山形県教育庁文化課

山形県埋蔵文化財調査報告書第１４集

的場遺跡
村中遺跡
古郡B遺跡
助川遺跡
上台遺跡

発掘調査報告書

山形県教育委員会

業務用

山形県文化財発掘調査報告書

――昭和50・51年度山形県営農林事業関係――

昭 和 53 年 3 月

序

昭和50・51年度に行なわれた農林事業にかかる諸遺跡中、記録保存のための発掘調査が行われた4遺跡の調査報告書をまとめることができました。

西川町的場遺跡は農業構造改善事業、余目町上台遺跡・羽黒町村中遺跡は庄内スーパー農道、藤島町古郡B遺跡は藤島川改修、藤島町助川遺跡は県営圃場整備のそれぞれの事業にともなうものであります。

緊急発掘調査を実施する埋蔵文化財のなかで、農林事業に関係する遺跡が年々増加しています。農業の近代化のために、基盤整備をはかり、時代の要請にこたえるという本県の重点施策から考えて、今後とも農林事業と埋蔵文化財の保存のための調整は、ますます重要な課題になってくるものと思います。

本報告書に示された遺跡と遺物は、悠久のむかしの祖先たちの生活と歴史をさぐる重要な資料でありますが、なかんづく西川町的場遺跡は縄文時代晩期の良好な遺跡として、竪穴住居跡とともに当時のくらしをしのぶ数々の貴重な遺物を出土しました。幸い多くの調査関係者の熱意と農林関係各機関の助力によって、貴重な遺跡の調査と数多い資料の整理が終了し、ここに報告書を刊行することができました。

農林水産部の担当職員、地元教育委員会、調査関係の多くの方々に感謝するとともに、善意ある批判と暖かい援助を期待いたします。

昭和53年3月

山形県教育委員会
教育長　赤星武次郎

例　　言

1．　本報告書は、山形県教育委員会が昭和50年度・51年度に実施した、農林事業に係る的場・村中・古郡Ｂ・助川・上台の各遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、西川町・羽黒町・藤島町・余目町の各教育委員会及び関係諸機関の協力を得て行われたものである。

3．　挿図縮尺は、遺構については２分の１・３分の１とし、土器の実測図は３分の１を原則とし、拓影図はすべて３分の１とした。また、石器の実測図は石鏃等（小形）を２分の１、凹石・石皿等（大形）を４分の１とし、それぞれにスケールを示した。

4．　挿図中の記号は、遺構にＳ、遺構因子にＥ、遺物にＲを冠してＳＴ―竪穴住居跡・ＳＤ―溝跡・ＳＨ―墳墓・ＳＫ―土壙・ＳＰ―ピット群・ＳＸ―性格不明遺構・ＥＤ―周溝・ＥＬ―炉・カマド・ＥＰ―ピット・ＥＵ―埋設土器・ＥＹ―床面・ＲＮ―自然遺物・ＲＰ―土製品・ＲＱ―石製品・ＲＷ―木製品とした。

5．　本報告書を作成にあたっての分担執筆等は以下の通りである。

執筆：的場遺跡―佐藤庄一・野尻　侃・渋谷孝雄・茨木光裕
　　村中遺跡―名和達朗・尾形与典
　　古郡Ｂ遺跡―野尻　侃
　　助川遺跡―佐藤正俊
　　上台遺跡―佐藤庄一・名和達朗
編集：名和達朗・佐藤鎮雄・渋谷孝雄

なお、的場遺跡の実測図作成にあたっては、執筆者に加えて手塚　孝・佐藤正俊・佐藤鎮雄（土器）・阿部明彦（石器）が分担した。さらに奏　昭繁（置賜考古学会会員）・中嶌　寛（東南村山福祉事務所主事）・今泉信男・山口博之・矢口広道・荒井格・青木敏雄・会田容弘・東海林恵史・京谷彰子・信田由美子・沼沢美代子（山形大学生）の諸君の協力を得た。

目　　次

的 場 遺 跡

Ⅰ　調査の経違

調査に至る経過……1

調査の経過……2

Ⅱ　遺跡の概観

遺跡の立地……5

遺跡の層序……7

遺構の分布……8

遺物の分布……10

遺物の分類……11

Ⅲ　遺構と遺物

1号住居跡……18

3号住居跡……28

4号住居跡……53

土壙群……58

包含層出土遺物……70

Ⅳ　ま　と　め

出土遺物……90

遺　構……95

村 中 遺 跡

Ⅰ　調査の経違……121

Ⅱ　遺跡の概観……125

Ⅲ　遺構と遺物……125

Ⅳ　ま　と　め……127

古 郡 B 遺 跡

Ⅰ　調査の経違……131

Ⅱ　遺跡の概観……132

Ⅲ　遺　　構……133

Ⅳ　ま　と　め……134

助 川 遺 跡

Ⅰ　調査の経違……139

Ⅱ　遺跡の概観……140

Ⅲ　遺構と遺物……142

Ⅳ　ま　と　め……142

上 台 遺 跡

Ⅰ　調査の経違……145

Ⅱ　遺跡の概観……147

Ⅲ　遺構と遺物……149

Ⅳ　ま　と　め……154

挿 図 目 次

第1図　的場遺跡　全体図

第2図　位置図……4

第3図　土層図……7

第4図　遺構配置図……9

第5図　1号住居跡……19

第6図　1号住居跡付近遺物分布図……20

第7図　1号住居跡出土土器・木製品……22

第８図　１号住居跡出土土器（１）……23
第９図　１号住居跡出土土器（２）……24
第10図　１・４号住居跡出土石器……26
第11図　１号住居跡・土壙群出土石製品……27
第12図　３号住居跡……29
第13図　３号住居跡内遺物分布図……33
第14図　３号住居跡埋設土器（１）……35
第15図　３号住居跡埋設土器（２）……37
第16図　３号住居跡出土土器……39
第17図　３号住居跡出土土器・土製品……41
第18図　３号住居跡出土土器（１）……43
第19図　３号住居跡出土土器（２）……44
第20図　３号住居跡出土土器（３）……45
第21図　３号住居跡出土土器（４）……46
第22図　３号住居跡出土土器（５）……47
第23図　３号住居跡出土土器（６）……48
第24図　３号住居跡出土石器（１）……49
第25図　３号住居跡出土石器（２）……50
第26図　３号住居跡出土石器（３）……51
第27図　３号住居跡出土石製品……52
第28図　４号住居跡……54
第29図　４号住居跡出土土器……56
第30図　４号住居跡・土壙出土遺物……57
第31図　５・６・８・10～13土壙……59
第32図　土壙出土土器（１）……61
第33図　６号土壙出土土器……63
第34図　土壙出土土器（２）……65
第35図　土壙出土土器（３）……67
第36図　土壙出土石器・土製品……69
第37図　包含層出土土器（１）……71
第38図　包含層出土土器（２）……73
第39図　包含層出土土器（３）……75
第40図　包含層出土土器（４）……77
第41図　包含層出土土器（５）……79
第42図　包含層出土土器（６）……81
第43図　包含層出土土製品・石製品……83
第44図　包含層出土石器（１）……84
第45図　包含層出土石器（２）……85
第46図　包含層出土石器（３）……86
第47図　各区出土磨製石器石斧……87
第48図　各区出土石器(1)……88
第49図　各区出土石器(2)……89
第50図　位置図（村中・古都Ｂ・助川遺跡）……120
第51図　村中遺跡　全体図……122
第52図　Ｆライン土層図……123
第53図　グリッド配置図……124
第54図　Ｈ－９～Ｉ－12区遺構図……126
第55図　古都Ｂ遺跡　墳丘図……134
第56図　土層図……135
第57図　助川遺跡　全体図……138
第58図　土層図……141
第59図　位置図（上台遺跡）……144
第60図　上台遺跡　全体図……146
第61図　土層図……147
第62図　遺構配置図……148
第63図　２号住居跡……150
第64図　遺跡出土土器……152
第65図　遺跡出土土器・石器……154

付表１　的場遺跡調査行程表……3
付表２　寒河江川流域の縄文時代遺跡……6
付表３　石器分類概念表……17
付表４　遺構内出土土器分類表……68
付表５　的場遺跡の土器群別と土器型式編年対比表……98

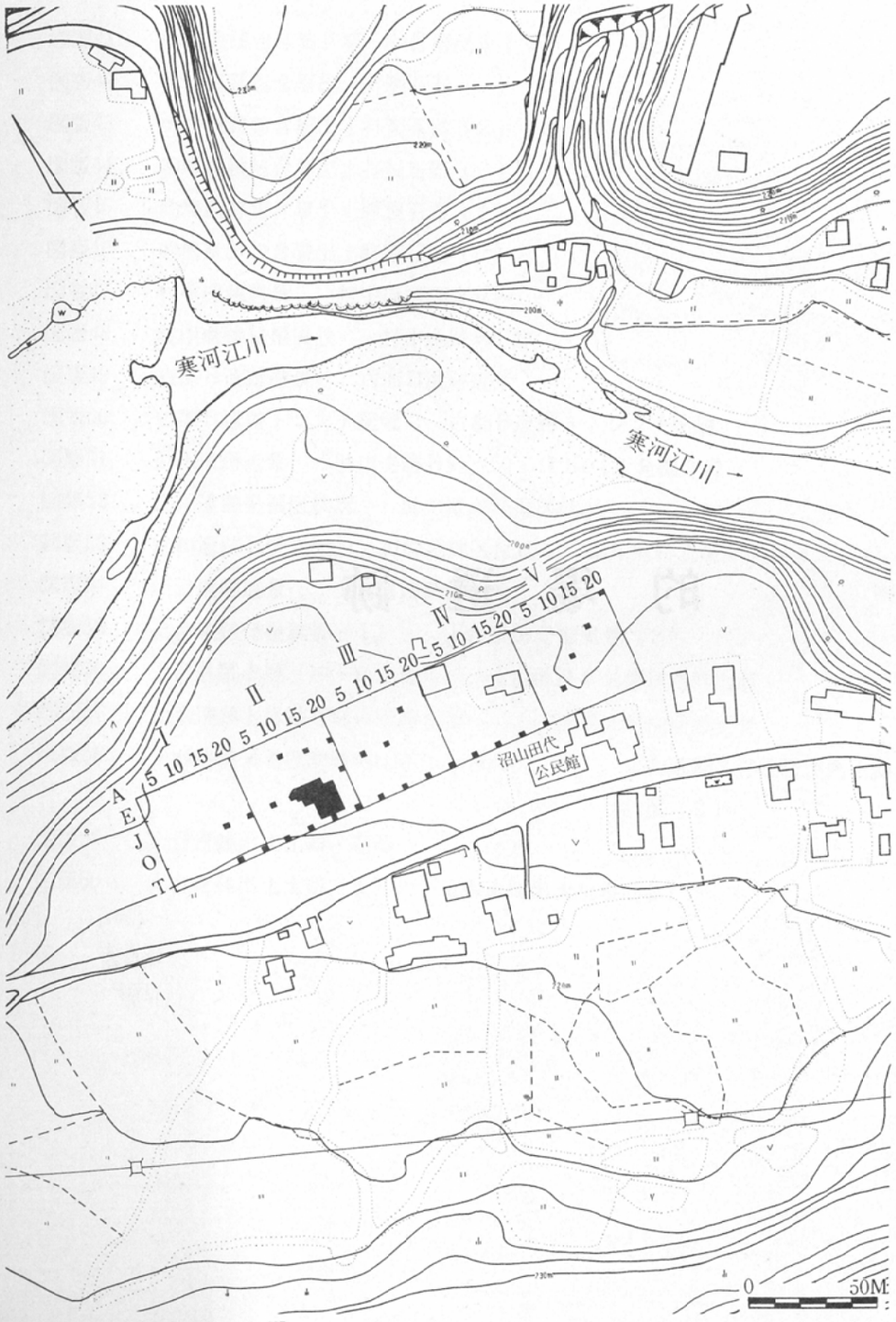
付表６　住居跡集成表……99
付表７　出土土器遺構・層分類表…… 100
付表８　出土土製品・石製品・磨製石器計測表（１）…… 101
付表９　出土土製品・石製品・磨製石器計測表（２）…… 102
付表10　出土土製品・石製品・磨製石器計測表（３）…… 103
付表11　出土石器一覧表（１）…… 104
付表12　出土石器一覧表（２）…… 105
付表13　出土石器計測表（１）…… 106
付表14　出土石器計測表（２）…… 107
付表15　出土石器計測表（３）…… 108
付表16　出土石器計測表（４ …… 109
付表17　出土石器計測表（５）…… 110
付表18　出土石器計測表（６）…… 111
付表19　出土石器計測表（７）…… 112
付表20　出土石器計測表（８）…… 113
付表21　出土石器計測表（９）…… 114
付表22　出土石器計測表（10）…… 115
付表23　出土石器計測表（11）…… 116

図　版　目　次

図版１　的場遺跡Ⅱ区近景　的場遺跡Ⅲ～Ⅴ区近景
図版２　的場遺跡３号住居跡発掘風景　的場遺跡遺構全景
図版３　的場遺跡１号住居跡全景　的場遺跡１号住居跡壁・周溝
図版４　的場遺跡１号住居跡土器出土状況　的場遺跡１号住居跡石器出土状況
図版５　的場遺跡土偶・注口土器　的場遺跡１号住居跡・６号土壙出土土器
図版６　的場遺跡１号住居跡覆土１層・周溝・ピット出土土器
図版７　的場遺跡１号住居跡出土打製石器
図版８　的場遺跡１号住居跡出土石製品
図版９　的場遺跡３号住居跡全景（１）　的場遺跡３号住居跡全景（２）
図版10　的場遺跡土層（１）　的場遺跡３号住居跡土層（２）
図版11　的場遺跡３号住居跡内１号炉跡　的場遺跡３号住居跡内２号炉跡
図版12　的場遺跡３号住居跡埋設土器出土状況　的場遺跡３号住居跡２号埋設土器
図版13　的場遺跡３号住居跡１・２号埋設土器
図版14　的場遺跡３号住居跡土器出土状況　的場遺跡３号住居跡石冠出土状況
図版15　的場遺跡３号住居跡出土土器
図版16　的場遺跡３号住居跡覆土１層出土土器（１）
図版17　的場遺跡３号住居跡覆土１層出土土器（２）
図版18　的場遺跡３号住居跡覆土２・３・４層出土土器
図版19　的場遺跡３号住居跡周溝出土土器
図版20　的場遺跡３号住居跡覆土４層・床面・１号炉跡出土土器
図版21　的場遺跡３号住居跡ＥＰ１～３・５・７～10出土土器
図版22　的場遺跡３号住居跡出土遺物
図版23　的場遺跡３号住居跡出土打製石器（１）
図版24　的場遺跡３号住居跡出土打製石器（２）
図版25　的場遺跡３号住居跡出土磨製石器（１）
図版26　的場遺跡３号住居跡出土磨製石器（２）
図版27　的場遺跡４号住居跡全景　的場遺跡岩版出土状況
図版28　的場遺跡４号住居跡覆土２層・包含層Ⅰ層出土土器
図版29　的場遺跡４号住居跡出土打製石器
図版30　的場遺跡４号住居跡・包含層出土土製品・石製品
図版31　的場遺跡４号土壙近景　的場遺跡８ａ号土壙遺物出土状況
図版32　的場遺跡８号土壙土偶出土状況　的場遺跡11号土壙全景
図版33　的場遺跡１・２号・３・４号・５号土壙出土土器
図版34　的場遺跡６号・８号土壙出土土器
図版35　的場遺跡10号・11号・12・14号・13号土壙出土土器
図版36　的場遺跡土壙群出土打製石器
図版37　的場遺跡６号・８号土壙出土遺物
図版38　的場遺跡包含層Ⅱ層出土土器（１）
図版39　的場遺跡包含層Ⅱ層出土土器（２）
図版40　的場遺跡包含層Ⅱ層・同Ⅲ層出土土器（１）

図版41　的場遺跡包含層Ⅱ層・同Ⅲ層出土土器（２）
図版42　的場遺跡包含層出土打製石器（１）
図版43　的場遺跡包含層出土打製石器（２）
図版44　的場遺跡包含層出土打製石器（３）
図版45　的場遺跡包含層出土磨製石器（１）
図版46　的場遺跡包含層出土磨製石器（２）
図版47　村中遺跡遠景　村中遺跡調査状況
図版48　村中遺跡発掘風景　村中遺跡Pit 群
図版49　古郡Ｂ遺跡遠景　古郡Ｂ遺跡近景
図版50　古郡Ｂ遺跡トレンチ配置　古郡Ｂ遺跡３トレンチ土層
図版51　助川遺跡近景　助川遺跡Ｂ地点50・110Ｇ付近発掘全景
図版52　助川遺跡発掘区状況　助川遺跡発掘区状況
図版53　助川遺跡Ｂ地点50－ 120Ｇ発掘区付近　助川遺跡土層セクション
図版54　上台遺跡遠景　上台遺跡調査状況
図版55　上台遺跡発掘風景（１）　上台遺跡発掘風景（２）
図版56　上台遺跡土層（10－40北壁）　上台遺跡６号溝状遺構土層
図版57　上台遺跡１号落ち込み遺跡全景　上台遺跡２号住居跡全景
図版58　上台遺跡２号住居跡内土器出土状況（１）　上台遺跡２号住居跡内土器出土状況（２）
図版59　上台遺跡出土土器・石器
図版60　上台遺跡出土土器（１）　上台遺跡出土土器（２）

的　場　遺　跡



第１図　的場遺跡　全体図

Ⅰ　調査の経緯

調査に至る経過

的場遺跡は、山形県西村山郡西川町大字沼山字田代に所在する。寒河江川中流右岸の河岸段丘上に位置し、地目は水田・畑・宅地などになっている。この地域から縄文時代の土器や石器が出土することは、地元の人々によって古くから知られていたようであるが、正式に埋蔵文化財包蔵地として確認されたのは昭和37年のことになる。

昭和37年11月12日、山形県遺跡地名表作成の一環として、犬飼安太郎・相田俊雄の両氏が当地域を分布調査し、本遺跡を「松原遺跡」として認定している。このときの報告にもとづく遺跡台帳には、田代地区荒木昭二氏が耕作等により発見した縄文式土器を収録しており、縄文時代中期の集落跡と記している（註１）

昭和49年秋、西川町田代地区が農業構造改善事業の施行が計られ、県農林部から教育委員会に照会があり、協議の結果昭和50年度に緊急発掘調査を実施することになった。昭和50年４月18日、教育庁文化課佐藤鎮雄技師が現地確認に行き、試掘調査の結果、多量の縄文時代後・晩期の遺物を採集した。これにより本遺跡は縄文時代後・晩期の集落跡も存在することが予測されたわけである。なお本遺跡の名称については、地元の人々に再度問い合わせたところ、俗称として狩りなどの弓を射る場所「まとば」と呼ばれていることがわかり、「的場遺跡」として変更登録することにした。「松原」という名称は、「まとば」を「まつば」、「まつばら」として誤聞したために出てきたとみられる。

発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、西川町教育委員会の協力を得て、昭和50年８月６日から同９月11日までの述べ28日間にわたって実施した。調査員には県教育庁文化課の佐藤庄一・野尻　侃が当たり、このほか荒木利見氏（当時西川町立大井沢小学校教諭）小向裕明氏(当時山形大学農学部学生)等に多大な応援を得た。また調査期間が夏休み中であったために作業員として県立寒河江高校西川分校をはじめ地元の高校生・大学の方々24名に協力を得た。

なお発掘調査終了後、西川町教育委員会および地元の方々の御努力によって、発掘した住居跡はベントナイト・砂を埋め戻しの上保存、未発掘区についても地表下10～20cmの削平だけで大部分が保存されることになった。関係名位の温かい御配慮に対してお礼を申し上げる。

（註１）　山形県教育委員会1963　「山形県遺跡地名表」

調査の経過（第１図・表１）

発掘調査は、対象区域を農業構造改善事業予定地内に限定し、東西に長く40×40mの大発掘区を５つ（Ⅰ～Ⅴ区）設定した（第１図）。事業予定地区南側の水田は、やや湿地となっており、４月の確認調査の段階でもほとんど遺物が認められなかったので、調査区域からは除外している。

大発掘区は、２×２m単位のグリットによって南北・東西各々20等分され、計 400の桝目をなす。グリット番号は、大発掘区毎にX軸（東南）を西から１・２……19・20、Y軸（南北）を北からA・B……S・Tと名付けた。各グリット名称はたとえばⅡ－15Mグリットのように呼ぶことにする。Y軸の方向はN－8°15′40″－Eである。

検出した遺構の名称は、発掘中は１号住居跡・１号土壙・１号炉のように呼んでいたが整理の段階で山形県文化課が現在一般に使用している遺構記号を用いることにした。これは本遺構をS・本遺構の各因子をEとした上で、遺構の性格を簡略化して付したもので、的場遺跡の主な遺跡記号は下記のようである。

ST（竪穴式住居跡）・SK（土壙）・SX（性格不明）

ED（周溝）・EL（炉）・EP（ピット）・EU（埋設土器）・EY（床面）

本遺構と遺構因子は組合わせて、ST３－EL１（３号住居跡１号炉）のように呼称する。

遺物記号は、第１字をRとした上でつぎのように遺物の性格を簡略化して付している。

RN（自然遺物）・RP（土製品）・RQ（石製品）・RW（木製品）である。

調査の経過を、行程図（表１）を参照しながら述べる。調査は最初発掘区南端T列に添って２×２mのグリッドを10mおきに坪掘りし、遺跡の範囲確認を試みた。V区については圃場整備区域に合せて斜め方向に発掘している。またⅠ～Ⅲ区についてM・LないしK列も10mおきに１グリッド坪掘りしている。範囲確認の坪掘りは８月７日から13日までに27グリッド行なった。その結果、Ⅱ区に遺物が集中して認められたので、以後はⅡ区を中心に調査を実施した。Ⅱ区の拡張および包含層の掘り下げ作業は、お盆あけから８月25日まで行ない、ベルト・コンベアーも使用しながら約 180m²を実施した。最終発掘面積は、約 350m²である。

遺構の中でもっとも早く発見されたのは、坪掘りの際Ⅱ－15Lで検出された落ち込み遺構（SX２）で、初めは住居跡の可能性も考えたが、その根拠に乏しく性格不明のものである。８月18日頃からST１・３のプランが見えはじめる。折からの猛暑で昼過ぎは一時現場作業を休止して屋内で遺物の洗浄を行なう。Ⅱ区では縄文時代後期中葉から晩期終末までの土器が出土するが、とくに大洞A式併行期の文様が多いようである。

ST１は南側の輪郭を検出したが、北側が遊園地の塀にかかるため拡張を断念する。

ST３は初め北西隅の輪郭を検出し、それを追ってグリッドを拡張した。遺構検出面から深いことと、住居跡の大きさが10m前後と大規模なためST３の全体プランを検出できたのは８月28日になる。ST３はプラン確認と平行して、中央に十字の断面観察用ベルトを残しながら、順次覆土を掘り下げている。この段階でST３の北西部にもう一つ住居跡（ST４）が検出された。またST１南側の土壙群も、プランの確認と一部精査を行なっている。

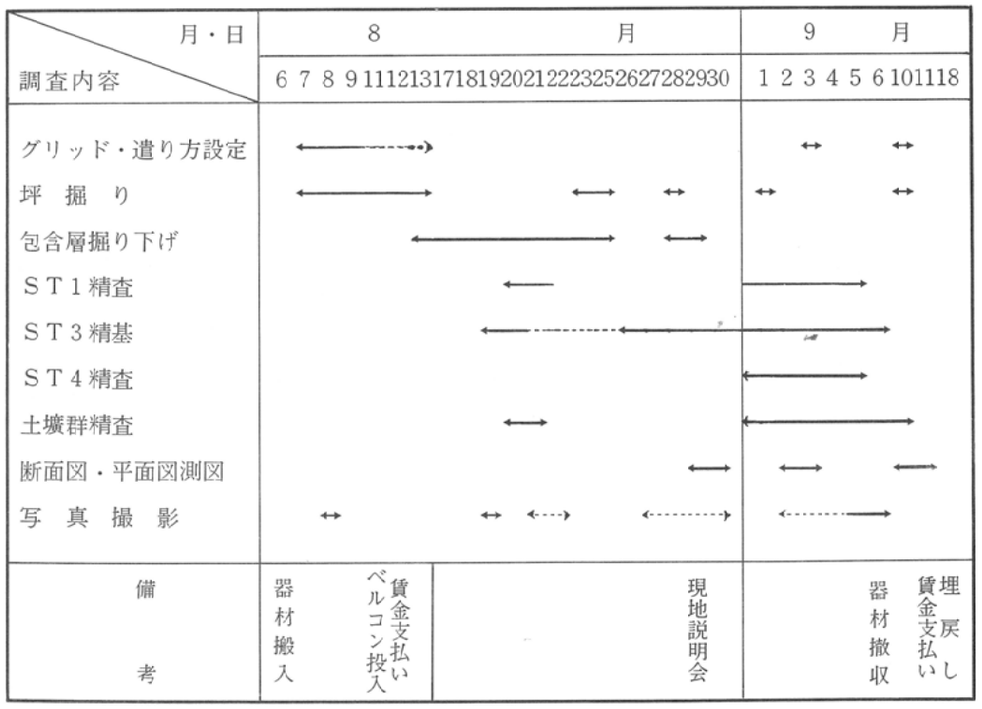
８月30日に現地説明会を実施し、地元の方々や関係者など約 200名の参加を得た。９月に入ってからは、各遺構の床面やピットの精査および図面作成を行なった。図面作成は当初予定の９月６日までに終らず、10・11日の２日間延長している。写真撮影は隋時必要に応じて行なっているが、９月５・６日には遺構の最終撮影を実施した。

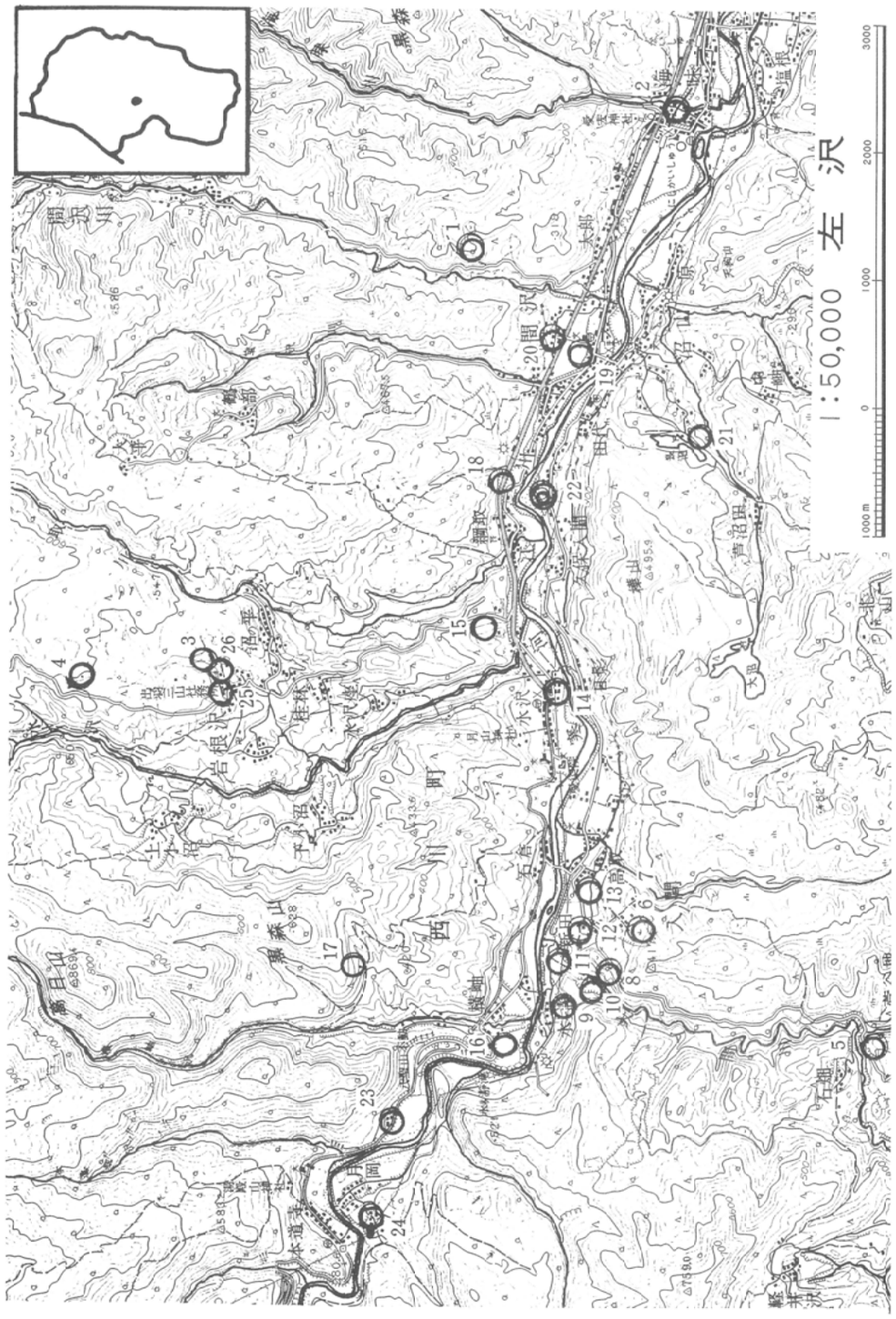
なお発掘終了の９月18日、西川町建設課の重機を借りて、ベントナイト・砂を敷いたのち埋戻しを行なった。

この間発掘作業に従事した作業員は、高校生と大学生を主体として１日平均10名、述べ約 280名である。災天下のさなかの力強い御助力に心から感謝を申し上げたい。

的場遺跡調査行程表

表 1





第２図　位置図

Ⅱ　遺跡の概観

遺跡の立地（第２図・図版１）

山形県のほぼ中央に南北に連なる朝日山地がある。標高1,979mの月山は朝日山地の北端にあり、カルデラ火山特有の景観をなしている。月山火山の墳火によって朝日山地の1,000m以上の稜線はさらに北に延びて出羽丘陵と接し、庄内と村山という山形県の二大地域を作り出した。月山火山のまわり特に内陸側は日本でも有数の豪雪地帯で、春４月でも山麓の民家は雪に埋もれているほどである。

朝日山地の東北斜面の各峰々に源を発する寒河江川は、山地に添って北流し、月山沢付近で湯殿山方面から流れ出る大越川と合流し、流れを東方に変える。中流域では西川町の本導寺、間沢、睦合等と谷合いを蛇行し、寒河江市白岩付近で下流域に至る。下流域では河北町・寒河江市一帯に広い扇状地をなし、河北町溝延付近で最上川と合流する。寒河江川中流域の両岸には、狭い河岸段丘や、支川との合流点に出来た小扇状地が点在し、縄文時代中期以降現在に至る集落が形成されている。

的場遺跡は、この寒河江川中流右岸に位置し、張り出した小河岸段丘の上位面に立地する。標高 218m 前後で、河床との比高は約20m を測る。西川町間沢部落の西方 1.2kmにあり、沼山田代公会堂の北裏一帯に広がる。田代部落のほぼ中央を東西に通る県道小山・沼山線の北側は、東西 350m 、南北 120m のゆるやかな舌状平担地となっており、遺跡はその中央北寄りに位置する。地目は現在畑地・水田・宅地などで、とくに畑地に遺物が多く散布する。所在地は山形県西川町大字沼山字田代、所有者は荒木昭二氏他数名である。

つぎに的場遺跡付近の歴史的環境について触れる。月山をとりまく山岳地域のうち月山と湯殿山、羽黒山が組み合わされて、古来出羽三山と称されてきている。西川町の寒河江川中流域は、出羽三山信仰の登拝者の道筋や宿坊として振わったところである。もちろん三山信仰以前にも、この地に原始・古代の人々が生活していたことは当然である。寒河江川流域には、上流は標高 600m 前後の弓張平遺跡群から、下流は標高90m の不動木遺跡まで46ケ所の遺跡が分布する。時期的にも旧石器時代末葉から奈良・平安時代まで各期にわたる。ここでは的場遺跡と関連をもつ縄文時代の遺跡について少し詳しく述べる。寒河江川流域で現在確認されている縄文時代の遺跡は全部で32ケ所である（第２図）。このうち表面採集品などによって遺跡の時期がある程度知り得る遺跡は18ケ所で、内訳は縄文時代前期１、中期13、後期３、晩期３となる（表２）。立地的には寒河江川に支流が合流する河口付近が多い。ただし、後・晩期の遺跡は、月岡遺跡や的場遺跡など見はらしの良い舌状の段丘上に立地する傾向がうかがえる。

寒河江川流域の縄文時代遺跡

表 2

番号	遺跡名	所在地	地目	立地	種別	時期	文献
1	柴倉	西川町海味柴倉	畑	山麓台地	集落跡	縄文	
2	東浦	〃海味東浦311	畑	段丘	〃	縄文中期	
3	龍神沼	岩根沢上の平	畑	台地	〃	縄文	出羽三山・葉山1975
4	スゴウ	〃 スゴウ	畑	〃	〃	〃	
5	落合	入間落合734	畑	段丘	〃	縄文中期	寒河江工業高校1968
6	新田平A	〃 新田平	畑	〃	〃	縄文	
7	新田平B	〃 〃	畑	〃	〃	〃	
8	お仲間林	〃 〃	畑	〃	〃	縄文中期	
9	上野A	〃 上野	畑	〃	〃	縄文	
10	上野B	〃 〃	畑	〃	〃	〃	
11	松の木平	〃 松の木平	畑	〃	〃	〃	宇野修平1971
12	兵助新田	〃 兵助新田	水田	〃	〃	〃	
13	大平	〃 大平原野	畑	〃	〃	〃	
14	水沢	水沢下	畑・宅地	〃	〃	縄文中期	寒河江工業高校1968
15	山居	〃 山居	畑	台地	〃	〃	出羽三山・葉山1975
16	横岫	〃 鍵立	畑	段丘	〃	〃	〃
17	黒森山	〃 黒森1559	荒地	山腹	〃	〃	〃
18	サッテロ	間沢サッテロ	畑・宅地	段丘	〃	〃	〃
19	金畑	〃 金畑248	グランド敷地	〃	〃	縄文	
20	イカヅキ	〃 東326	宅地	〃	〃	縄文後・晩期	出羽三山・葉山1975
21	長沼	沼山立目	畑	山麓	〃	縄文	
22	的場	〃 田代	畑・宅地	段丘	〃	縄文中～晩期	
23	清水小屋	本道寺清水小屋	畑	〃	〃	縄文後期	
24	月岡	月岡西の平	畑・宅地	〃	〃	縄文晩期	
25	宝田	岩根沢上の平	〃	台地	〃	縄文中期	
26	薬師森	〃 〃	〃	〃	〃	縄文	出羽三山・葉山1975
27	石田	睦合吹上	畑	段丘	〃	縄文	
28	熊野	〃 熊野	宅地・水田	〃	〃	縄文中期	寒河江工業高校1968
29	弓張平B	志津弓張平	畑・宅地	山腹	〃	縄文前期	山形県教委1977
30	弓張平I	〃 〃	畑・林	〃	〃	縄文	〃
31	谷沢	寒河江市谷沢上谷沢	畑・水田	段丘	〃	縄文中期	
32	日和田	〃日和田 47	学校敷地	平地	〃	〃	

遺跡の層序（第3図）

本遺跡は寒河江川中流石岸、やや張り出した河岸段丘上に立地する。遺跡はこの段丘上の南北のゆるやかな舌状平担部にあり、調査区は事業予定地内に、東西に長く設置したため、層序は台地中央部よりやや端部によって観察した。ただし、Ⅱ区においてはすぐに遺構と合うため、遺構の掘り込み面までの層序と、遺構の覆土を遺跡全体の基準にしている。

層序は基本的に4つの地層に分けられる。

Ⅰ層　耕　土　　小砂利を多くふくみ、ボソボソしている粒子の細い黒色土である。厚さ18～32cmである。

Ⅱ層　褐色土層　　挙大の石が混り、若干の炭化粒子・黄色粒子を含み、やわらかい。厚さ15～28cmで、耕作により攪乱遺物を含む。

Ⅲ層　黒褐色土層　　炭化粒子を多く含み、やや粘着性がある。細礫を含む。厚さ11～15cmである。遺構の掘り込みが初まる。

Ⅳ層　黄褐色土層　　砂質性で小礫や河原石を含み、遺物は含んでいない。

遺構内の覆土は

①褐色土で炭化粒子を多く含み粘着性がある。

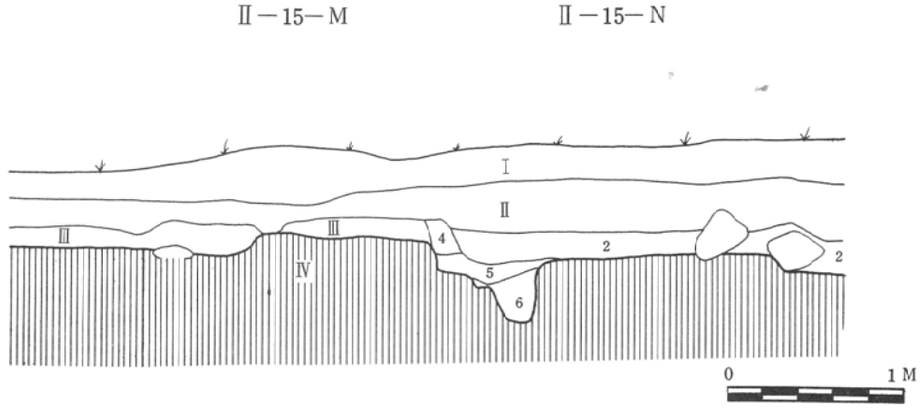
②炭化・赤色粒子を多く含み、粘着性があり、小礫を含む。

③暗褐色を呈し、赤色粒子を多く含み粘着性が強い。ところどころに黄色ブロックが混じる。

④黄色ブロックが多く含み、Ⅲ層との漸移層である。

⑤Ⅳ層と②層がまじり合った様な層で、炭化物が多い。

⑥炭化物・赤色粒子を多く含み、ネバネバしている。



第3図　土層図

遺構の分布（第４図・図版２）

調査は農業構造改善事業予定地内に20m ×20m の発掘区を東西に５区（Ⅰ～Ⅴ区）設定し、各区に10m 毎に遺構・遺物の分布を調査するため４～６ケ所の２m 四方のグリットを掘り（第１図）、土層の観察、包含層の有無等を調査した。その結果Ⅰ区東側からⅢ区西側にかけて遺物の散布が認められ、とくにⅡ区東南部では遺物が集中しており、遺構の掘込みも一部確認が出来た。このため調査はⅡ区を集中して行なった。調査グリット名で９～17－Ｌ～Ｓの51グリット（ 186m²）である。

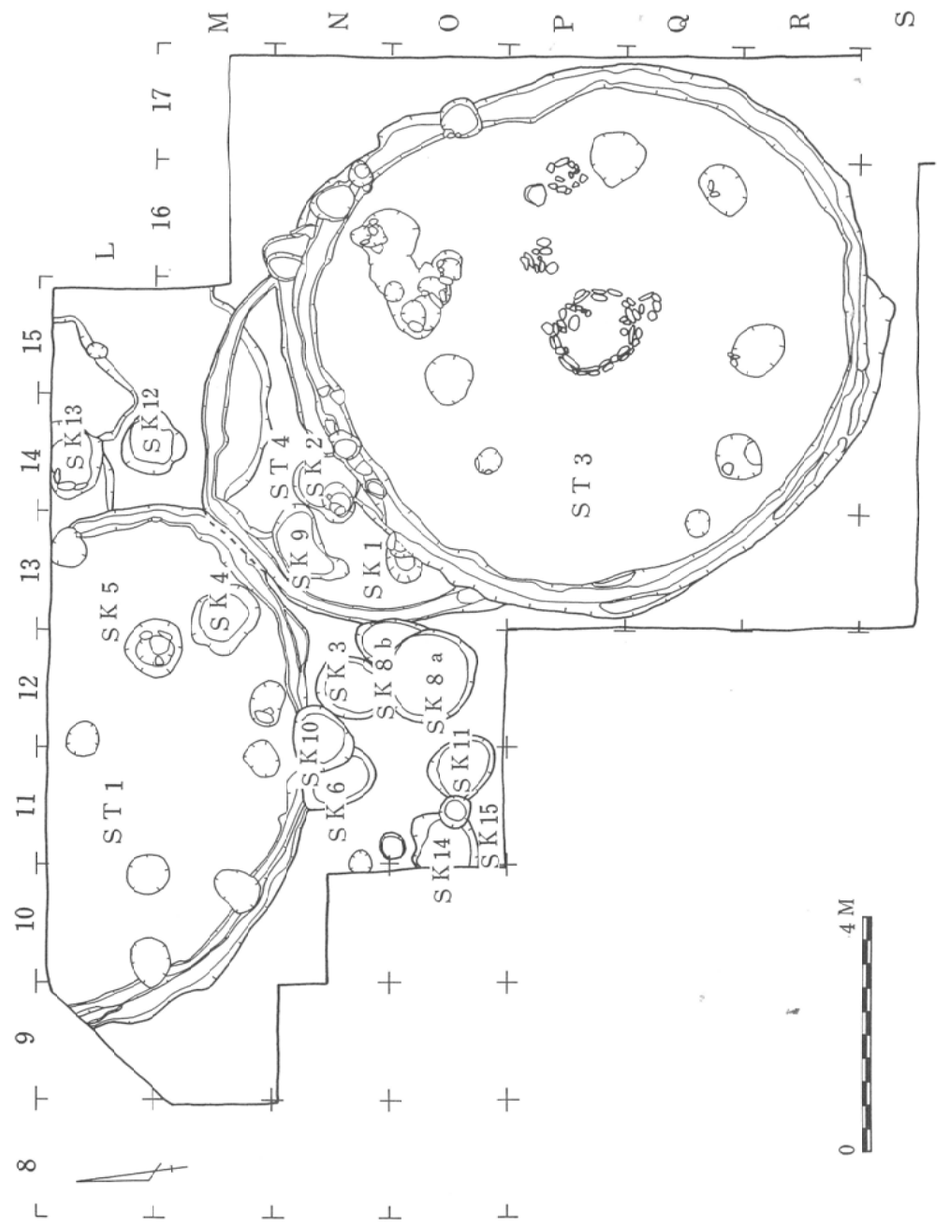
この地区で検出した遺構は、ＳＴ１・３・４の３棟の竪穴住居跡とＳＫ１～15の計15基の土壙、それにＳＴ３内に設けられた埋設土器３個体などである。各遺構はかなりの重複関係が認められる。

遺構は地表面下40～50cmの深さのⅢ層（黒褐色土）上面で 掘り込みが確認され、Ⅳ層を深く掘り込んでいるため、比較的検出が容易であった 。

精査地区における遺構の分布状態は、調査区の北西部に１号住居跡、南東部に３号住居跡、その中間に４号住居跡という配置を示す。発掘調査段階の重複関係から４号住居跡は１・３号住居跡によって切られていることが確認された。１号住居跡は北半分が遊園地になっているため未調査に終ったが、検出長径8.5m を測る楕円形のものである。明確な炉は検出できなかったが、床面東側に一部焼土がみられた。３号住居跡は直径9.4～10.2m のほぼ円形の大型のもので、住居内に石組炉２基と埋設土器３基を有する。４号住居跡は、３号住居跡によって切られているため、北西部しか残っていないが、３号住居跡に一部残っている周溝の痕跡も考慮すると、直径約6.9m の円形のプランを示すものと推定される。炉は検出できなかった。住居跡の時期は３棟とも縄文時代晩期後半頃である。

土壙は調査区北西部、１号住居跡の南東部にＳＫ１～16まで16基集中して検出された。なお調査の過程でSK7としたものがSK6に含まれることになったため欠番となり、逆にＳＫ８が２つの重複を持つことが判明したため、ＳＫ８ａ・８ｂの２つに細分した。土壙は長径１m 前後で円形ないし楕円形のプランを示し、底面が平担なものが多い。時代は縄文時代後期中葉から晩期末葉まで多様である。

精査区以外の遺構の分布は、ほとんどが坪掘り段階で終ったため明らかでない。Ⅱ－10Ｔ・Ⅴ－15Ｏで１m 前後の長い溝、Ⅴ－20Ａで直径70cm前後の落ち込みが検出されている。いずれも内部に金属工具によって加工された木質遺物や、ガラス製品を出土しており、時期的にかなり後世のものと推定される。



第４図　遺構配置図

遺物の分布

最初に坪掘りグリッドの所見を主にして遺跡全体における遺物の分布について述べる。調査は農業構造改善事業予定地区のうち、遺物散布のまったく見られない西側と低湿地の南側を除く約1600m²を対象とした。20m四方の東西に長い5区（Ⅰ～Ⅴ区）の大発掘の中で、Ⅰ区は2m四方の坪掘りグリッドを3つ設定している。いづれも耕土中から土器片が1・2点出土しただけで、地山までの土層からは遺物はまったく発見できなかった。Ⅱ区の坪掘り区11個のうち5T区からは耕土中から土器が18片出土したが、下層からは発見されていない。したがって遺物包含層がこれより西側に延びないものと推定される。なおこの他のⅡ区の坪掘り区からはⅡ・Ⅲ層も含めいずれも50片以上の土器が出土している。Ⅲ区の坪掘り区7個のうち5K区からⅡ層中より土器が292片出土したが、その他の区は4～16片程度である。Ⅳ区の坪掘り区4個はⅠ・Ⅱ層合わせて土器が11～28片出土している。Ⅴ区の坪掘り区6個のうち5O区はⅡ・Ⅲ層中から土器が72片出土したが、その他の区はまったく認められないか数片程度である。なおⅤ－10J・20A区の遺物には縄文時代中期中葉の土器が数片混っている。

これらのことから工事予定地区における遺物の純粋な包含層は、Ⅱ区を中心とし一部Ⅲ区北側に広がる長径約40mの舌状地をなすものと推定される。Ⅲ～Ⅴ区は低地に一部流入したものと考えられる。また本遺跡の北東約100mの畑地には表面に縄文時代中期の土器片が散布することから、同時代の別の遺跡の存在が予測される。

つぎにⅡ区9～17－L～S区の精査地区における遺物の分布について述べる。各グリッドの層位毎の遺物の分布を見ると、Ⅰ層の耕作土中では精査地区の南半に遺物が多く認められた。これは耕作による低地への土の移動のためと考えられる。包含層Ⅱ層中では精査地区の北西部に遺物が集中して認められた。これは地山が浅い1号住居跡や土壙群の上面が一部遺構覆土に入り始めたためと考えられる。包含層Ⅲ層中では4号住居跡および3号住居跡の北西部に遺物が集中して認められた。これはこの地区が一部遺構覆土中に入り始めたことを示している。包含層Ⅳ層中では3号住居跡西半に遺物が集中して認められた。これをこの地区が水平レベルでは最後の段階で一部遺構覆土中に入り始めたことを示している。

精査地区はほとんどのグリッドが遺構にかかったため、包含層Ⅱ～Ⅲ層の一部は遺構の覆土になる。各遺構の覆土の内容については次章で説明する。包含層の内容についても次章で説明するが、精査地域が遺構の密集地に当ったため、各遺構の覆土が複雑に重復していることと地形面の変化から、必ずしも遺物包含層における分層的な調査結果は導きえていない。

遺物の分類

本調査によって検出された遺物の総数は破片数にして約30.000点である。Ⅲ章で遺構と遺物について述べるのに先立ち、遺物の分類基準について触れる。

遺物は土器、石器、土製品、石製品の4つに大別する。土器、石器も広義には各々土製品や石製品の内に含まれるが、ここでは土器・石器の概念を狭義の器（うつわ）ものないし利器として把握し、それ以外のものは土製品および石製品として扱うことにする。

土器の分類

土器については、整理段階でできるだけ層位的序列を重視する分折を試みたが、発掘区域が遺構の密集する地点を主とすることになったため、垂直方向の重復が著しく明確な区分は導き得なかった。ここでは主たる文様および文様の施文手法を中心にして12の土器群に大別し、さらに各土器群を施文手法や器形等によって以下のように小類に細分する。

第Ⅰ群土器

花弁状の大きな波状口縁をもち、内側に肥厚した口縁部の外側に連続して刻みを加える土器を主とする土器群。本群土器は文様や器形によってさらに3類に細分される。

a類　L$\left\{\frac{R}{R}\right.$の細い縄文原体を横位・縦位に回転させて羽状としたものを地文とし、これに太い沈線によって区画された磨消縄文を頸部文様帯および体部文様帯に有するもの。器形は口縁部が外反し、頸部でしまる深鉢ないし壺形土器である。

b類　刻目による直線的な文様帯を口縁部ないし頸部にもち、これに無文帯ないしは、L$\left\{\frac{R}{R}\right.$縄文の磨消縄文帯が組み合わさるもの。器形は深鉢や鉢形土器などがある。

c類　沈線による格子目文ないし綾杉文を、頸部や体部上半に有するもの。器形は深鉢形土器がある。

第Ⅱ群土器

波状口縁に突起をもち、初源的な入組文ないし弧線連結文を主とする土器群。貼瘤は多用されず、口縁の突起部やモチーフの起・終点に限られる。本群土器は3類に細分される。

a類　太い沈線によって区切られた初源的な入組磨消縄文ないし弧線連結磨消縄文を口頸部ないし体部上半に有するもの。器形は壺形ないし注口土器がある。

b類　2条の平行沈線による初源的な入組文ないし弧線連結文を口頸部ないし体部に有するもの。器形は注口土器、鉢形土器がある。

c類　曲線的な細い刷手目を口頸部から体部全体に有するもの。器形は平縁で口縁部が直立する深鉢形土器がある。

第Ⅲ群土器

磨消手法による弧線連結文および入組文を主とし、貼瘤を伴なう土器群。刻目や三又状陰刻を有する入組文はまだみられない。本群土器はさらに２類に細分される。

a類　太い沈線によって区切られた入組磨消縄文ないし弧状磨消縄文を口頸部ないし体部下半に有するもの。

b類　太い沈線によって区切られた直線的な磨消縄文を口頸部に有するもの。器形は深鉢ないし壺形土器がある。２個１対の貼瘤がよくみられる。

第Ⅳ群土器

先端の細い鉢状工具による刻目手法を特徴とする入組文および弧線連結文を主とする土器群。貼瘤に縦や横の刻目を有するものもみられる。本群土器は２類に細分される。

a類　比較的間隔をおいた刺突による刻目手法をもつ入組文ないし弧線連結文を有するもの。器形は平縁ないし平縁に突起をもつ深鉢形土器がある。

b類　比較的間隔の狭い刺突による刻目手法をもつ入組を有する。

第Ⅴ群土器

磨消縄文ないし刻目手法による入組文のうち、三叉状陰刻をもつものを主とする土器群。本群土器はさらに３類に細分される。

a類　先端の角張る篦状工具を器面に直角にあてて刻む刻目文を有するもの。

b類　磨消縄文による入組文に、三叉状陰刻と貼瘤を有するもの。

c類　磨消縄文による入組文に、眼鏡状の貼瘤突起を有するもの。

第Ⅵ群土器

定型的な三叉文を有するものを主とする土器群。本群土器は２類に細分される。

a類　磨消縄文による入組文と組み合わさり、いわゆる玉抱き三叉文を有するもの。

b類　磨消縄文を伴わず沈線のみによる三叉文を有するもの。

第Ⅶ群土器

羊歯状文を有するものを主とする土器群。本群土器はさらに２類に細分される。

a類　羊歯状文を有するもの。器形には鉢形土器と注口土器がある。

b類　沈線によるＫ字状文字等を有するもの。器形は椀形土器と注口土器がある。

第Ⅷ群土器

第Ⅶ群土器のＫ字状文が縦横にのびる複雑な磨消縄文を主とする土器群。これに口頸部に浮彫的な刻目を有する鉢・浅鉢形土器が伴なう。本群土器はさらに２類に細分される。

a類　２～３条の平行沈線により区画された口頸部文様帯に浮彫的な刻目文を有するもの。器形は口頸部のやや内弯する皿と口頸部が強く外反する鉢形土器がある。

b類　ａ類の口頸部文様体と体部のＫ字状文が縦横にのびる複雑な雲形文とが組み合わされるもの。器形は口縁に二連小突起を有する椀ないし皿形土器がある。

第Ⅸ群土器

第Ⅷ群ｂ類の雲形文がやや直線化したものを主とする土器群。これに口頸部に平行沈線および連続刻目文を有する鉢・壺形土器等が伴なう。本群土器は２類に細分される。

a類　３～５条の平行沈線文および平行沈線の一部に連続刻目文を加えているもの。器形は、口頸部が強く外反する鉢・深鉢・壺形土器等がある。

b類　ａ類の口頸部文様帯に直線化した雲形文をもつ体部が組み合わさるもの。器形は皿・浅鉢・鉢・壺形土器等がある。

第Ⅹ群土器

磨消縄文を有するＩ字文を主とする土器群。これに口縁部が研磨され頸部に平行沈線ないし眼鏡状の凸帯をもつ浅鉢・鉢・甕形土器が伴なう。本群土器は３類に細分される。

a類　磨消縄文を有するＩ字文を体部に施すもの。器形は鉢・壺形土器等がある。

b類　頸部に眼鏡状の凸帯を有するもの。体部には縄文が施される。器形は甕・壺形土器がある。

c類　口縁部が研磨され頸郎に平行沈線ないし斜縄文を有するもの。器形は鉢・深鉢・甕・壺形土器等がある。

第Ⅺ群土器

浮彫手芸による直線的なＩ字文を主とする土器群。本群土器はさらに３類に細分される。

a類　浮線による直線的なＩ字文を体部上半ないし体部全体に有するもの。器形は浅鉢・台浅鉢・鉢・壺形土器等がある。

b類　浮線による直線的なＩ字文ないし平行沈線文を口頸部に限定して施すもの。体部には縄文ないし研磨が施される。器形は鉢・大形浅鉢・甕・壺形土器等がある。

c類　口縁部が研磨され体部に結節回転縄文ないし斜縄文を有するもの。口唇部に上方からの押圧による小波状文を持つものもある。器形は口縁部が外反する深鉢ないし甕形土器・壺形土器がある。

第Ⅻ群土器

口頸部文様帯と体部文様帯が合体した変形Ｉ字文を主とする土器群。３類に細分される。

a類　変形Ｉ字文の起・終点部分に２個の択りによる瘤を有するもの。器形は浅鉢・高坏・鉢・壺形土器等がある。高坏形土器にはしばしば大きな波状突起が伴なう。

b類　瘤をしたないやや扁平な変形Ｉ字文を有するもの。器形は浅鉢形土器がある。

c類　口唇部に上方からの押圧による縄文を有するもの、器形は甕形土器が主である。

打製石器の分類

墳墓などの特殊な例を除き、石器時代の遺跡には完成された石器の他、石器製作の結果を示す多数の剥片・砕片・石核・未成品・失敗品が残されている。本遺跡も例外ではなくこれらの遺物は慣例的な器種名をもつ完成された石器の数をはるかに上まわる。このなかでも完成品と未成品、失敗品を区別することは特に困難であることから、本遺跡ではまず剥片・砕片・石核を選別し、残った二次加工のある石器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片の観察、分類に重点を置いた。剥片・砕片については大きさによって分類したが、石核の分類は時間の都合上割愛せざるを得なかった。

本遺跡出土の二次加工ある石器・加工痕・使用痕ある剥片は、概ね10種に分けられる（付表３）。このなかには両面加工石器（Ⅵ）のように、現段階では、独立した器種として積極的に認定できないものもあるが、大部分は慣例的な器種名をもつものである。これらは形態的な特徴によって、各々が以下のように類別できる。

Ⅰ　石鏃

a類　茎が全長の$\frac{1}{4}$以上で大型。**b類**　茎が全長の$\frac{1}{4}$以下で大型。**c類**　全体の形が菱形に近く厚みがある。**d類**　全長が 2.5cm以下で重さ１g 以下小型。**e類**　茎部が不明瞭で細身。**f類**　茎部が不明瞭で幅が広い。**g類**　無茎。**x類**　未成品或は失敗品。

Ⅱ　石錐

a類　断面菱形で棒状のもの。**b類**　有茎で石鏃と似るが全体的に厚味があり先端部磨耗が著しい。**c類**　断面菱形の刺突部が細く長く突き出しつまみをもつ。**d類**　小型の縦長剥片に周辺加工を施したもの。

e類　つまみ部から三角形状に突出した刺突部をもつ。**f類**　刺突部とつまみ部の境が不明瞭で先端が断面三角形。**x類**　未成品或は失敗品。

Ⅲ　石匙

a類　つまみに対して刃部を平行にもついわゆる縦形石匙。**b類**　つまみに対して刃部を直角にもついわゆる横形石匙。**c類**　つまみを中心に刃部が弧を描くもの。**x類**　未成品或いは失敗品。

Ⅳ　石篦

a類　先端部両面にfluting 状の剥離が施され先端部側面観は両刃状になる。**b類**　先端部片面に急角度の fluting 状の剥離が施されエンドスクレーパーに類似する。**c類**　先端部に fluting 状の剥離がなく粗い二次加工面が残るもの。**d類**　先端部両面とも一次剥離面で構成されるもの。**e類**　先端部の二次加工がほぼ直角に施され鈍さを感じさせるもの。**x類**未成品或いは失敗品。

Ⅴ　両面加工尖頭石器

二次加工が両面に及ぶもののなかで少なくとも一端が尖頭部を形成すると認められるものの一群。両面全体が二次加工面で覆われるものはなくいわゆる石槍にくらべ粗い印象を受ける。Ⅴｂを除けばさらに加工が加えられたとしても従来知られている器種にはなり得ない。**a類**　加工が剥片周辺全体に及ぶもの。**b類**　加工が一端にしか認められないもの。**x類**　未成品或は失敗品。

Ⅵ　両面加工石器

この一群のなかには、加工が進めば石篦など従来知られている器種になり得るものもあり、前述したように新器種として独立させるには現段階では無理があるかも知れない。しかしアスファルトが付着した例（第24図９）から完成品があることも確実であろう。**a類**　横長剥片を素材としバルブを剥取しているもの。**b類**　縦長剥片を素材としたバルブを両側縁から剥取しているもの。**c類**　ぶ厚い剥片の両面を粗く加工しているもの。

Ⅶ　スクレーパー

a類　いわゆるラウンドスクレーパー。**b類**　剥片の一部に急角度の二次加工を施したもの。**c類**　剥片の一側縁に角度の小さい二次加工を施したもの。**d類**　剥片の二側縁に角度の小さい二次加工を施したもの。**e類**　抉りのあるノッチドスクレーパー

Ⅷ　打製石斧

本遺跡では１点のみ出土。

Ⅸ　加工痕ある剥片

剥片の一部に二次加工を施したもので、加工の部位に斉一性がなく連続しない。

Ⅹ　使用痕ある剥片

剥片の側縁に連続する刃こぼれが認められるもの。

Ⅺ　剥片・砕片

剥片・砕片は目的的剥片になり得るか否かを目安に類別した。**a類**　約10×５cm以上。この類に入る石器としてⅦｃ類の一部がある。**b類**　約10～5×5～３cmで最大厚　２cm以上。この石器に見合う石器はほとんどない。**c類**　約10～５×５～３cmで最大厚　２cm以下。本遺跡の石器のうち石鏃・石錐を除くものの素材。**d類**　約５～３×３～２cmで厚さ1.5cm以上。これ大きさに見合う石器はほとんどない。**e類**　約５～３×３～２cmで厚さ1.5cm以下。石鏃・石錐等小型の石器の目的的剥片。**f類**　約３×２cm以下。ld の素材となるが大半は砕片といえる。

磨製石器の分類

今回の調査で得られた石製品の種類は比常に多い。広義的には、磨製石器も石製品として理解されるが、ここでは利器としての磨製石斧・凹石・磨石等につき、類形的に分類、把握しその概要を提示する。

XII　磨製石斧

磨製石斧は、完形品が少なくその全様を知り得るものは少ないが、基部や刃部の形態および断面形により次の4類に分類される。

a類　基部・刃部が平坦で定角形をなすものを一括してa類とする。断面形状は面取りが鋭く隅の角張りが強く長楕円形を呈する。

b類　基部・刃部が丸みをもちa類に比べて基部の隔がせまく鋭くなる。断面形状は隅が丸みをもち中央部で凸状にふくらむもので、面取りの顕著なもの（b_1類）とややあまいもの（b_2類）に細分できる。

c類　基部は丸みをもつが、b類に比べて幅が広く、断面状は面取りがなく長円形を呈するものである。

d類　小形の磨製石斧で、基部・刃部が丸みをもち定角形を呈する。a～c類とは意図した使用目的が異なるものでd類として分類する。

XIII　磨石

磨石は、円形や楕円形を呈する自然礫で、礫中の平坦面と縁辺に磨面を持つものである。形状や磨面の位置等により5類に分類できる。

a類　径6㎝内外の礫を用い、形状は楕円形を呈する。磨面を礫の平坦面と縁辺にもつ。

b類　径10㎝内外の球形を呈し、磨面を球形の接地面1面にのみもつものである。

c類　形状は、偏平な長楕円形隅丸状の方形を呈するもので、礫中の平坦面一面のみ磨面をもつものと、両平坦面二面に磨面をもつものとがある。

d類　形状は、円柱状を呈し断面は円形を呈する。磨面を両端部及び縁辺にもつものである。

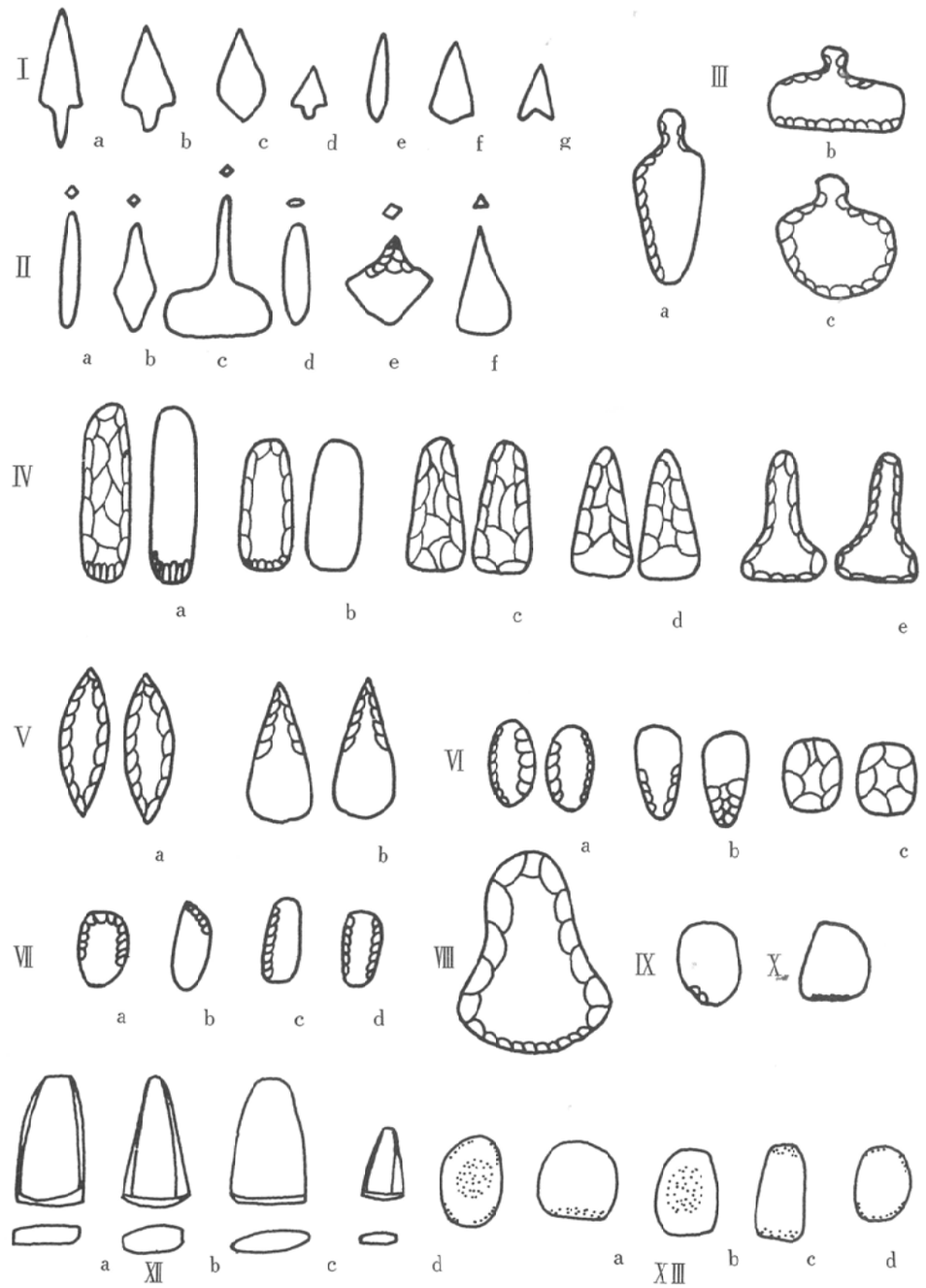
e類　e類は径10㎝内外の楕円形を呈する礫を利用している。c類に比べて断面形は凸状にふくらみ、磨面を縁辺にもつものである。縁辺に敲打痕をもつものも含まれる。

XIV　凹石

凹石は、楕円形・円形状の自然礫に、1個あるいは複数個の凹みを有するものである。今回の調査では、出土数量が少なく個々については後述する。

石器分類概念表

表 — 3



Ⅲ　遺構と遺物

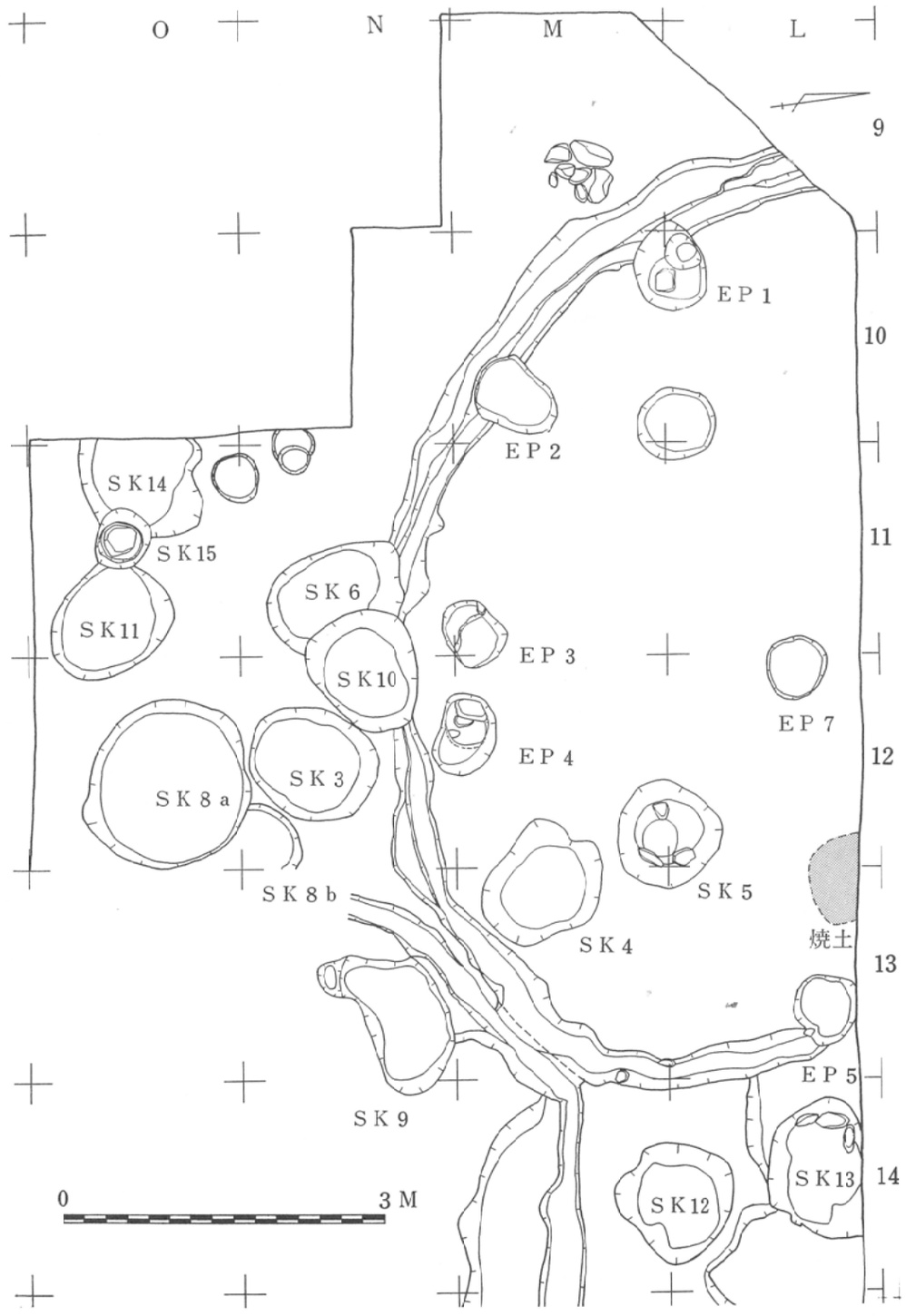
第１号住居跡（ＳＴ１）（第５～11図、図版３～８）

Ⅱ区９～13－Ｌ～Ｎグリッドを第Ⅲ層黒褐色土層まで掘り下げたところ落ち込みがあらわれたので、黒褐色土層面でこの落ちこみの範囲を明らかにした。その結果この落ち込みは幅約35cmの周溝をもつ住居跡であることを確認したが、北側は児童遊園地になっているため調査が出来ず、南部の９～13－Ｌ～Ｎグリッドの計13グリッドを調査した。先の事情のため全体のプランは調査出来なかったが、ほぼ楕円形を呈すると思われる。検出された東西最大径は8.5m、南北4.4m を測る。深さは耕作土上面から床面である第Ⅳ層黄褐色土層までは約72cmであるが、その上約15cmの黒褐色土層（第Ⅲ層）上面から掘り込まれる。

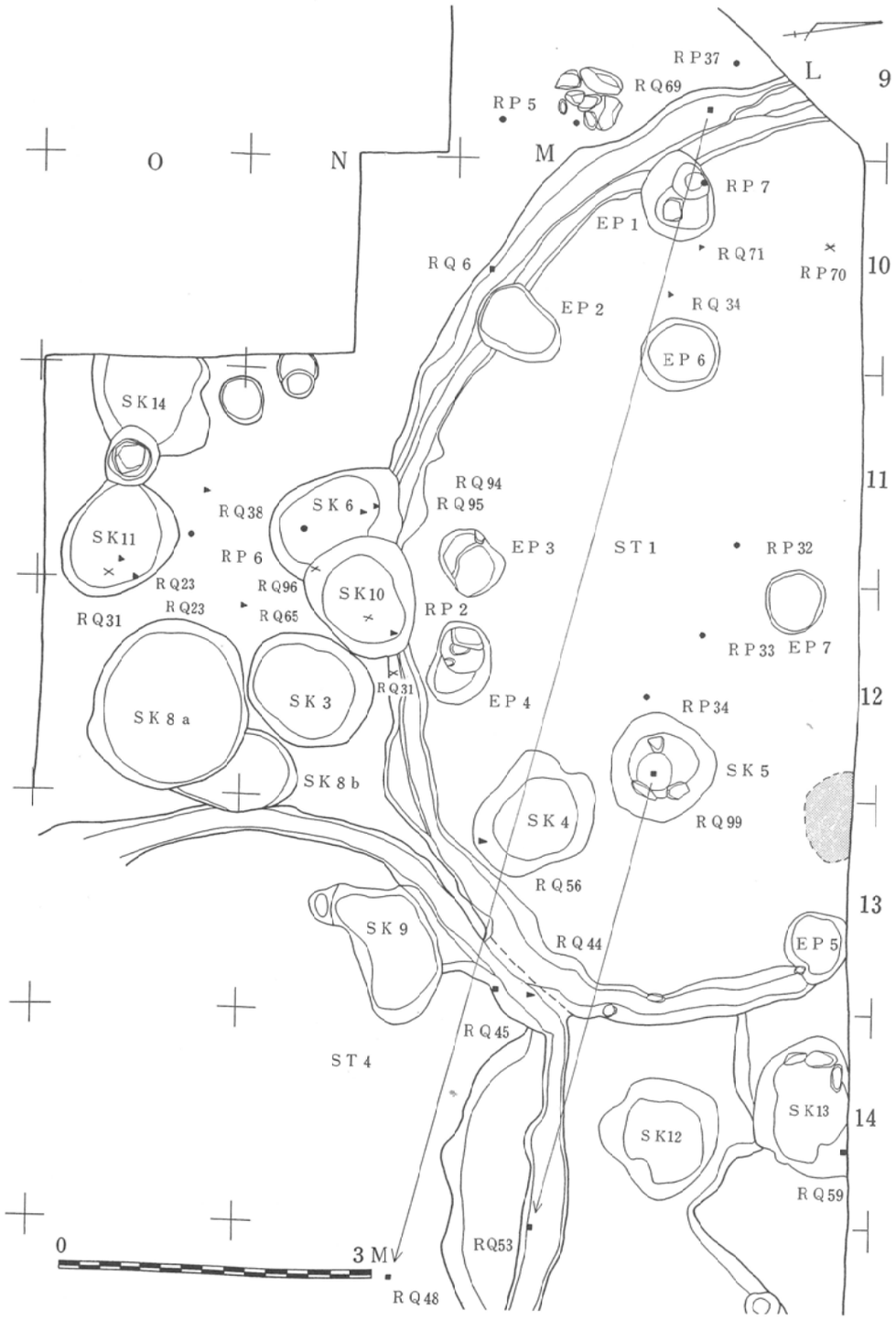
住居跡の壁は重直に近く、床面から溝底までは約18cmを測り、かなり深い周溝である。床面は中央に向かって少しずつ低くなり、壁直下よりの差は約10cmほどである。床面のうちでも壁より50～70cm以上内測の部分は壁付近に比べるとやや固く踏みしめられているが、余り固いものではない。壁、床面とも目立った凸凹は見られない。

柱穴と思われるピットは全部で７個（P_{t1}～P_{t7}）あり、周溝際に５個、床面内部に２個あり、周溝際の西側３個（P_{t1}～P_{t3}）はほぼ 120cm間隔でならぶが、ほかは規則性をもっていない。ＳＫ４・５は形状や出土遺物から本住居跡よりも古い時期のものと思われる。
それぞれのピットの直径は約60～80cm、深さは約25～35cmを測る。すべてのピットが重直な掘り方で、主柱穴的様相を示しており、補助的なピットは確認出来なかった。またピット内からは若干の土器・石器片が出土している。12・13－Ｌグリットにかけて床面に焼土を確認したが、掘り込みなどがなく炉とは断定出来ない。３号住居跡からは石組炉が検出されていることを考えあわせると、本住居跡の炉は北側の未掘区域に存在することも考えられる。

土層は表土Ⅰ層、挙大の石を含む褐色土Ⅱ層、細礫や炭化粒子を多く含む黒褐色Ⅲ層、炭化粒子を多く含む粘着性のある覆土①層、炭化粒子・赤色粒子を含み、粘着性の強い覆土②層、やや暗い暗褐色土覆土③層、黄色ブロックを多く含み、周溝側に推積している覆土④層の順に推積している。表土から床面までの深さは約50cm、遺構検出から床面までの深さは約20cmである。覆土の大半はやや暗い色調で、壁に近い部分ではⅥ層の黄褐色土層の漸移層と思われる黄褐色粒子やブロックがみられた。これらのうち遺物包含層はⅡ層からであり、Ⅲ層上面から住居跡の掘り込みが始まり覆土①～③層までは遺物が包含されている。



第５図　１号住居跡



第６図　Ⅰ号住居跡付近遺物分布図

本住居跡内出土土器の総数は2031片である。内訳は、覆土１履 953片、同２層 256片、内３層93片、同溝内 156片、床面 138片、ピット内 435片である。

覆土１層からは第Ⅰ～第Ⅻ群土器が各々少数づつ出土している（第８図１～23）。１は第Ⅰ群土器ｂ類（以下Ⅰb類と略称）、５はⅢａ類、３はⅥａ類、２・４はⅣｂ類、6～９はⅥａ類、10はⅥｂ類、11・12はⅦａ類、13・14はⅧａ類、15はⅧｂ類、17はⅨa類、16・20はⅨb類19はⅩｂ類、18はⅩｃ類、21はⅪｂ類、22・23はⅫｂ類である。本層は相当に混在しているとみられる。

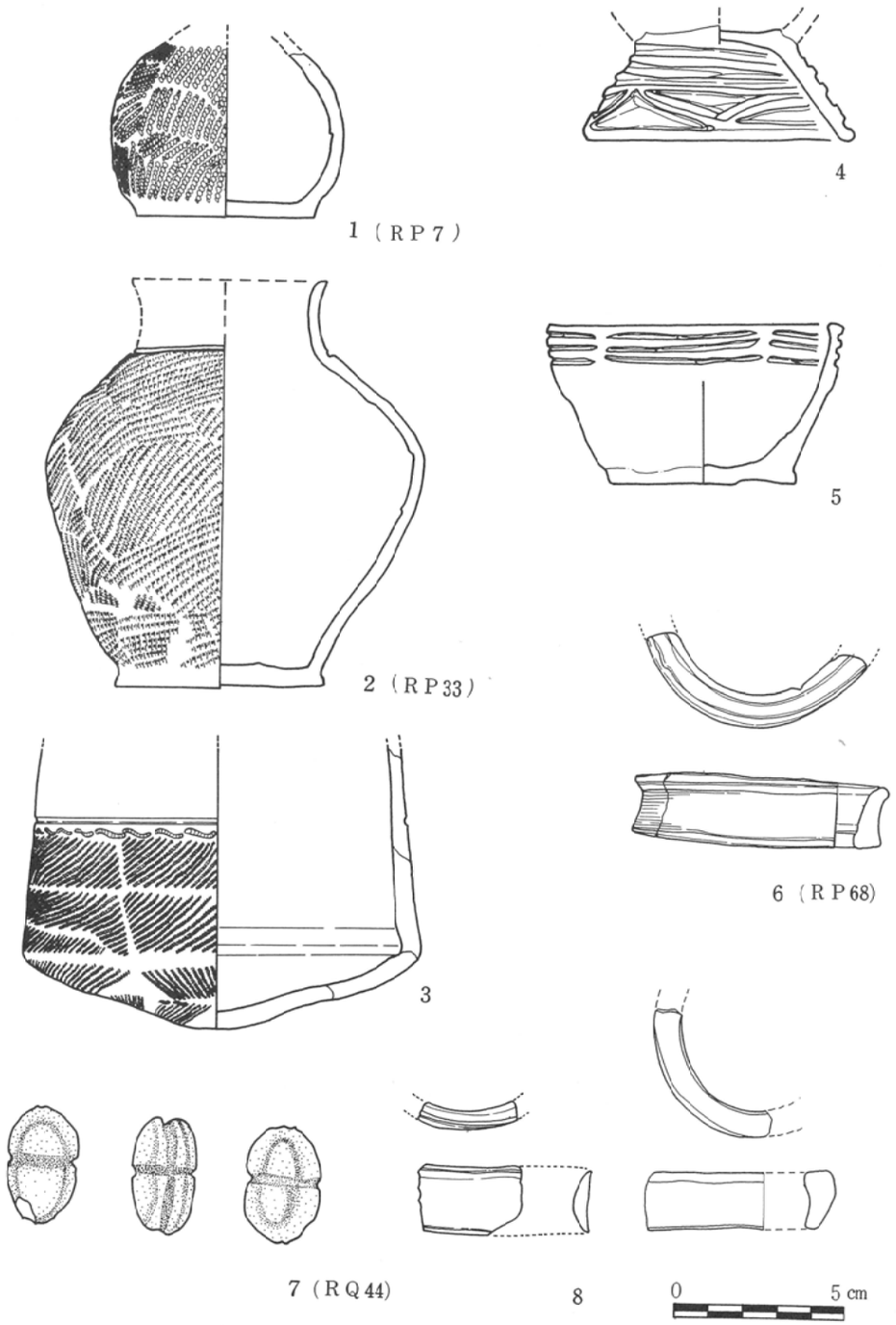
覆土２・３層は堆積が薄く曲線的な重なりを示すので、土器については一括して述べる。本層では１層に比べ各群の混在は少ないが、第Ⅴ群～第Ⅹ群土器がみられる（第８図24～36）。24はⅤａ類、25はⅤｂ類、26～29はⅥａ類、30～32はⅧａ類、33・34はⅨｂ類、35・36はⅩ群ないしⅪ群に伴なう粗製深鉢である。ＥＰ３付近の覆土２層よりⅥ・Ⅶ群土器や石棒・両頭石斧等がまとまって出土している。第７図３は本住居東端覆土２層より出土した椀形土器で、Ⅷａ類に伴うとみられる。第７図１・２・４は覆土３層出土の完形土器である。４はⅪａ類で、高坏に近い台付浅鉢の台部である。３条の平行沈線下に四単位のエ字文を施している。１は大きな底径をもつ平底の小形壺で、Ⅻ群土器に伴なう器形とみられる。２は体部上半に最大径を有し、口頸部の直立する小形壺で、体部にＬ｛｢の斜縄文を施している。Ⅹ～Ⅻ群土器に含められるものである。

第９図１～22は周溝内および床面より出土している。Ⅰ群（１～３）・Ⅵ群（６・７）・Ⅶ群（８）土器も存在するが小片であり、主体をなすのはⅪ群（13・14・16・17）・Ⅻ群（15・18・20・22）土器である。第７図５の浅鉢は、床面より出土し、３条の平行沈線文を６単位のＩ字文風に施しており、Ⅻ群土器の仲間とみられる。

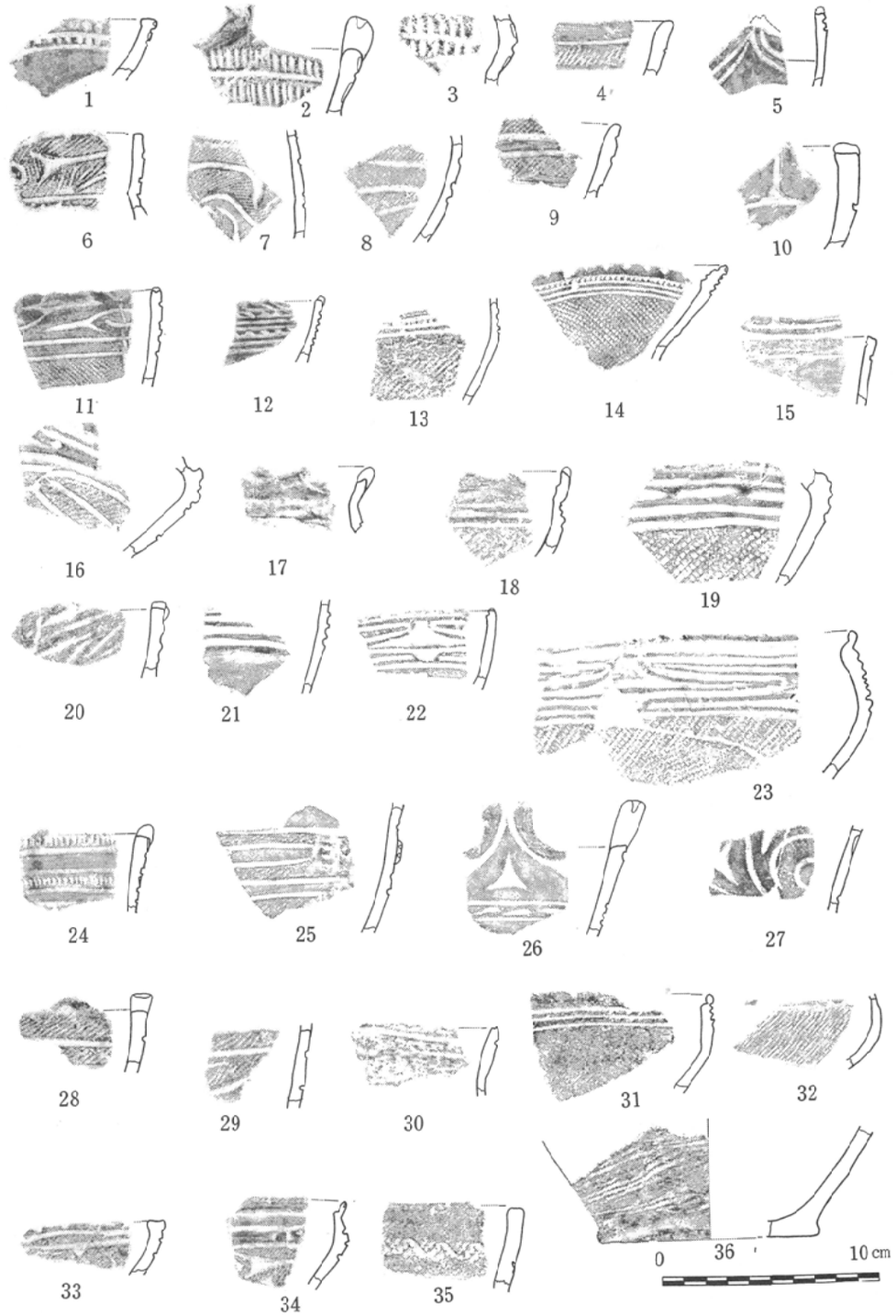
23～37は、本住居跡の柱穴より出土し、Ⅰ群（１・26）・Ⅱ群（24・25・27～29）・Ⅵ群（34～36）・Ⅺ群（37）土器等があり、覆土１層同様に遺物の混入が著しい。

これらの土器群のうち本住居跡に伴うことが明確なものはない。本住居跡の時期をもっともよく反映しているとみられるのは床面・周溝内出土の土器群である。中でも主体を占めるものはⅪ群・Ⅻ群土器であり、この傾向は覆土最下層(覆土３層)でも同様である。また新しい時期の遺物に古い時期の遺物が混じることはあっても、その逆が成り立たない層位学の原則も考慮するならば、本住居跡の時期はⅪ群・Ⅻ群土器の時期と把握される。Ⅺ群・Ⅻ群土器は、Ⅳ章で後述するように、縄文時代晩期大洞Ａ・Ａ′式土器に併行する時期のものとみられる。

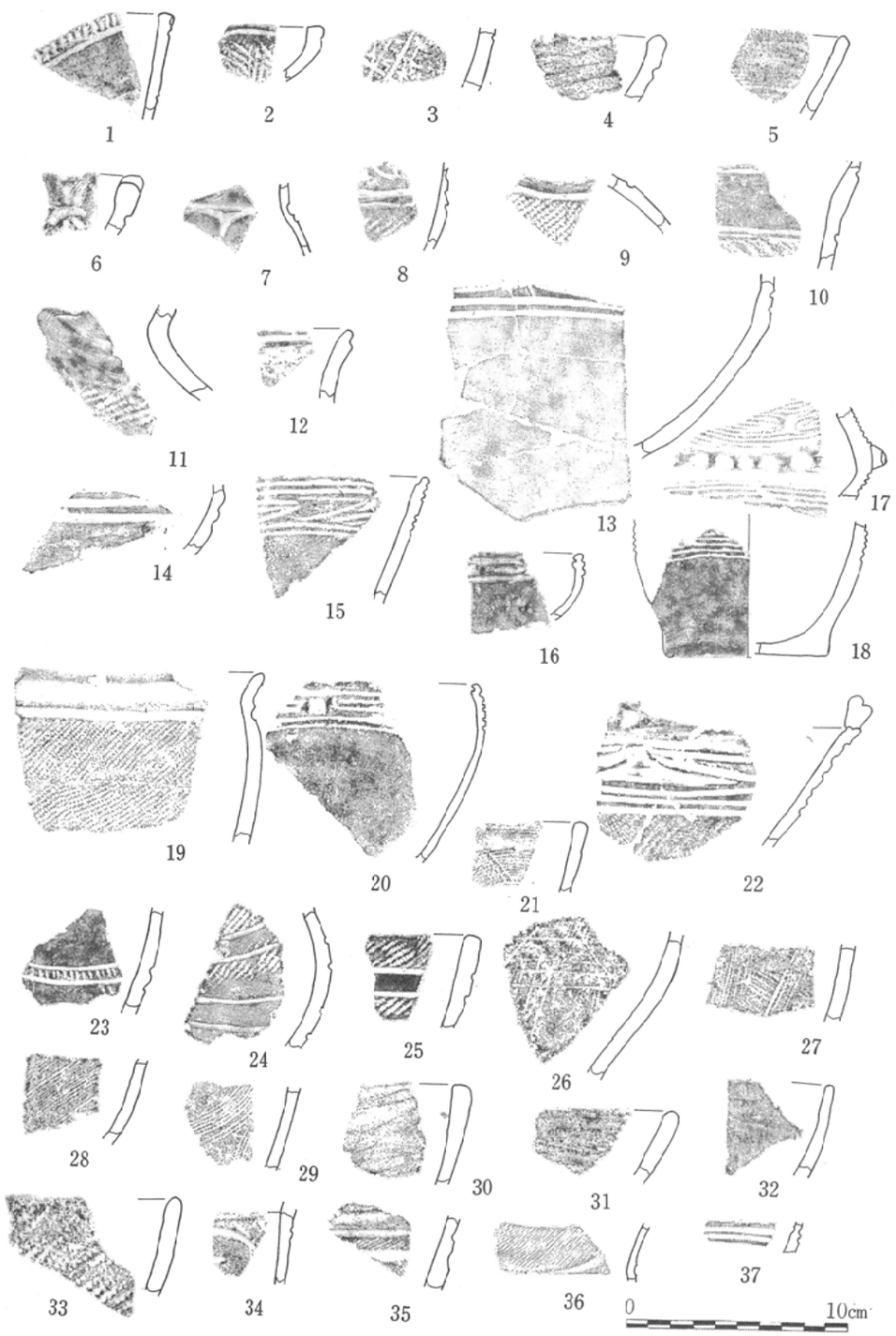
本住居跡出土の土製品(第７図6～9)のうち９は覆土１層出土の土錘である。径3.3×2.1cm、重量14g を測り、小形品である。形状は楕円形を呈し、その両軸にそって幅３mm



第７図　１号住居跡出土土器・木製品



第８図　１号住居跡出土土器（１）



第９図　１号住居跡出土土器（２）

の凹帯が全周する。第７図６～８は、ＥＰ１ 覆土出土の耳栓である。総数３個出土している。８は全体の５分の１程度の破片で、推定径約７㎝程度である。断面形は扁平で、中中部で屈曲して『く』の字状を呈する。６は床面より出土し、覆土１層出土のものと接合した。全体の３分の１ほどの破片である。推定径は約７㎝程度で、表面をていねいに研磨している。

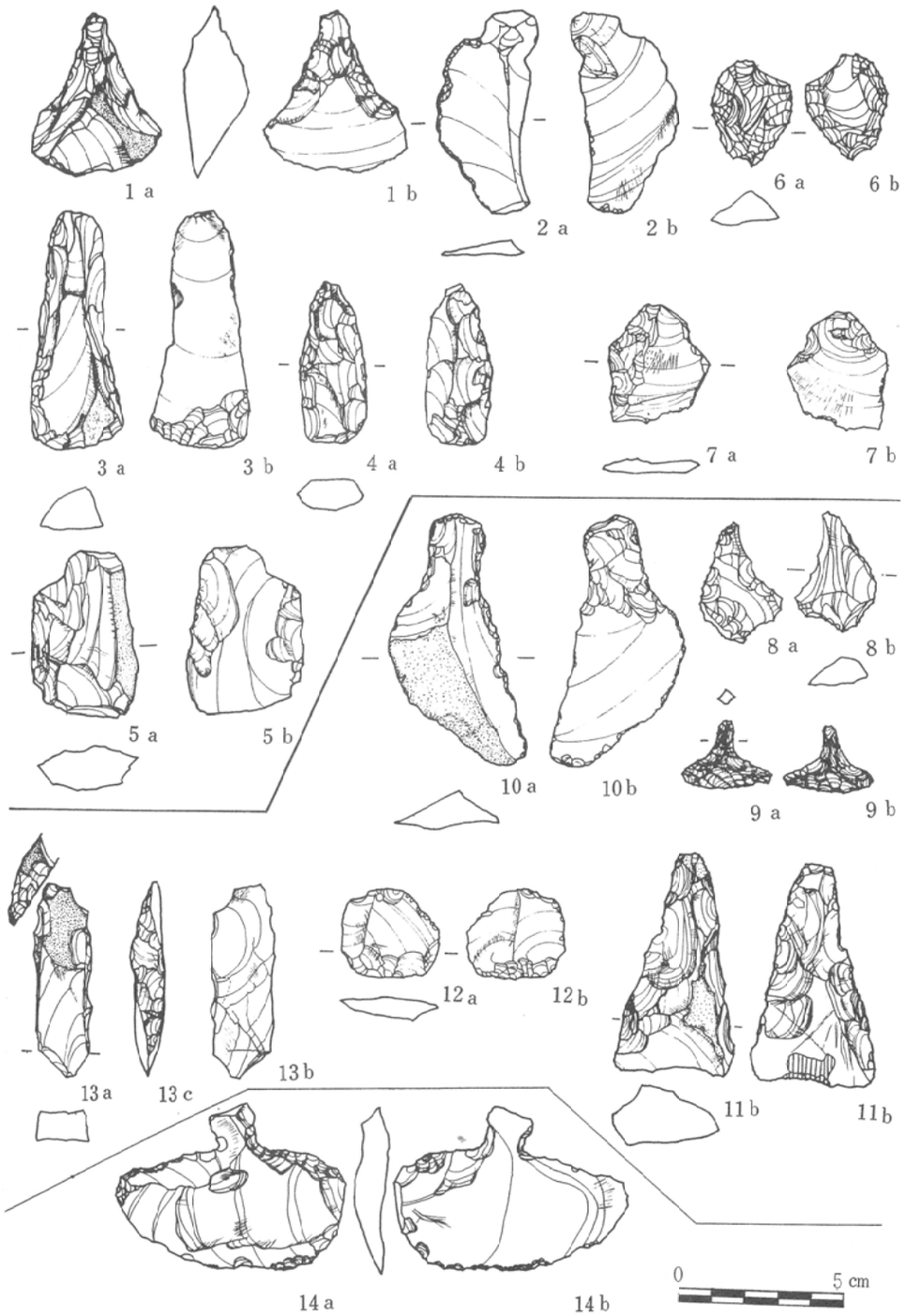
本住居跡出土の打製石器（第10図上段）の内訳は第11表のとおりである。そのうち二次加工のある石器は総数28点で、その大部分は覆土１層から出土している。

１はⅡc類の未成品であるとみられる。２はａ面左側縁に細い二次加工があるのみで、素材の形をほとんど変えていない。b面左側縁には連続した細い剥離痕が認められる。３はⅣa類の石箆で、素材の剥離面から急角度の二次加工を施した両側縁をもち、先端は表・裏面からフルーティング様の剥離が施され両刃状となっている。４はⅣc類で、完全な両面加工となっているが、先端部加工はない。５はⅥa類で、ｂ面左側縁にも大きな剥離面があり、未成品ともみられる。６はⅦa類で、表・裏面ともほぼ全周に及ぶ典型的なラウンドスクレーパーである。７はａ面左側縁を刃部とするⅦc類のサイドスクレーパーである。

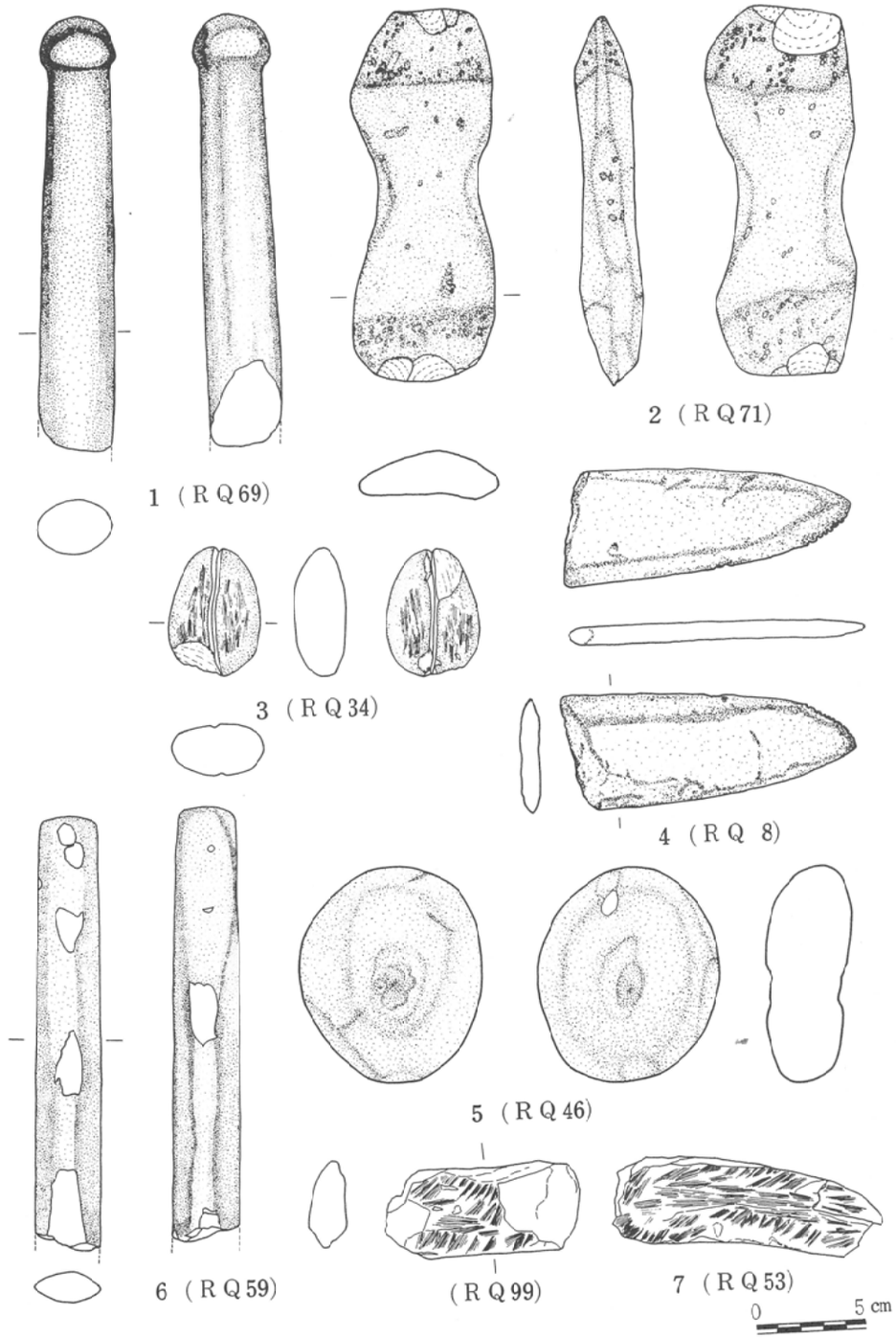
図示できなかったが、この他にもⅤb類２点・Ⅵa類２点・Ⅵb類２点・Ⅵc類１点・Ⅶa類１点・Ⅶb類２点・Ⅶc類１点・Ⅶe類１点・Ⅸ類７点・Ⅹ類１点が出土している。

磨製石器は２点のみ出土している。第11図２は、両頭石斧で、全長16.4㎝・刃部幅 6.5㎝を測る。断面は長楕円形を呈し扁平である。刃部は両面からていねいに敲打を行い、基部両縁も敲打により整形している。刃部には打撃による大きな剥離がある。第48図６は覆土２層出土の磨石である。前述した分類によればａ類として把握される。材質は、安山岩で、重量 260ｇを計る。

その他石製品は３点出土している。第11図１は有頭の石棒である。断面が楕円形を呈し、最大径3.2×2.4㎝を測る。表面に縦位の擦痕があり、体部縁辺・頭部の頂端部に敲打痕がある。その上をていねいに磨いて整形している。材質は、泥岩で、後述するＳＴ３－Ｆ１出土の石棒と同一個体である。第11図４・第11図７はいずれも片刃の石刀である。４は、覆土１層出土で、背部、刃部とも先端で弯曲が著しい。刃部先端に刻みを有し、背部・刃部縁辺に横位の擦痕が走り、平担部をていねいに磨いている。刃部に刃こぼれ状の使用痕は認められない。材質は泥岩である。７はＥＰ５の覆土より出土している。片刃で、背部に若干のそりをもつ。表面に斜位の擦痕があるが、つくりは雑である。刃部に刃こぼれ状の痕跡は認められない。材質は粘版岩で節理が走り、表面の離脱が著しい。また後述するＳＴ４－Ｆ１出土の石刀と同一個体で接合した。



第10図　1・4・3号住居跡出土石器



第11図　1号住居跡・土壙群石製品

３号住居跡（ＳＴ３）　（第12～27図・図版９～26）

Ⅱ区13～17－Ｎ～Ｓグリッド第Ⅲ層（黒褐色土層）上面で確認された竪穴式住居跡である。地山（第Ⅳ層－黄褐色砂質土層－）を深く掘り込んでいるため壁・周溝等の検出は容易であった。本住居跡の床面はＳＴ４の周溝の一部を埋め込んでつくっており、本住居跡の北側でＳＴ４を切っていることがわかった。

平面プランは南北にやや長い略円形を呈する。大きさは南北10.2m×東西 9.4m、深さは32cmを測る。覆土は４層に大別される。覆土①層は、粘質の明褐色土層で、厚さ15cm前後である。多量の炭化粒子と若干量の赤色粒子を含む。北側の一部を除いて住居跡のほぼ全体を覆っている。覆土②層は、粘質の褐色土層で、厚さ10～13cmである。多量の炭化粒子・赤色粒子を含む。覆土③層は、粘性の強い暗褐色土層で、厚さ５～８cmである。住居の西側ではやや厚く堆積している。赤色粒子を含む、周壁際では黄色ブロックが混じる。覆土④層は、粘質の暗黄褐色土層で、厚さ５cm前後である。地山との漸移層である。

壁は南側でやや緩やかな立ち上がりを示すが、全体的にほぼ垂直に近い立ち上がりをを示す。壁高は13～28cmを測る。周溝は、南西側で２列に分かれ、外側のは壁柱穴とみられる小穴群、内側は溝状の形態を示す。同溝の幅は35～53cm、深さは床面下45～50cmを測り、相当深いものである。床面は全体的に平担であるが、中央で12cm程の凹みを示す。周溝付近を除いて地山を固く叩きしめており、とくに貼床はみとめられなかった。

柱穴は20個（ＥＰ１－ＥＰ20）あり、主柱穴的様相を呈するのはＥＰ１～５・７の６個である。同溝の中にあるＥＰ10～16は補助的なものとみられる。主柱穴的様相を呈するピットは、直径１m前後の不整円形を示し、深さ60～ 110cmを測る。各ピットとも最深部を中央寄りにもち、内側に傾斜している。周溝内のピットは、 径40～60cm、深さ40～50cmを測る。円形のほぼ垂直な掘り込みを示している。

炉は、石組炉で２基（ＥＬ１～２）検出した。ＥＬ１は住居内ほぼ中央に位置する。平面形は1.6m×1.3mの楕円形を呈する。拳大から35cm位の細長い楕円形の河原石を用い、南側に20cm程度の河原石を方形に組んだ張出し部を有する。深さは、中央部で25cmを測り、中央部がやや高くなっている。覆土は４層に区分される。 ①層は多量の木炭を含む黒褐色微砂層。 ②層は焼土・木炭を含む明褐色微砂質土層。 ③層は赤褐色土層で、炉内中央部に集中して堆積している焼土である。 ④ 層は少量の木炭を含む暗褐色微砂層で、張り出し部に堆積している。ＥＬ２は住居北側にあり、直径60cmの円形石組炉である。

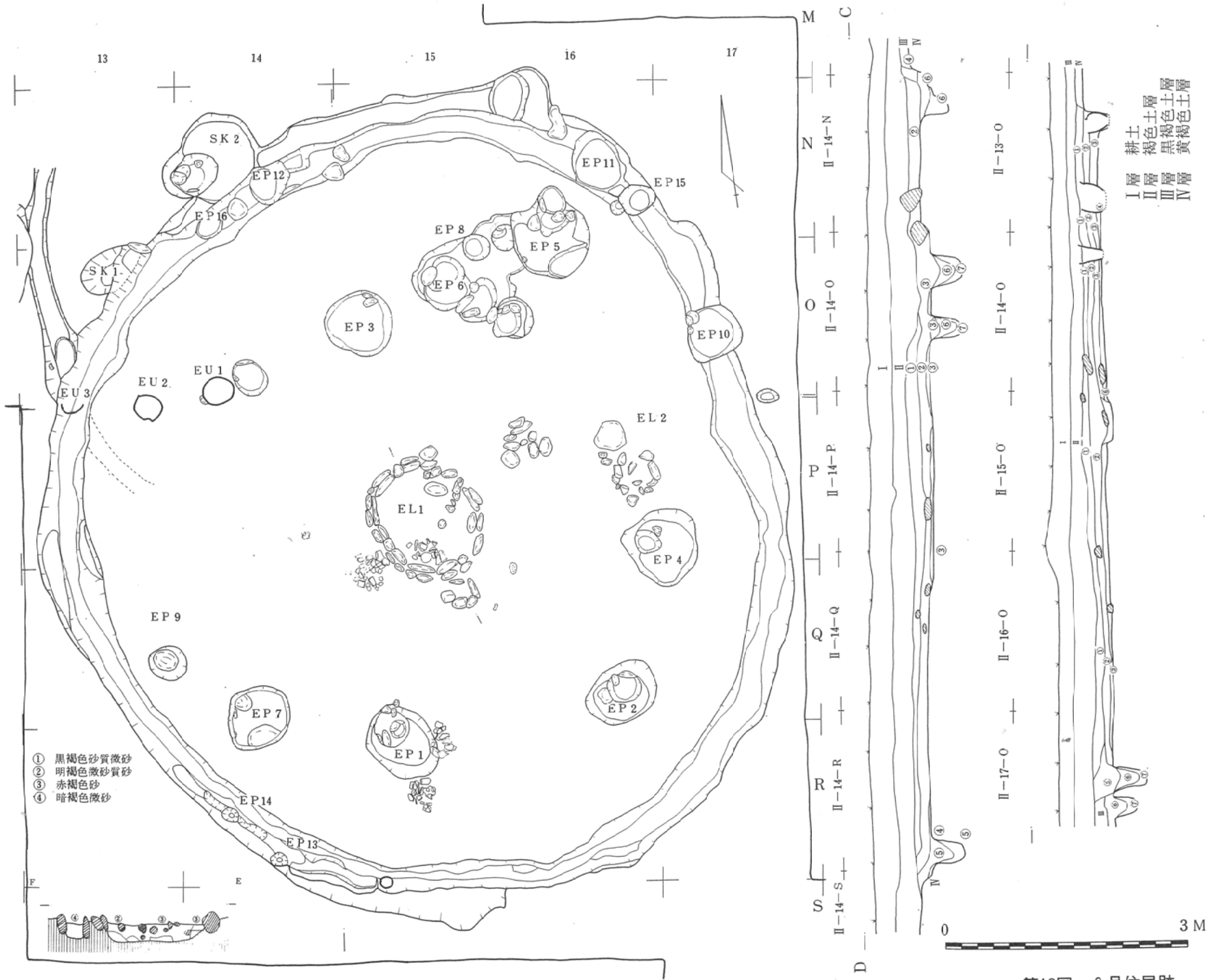
住居の北西部分13～14－Ｐライン上で、埋設土器が２基（ＥＵ１～２）検出されている。床面を約10cm掘り込み、体部下半を欠いた甕形土器および鉢・浅鉢形土器を２～３個組み合わせて埋置している（第14・15図）。埋設土器の上面は床面より20～30cmの高さを有し、

26)

）上面で確認された竪穴式住居跡であ
込んでいるため壁・周溝等の検出は容
を埋め込んでつくっており、本住居跡

きさは南北10.2m×東西 9.4m、深さ
は、粘質の明褐色土層で、厚さ15cm前
む。北側の一部を除いて住居跡のほぼ
、厚さ10～13cmである。多量の炭化粒
色土層で、厚さ５～８cmである。住居
、周壁際では黄色ブロックが混じる。
である。地山との漸移層である。
体的にほぼ垂直に近い立ち上がりを
２列に分かれ、外側のは壁柱穴とみら
35～53cm、深さは床面下45～50cmを
あるが、中央で12cm程の凹みを示す。
に貼床はみとめられなかった。
相を呈するのはＥＰ１～５・７の６個
とみられる。主柱穴的様相を呈するピ
110cmを測る。各ピットとも最深部を
ットは、 径40～60cm、深さ40～50cm

Ｌ１は住居内ほぼ中央に位置する。平
cm位の細長い楕円形の河原石を用い、
有する。深さは、中央部で25cmを測
分される。 ①層は多量の木炭を含む
砂質土層。 ③層は赤褐色土層で、炉
層は少量の木炭を含む暗褐色微砂層で、
り、直径60cmの円形石組炉である。
が２基（ＥＵ１～２）検出されている。
および鉢・浅鉢形土器を２～３個組み
上面は床面より20～30cmの高さを有し、



第12図　３号住居跡

口縁部が良好に遺存する。ＥＵ１は南側を河原石により補強されている。また、13—Ｐラインの周溝中にも、本部下半の欠けた甕形土器が一個斜めに検出されている。これらは、ほぼ一直線上に並び、いづれも体部下半を欠いている等を考え合わせると、共通の目的をもって埋設されたものとみられる。土層観察の結果、上面からの掘り込みがみられず、土器の型式もＳＴ３の時期と共通する。したがって本住居跡に伴う施設と考えられる。

本住居跡出土の土器の総数9537片である。内訳は覆土１層4019、２層1485、３層 743、４層1690片である。

覆土１層からはⅠ群～Ⅺ群土器まで各群の土器が出土している（第18図・図版16・17）。１・２はⅠa類、３はⅠb類、４・５はⅢa類、６はⅢb類、７～10・12はⅣa類、11・13はⅣb類、14～16はⅤa類、17～18はⅤb類、21～25・29はⅥa類、26はⅥb類である。このほか器面全体に曲線的な刷毛目文（28）、粗い刷毛目文(19)、および研磨(20・27)を施しているものもある。本層で主体を占めるのはⅨ～Ⅺ群土器で、30～36はⅨb類、38～40はⅩa類37・42・44はⅩb類、41・43・45・46はⅪa類に属する。第17図２も覆土１層から出土したもので、口縁部に４個の小二連突起を有する鉢形土器である。体部に直線的なＩ字文が８単位づつ３段に施されている。Ⅺa類に属する。

覆土２層からはⅣ群～Ⅺ群土器までの土器が出土している(第19図１～５)。１はⅣb類、２・３はⅦa類、４・５は壺形土器の一部でⅪc類に属する。第16図５・６も本層から出土したもので、５は壺形土器の頸部から体部上半、６は本部下半である。口頸部が内側にすぼまり、頸部に１条の沈線、 体部にＬ{R/R とＲ{L/L ２本の縄文原体を交互に用いて羽状縄文を施している。内面も比較的よく磨かれている。Ⅹc類に属するとみられる。

覆土３層からⅢ群土器～Ⅺ群土器まで出土しているが、Ⅹ・Ⅺ群土器が主体を占める（第19図６～27、図版18）。７はⅢb類、８はⅣa類、９はⅥa類に属する。７は横方向に粘土貼付による板状の突帯・縦方向に短い沈線を有する深鉢形土器の破片で、類別は不明である。10・11はⅩa類の壺形土器。16も粗い磨消縄文を伴なう　字文を施しており、工字文間に斜方向の連結を有する。17は磨消手法を伴なわない工字文でⅪa類、13・21～23は頸部に眼鏡状の突帯を有するⅩb類である。甕形土器は口唇部に１条の沈線を加えた波状口縁が特徴的である。19・20は平縁で口縁部に１条、頸部に４条の平行沈線を有する甕形土器である。Ⅹc類の仲間に含めておきたい。12・18は平縁ないし波状口縁で、口頸部に３条の平行沈線を有する浅鉢形土器である。これもⅩc類に属する。15は口唇部に刻目をもち、頸部に３条の平行沈線を有する鉢形土器である。Ⅹc類に属するとみられる。24～26は口唇部に箆状工具による連続押圧波状文を有する甕形土器である。24・25は頸部に結節回転縄文、26は２条の幅広い平行沈線が施されている。24・25はⅪc類、26はⅩc類の中間的様相をもつ。

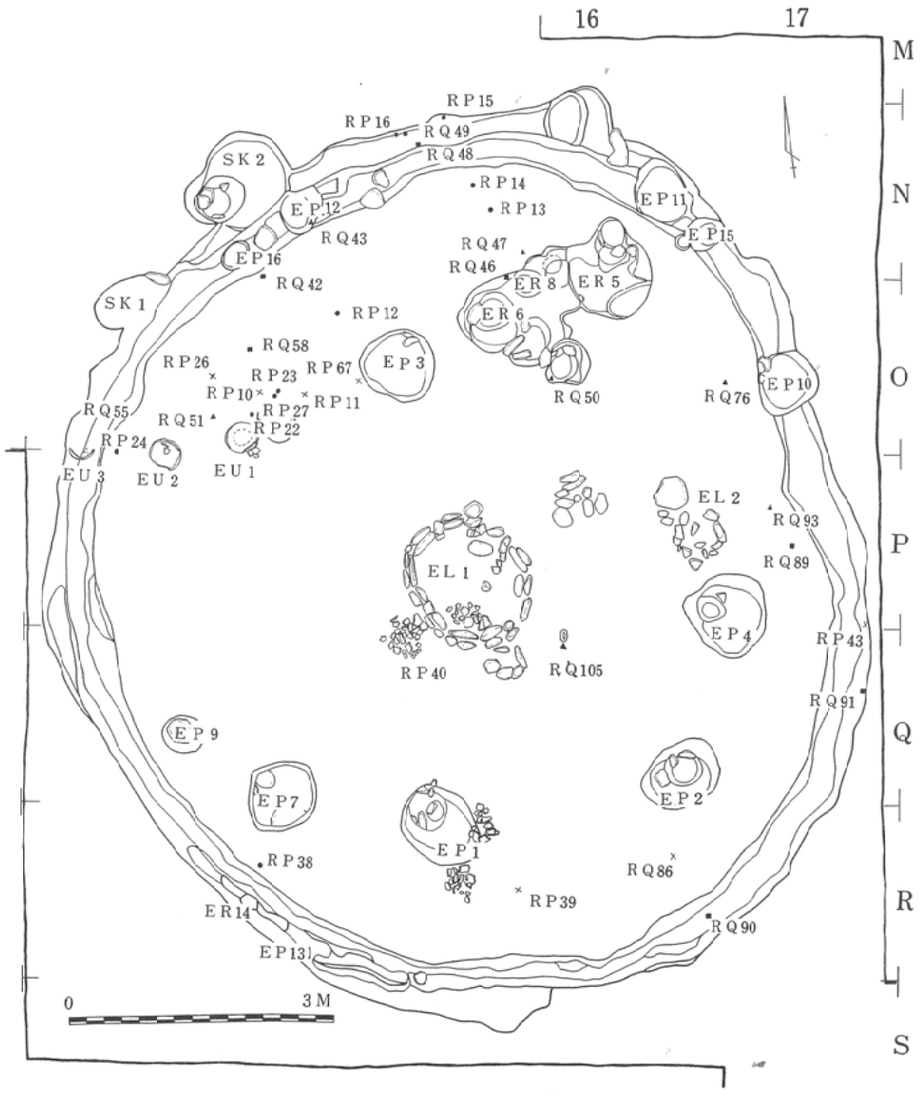
27は深鉢形土器の底部で一条交互式の網代痕が施されている。

第16図２～４・第17図１・２（図版15）も覆土３層から出土したものである。第20図１は口縁部に小波状突起と４個の中波状突起をもつ小形の台付浅鉢である。口頸部外面に２条、内側に１条の平行沈線を有し、体部はR{ℓ/ℓ 縄文が施されている。Ⅹc類に属する。３は口縁部に１個の中突起をもつ小形の鉢形土器である。頸部が研磨され、体部に粗いL{R/R 縄文が施されている。底部は 0.6cm位のあげ底となっている。第16図２は口縁部が欠損しているが、体部がほぼ直立する小形の深鉢形土器である。体部に粗いL {R/R 縄文が施され、底部周辺には縄文が施されない。器面内側に炭化物が付着している。３は体部上半を欠損する壺形土器で、底部がやや張出したあげ底風になっている。体部全面にL{R/R 縄文が施されている。４は半縁で体部下半が欠損する大形の浅鉢形土器である。頸部に１条の沈線、体部に一部結節を有するL{R/R 縄文が施されている。これらの土器の時期を明確に位置付けることは困難であるが、器形などからⅩないしⅪ群土器に属するとみられる。

覆土４層からはⅠ群土器～Ⅺ群土器まで出土しているが、Ⅸ～Ⅺ群土器が主体を占める（第20・21図、図版18・20）。第20図１はⅠb類、２・６・７・14はⅢa類、3～5・13はⅢb類、８～11はⅣa類、12はⅣb類、19・23・28はⅥa類、20はⅥb類、26はⅦa類、25・31はⅧa類、24・27・29はⅧb類に属する。15～17は撚糸文を施し21・22は器面全体が研磨されている。Ⅰ～Ⅷ群土器は量的に少なく、各群毎の顕著な増減は認められない。

30・38～44はⅨb類、32～35・45～50はⅨa類、第21図１・２・６はⅩa類、23・30～Ⅹはa類、７～22・24・25・35はⅩc類に属する。Ⅸa類とⅩc類はともに数条の平行沈線をもつ鉢ないし深鉢形土器を主とするものがあるが、Ⅸa 類の口縁部形態は直立ないし内傾するものが多く、Ⅹc 類はやや内弯した体部が口縁部で急に外反するものが多い。３・４は磨消縄文の手法を伴わない工字文が体部に施されている鉢形土器で、工字文が後述するⅪ群土器のような完成度を示さず、浮彫手法よりはむしろ沈線を主体とするものである。時期的にはⅩ群土器に併行するものと思われる。26～29は浮彫的な工字文でⅪa類。31・34はⅪb 類に属する。32・33・34はⅩc類に近い器形であるが、口頸部が長く伸びて甕形土器に近い器形をとることからⅪ群土器に入れる。37～39は平行沈線をもたない甕ないし壺形土器でⅪc 類に属する。40はⅪb類の浅鉢形土器の底部周辺で、庭部との境界に１条の沈線を有している。

第22図（図版19）は周溝内から出土した土器である。Ⅰ～Ⅷ・Ⅻ群土器も小数存在するが、主体はⅨ～Ⅺ群土器が占める。１はⅠb類、２・３はⅢa類、５はⅤa類、６～９はⅤb類に属する。10～12は器面全体が研磨され、口縁端がやや肥厚する大形の深鉢形土器である。Ⅴ群土器に属すると見られる。14・15はⅪb類、13・16～23・35Ⅺa 類である、Ⅸa類の鉢ない



第13図　３号住居跡内遺物分布図

●土　器　　▲石　器

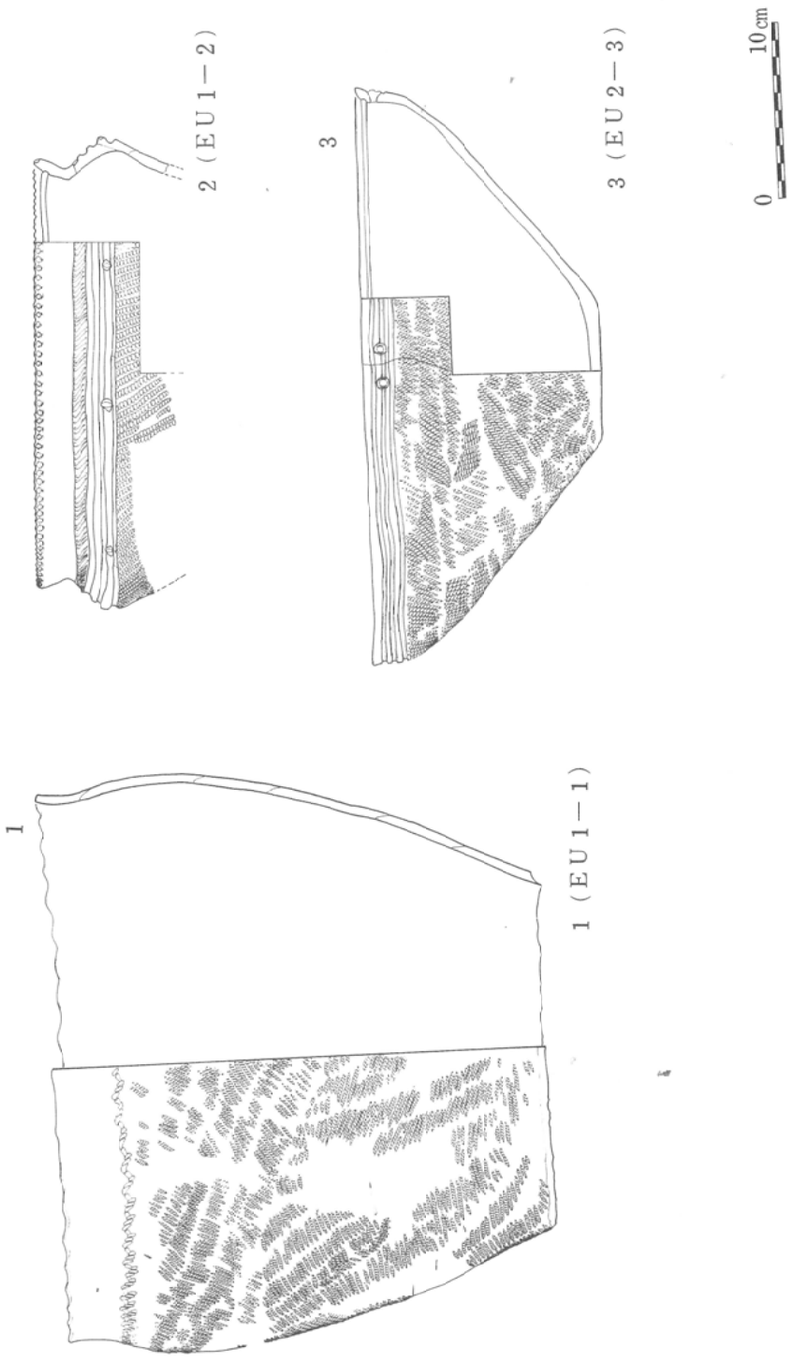
■石 製 品　　×土 製 品

し深鉢形土器の口縁部は短く急激に外反する傾向を示す。このような特徴は26・27・29の大形の深鉢形土器にもみられる。24・25・28はⅪc類の鉢ないし甕、28・31は同類の壺形土器である。30は施文手法はⅪc類に類似するが、器形は口縁部が直立した深鉢形土器である。口縁の小波状突起も浅いものでむしろⅨないしⅩ群土器に伴なうとみられる。34は鉢ないし壺形土器の口縁部片で、体部上半に縦方向の沈線によって長方形の浮彫文様を重ねているものである。34に該当する小類は設定しなかったが、他遺跡での併出関係からⅪ群土器に属するものとみられる。36はⅪa類の浅鉢の体部下半である。33はⅫb類に属する浅鉢形土器で1片のみ出土した。ＳＴ３の下限時期を考える点で重大な意味を持つものであるが、後述するようにＳＴ３の時期は床面や埋設土器の資料からⅫ群土器まで下ることは考えられず、何らかの攪乱によるものと考えられる。

第23図25～43（図版20）は床面から出土した土器である。Ⅹ・Ⅺ群土器がほとんどである。25～28はⅩa31～35・40・41はⅩc類、29・30・43はⅪa類、39・42はⅪc類に属する。43は器面に赤色顔料の塗彩がみられる。第16図１（ＲＰ10・図版15）はＳＴ３南端の壁直下から出土した小形の壺形土器である。口頸部が欠損しているが、体部がやや扁平で底部に４個の貼瘤状の脚を有する。現存する体部の上端はあたかも二次的整形を施している如く直線的で平滑である。文様は体部に５単位２段の磨消縄文を伴なう工字文を有する。

つぎにＳＴ３のピット内および炉内出土の土器について述べる。ＥＰ1からはⅨb類、Ⅹa類が出土している。ＥＰ２からは口縁部がほぼ直立し羽状縄文をもつ深鉢形土器、Ⅹc類の壺形土器が出土している。ＥＰ３からはⅣa類、Ⅹc類、Ⅺa類、Ⅹb類、Ⅹc類、口頸部に幅い箆状工具による磨きをもつ大形の鉢形土器が出土している。ＥＰ５からはⅨa類(第23図３・４・６)、Ⅹc類（１・２）の浅鉢ないし鉢形土器が出土している。ＥＰからはⅤb類(７～11）の鉢ないし深鉢形土器が出土している。ＥＰ10からはⅣa類(12)、Ⅹc類（14～16）の深鉢ないし壺形土器が出土している。ＥＬ１の覆土内からはⅠb類（17）、Ⅰc類（20)、Ⅲa類（19・23)、Ⅲb類（18)、Ⅹb類（21)、Ⅹc類（24）などが出土している。

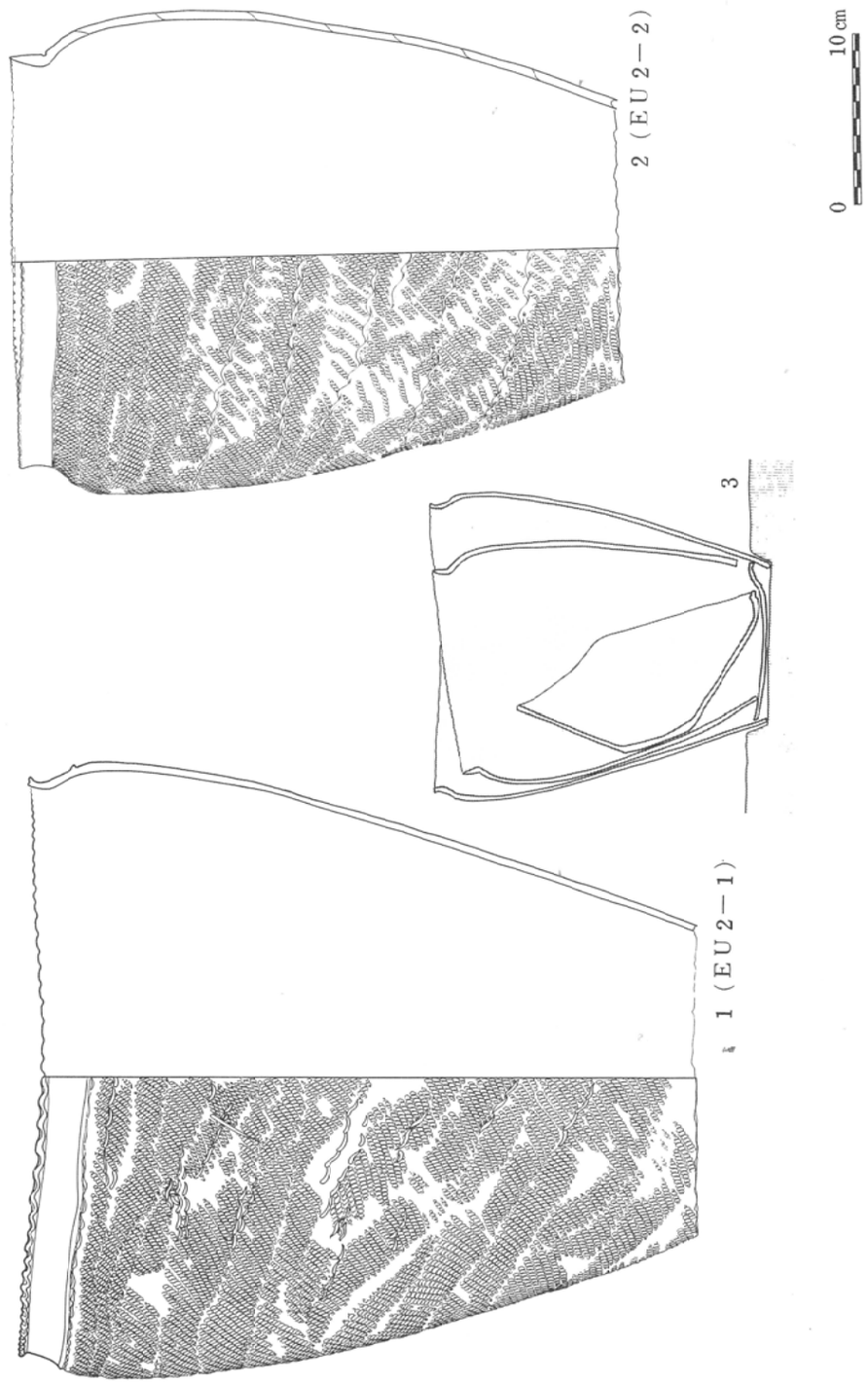
埋設土器は３個出土している(ＥＵ１～３)。ＥＵ１は床面を10cmほど円形に掘りくぼめた掘り方に底部付近を壊した大形の甕形土器（第14図１・図版13）を埋め、周囲を河原石で固めたものである（図版12）。甕形土器の口径は31cm、現在器高は28cmを測る。口唇部に箆状工具の押圧による小波状突起を有し、体部にＬ$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.$の結節回転縄文が施されている。なおＥＵ１の内部から口唇部に棒状工具による刺突文、口頸部に平行沈線と連続刻目文をもつ大形の鉢形土器（第14図２）が発見された。ＥＵ２は、床面を10cmほど掘りくぼめた掘り方に２個体の甕形土器（第15図１・２図版13）と大形の浅鉢形土器（第14図３）



第14図　３号住居跡埋設土器（１）

を組み合せて埋めたものである（第15図３模式図）。もっとも内側の浅鉢形土器は周囲の３分の１程度が欠損し、周囲の２個体の甕形土器も底部付近が欠損している。１は口径34cm、現在器高38.5cmを測り、体部に結節を伴なうＬ{R{ℓ R{ℓ ℓ 縄文が施されている。3は口径24cm、器高25.5cmを測り、体部にＬ{R{ℓ R{ℓ ℓ 縄文が施されている。1～3は器面内外に多量の炭化物の付着がみられる。ＥＵ３は底部付近を壊した甕形土器を１個体周溝内にやや斜めに埋置された状態で検出されたものである。風化が著しく復元ができなかったが、体部にＬ{R R 縄文が施されている。地層観察の結果ＥＵ１～３とも上面から掘り込みは認められなかった（第12図）。

以上ＳＴ３出土土器について述べてきたが、つぎにＳＴ３の生活時期についてふれる。覆土1～4層および周溝内の土器で主体を占めるのはⅨ～Ⅺ群土器であり、ＳＴ３の時期がこれらのいずれかに含まれることは確実とみられる。このうち遺構の時期をもっともよく反映しているとみられる床面直上出土の土器はⅩ・Ⅺ群土器である。それゆえⅨ群土器は除いても良さそうである。しかし主柱穴であるＥＰ1とＥＰ５内の出土土器も考慮するとⅨa類とした磨消縄文手法による直線的な雲形文の一部はＳＴ３の生活時間に及ぶことも認めざるを得ない。Ⅹ～Ⅺ群土器のうちもっとも特徴的な土器は第16図１にみられるような磨消縄文手法を伴なう工字文の仲間（Ⅹa類）である。Ⅹa類は従来Ⅸ群土器とⅪ群土器の仲間的な様相を持つものとして理解されてきたが、研究者によってⅨ群土器に含めたりⅪ群土器の古い時期と考えたりまちまちであった。本書ではⅩa類およびこれに伴なう鉢、深鉢(甕)、壺形土器をまとめてⅩ群土器として一群を設定している。Ⅺ群土器の中でⅩa・Ⅹb類として磨消縄文手法を持たない工字文のうち、浮彫的な要素が少ないものはⅩ群土器に含めてもよいことは既に述べた。これによってＳＴ３の床面および周溝内出土の大半の土器はⅩ群土器と考えることが可能である。それにしてもⅪ群土器のうち浮彫的な工字文をもつ浅鉢や壺形土器および口唇部に箆状工具て押圧した小波状口縁と結節回転縄文を特徴とする甕形土器などはⅪ群土器の特徴として考えなければならないであろう。後者の甕形土器(Ⅺc 類)がＳＴ３と具体的な関連を持って表われているのがＥＵ１～３である。ＥＵ１～３をＳＴ３の生活時期より１時期新しい（Ⅺ群土器の時期）と考えることも可能であるが、地層断面の観察結果およびＥＵ１内から出土した口頸部に刻目をもつ鉢形土器の存在は、むしろＥＵ１～３がＳＴ３と同時期であることをうかがわせる。Ⅸ～Ⅺ群土器は型式学的におおむねこの順序で変遷すると考えられるが、遺跡における住居跡の生活ないし廃絶時期は必らずしも型式の粋内に納まるものではなく、それらの過渡的様相を示すことも十分考えられる。ここではＳＴ３の時期をⅩ群土器を中心とする時期と把握しておきたい。Ⅹ群土器はⅣ章で後述するように縄文時代晩期大洞Ｃ２式後半併行期と考えられる。



第15図　３号住居跡埋設土器（２）

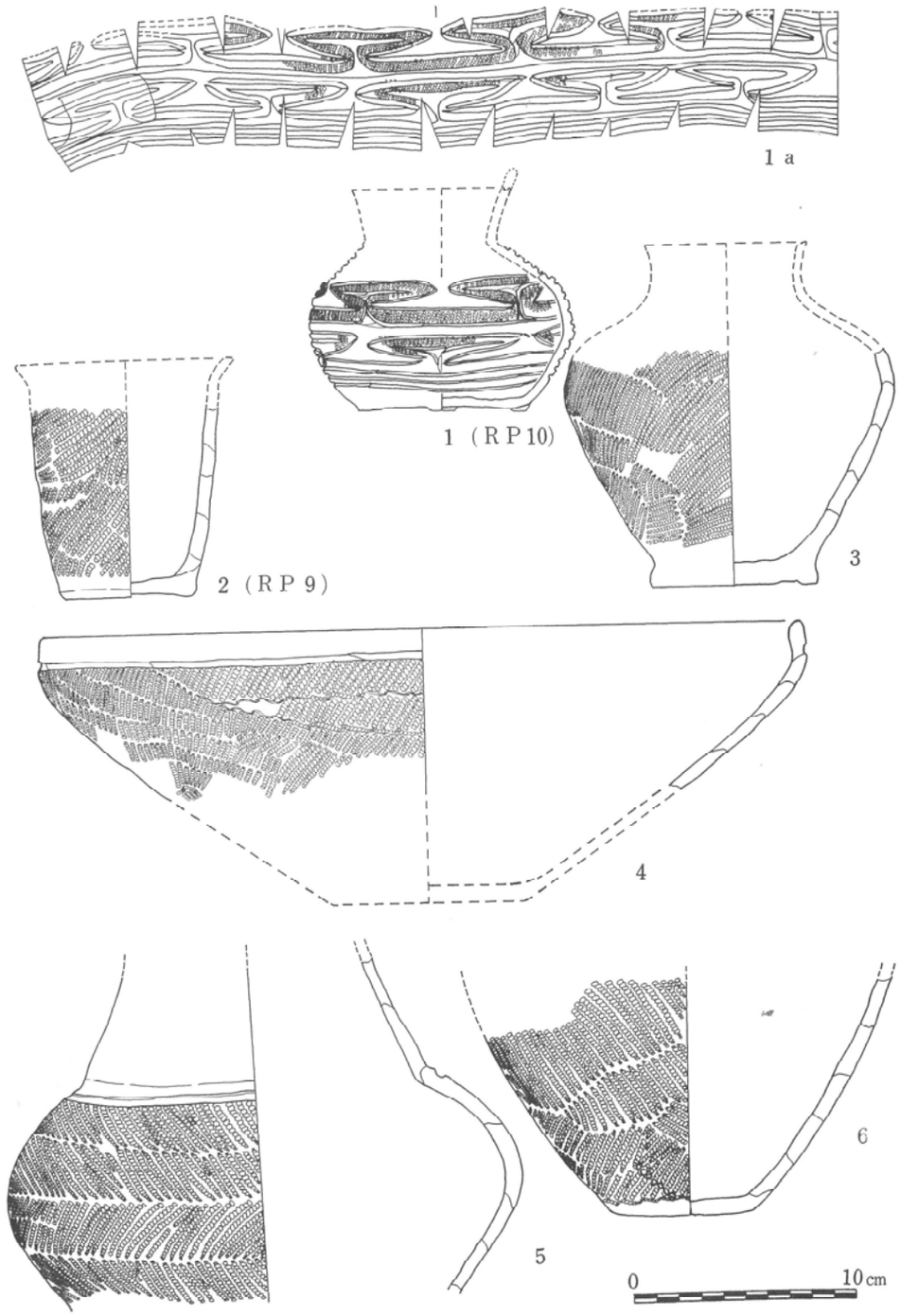
土製品は５点出土している（第17図４～８）。４～７は耳栓である。５は周溝出土である。全体の５分の１程度の破片で推定径は約７cmとみられる。断面は扁平で中央部分が『く』の字状に屈曲する。裏面はていねいに磨かれている。胎土に微細な砂粒を含み、焼成は良好である。４はＳＴ３の炉跡付辺より出土した全体の６分の１程度の破片である。推定径６cm程度である。表面に朱が塗られた形跡を認める。胎土に微細な砂粒を含み焼成は良好である。８は覆土１層出土の土偶である。１点のみの出土である。肩部の破片で腕部は欠損しており、中央に乳房状の突起を有する。この突起の上に一条、横位の刺突が施されている。胎土に粗い砂粒を多量に含む。

本住居跡出土の打製石器（第24～26図・第10図４）の内訳は表11に示した。そのうち二次加工のある石器は、覆土１層から56点、覆土２層から55点、床面から３点、周溝から２点、柱穴から６点検出されている。

第24図・第10図14は覆土１層出土である。１・２はそれぞれⅠa類・Ⅰe類に含められる石鏃である。13・15はⅢa類の石匙である。13は横長剥片を素材としてa面左側縁に背の低い二次加工を施して刃部としている。ａ面右側縁はバルブ除去の調整剥離と一次剥離面で構成されている。15は縦長剥片を素材とし、ａ面左側縁を刃部としている。ａ面右側縁先端部には背の高いブランテ イング様の剥離がある。14は横長剥片を素材とするⅢb類で、13・10と同様背の低い鋭い刃部をもつ。第15図14は縦長剥片を素材とするⅢc類の石匙で、つまみ部分以外目立った二次加工はない。3～5はⅣ類とした石箆である。4は両側縁に急角度の二次加工が施され、先端が両刃状になるⅣa類、３・５は共に先端が大きな剥離面で覆われるⅣc類の石箆である。６～７はそれぞれⅤa類・Ⅴx類とした両面加工の尖頭器状石器である。6は先端・基部とも欠損している。7は先端部だけの資料である。両者とも二次加工が全面に及んでいないが、鋭い先端部をもっていることから石槍としての機能を想定できる。８・９はⅥa類とした両面加工石器である。9は、より入念な二次加工のある側縁にアスファルトが付着しており、刃部に対峙する側縁と考えられる。この側縁は断面図で示したように薄く鋭いものとなっており、表・裏面とも小さな二次加工が施されている。８は横長剥片のバルブを除去するという点において９と共通するが、対峙する側縁に二次加工はなく、刃部を形成しているとは考えられない。10はⅦa類としたラウンドスクレパー、11はⅦd類とした両側縁に刃部をもつスクレーパーである。

図示できなかったが、この他にⅥa類１点、Ⅵb類１点、Ⅵc類７点、Ⅶb類１点、Ⅶc類２点、Ⅶc類７点、Ⅸ類17点、Ⅹ類５点出土している。

第25図上段は覆土２層出土のものである。7はⅡx類としたもので、先端部両側から急角度の二次加工となっており、この部分の断面は三角形を呈している。石錐の失敗品とみら



第16図　３号住居跡出土土器

れる。1、2はそれぞれⅣb類、Ⅳa類の石箆である。1の両側縁は基部から先端に向って両面に入念な二次加工が施されているが、先端部は片面にラフな加工が認められるのみで、Ⅳd類とすべきかもしれない。3、4は共にⅤx類とした両面加工尖頭器の未成品である。4aは先端部に自然面を残したままであるが、鋭さを感じさせる。第26図7はⅥb類とした石器である。b面基部が左右両側縁から二次加工をうけてバルブが除去されている。con caveした先端部は、図で表われていないが、直角に立ち上がる一次剥離面があり、刃部とはなっていない。5、6は共に急角度の刃部をもつⅦb類のスクレーパーである。

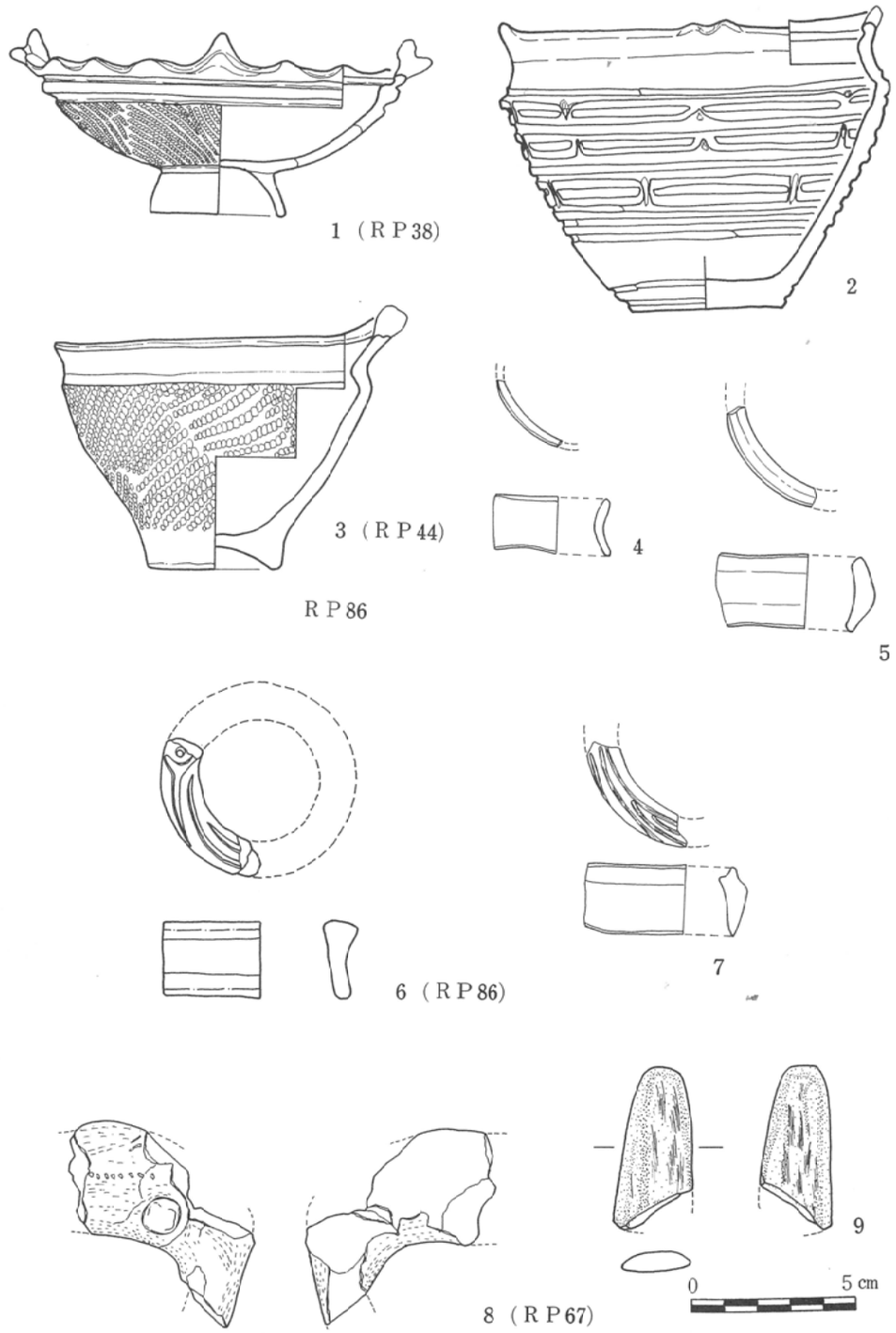
図示できなかったが、この他にⅤx類2点、Ⅵa類1点、Ⅵb類1点、Ⅶb類1点、Ⅶc類1点、Ⅶd類3点、Ⅶe類15、Ⅸ類20点、Ⅹ類5点が出土している。

第25図下段・第24図12は床面直上・周溝・柱穴出土のものである。第24図12はⅢc類とした石匙で、弧を描く刃部に急角度の二次加工を施している。11は典型的なⅥa類の石箆である。10はⅦa類、8はⅦb類、9はⅦc類のスクレーパーである。12は本遺跡で唯一の打製石斧である。分銅形を呈し、両刃の刃部をもつ。

第26図は接合資料である。覆土2・3層で検出された剥片4点からなるもので、他に接合しない同一母岩の剥片が1点確認された（6）。本遺跡には、このほかにも多数の接合資料があるとみられるが、整理期間の関係で未整理状態にある。

磨製石器は14点出土している（第27図5、第49図1～8・10）。本調査で検出され遺構中ではもっとも多く出土し、種類も豊富である。内訳は石錘1点、磨石6点、凹石3点、石冠3点である。

第27図5は覆土3層出土の石錘である。楕円形を呈する自然礫を使用し、中央部短軸方向を敲打し、凹刻したものである。重量 202g で材質は安山岩である。第49図2・4・7・8・10は磨石である。前述の分類によれば4はa類として握握される。材質は砂岩で、表面に亀裂が入っており、大変もろく火熱を受けた形跡がある。8はb類で、材質は花崗岩で、球形を呈し、表面の磨擦痕はあまりはっきりせず使用回数が少ないものと考えられる。2・10は、楕円形を呈し、両平担面に磨面を有し断面は扁平でc類である。材質は花崗岩である。10は縁の一端に敲打痕があり、朱の付着が認められる。礫中の平担面に著しい磨擦痕をもち、縁辺にも磨面をもっている。これらはいずれも覆土1層出土である。7は周溝より出土したもので、d類である。形状は円柱状で断面はほぼ円形を呈する、頭部、端部は平担で磨面としている。第49図3・5・6は凹石である。いずれも表面に1～数個の凹みを有する。形状は楕円形を呈し、断面は扁平である。5は磨石c類の再利用品である。楕円形を呈する礫の平担面に磨面がある。第49図1は覆土1層出土の石皿である。破片である。楕円形を呈する自然礫の一面を磨いて凹面をつくりだしている。縁辺にふちがあり、



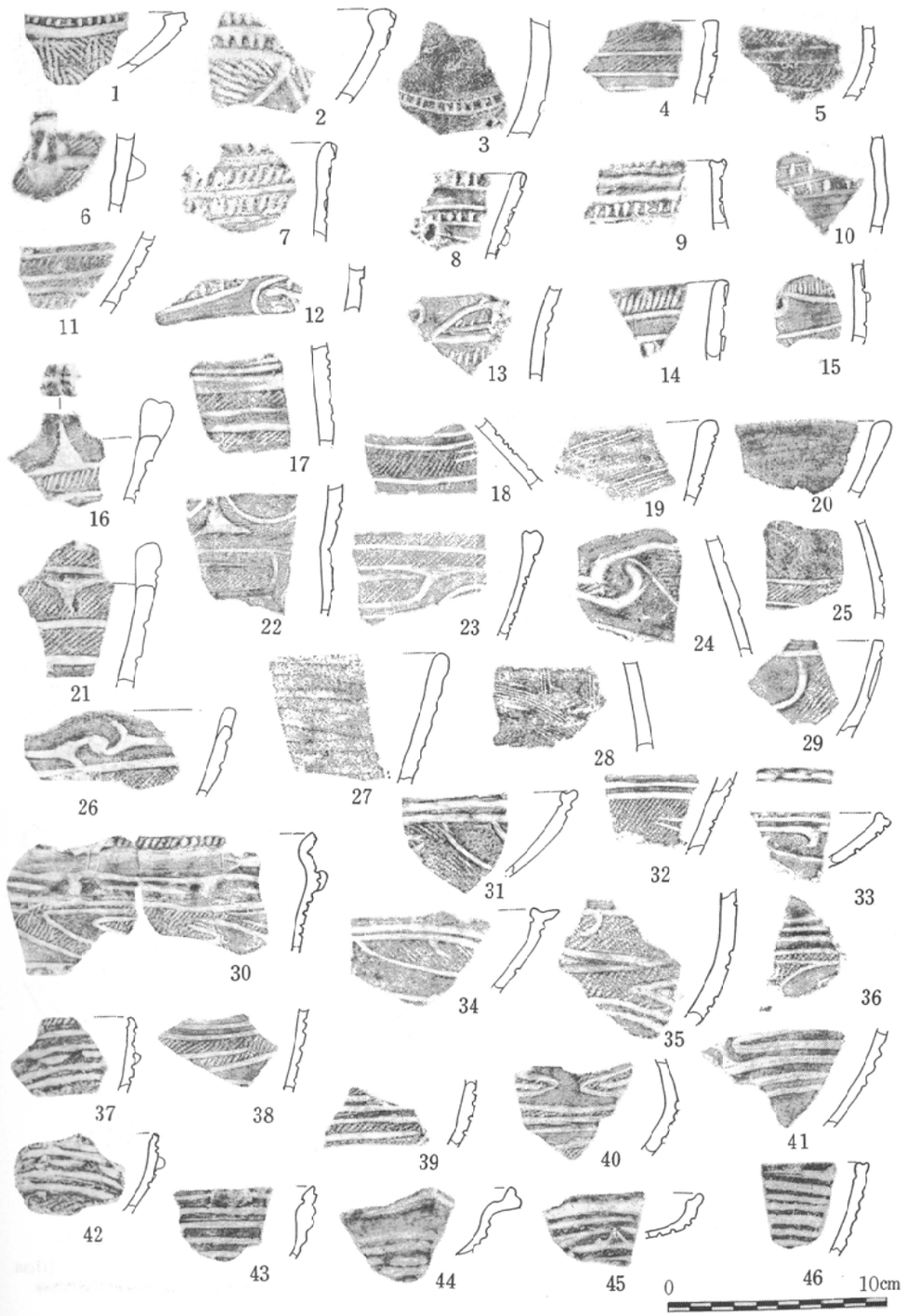
第17図　3号住居跡出土土器・土製品

磨面に小さな敲打痕が無数についている。朱の付着が認められる。材質は安山岩である。前述した磨石にもその縁辺に朱の付着したものがあり、セットをなすものと考えられる。

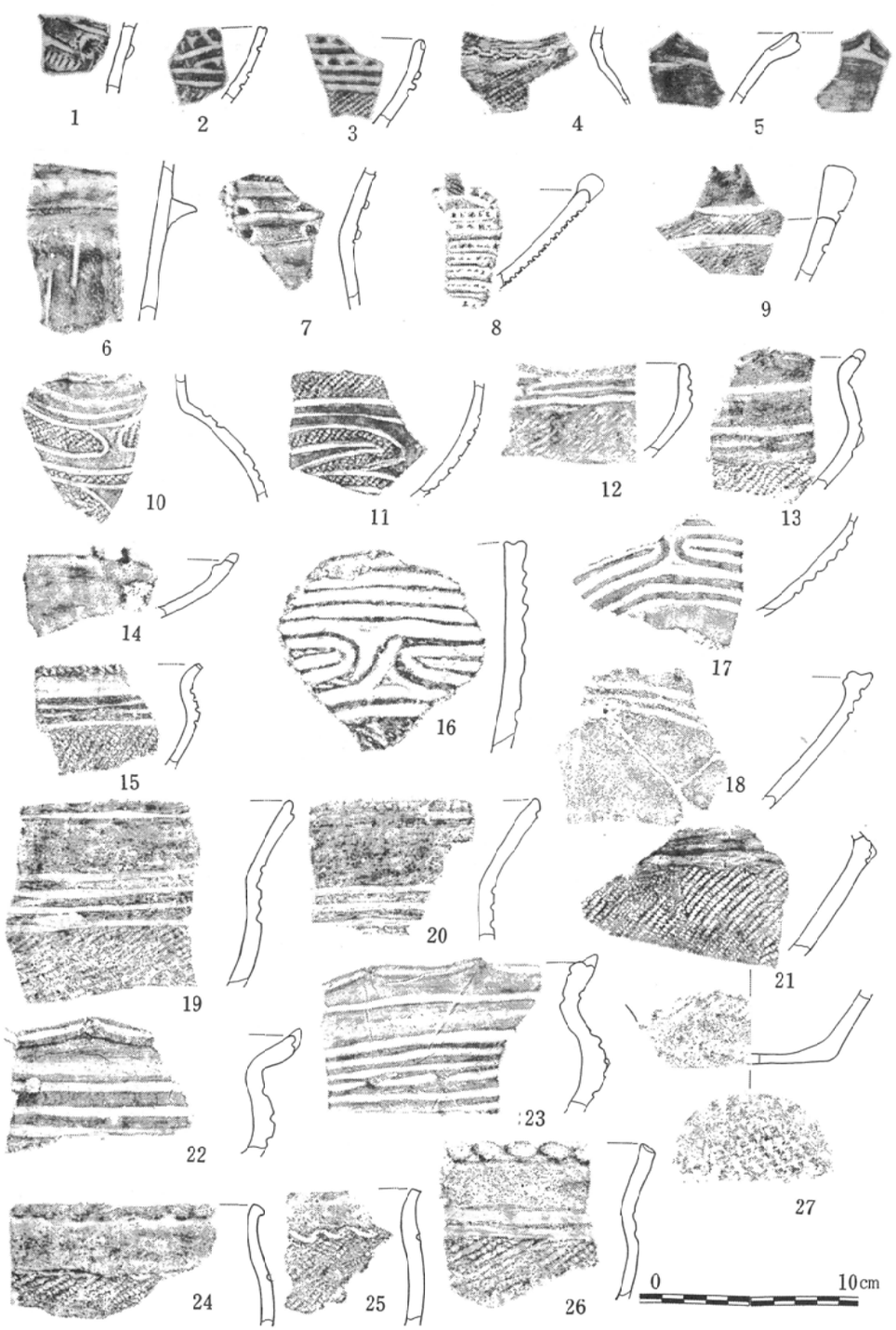
第27図６～８は覆土４層出土の石冠である。６は底面径10.2cm、角張った長楕円形を呈する。握りは細身で中央部に凸帯をめぐらす。表面はていねいに磨かれている。底面はゆるやかに湾曲し、中央部に小さな敲打痕が無数についている。８は円礫を敲打し、幅1.5cm程度の溝をめぐらして握りとしている。底面は平担で、微細な擦痕が走り、中央部に敲打痕を有する。材質は花崗岩で底面は平担である。７は体部を敲打して成形し、底面とその縁辺および握りを磨いている。握りに幅３mm程度のあさい凹刻があり１周する。底面には、ゆるい湾曲があり、敲打痕がある。

石製品は５点出土している（第27図１～４・７・第17図９）。第27図１は覆土１層出土の石棒である。１点のみ出土している。径3.1cmを測り、断面は円形である。表面に縦位の擦痕があり、石質も同一で前述のＳＴ１出土のものと同一個体とみられる。第27図３・７、第17図９は覆土１層出土の石刀である。３・７は背部を面取りしており、角張っている。刃部は丸くおさめ、片刃である。７は表面に斜位の擦位の擦痕が走り、３はていねいに磨かれている。

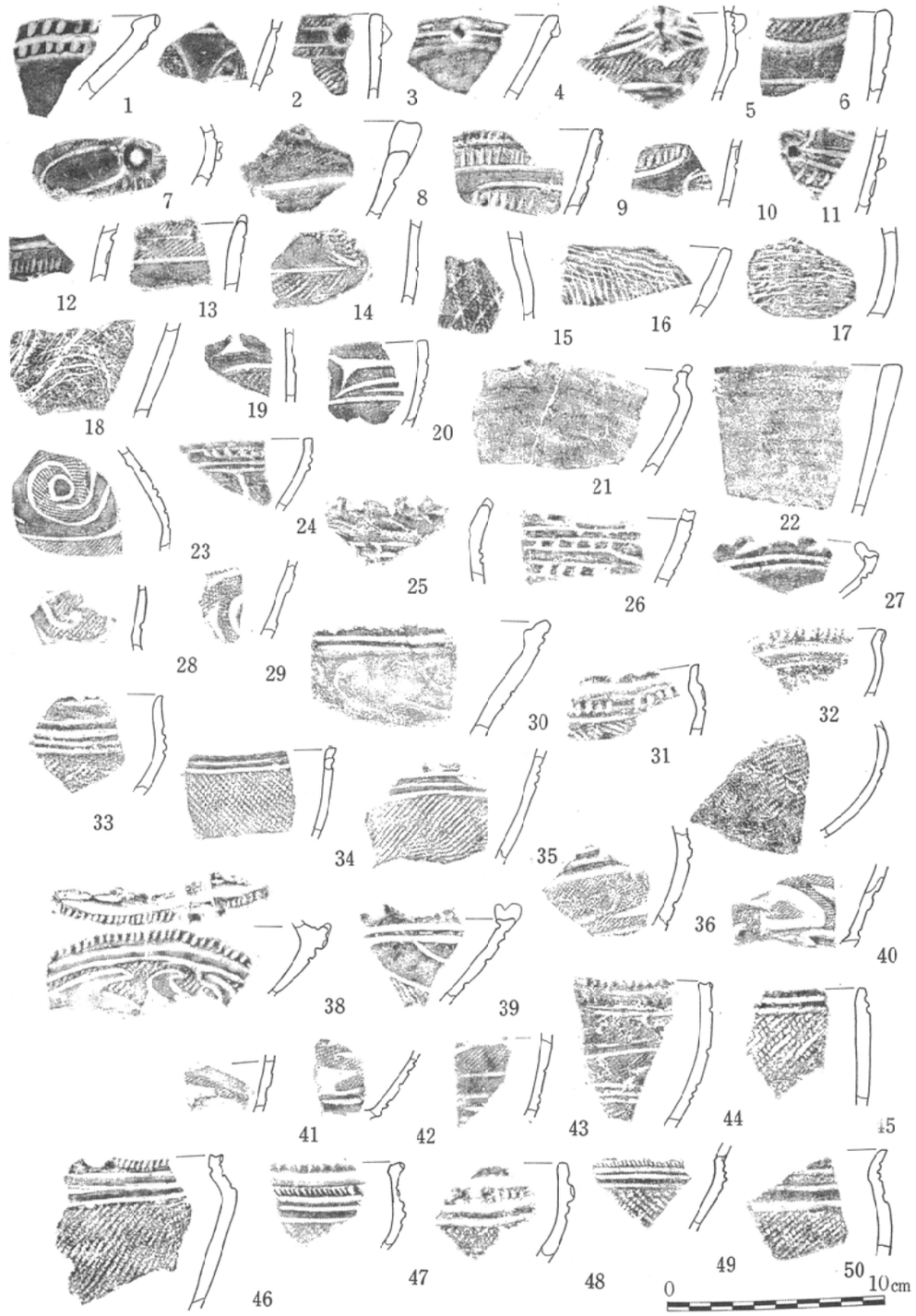
第27図２・４は円盤状石製品である。いずれも縁辺を敲打して成形し、平担面を磨いている。２は覆土１層出土である。径 5.4cmである。４はＥＵ１出土である。径 6.6cmを測り、平担面を磨いている。いずれも断面は扁平で、石質は安山岩で、その縁辺を部分的に研磨しているところがある。



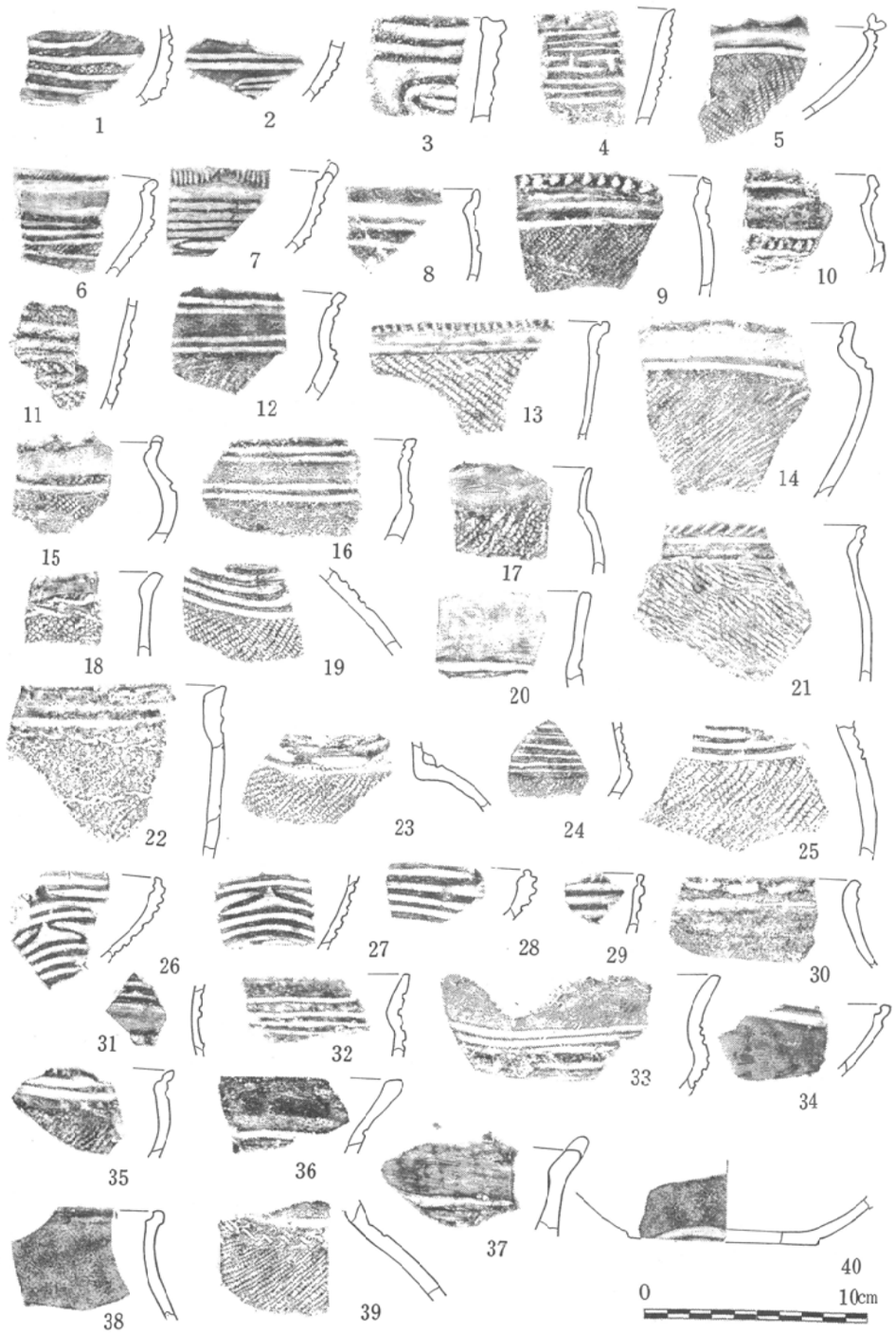
第18図　３号住居跡出土土器（１）



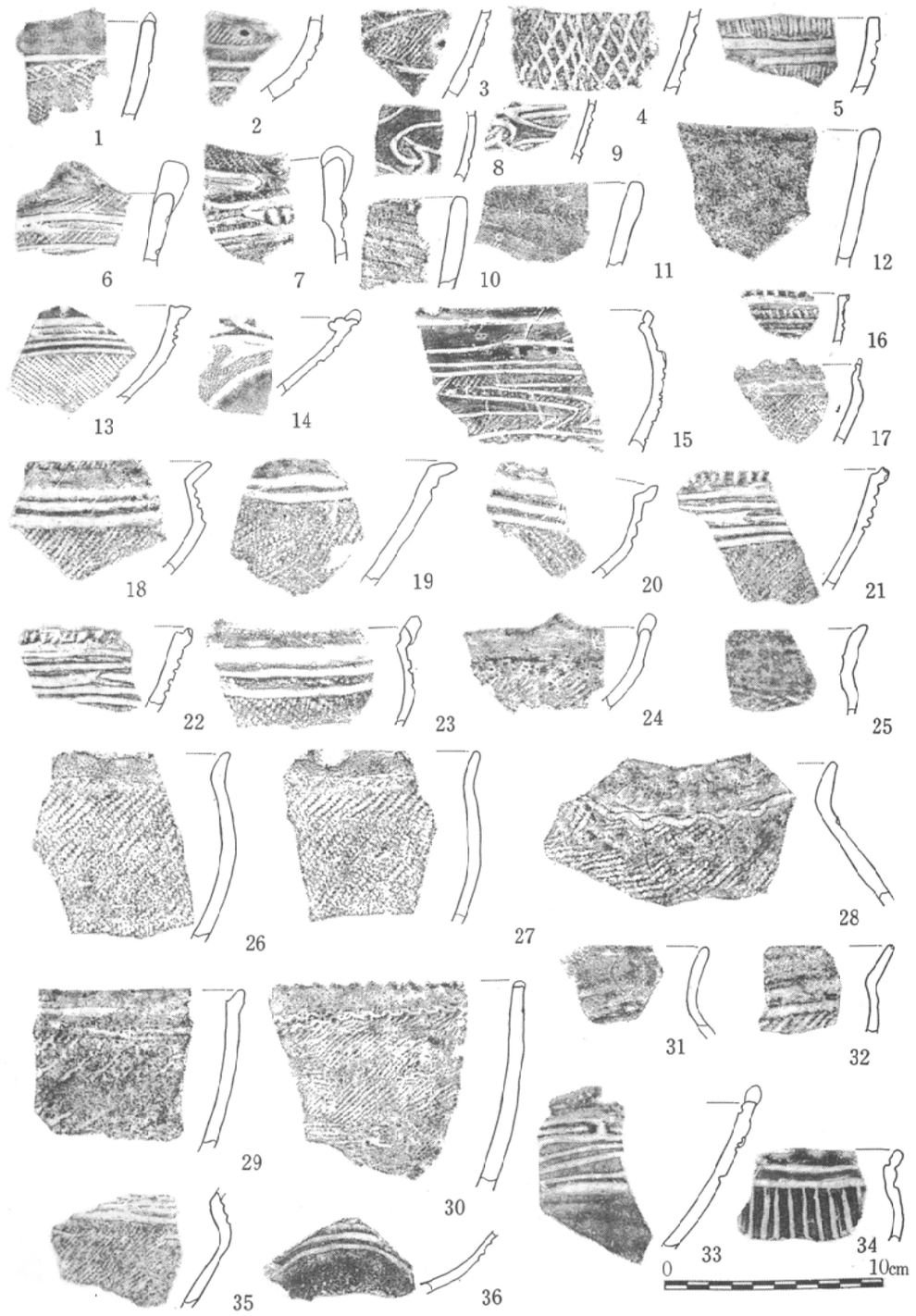
第19図　3号住居跡出土土器（2）



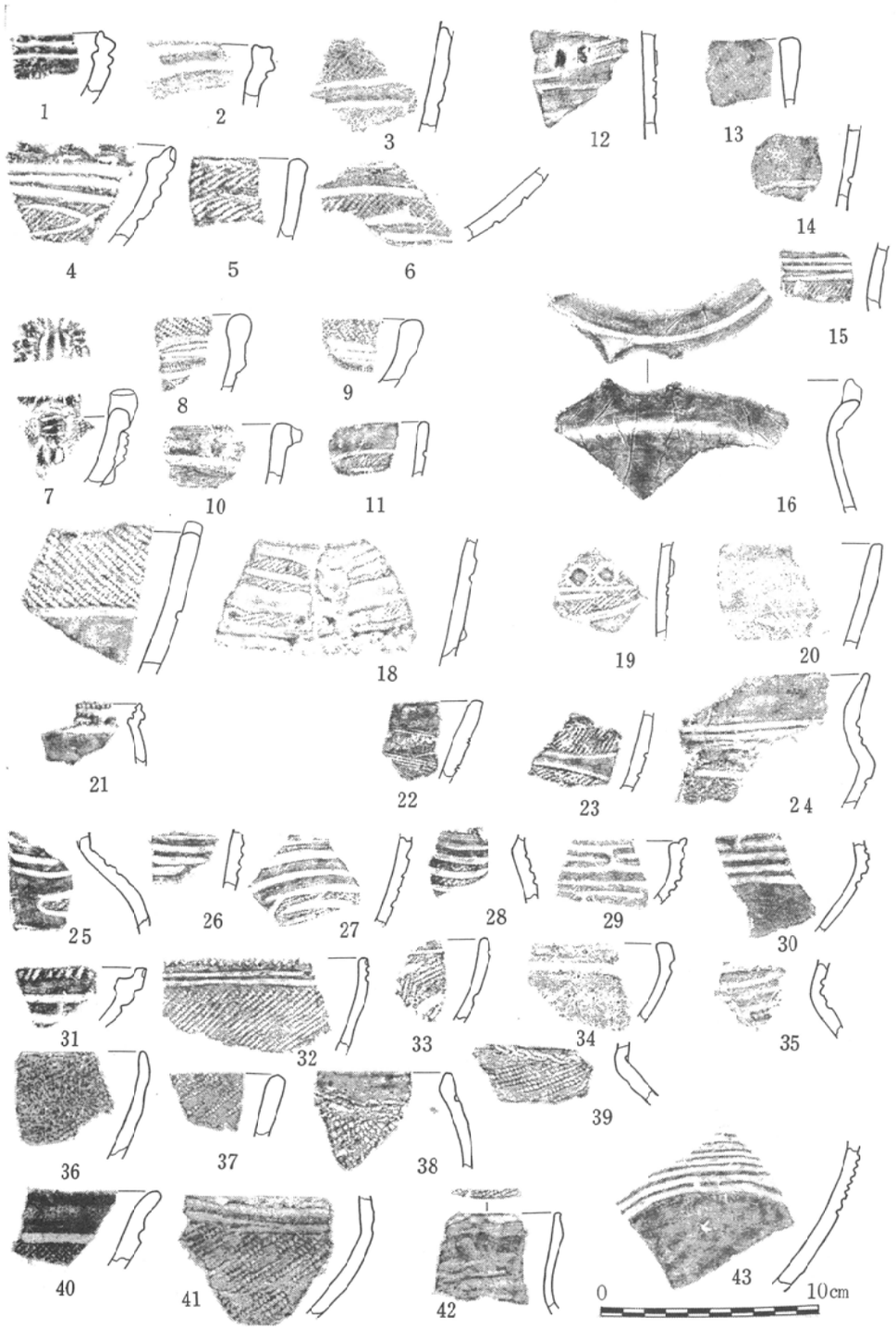
第20図　3号住居跡出土土器（3）



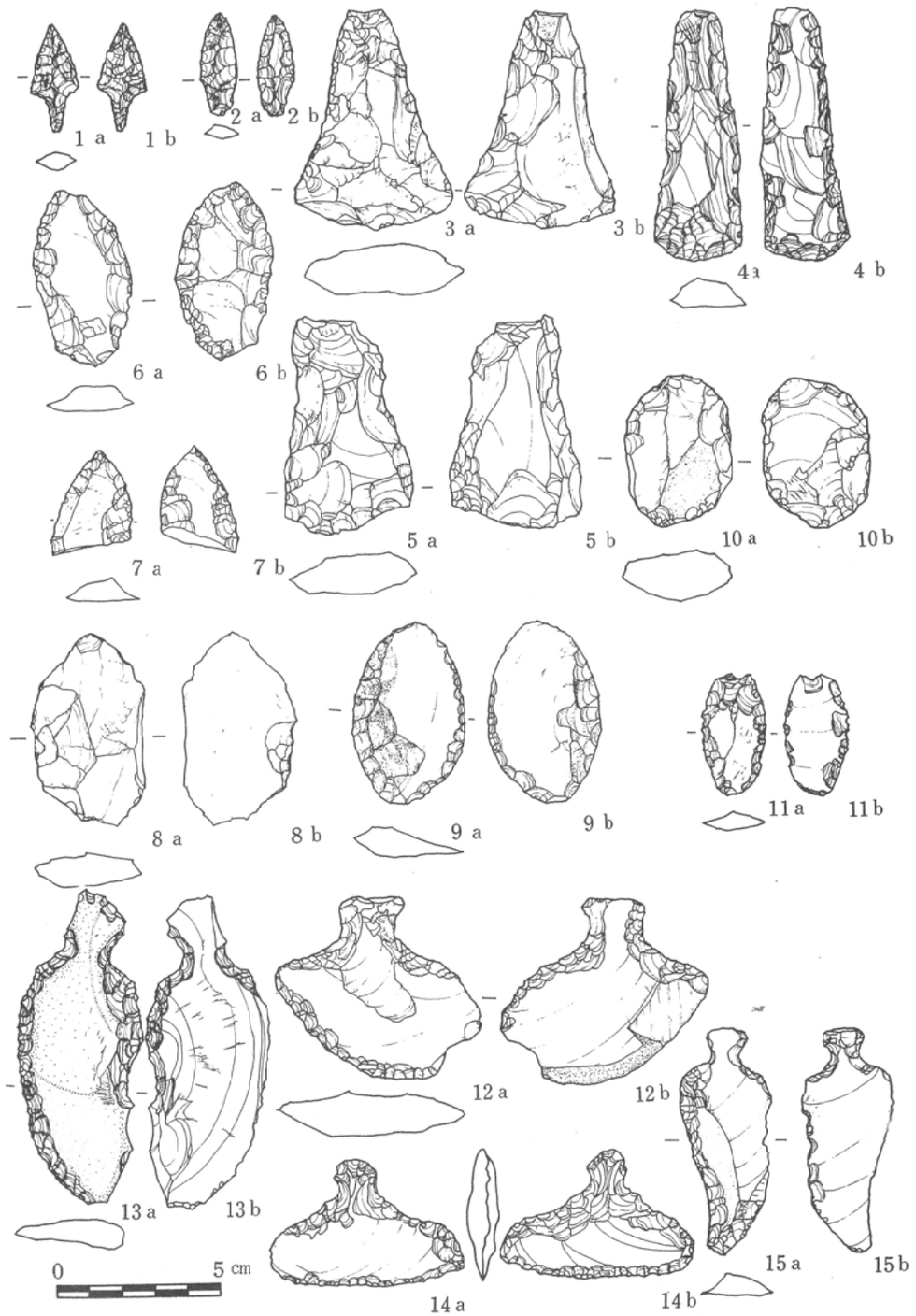
第21図　3号住居跡出土土器（4）



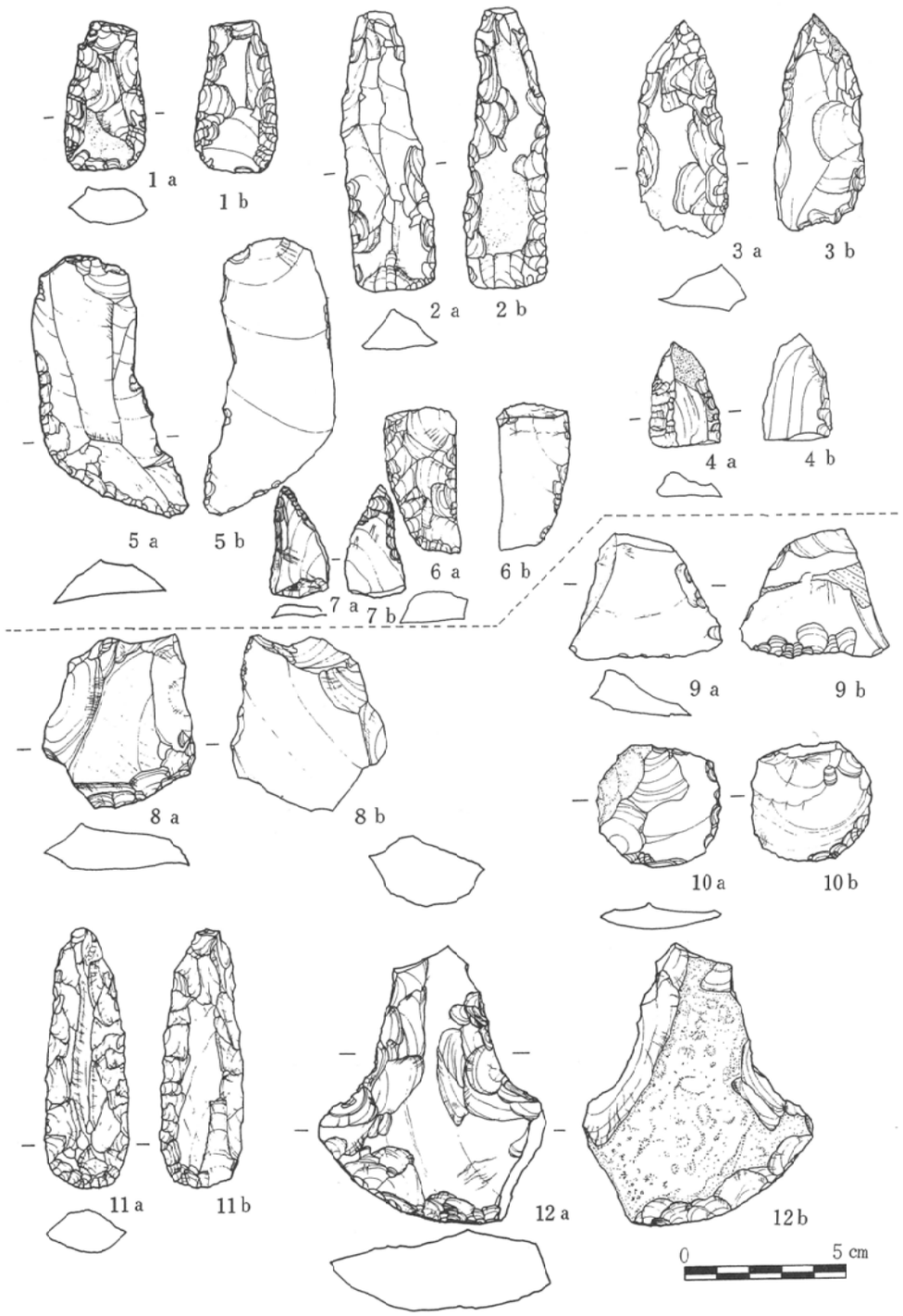
第22図　3号住居跡出土土器（5）



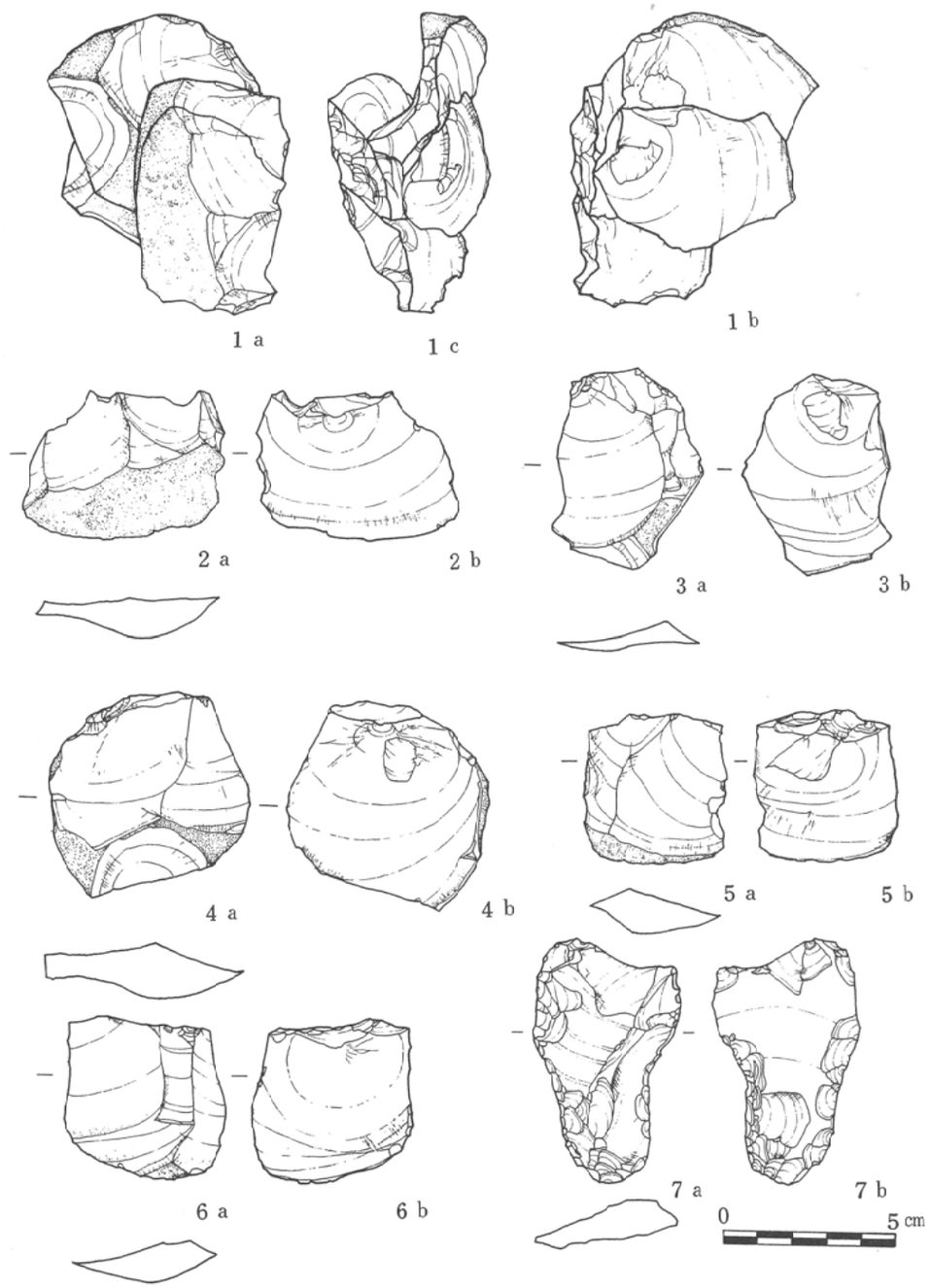
第23図　住居跡出土土器（6）



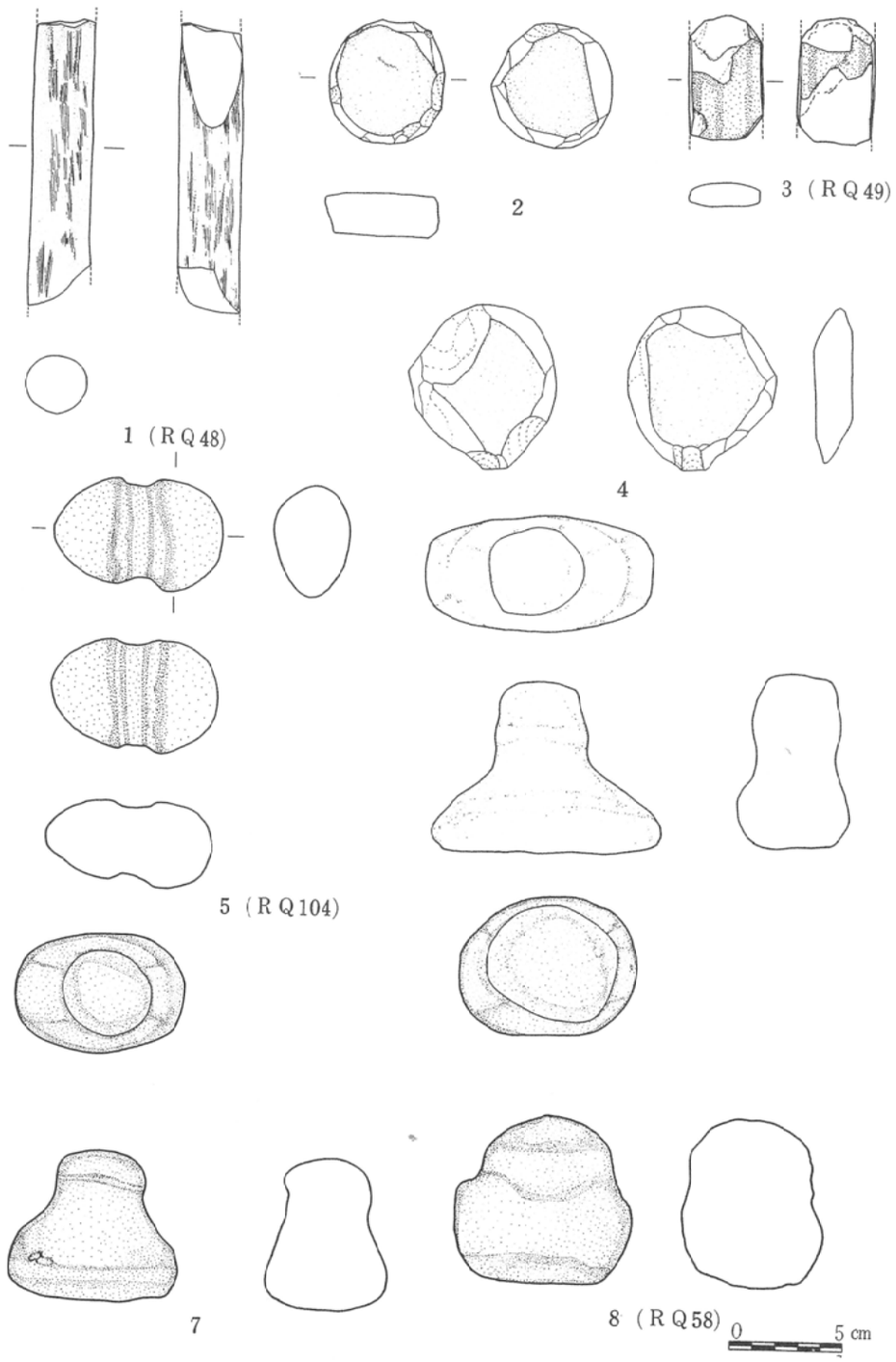
第24図　3号住居跡出土土器（1）



第25図　3号住居跡出土石器（2）



第26図　3号住居跡出土石器（3）



第27図　3号住居跡出土石製品

4号住居跡（ＳＴ４）　（第28・29図・図版27～30）

Ⅱ区13～15—Ｍ～Ｎグリットの第Ⅲ層（黒褐色土層）上面で確認された竪穴式住居跡である。地山（第Ⅳ層—黄褐色砂質土層—）を掘り込んでいるため壁・周溝等の検出は容易であった。３分の２は南側のＳＴ３によって切られているが、周溝の一部をＳＴ３の床面にわずかに確認できた。

平面形は径 6.9ｍの略円形を呈するものと推定され、覆土は２層に大別される。覆土①層は粘質の明褐色土層で、厚さ18cmである。多量の炭化粒子を含む。南側をＳＴ３によって切られているが、本来は全体を覆っていたものとみられる。覆土②層は、粘質の暗黄褐色土層で、厚さ20cmである。地山との漸移層で、床面のところどころに堆積している。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高３～５cmを測る。周溝は幅25～43cm、深さ20cmの相当深いものである。周溝の一部がＳＴ１の周溝と重複し、その先後関係は明確に把握できなかった。しかし、後述するとおり伴出土器からみてＳＴ４はＳＴ１より古いとみられる。

床面は、ほぼ平担で、周溝付近を除き地山をやや叩きしめてつくっている。貼床はみとめられない。北東部に半月状の落ち込みを有するが、この性格は不明である。

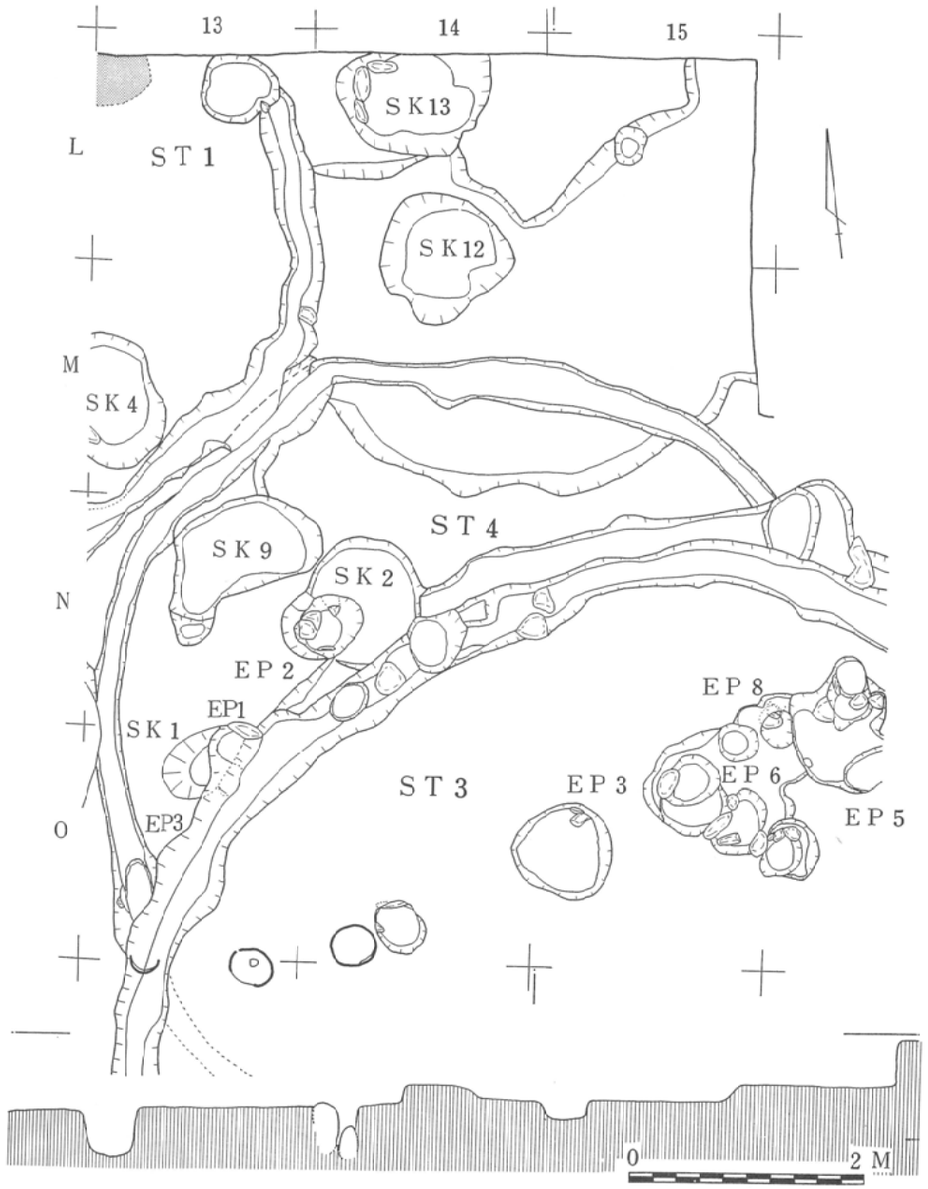
柱穴は３個（ＥＰ１～３）検出され、周溝内に１個・ＳＫ１・２と重複して２個在る。径30～70cmの円形を呈し、深さ40～70cmを測る。主住穴はＥＰ１～２で、ＥＰ２はもっとも深く住居内中央部へ向って傾斜している。ＥＰ３は壁柱穴とみられ、垂直に掘り込まれている。ＳＫ１・２・９は、形状や出土遺物からみて本住居跡より古い時期のものとみられる。したがって本住居跡はＳＴ３・ＳＫ１・２・９より新しく、ＳＴ１より古い。

本住居跡から出土した土器の総数は、覆土内も含め1061片である。内訳は覆土１層 819片、同２層 109片、周溝内 114片、ＥＰ１覆土６片、ＥＰ２覆土５片、ＥＰ３覆土８片である。つぎに各層位毎に土器の内容について述べる。

覆土１層からは第Ⅰ群土器から第Ⅺ群土器まで各群の土器が混在しているが、ここではⅨ～Ⅺ群土器頃の土器についてのみ触れる（第29図１～５、図版28)。２は口唇部と頸部に連続した刻目をもつ鉢形土器で、体部に直線化した雲形文をもつものと思われる。Ⅸb類に属する。5は壺形土器の頸部に太い工字文を有するⅩa類である。３・４はⅩc類に属する。１は器面全体が横方向に研磨されている深鉢形土器である。

覆土２層もⅠ～Ⅺ群土器まで各群の土器が混在するが、Ⅸ～Ⅺ群土器が量的に主体を占める(第29図６～24)。６・８はⅠb類、９・10はⅢb類、７はⅤb類、15はⅨa類、12・16～18はⅨb類、19・21はⅩc類、23はⅪb類に属する。このほか器面全体に撚糸文(13)や刷毛目文(11)、斜縄文(14・22)、および研磨（24）が施されている深鉢ないし壺形土器片がある。

周溝内から出土した土器のうち文様や器形の顕著な資料が25～31である。25がⅢb類、26



第28図　4号住居跡

がVb類、31がⅨa類に属する。27・28は器面が横方向に研磨されている深鉢でⅤ群土器前後のものである。周溝内出土の土器で量的に主体を占めるのは、29のようなⅩc類ないし粗い斜縄文を有する深鉢形土器片である。ＥＰ１～３内の土器は文様のわかるものがなく、斜縄文をもつ深鉢形土器がほとんどである。

これらの土器群のうちＳＴ４の床面直上も含め確実に伴なう資料はない。比較的遺構の時期を反映していると考えられる周溝内や覆土２層の土器も、各群土器の混在があり、量的にⅨ～Ⅺ群土器が主体を占めることがうかがえるだけである。つぎに各遺構との重複関係よりみるとＳＴ４はＳＴ３によって切られているのでＳＴ３の廃絶時期（Ⅹ群土器期）よりも新しくなることはなく、またＳＴ４のＥＲ１・２が各々ＳＫ１・２を切って作られていることからＳＫ１・２の時期（Ⅴ群土器期）よりも古くなることもない。またＳＫ５の覆土１層出土の石刀（ＲＱ99）が、ＳＴ４周溝の石刀片と接合する。ＳＫ５の時期はⅨ群土器期と考えられる。したがって、ＳＴ４の時期は最大幅Ⅸ～Ⅹ群の土器期の間になる。

以上のことよりＳＴ４の時期はⅨ～Ⅹ群土器期と把握しておきたい。Ⅸ・Ⅹ群土器は後述するように縄文時代晩期大洞Ｃ₂式の各々前半と後半に対比されるものである。

土製品としては、耳栓（第30図７）が覆土１層より１点出土している。全体の３分の１程の破片で推定径は約４cmである。今回の調査で出土した耳栓中では最も小形である。胎土に砂粒を多く含み焼成もあまい。断面は扁平で、中央部で屈曲し「く」の字状を呈する。

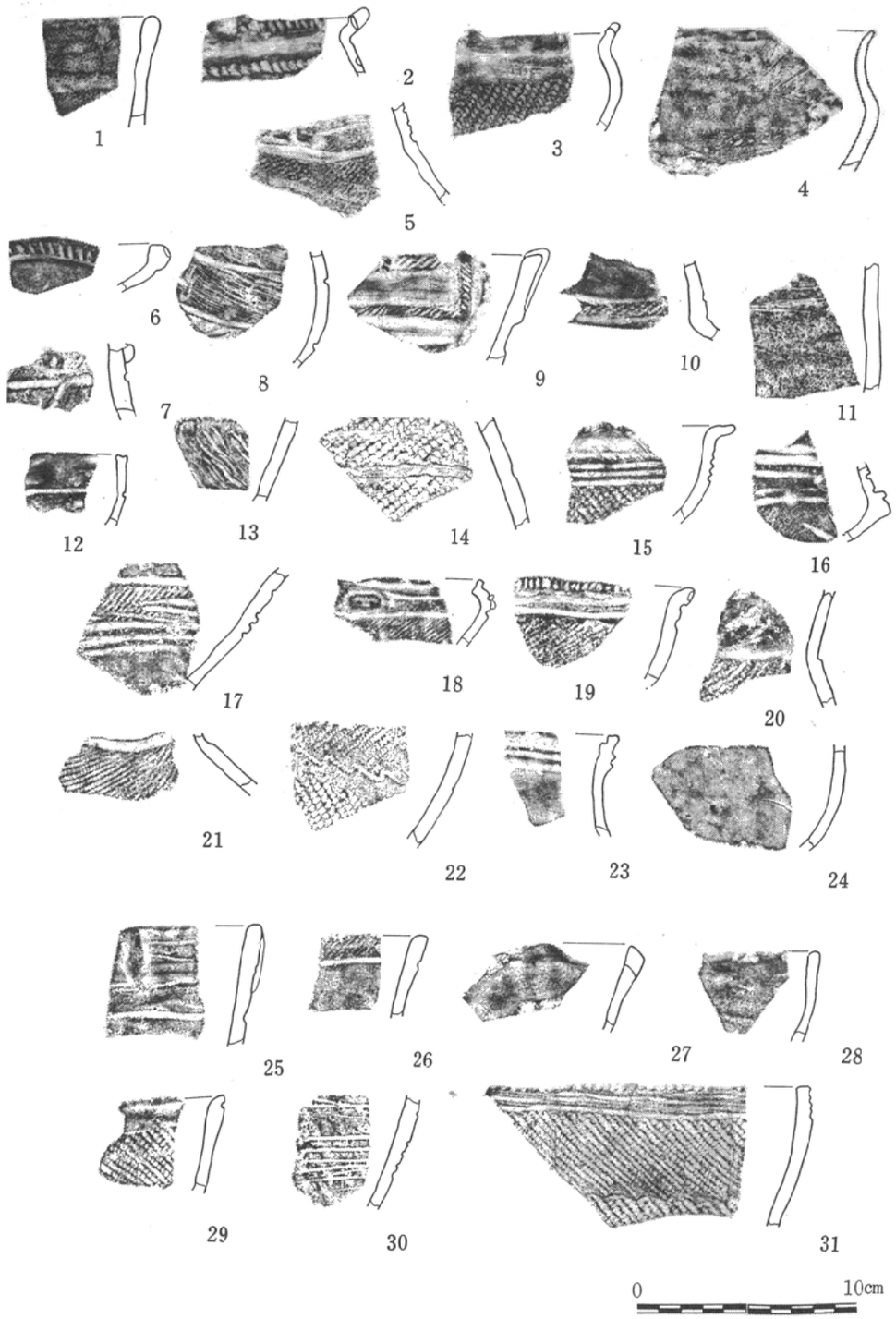
本遺構出土の打製石器群（第10図中段）の内訳は表11に示した。そのうち二次加工のある石器は総数16点で、10を除けばすべて覆土１層から出土している。

8は石鏃の未成品と思われる。９はⅡc類の石錐である。両面全体に二次加工が施され、突出部の断面は菱形を呈し、ｂ面にみられるように折損している。10はつまみを作り出しただけのラフな石匙で、ｂ面右側縁に急角度の剥離痕が認められる。11は先端部が両面とも一次剥離面のままで鋭い刃部をもつⅣd類の石器である。12はⅦa類、13はⅦb類に含められるスクレーパーである。

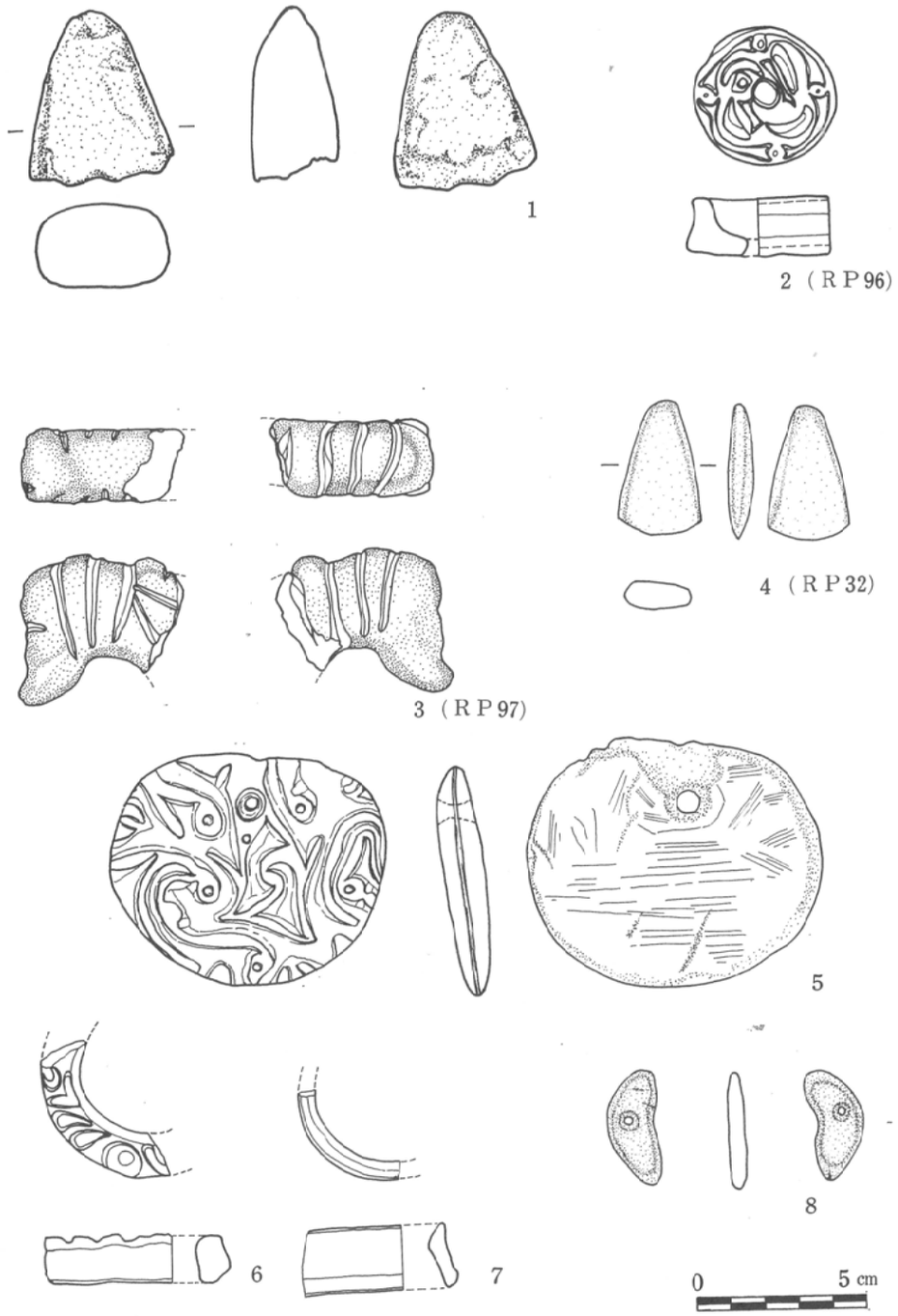
図示できなかったが、この他にⅥc類1点、Ⅸ類６点、Ⅹ類１点が出土している。

磨製石器としては磨石（第49図９）が、周溝より１点出土している。材質は花崗岩で、楕円形を呈する自然礫の両平担面に磨面をもつもので、前述した分類によればＣ類として把握される。重量1440g である。

石製品として石刀（第11図７）が、覆土１層より出土している。前述したＳＴ1・ＥＰ５出土の石刀と同一個体で接合した。片刃でＳＴ1出土の石刀の先端部にあたる。表面に横位の擦痕があり、裏面は背部、刀部付近に斜位の擦痕が走る。背部、刃部ともそりをもつ。



第29図　4号住居跡出土土器



第30図　4号住居跡・土壙出土遺物

土壙群（第30～36図・図版31～37）

本遺跡において発見された土壙は14基である。15号土壙は覆土の状態から後世のものと判断されるので記述からは除外する。内訳は土壙が集中して発見された11・12—N・O区で7基、14—L区で2基、ST1と重複して2基、ST4と重複して3基である。

1号土壙（SK1）

13—0グリッド、ST4の床面で確認した土壙で、ST4の柱穴（EP1）およびST3の周溝によって切られている。平面形は不整の楕円形を呈し、長径90cm、短径約50cm、を測るが、下面は未掘のためその深さは不明である。覆土は明褐色微砂の単一層である。

土器は覆土1層から66片出土している（第32図1～10・図版33)。2は器面全体が研磨されている浅鉢形土器で、口縁部内側がやや肥厚している。V群土器頃のものと思われる。3はⅧa類、5はⅧb類に属する。1・6は壺形土器、4・7～10は粗製の深鉢形土器である。これらの詳しい時期は不明であるが晩期のものと思われる。ST1の時期はⅧ群土器を中心とするものと推定される。

石器は剥片・砕片・石核あわせて30点出土している。

2号土壙（SK2）

14—Nグリッド、ST4の床面で確認した土壙で、ST4の柱穴（EP2）およびST3の周溝によって一部切られている。平面形はほぼ円形で、直径約115cm、床面から壙底部までは25cmを測り、平担な壙底である。壁はほぼ垂直に壙底より立ち上がる。覆土は明褐色微砂の単一層で、炭化粒子を微量含んでいる。

土器は覆土1層から16片出土している（第32図11～14・図版33)。11はⅠa類、12・13はⅤb類、14はⅤ群土器頃のものと思われる。このほか器面全体が研磨されたものおよび斜縄文をもつ粗製の深鉢形土器が出土している。断片的な資料であるが、SK2の時期はⅤ群土器を中心とするものと推定される。

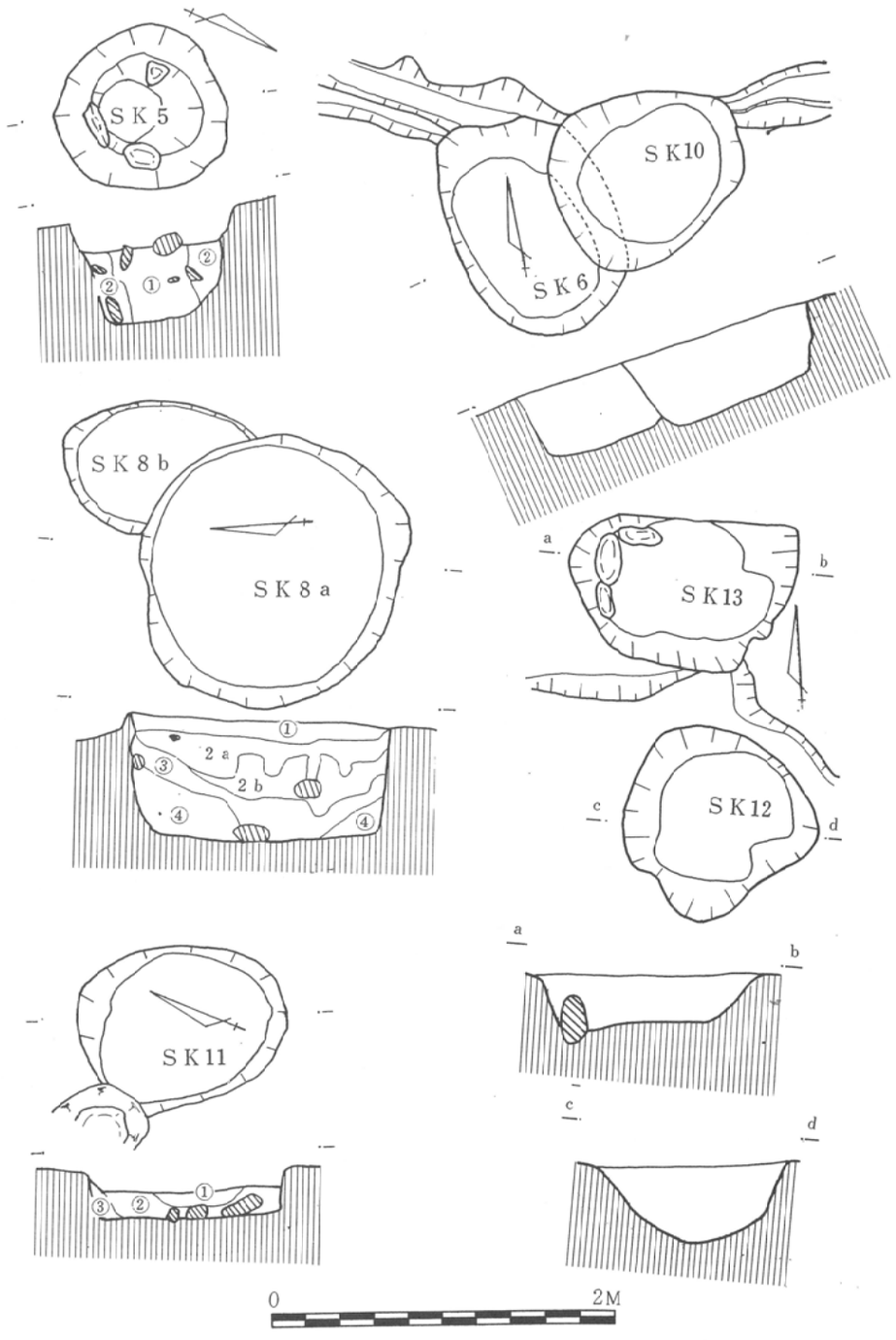
石器は、剥片・砕片・石核あわせて15点出土している。

3号土壙（SK3）

12—NグリッドでSK8bとSK10との間に検出された土壙で平面形がほぼ円形である。

直径約120cm、を測り、壁はやや重直に立ち上がる。壙底は平担であるが、北側がやや凹んでいる。覆土は暗褐色微砂の単一層である。

土器は覆土1層から35片出土している（第32図15～17・図版33)。15はⅡb類、16はⅣa類に属するものである。このほか器面全体が研磨された鉢ないし深鉢や、斜縄文を有する深鉢（17）などの小片がある。断面的な資料であるが、SK3の時期はⅣ群土器を中心とする



第31図　5・6・8・10～13土壙

ものと思われる。

石器は、F1から剝片・砕片が7点、F2から剝片・砕片・石核が21点出土している。

4号土壙（SK4）（図版31）

12−13MグリッドにありST1の床面で確認した土壙で、平面形は不整の円形を呈している。直径約115cmで、壁は西側ではゆるやかに、北東部ではほぼ垂直に立ち上がる。壙底は中央部が壁下より15cm程低くなりスリ鉢状を呈する。床面からの深さは約47cmである。覆土は1層で、暗褐色微砂層である。

土器は覆土1層から45片出土している（第32図18〜24・図版33）。18はⅡb類、19はⅥa類23はⅪa類、20・21はⅤ群土器頃に属するものである。このほか器面全体がよく研磨された浅鉢、細い斜縄文をもつ鉢、粗い斜縄文をもつ深鉢形土器（22・24）などがある。SK4の時期はⅥ群土器を中心とするものと思われる。

石器は、剝片・砕片・石核があわせて25点出土している。

5号土壙（SK5）（第31図）

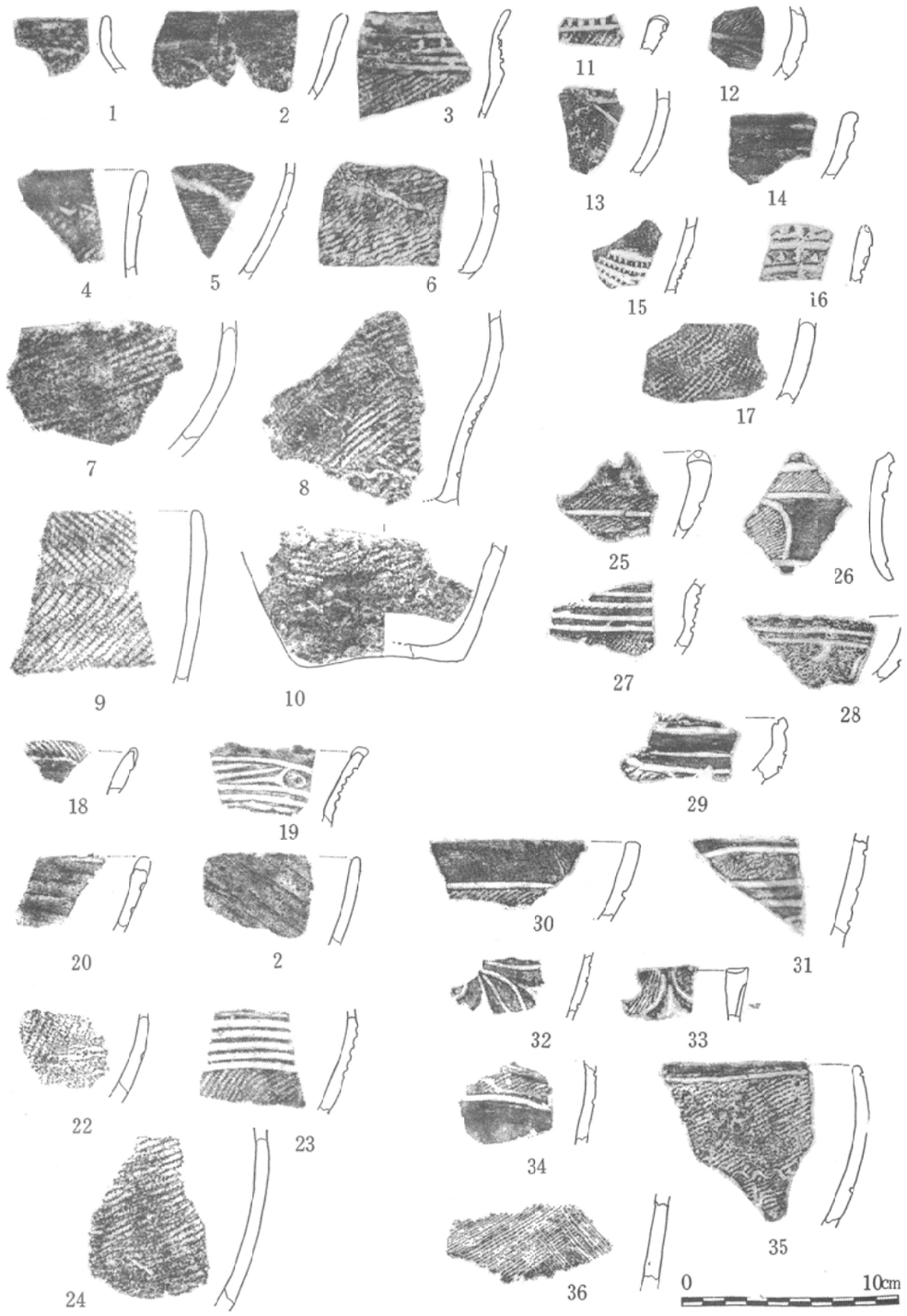
12−L・Mグリッドにあり、ST1の床面から確認した土壙である。平面形は円形で直径約1mである。壁はやや強い立ち上がりを示し、断面形は舟底状となる。床面から壙底までの深さは約61cmを測る。覆土は2層に分けられ、覆土1層は暗褐色微砂層で、木炭を若干含んでいる。覆土2層は木炭、赤色粒子を若干含む褐色微砂層で壁側に推積する。

土器は覆土1層から105片出土している（図32図25〜29・図版33）。25はⅤ群、26はⅧb類、27はⅨa28・29はⅨb類に属する。このほか比較的粗い斜縄文をもつ鉢ないし深鉢形土器の小片が多く出土している。SK5の時期はⅨ群土器を中心とするものと思われる。

6号・10号土壙（SK6・10）（第31図）

11Nグリッドにあり、ST1の周溝と重複関係をもつ。SK6は長径132cm、SK10は長径118cmの共に楕円形を示す。土層の推積状態により、SK6はSK10・ST1周溝に切られていることがわかる。2つの土壙とも立ち上がりは緩やかであり、SK6の壙底は平担でSK10に切られている。深さはSK10で45cm、SK6で43cmである。覆土は共に1層でSK6は暗褐色粘質微砂層でSK10は多量の木炭・赤色粒子を含む暗褐色粘質砂層である。

SK6は土器が523片土した（第33図・第34図1〜11・図版34）。第34図1はⅠa類、3はⅠa類、4・5はⅡa類、7・8はⅢb類、2・10・11はⅥa類に属する。第33図1・2とも覆土1層から出土し、1は5個の花弁状の大波状口縁をもち、頸部でしまる鉢形土器である。内側に肥厚した口唇部に連続刻目をもち、L{R/R}の細い原体を横・縦位に回転させた羽状縄文を施すⅠa類の特徴をよく示す。2は平縁で頸部がややしまる小形の深鉢で口縁・頸部に箆状工具による刻目文、頸部に磨消縄文による5単位の弧線連結文、体部上半に5単位の入組



第32図　土壙出土土器（1）

文を有する。貼瘤は頸部と体部の境にある刻目帯に２個１組で５単位施されている。施文手法からはⅣ群土器とⅤ群土器の特徴が折衷したものであるが、貼瘤の位置や文様帯の幅等からⅤ群土器に属すると考られる。ＳＫ６からはこのほかⅤc類や、口縁部内側が肥厚し器面全体が研磨された浅鉢、および深鉢形土器も出土している。ＳＫ６の時期はⅤ群土器を中心とする頃と推定される。

ＳＫ10では覆土１層から土器片38片出土している（第35図１～９・図版35)。６はⅠc類、５はⅣa類、3は縦に刻目のある貼瘤をもつⅤ類、１・２・４はⅤa類、7～９は細い刷毛目文をもつ仲間である。また器面全体が研磨された浅鉢・深鉢形土器も出土している。ＳＫ10の時期はⅥ群土器を中心とする頃と思われる。

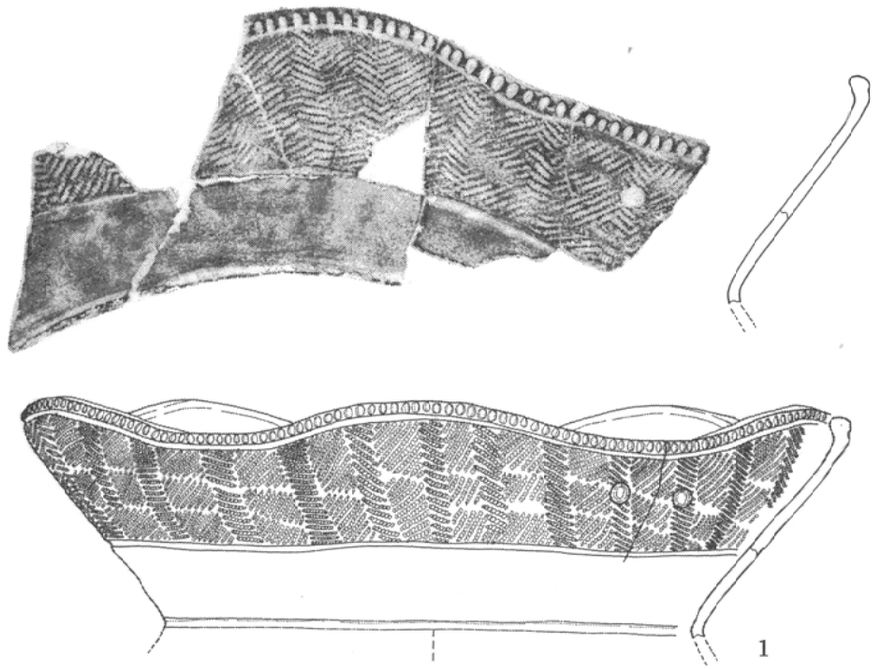
ＳＫ６からは、他に磨製石斧・磨石・円盤状石製品・耳栓・土偶が各１点出土している。第30図1は磨製石斧の基部のみの破片で、材質は流紋岩であり、形態はｃ類として分類される。磨石（第48図１）は、重量 640g で材質は花崗岩でｅ類として把握される。　第36図４）は径4.7cmの円盤状を呈する石製品で縁辺を敲打し整形して、平坦面は磨いている。耳栓（第30図2)は完形で、径4.1cm、表面は朱塗りされた形跡がある。土偶（第30図３）は、肩・腕部の半欠品で覆土１層より出土し、表面は朱塗されている。ＳＫ10からは土製・石製品が出土していない。

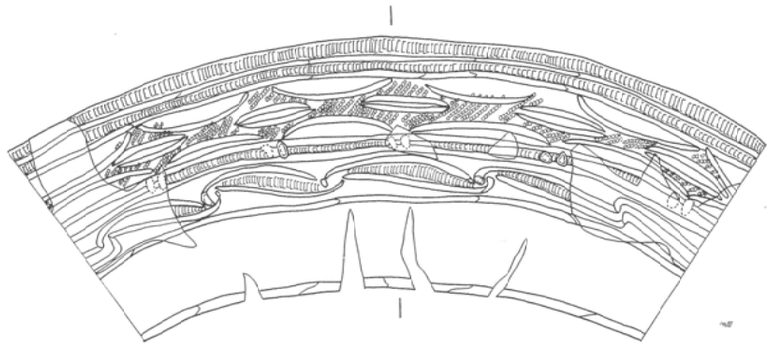
またＳＫ６の覆土２層より本遺跡で唯一のⅡa類の石錐が出土し（第36図５）、ｂ面突出部先端に光沢が認められる。覆土２層より剝片・砕片・石核があわせて 129点出土している。ＳＫ10では、Ｆ2からⅡf類の石錐が出土し（第36図８）、断面が三角形をなし、尖頂部は折損している。Ｆ1からは剝片・砕片が18点出土している。

８ａ・８ｂ号土壙（ＳＫ８ａ・８ｂ）（第31図、図版31・32）

12－Ｎ・Ｏグリッド内で検出された土壙で、互いに重復関係にある。ＳＫ8aは径約１ｍ60cmの、円形を呈し、ＳＫ8bは長径１ｍ15cmの、楕円形を呈す。ＳＫ8aの覆土は１層が、木炭を多く含む暗褐色微砂層、２層は木炭の粒子や赤色粒子を若干含んでいる暗褐色砂質微砂層、３層は赤色粒子や黄褐色ブロックをわずかに含む褐色砂質層、Ⅳ層は木炭や赤色粒子、地山のブロックを多く含む、Ⅴ層は地山のブロックや、炭化粒子、赤色粒子を含む黒褐色微砂層である。深さは72cmを測り、壙底は平担である。また壁も垂直に立ち上がる。8bの覆土は１層で、炭化粒子や赤色粒子を多く含む褐色砂質土層である。壁はほぼ垂直で、底部も凹凸がない。深さは24cm、切り合い関係は、断面の観察により、8bが8aを切って作られている。

土器は覆土１層 106、２層 453、３層67、４層 148の計 774片が出土している。（第34図12・31・図版34）発掘段階でＳＫ8aとＳＫ8bの明確な地層区分ができなかったので両者





2（ＲＰ46）　0　10cm

第33図　６号土壙出土土器

の遺物を一括して述べる。12・16・17はⅠa類、13はⅠb類、14はⅠc類、18はⅡa類、28はⅡa類、21～26・29はⅣa類、27はⅤb類、15・19・20・はⅤc類、30はⅥa類、31はⅥb類に属する。このほか器面全体に直線的な刷毛目文ないし研磨が施されている粗製の深鉢形土器が総量の3分の2以上出土している。ＳＫ８の出土土器はⅠ～Ⅵ群土器まで多様であるが、覆土３・４層で主体を占めるのは、Ⅳa類とⅤc類および前述の粗製深鉢形土器である。ＳＫ８の時期はⅣ・Ⅴ群土器を中心とする頃と把えておきたい。ＳK8aはＳK8bを切って作られているが、両者の時期関係は不明である。

磨製石器、土製品関係は磨石２点・耳栓２点・土偶１点が出土している。磨石は、（図版37）では重量 300g 覆土４層の出土でａ類として分類され、縁辺に朱が付着している。（図版37）は重量 470g ｃ類として分類される。それぞれの材質は花崗岩である。耳栓（第36図）は、（２）では覆土４層より出土し推定径５㎝程である。（３）は推定径７㎝程で内外面共黒色処理を施し丁寧に整形している。土偶（第36図１）は肩・腕部の破片で表面は朱塗りされている。

打製石器は、土壙群の中では最も多くの出土量があり、その内訳は（表　）に示した。Ｆ2出土の石匙（第36図９）は二次加工面が片面全体におよび、刃部鋭く他のⅢa類とは製作技術が異る。F4出土の石箆（第36図10）も唯一のⅣe類で両側縁・先端ともブランティング様の調整がなされ、F2出土の石(12)はⅥa類、Ｆ4出土の(11)はⅦb類に含められる。これらの石器のうち、（9・10）は本遺跡の中でも特異な存在であり、他の遺構群出土のものとは年代差があると考えられる。

９号土壙（ＳＫ９）

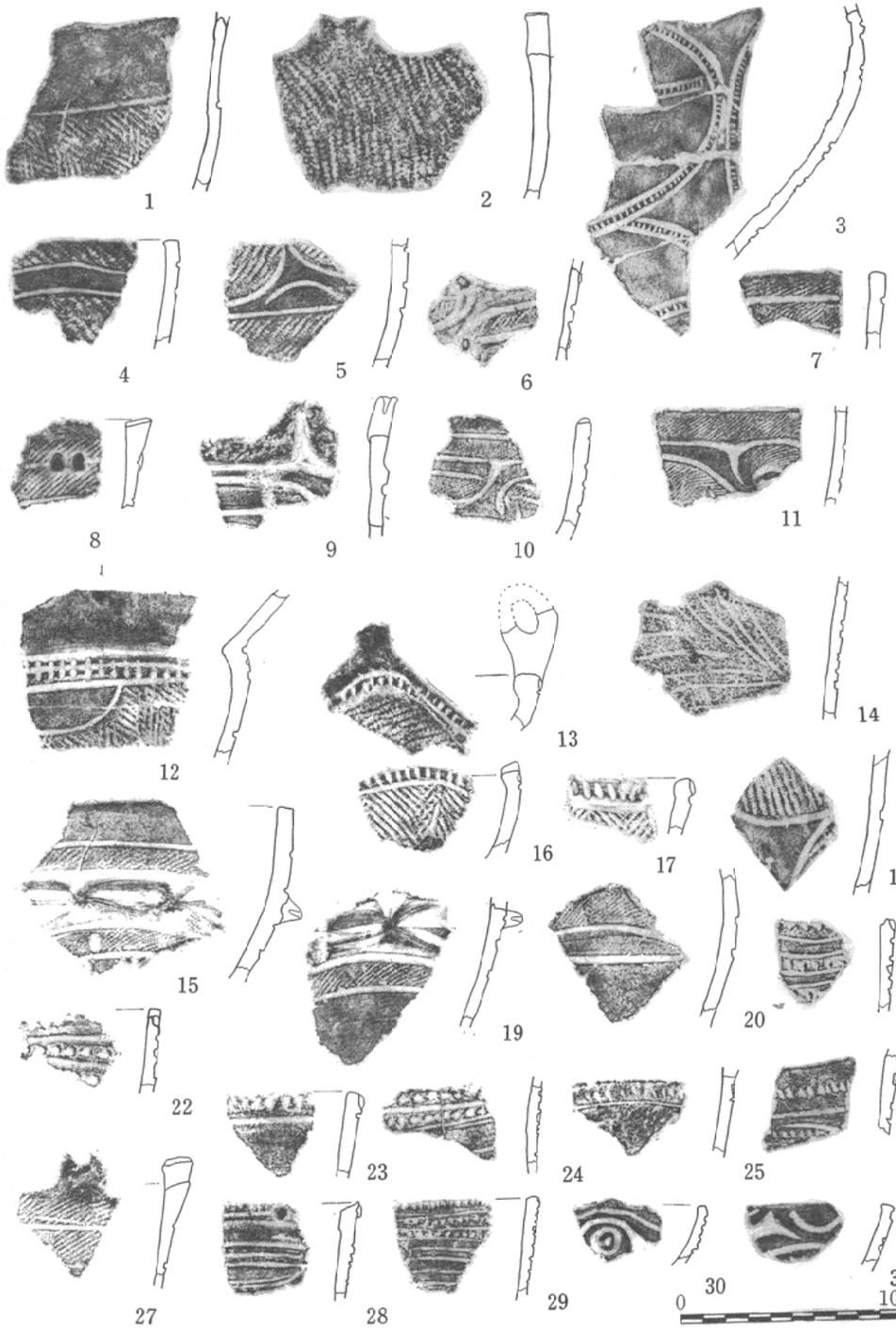
13－Ｎグリッド、ＳＴ４の床面で確認した土壙である。形態は不整な楕円形を呈し、長径約１ｍ40㎝を測る。壙壁はほぼ垂直な立ち上がりを示すが、凹凸が激しい、壙底は平坦にしている。覆土は１層で、炭化粒子や赤色粒子を多く含み、やや粘性がある褐色砂質土層である。

土器は覆土１層から16片出土している（第32図30～36）。30・34はⅤc類、31～33はⅥa類、35はⅥ群土器項に属するものである。このほか直線的な刷毛目文（36）や細い斜縄文をもつ深鉢形土器の小片が出土している。限られた資料からではあるが、ＳＫ９の時はⅥ群土器を中心とする頃と思われる。

Ｆ1からⅥc類の両面加工の石器が出土している（第36図14）、上半が折損しており石箆の失敗品かも知れない。この他剝片・砕片が29点出土している。

11号土壙（ＳK11）（第31図・図版32）

11－Ｏグリッドで検出された土壙で、西側をわずかに後世に掘り込まれている。形態は



第34図　土壙出土土器（２）

やや円形を呈し、北側ではゆるやかな立ち上がりを示し、他は急な立ち上がりである。壙底は平坦で、深さは33cmを測る。覆土は３層あり、１層は炭黄褐色粘土層、２層は暗褐色微砂層で木炭の粒子が多量に含まれている。３層は明褐色微砂質砂層である。

土器は覆土１層から 132片（第35図14～28・図版35）。覆土２層から12片(同17・21)出土している。14・21はⅠc類、15はⅡb類、25はⅡc類、16・17・20・24はⅥa類、23・26はⅤb類、22はⅥb類の椀形土器に属する。このほか器面全体が良好に研磨されている深鉢（14・19・27）や壺形土器および斜縄文の施されている深鉢形土器がみられる。深鉢形土器の口縁部は内側に肥厚しているものが多い。ＳＫ11の時期はⅣ群土器を中心とする頃と思われる。

石器はF_1からⅡf類の石鏃(第36図７)と剥片・砕片４点が出土している。F_2には石器類は検出されなかった。

12号土壙（ＳＫ12）（第29図）

14－Ｌグリッドで検出された土壙で、形態は径約１ｍ13cm、不整の円形を呈している。立ち上りはやや垂直を示し、壙底は平坦である。深さは26cm、を測り、覆土は１層の炭化粒子赤色粒子を多量に含む黒褐色粘質砂層である。

土器は覆土１層から27片出土している(第35図10～13・図版35)。顕著な文様のある土器は認められない。細い刷毛目のある土器や器面体に斜縄文の施されている深鉢形土器がほとんどである。深鉢形土器は、口頸部がやや外反し頸部に結節回転縄文が施されている甕形土器（10～13）が多い。ＳＫ12の時期は明らかでないが、Ⅹ～Ⅻ群土器頃であろう。

石器は剥片・砕片あわせて14点出土している。

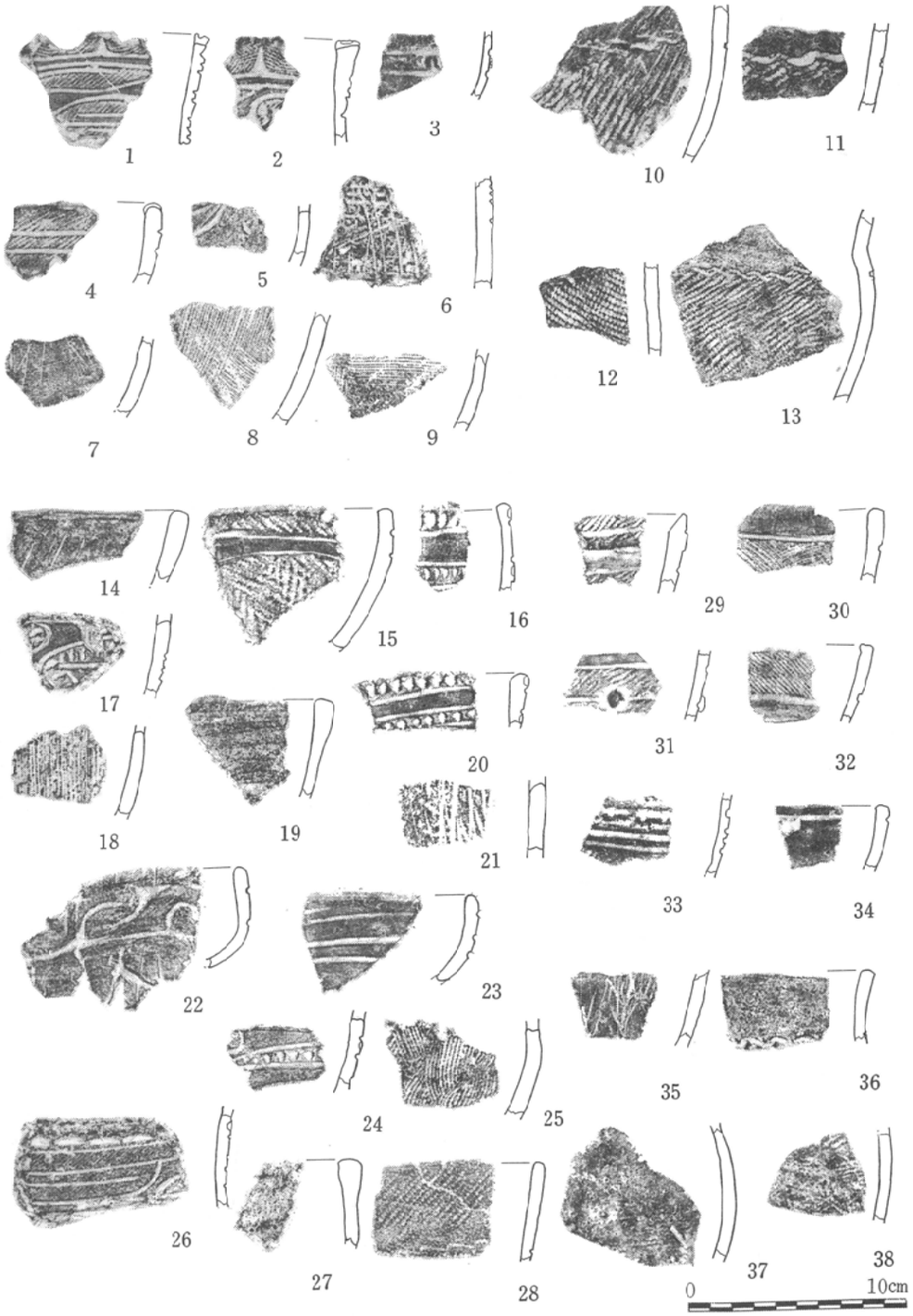
13号土壙（ＳＫ13）（第31図）

14－Ｌグリッド北側で発見された土壙で、一部分は未堀部分のＫ区にかかる。形態はほぼ円形を呈し、径約１３０ｃｍを測る。北東部と南部はゆるやかな立ち上がりを示し、深さ54cm、である。壙底部西側には、20～30cmの河原石を３個底部によせて検出している。中央部分は平坦で、覆土はＳＫ12の２層と似ている。

土器は覆土１層から39片(第35図29～36・図版35)。覆土２層から48片（31・34）出土している。30はⅠb類、29・31・32・34はⅢb類、33はⅨa類に属する。35は撚糸文を施している。このほか器面全体に刷毛目文や比較的細い斜縄文、および研磨を施した深鉢形土器片がある。ＳＫ13の時期は覆土２層の土器も考え合せ、Ⅲ群土器を中心とする頃と思われる。

石器はＦから石錐の未成品(Ⅱｘ類)が出土している(第36図６)。側縁は全体的にブランティング様の剥離が施されている。その他剥片・砕片が18点出土している。F_2から砕片が１点出土している。

14号土壙（ＳＫ14）



第35図　土壙出土土器（３）

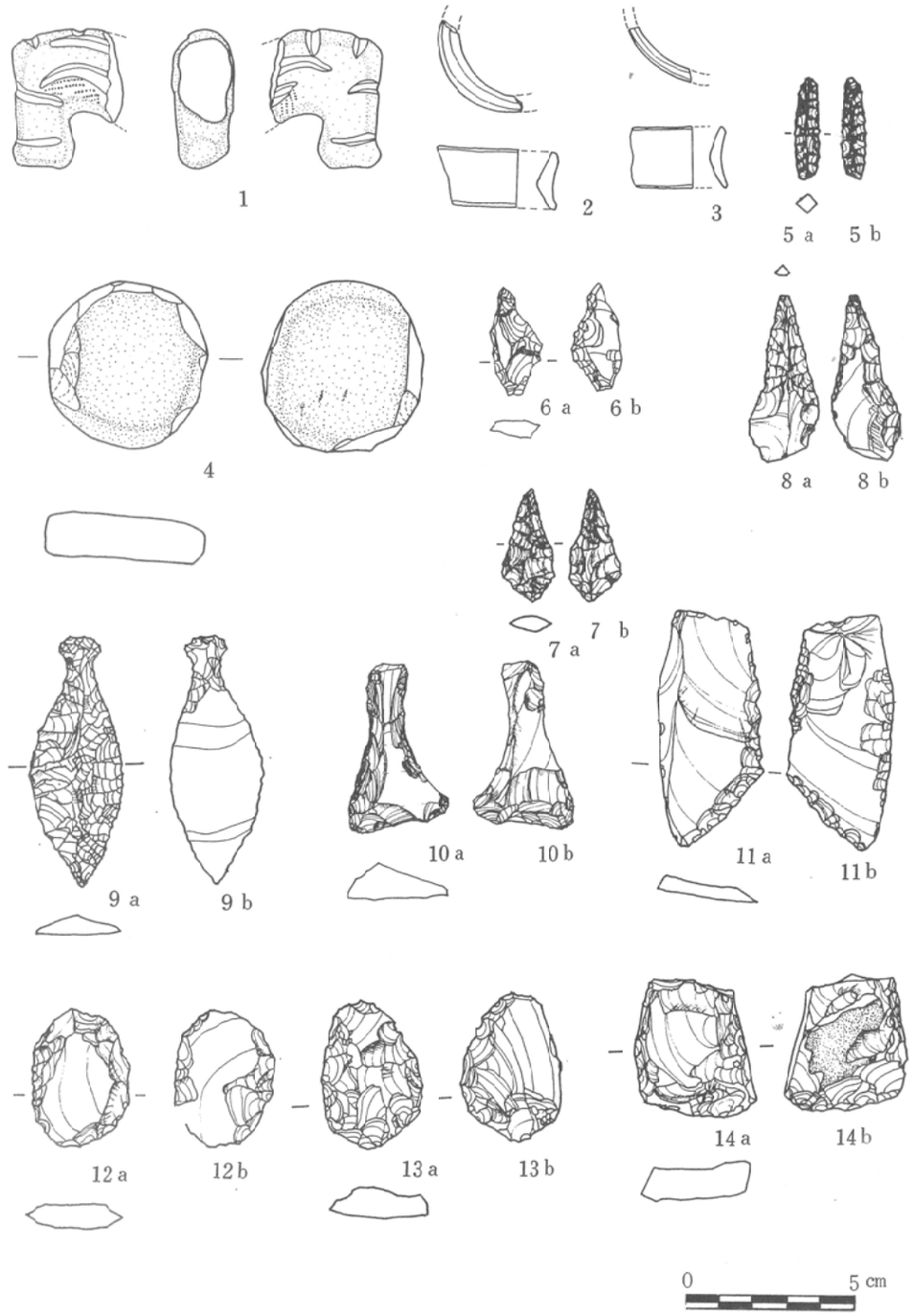
11－0グリッド西側で約3分の2程のプランを確認出来た。3分の1は10区にかかる。形態はほぼ円形で、径約115cmを側る。全体的にゆるやかな立ち上りを示し、深さ18cmである。壙底部は平担で、覆土は粘性の黒褐色粘砂土層である。

土器は覆土1層から5片出土したのみである（第35図37・38）。いずれも斜縄文が施された粗製の深鉢土器片で、時期は不明である。

遺構内出土土器分類表

表 4

遺構＼分類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ
ST1										—	◎	◎
ST3									—	◎	—	
ST4									◎	◎	—	
SK1					—		·····	◎	·····	·····		
SK2	—				◎							
SK3		—		◎	—							
SK4		—			—	◎					—	
SK5					—			—	◎			
SK6	—	—	—	—	◎	—						
SK8	—	—		◎	◎	—						
SK9					—	◎						
SK10	—			—	—	◎						
SK11				◎								
SK12												
SK13			◎									
SK14				?								



第36図　土壙出土石器・土製品

包含層出土遺物（第37～49図・図版38～46）

今回の精査区域の大部分が遺構の密集地域にあたっているが、なお遺構確認面の上層にあたる包含層Ⅰ・Ⅱ層および遺構の検出されなかったグリッドの地山までにいたる包含層Ⅲ・Ⅳ層中の遺物も多く存在する。本節では包含層出土の遺物について、土器、土製品、石器、石製品の順に述べる。

土　器（第37～42図、図版38・41）

包含層出土の土器は、Ⅰ層1187片、Ⅱ層4316片、Ⅲ層 1009片、Ⅳ層 198片の計6710片出土している。これらの4層は地層的には分離できるものの、土器の様相からは各土器群が混在したあり方を示す。ここでは包含層出土の土器をⅠ・Ⅱ層とⅢ・Ⅳ層の2つに分けて図示するが、各土器群の説明は一括して述べることにする。

第Ⅰ群土器（第37図1～4・6・10・11・15～17）

1～3は肥厚した口縁部の外唇部に連続した刻目を有するものである。ゆるやかな波状口縁を呈する。体部にL{R/R の縄文原体を横位・縦位に回転させた羽状縄文をもつが、同じ縄文は4にもみられる。Ⅰa類と分類したものである。6・10・11はL{R/R ないしR{L/L の斜縄文が施されているもので、口唇部の刻目はあまりみられない。Ⅰb類に属する。4の頸部には沈線による格子目文がみられ、Ⅰa類とⅠc類が同一器形に用いられる例である。15～17も沈線による格子目文ないし横羽状文が施されているものでⅠc類である。

第Ⅱ群土器（第37図8・9・13・35～41・43、第42図1～4）

8・13は鉢ないし深鉢形土器の口縁部で、直線的な磨消縄文帯を有する。体部に初源的な入組文ないし弧線連結文が施されると考えられ、Ⅱa類に分類した。9は沈線による弧線連結文と貼瘤をもつ壺形土器で、Ⅱb類に属する。第37図35～41・43、第42図1～4は、曲線的な細い刷毛目文を器面全体に有するのでⅡc類である。器形は底部から体部までほぼ直線的に立上る深鉢と、口縁部が外反し頸部でしまる深鉢との2種がある。

第Ⅲ群土器（第37図14・第41図1）

包含層における本群土器の出土例は少なく、Ⅲa類が第41図1、Ⅲb類が37図14にみられるだけである。ＳＫ6に好例（第34図5・8）がみられる。

第Ⅳ群土器（第37図5・7・12・18～20・23・第41図3）

先端の細い棒状工具による刺目手法による入組文および弧線連結文を有するものである。比較的間隔をおいた刻目（第37図5・18・19・23、第41図3）をもつⅡa類と、間隔の狭い刺突による刻目（第37図7・20）をもつⅡb類とに分けられる。前者には円形の刺突文が多く、後者には縦長の刺突文が多い。文様は入組文が多いが、弧線連結文（第41－3）もみ

第37図　包含層出土土器（1）

られる。

第Ⅴ群土器（第37図21・22・24～34、第41図２・４～16）

磨消縄文ないし刻目手法による入組文のうち三叉状陰刻をもつものを主とする土器群である。第37図21・22・24～26、第41図２は、先端の角張る篦状工具を器面に直角にあてて刻む刻目文でⅤa類に属する。刻目の間隔は密で、26のように貼瘤を伴なうものや、21・22のように磨消縄文手法と組み合さるものもある。文様は入組文が多いが、弧線連結文（24）もみられる。

第37図27～31、第41図４～16は、磨消縄文手法による入組文に三叉状陰刻を有するのでⅤb類である貼瘤が伴なうものが一般的であるが、包含層の資料中には貼瘤がみられない。第41図４・５はⅤb類に横方向からの連続刺突を伴なうもので、Ⅴc類との中間形態である。第37図32～34は、磨消縄文による入組文に眼鏡状の突起を伴なうものでⅤc類に属する。文様の外側は良好に研磨されているものが多い。

第Ⅵ群土器（第38図１～９・11・12、第41図17～24）

三叉文をもつものを主とする土器群である。磨消縄文による入組文と組合わさって玉抱き三叉文を有するもの（第38図２・６、第41図17～19・21）およびそれらの一部と考えられる磨消手法による入組文（第38図1・7、第41図22）はⅥa類に属する。磨消縄文を伴なわない沈線による三叉文を有するもの（第38図３～５・11、第41図20・21）はⅥb類に属する。Ⅵb類は器面全体に良好な研磨を有する。第38図８・９・12、第41図23・24は、器面全体がていねいに研磨されとの一部に沈線を有するものであるが、この種の注口土器や鉢形土器はⅥ群土器に特有なものであり、Ⅵb類に含ませて分類しておく。

第Ⅶ群土器（第38図10・13～17・19、第41図26・27）

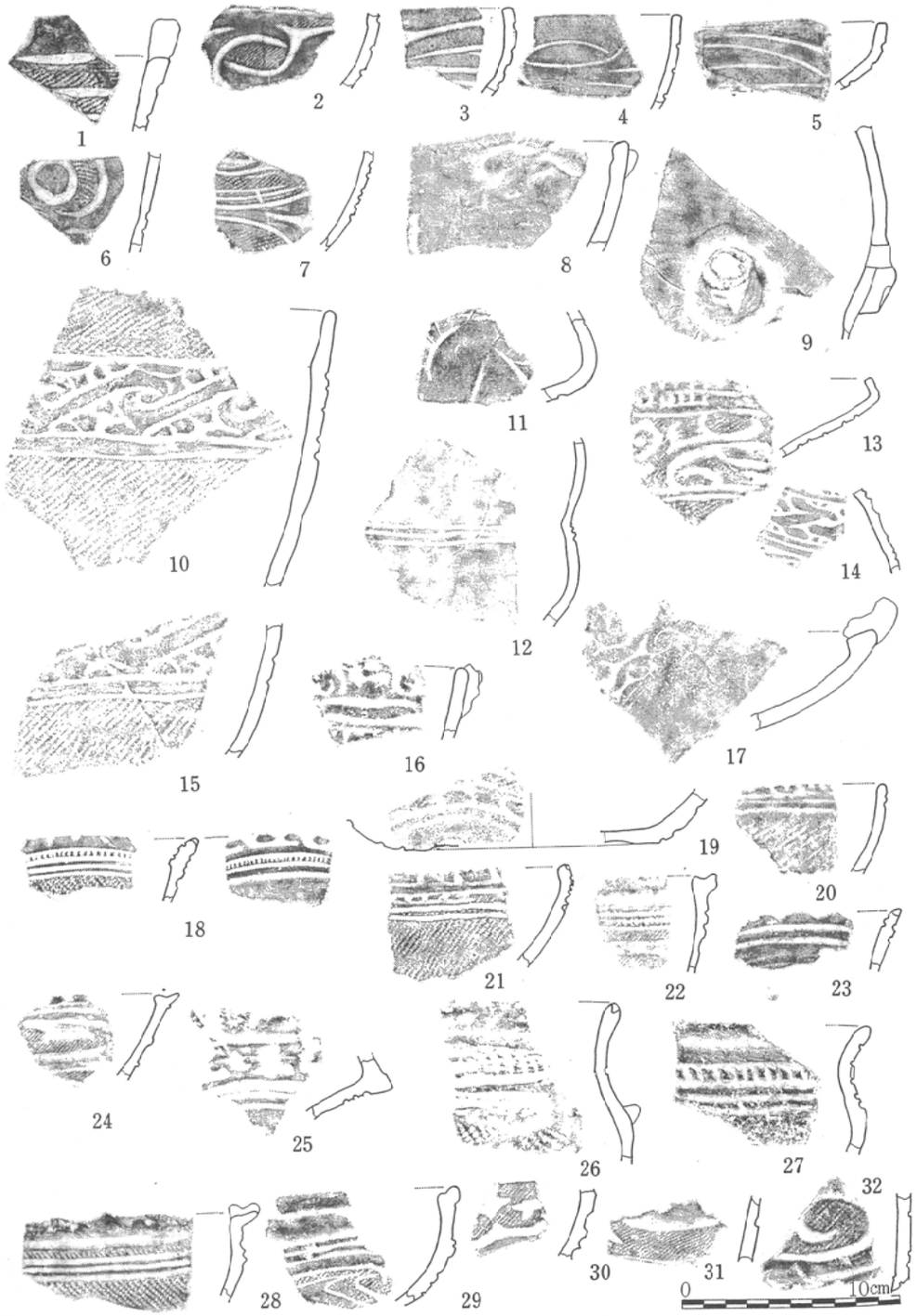
羊歯状文をもつものを主とする土器群である。浮彫手法による羊歯状文を有するもの（第38図10・15、第41図26・27）はⅦa類に属する。K字状文を有するもの(第38図14)やK字文文等がのびて浮彫的な磨消縄文をなすもの(第38図13・16・17・19)はⅦb類に属する。Ⅶ群土器の器形には浅鉢・鉢・注口土器等があるが、その中でも器種の変化が多い。

第Ⅷ群土器（第38図18・20～25・30～32、第41図28）

口頸部に羊歯状文の影響を残す刻目文を有するもの（第38図18・20～22、第41図28）はⅧa類、K字状文等が縦横にのびて雲形文をなすもの（第38図23・24・30～32)はⅧb類に属する。口唇部に小二連突起ないし小波状口縁が多用される。Ⅷ群土器の器形には皿・浅鉢・鉢・注口土器（第38図25）などがある。

第Ⅸ群土器（第38図26～29、第41図31・33）

口頸部に３～５条の平行沈線文およびその一部に連結した刻目文を有するもの（第38図



第38図　包含層出土土器（２）

26～28、第41図33）はⅨa類に属する。口唇部には小波状起ないし２連中突起を有する。体部に直線化した雲形文を有するもの（第38図29、第41図31）はⅨｂ類に属する。第41図31は沈線によって文様が描かれているものである。Ⅸ群土器の器形には浅鉢・鉢・壺形土器（第41図31）などがある。

第Ⅹ群土器（第39図１～17・28・29、第41図25・29・30・32）

包含層中には磨消縄文をもつ工字文を有する土器Ⅹa類は発見されなかった。ＳＴ3の土器分折等を加味しながら、Ⅹa類に伴出する土器について述べる。頸部に眼鏡状の突帯を有するもの（第39図８・９、第41図29・32）はⅩb類に属する。第　図は口縁部が研磨され頸部に数条の平行沈線はないが口頸部に3条の削りがあり、Ⅹc類に含めた。Ⅹ群土器に属する器形には、Ⅹa類が欠けているものの鉢・甕・壺形土器などがある。

第Ⅺ群土器（第39図18・20～23・26・27・30、第41図34・第42図24・25・27～29）

包含層中には浮線による直線的な工字文を有するⅪa類は発見されなかった。2～3 条の沈線による工字文を有するもの（第39図18・第41図34）はⅪｂ類に属する。平縁で口縁部が長く研磨され、体部に結節回転縄文ないし斜縄文を有するもの（第39図21～23・26・27・30）はⅪc類に属する。第39図20は口唇部に刻目をもち、長い口頸部が粗く研磨されている大形の鉢形土器でⅪ群土器に属する。器形は浅鉢・鉢・甕・壺形土器などがある。

第Ⅻ群土器（第39図19・24・25、第41図35・第42図26）

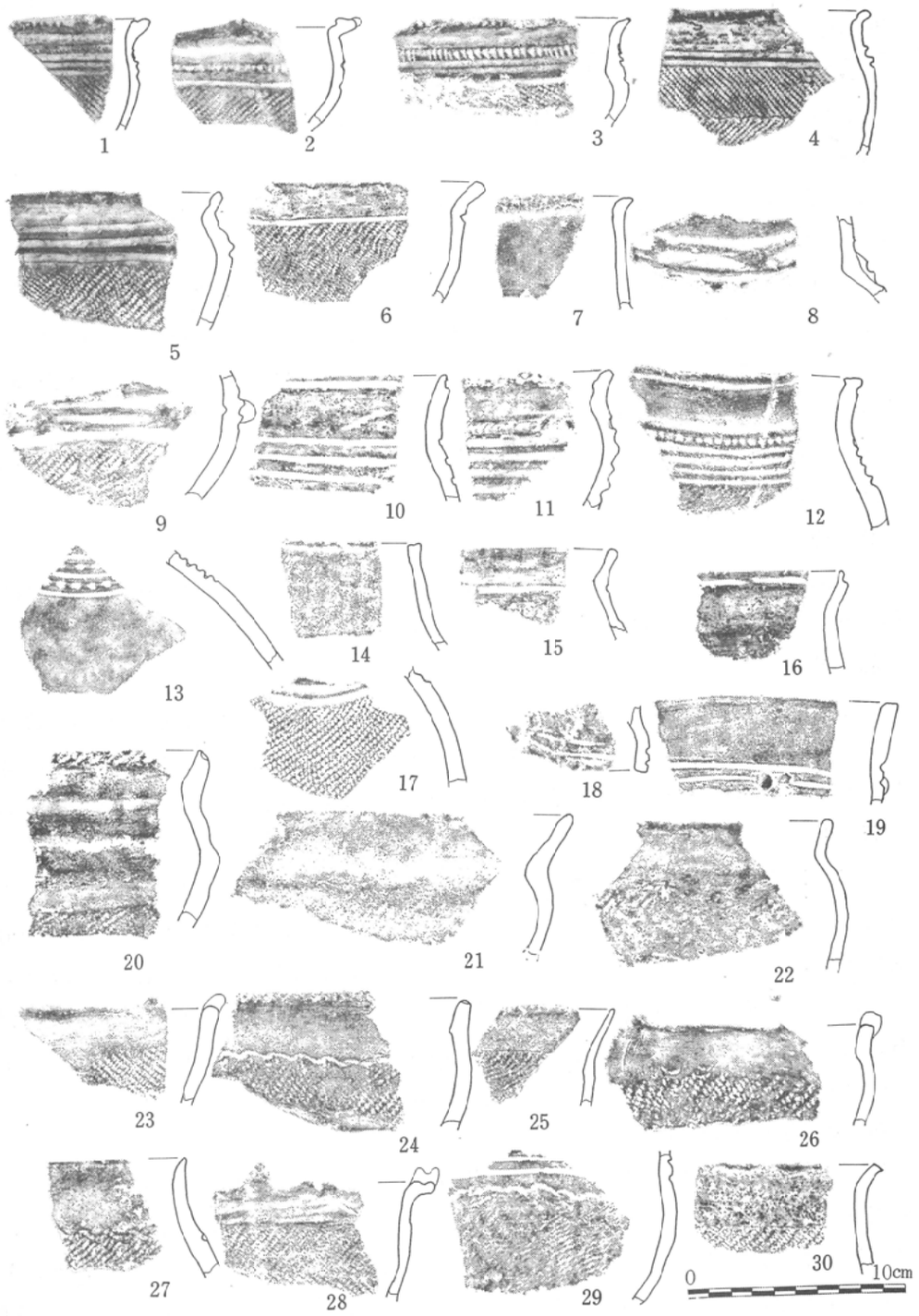
第39図19は択り手法による瘤をもつ変形工字文を有するものでⅫa類、第41図35は瘤をもたない「π」の字形の工字文でⅫｂ類に属する。第42図26は口唇部に篦状工具による押圧波状文、第39図24・25は口唇部に縄文を有する甕形土器でⅫc類に属する。Ⅻ群土器の器形には浅鉢・甕・壺形土器などがある。

その他の粗製土器（第40・42図）

最後に各類群への帰属が明らかでない粗製の鉢・深鉢（甕）・壺形土器について一括して述べる。

第40図１・２・20、第42図５～９は器面全体が研磨されている深鉢形土器である。第40図１・第42図５～６は口縁部が内側に肥厚していることからⅥないしⅤ群土器に伴出することが考えられるが、その他は他遺跡の例からみてⅣ～Ⅸ群土器までの幅をもつ。第40図３～５、第42図３は直線的な刷毛目文を有する深鉢形土器で、Ⅴ～Ⅸ群土器までの幅が考えられる。第40図６～８は撚糸文を有する深鉢形土器で、時期的な限定は不明である。

口縁部がほぼ直立し、器面全体に粗い斜縄文ないし羽状縄文を有する深鉢形土器はⅠ～Ⅻ群土器まで併出する。このうち第40図14の縦方向の羽状縄文をもつものはⅠ群土器に類似する。また第42図10～15にみられるような横方向に間隔をおいた斜縄文はⅠ～Ⅴ群土器



第39図　包含層出土土器（３）

によくみられる。第40図17～21は深鉢ないし壺形土器の底部である。17・18には木葉痕、20には一条交互式の網代痕が押捺されている。

土製品

土製品としては、耳栓１点、土偶３点、土版１点が出土している。

耳栓（第43図２）

推定径約７㎝程で、全体の５分の１ほどの破片である。胎土に砂粒を多く含み焼成はあまい。頂端部は平坦で、表面は磨かれている。

土　偶（第43図３・５・８）

包含層より３点出土している。いずれもⅡ区の出土である。３は、脚部の破片でスタンプ状を呈する。表面に斜縄文を施し底面は平坦である。５は体部の破片で頭部、両脚部を欠損している。表面に幅２㎜程の浅い沈線をめぐらし背部は凸状に膨み、沈線で区画された部分に刺突を施している。８は肩部の破片である。表面に５条の平行沈線を施し、その沈線で区画された部分に１条の円形刺突が施されている。

土　版（第43図１）

表採品である。形状は長方形を呈し断面は楕円形である。両端部に凸帯を持ち、文様は幅３㎜ほどの浅い沈線で描かれている。胎土に砂粒が多く表面の剝離が著しい。

石　器

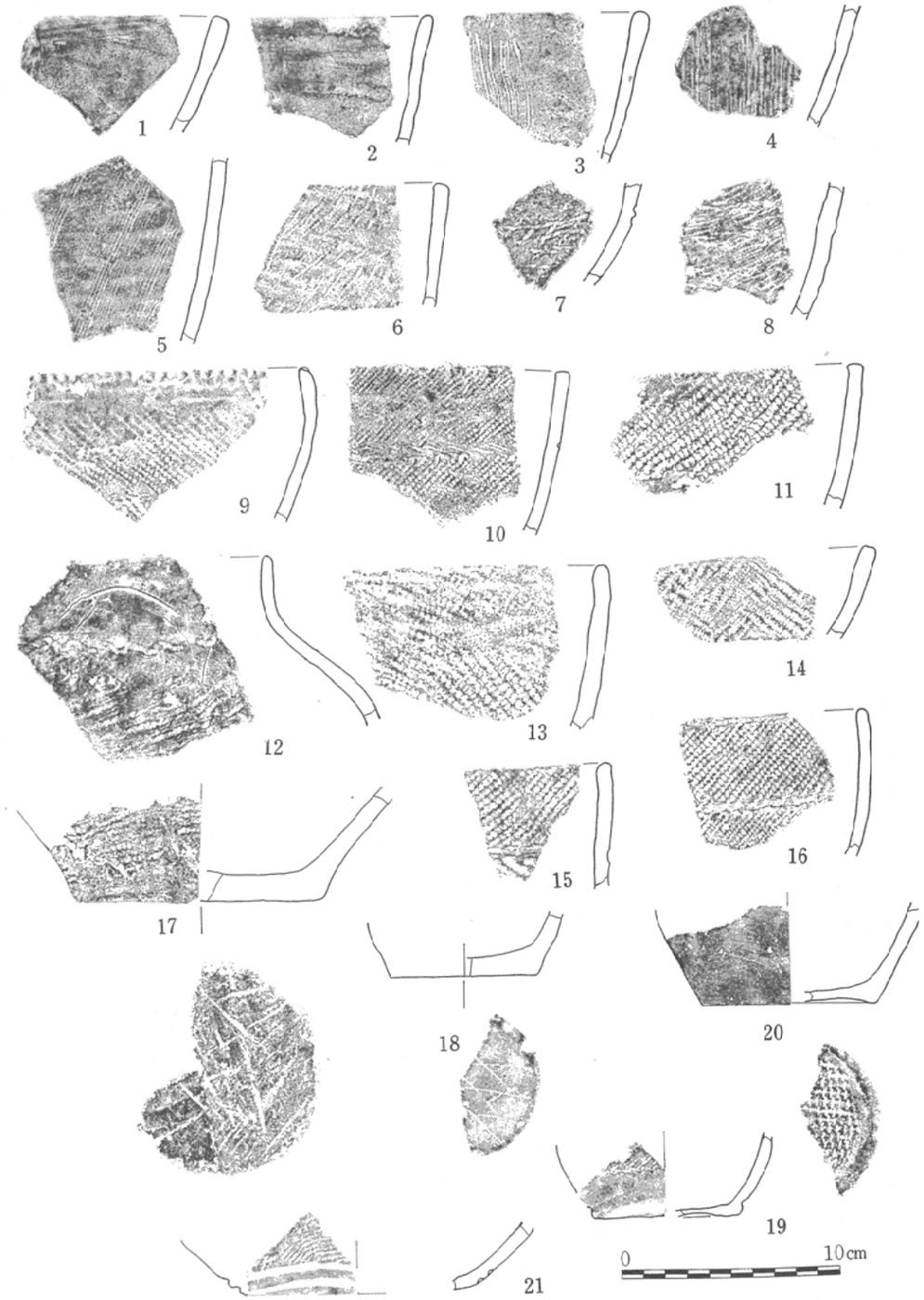
石器は総計 184点出土している。打製石器は石鏃20点、石錐15点、石匙15点、石箆20点、両面加工尖頭状石器14点、両面加工石器22点、スクレーパー33点加工痕ある剝片20点、使用痕ある剝片 3点である。磨製石器は磨製石斧10点、磨石６点、凹石４点、石鏃２点である。

石　鏃（第44図１～14）

1・2はⅠa類としたもので、1は本遺跡中最大の長さをもち、２は基部にアスファルトが付着している。3・4はⅠ b類としたもので、３は丸味をもった先端部をもち、４は素材面を残し、基部が折損している。5・６はⅠc類としたもので両者ともぶ厚く仕上げられている。7・8はⅠd類とした小型の石鏃である。10は細身に仕上げられたⅠe類、11は剝片の周縁に二次加工を加えただけのものでⅠf類に含められる。11・12は共に抉入の基部をもつⅠg類の無茎鏃である。13・14はⅠ x と分類した石鏃の未成品である。

石　錐（第44図15～24）

15～17はⅡb類としたもので、形態的には石鏃と類似するが刺突部断面が菱形を呈し、この部分に摩耗痕が認められる。18・19はⅡc類の石錐で18は基部、19は先端部が折損している。20・21はⅡd類としたもので柳葉形を呈し、先端部でも尖鋭さを感じさせない。20の先端部には摩耗痕と思われる光沢が認められる。22・23はⅡe類とした三角形状に突出する刺



第40図　包含層出土土器（４）

突部をもつ石錐である。24はⅡf類としたたもので、断面三角形の刺突部をもつ。

石　匙（第44図26～31）

26・27はⅢa類としたもので、26はつまみ部のつくりだし以外目立った二次加工はみられない。27は周縁の表、裏面に二次加工が施されている。28は横長剥片を素材とし、バルブ部をつまみに仕上げたⅢb類の石器である。刃部は背の高い剥離となっている。裏面はつまみ部以外に二次加工はない。29～31はⅢc類とした石匙である。3点とも刃部作出のための極だった二次加工はない。

石　篦（第45図）

1～2はⅣa類で、先端部は表、裏両者からフルーティング状の剥離が施され、両刃の刃部となっている。両者とも周縁部加工が表、裏両面からなされており両面加工となっている。3～9は刃部から片刃となり、エンドスクレーパーに類似するⅣb類の石篦である。3b、4b、7a面9b面の刃部にみられる剥離面は使用による刃こぼれと思われる。12・14はⅣc類で先端に刃部をなす剥離はない。10、11、13はⅣd類で先端部は両面とも一次剥離面だけで構成される。

両面加工尖頭状石器（第46図1～4）

1、3は先端部が尖鋭という感じは受けないが、両側縁とも側面観がジグザグでスクレーパーとはならないことからⅤaと分類した。2、4は未成品と考えられる。

両面加工石器（第46図5～8）

5～8はⅣa類としたものである。5はバルブを除去したあと両側縁に両面から二次加工を施したものである。6はバルブ除去のあと両側縁に二次加工を施したもので、先端部に刃こぼれが認められ、この部分が刃部と思われる。7はa面左側縁が刃部となると思われる。8はバルブを除去したあと対峙する側縁に二次加工を施している。

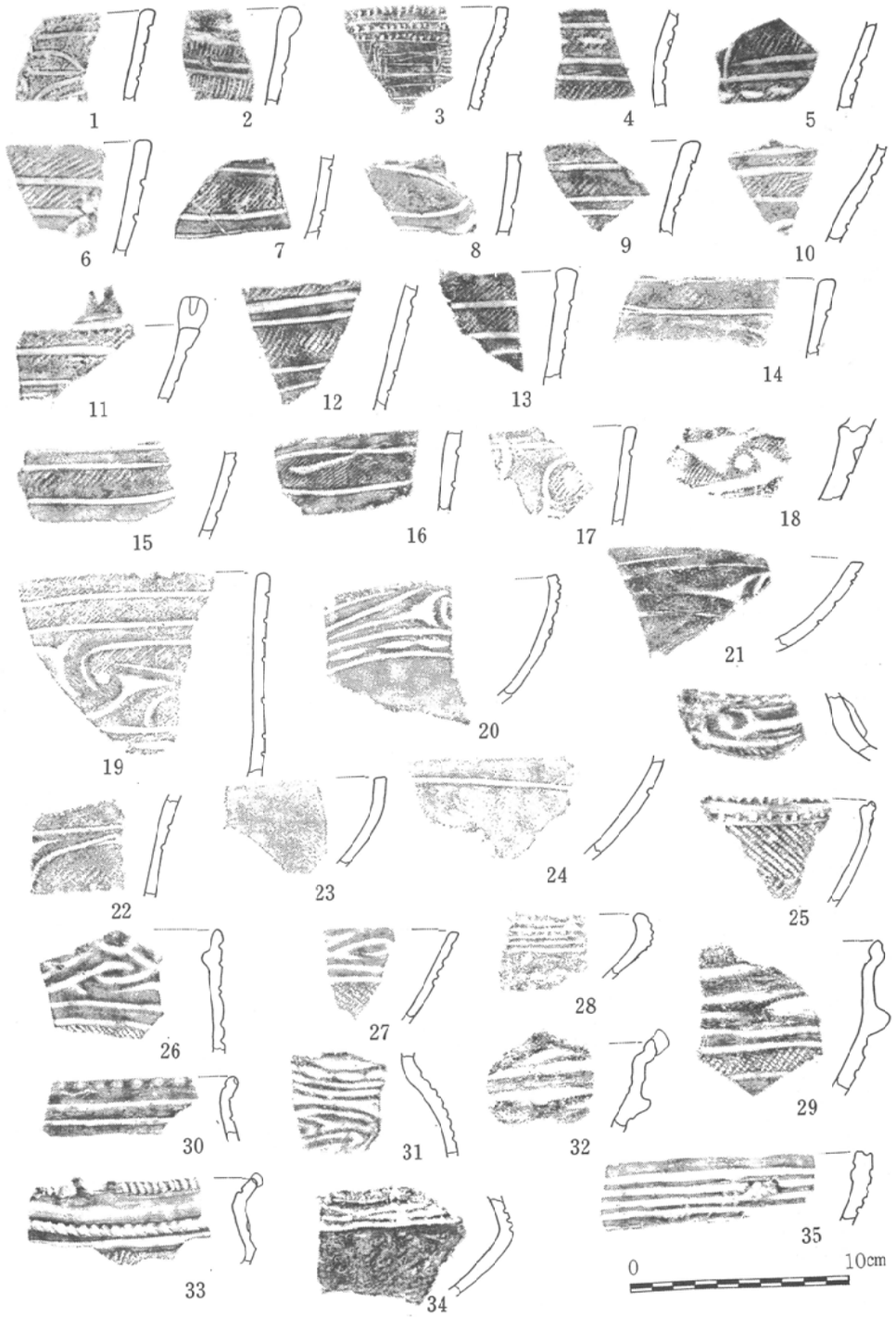
スクレーパー（第46図9～15）

9～11はⅦa類としたラウンドスクレーパーである。12はb面左下に背の高い二次加工による刃部をもつⅦb類のスクレーパーである。13はa面左側縁に連続した二次加工による刃部をもつⅦc類のスクレーパーである。14、15は抉りのある刃部をもつノッチドゥスクレーパー（Ⅶe類）である。

以上の他にも図示できなかった多数の打製石器については巻末の計測表に示した。

磨製石斧（第47図1～3・5・6・8～11、第30図4）

包含層より11点出土している。大部分が破損品で完形は2点のみである。材質は花崗岩粘板岩、硬質砂岩等である。前述したように形態的に4類に分類できる。a類（1・2・6）は刃部、基部が平坦で定角形のものである。1・2は刃部の破片で全体の3分の1程



第41図　包含層出土土器（5）

である。2に刃こぼれ状の使用痕がある。6は完形で、中央部で膨み縁辺の面取りはやや弱く、断面は若干丸みをもつ。3点ともⅡ区出土である。b類（3・5・8・9・10）としては5点がある。3はⅤ区出土、他は全てⅡ区出土である。8は完形で刃部は丸みをもち定角形を呈する。隔が角張り面取りが強く断面は扁平である。他は全て基部の破片で全体の2分の1～3分の1のところで欠損している。3は縁辺の面取りが弱く、5は断面中中央で厚さを増し断面は楕円形を呈する。表面に浅い擦痕がある。c類としては11がある。基部の破片で縁辺に面取りがなく断面は長楕円形を呈する。d類（第　図4）は小形の磨製石斧で全長3.9cm、刃長2.4cmで打質は碧玉である。断面は角の張る定角形を呈し表面はていねいな研磨を行っている。

磨石（第48図4・5、7～9、11）

前述したように形状、断面形、磨面の位置等により5類に分類した。材質は砂岩、安山岩、花崗岩等である。a類(5・8・9)は重量400～600g 前後で、磨面を礫の平坦面と縁辺にもつものである。b類7は、重量755g で球状の安山岩の一端にのみ平坦な磨面をもつものである。c類は包含層より出土していない。d類4はⅢ区出土である。重量920g で大型である。頭部に敲打痕をもつ。e類として11がある。材質は花崗岩で楕円形を呈し磨面をその縁辺にもつものである。

凹　石（第48図3・10・13・第49図3）

楕円形を呈する自然礫の表面に凹みをもつもので、材質は砂岩、安山岩、凝灰岩等である。凹みは1個のもの（10）と数個を有するものがある。重量は 300g 前後のものが多く（第48図3）のみ 490 g と大型である。（第49図3）は頭部に敲打痕があり13は平坦面に磨面をもつ。磨石の再利用品である。

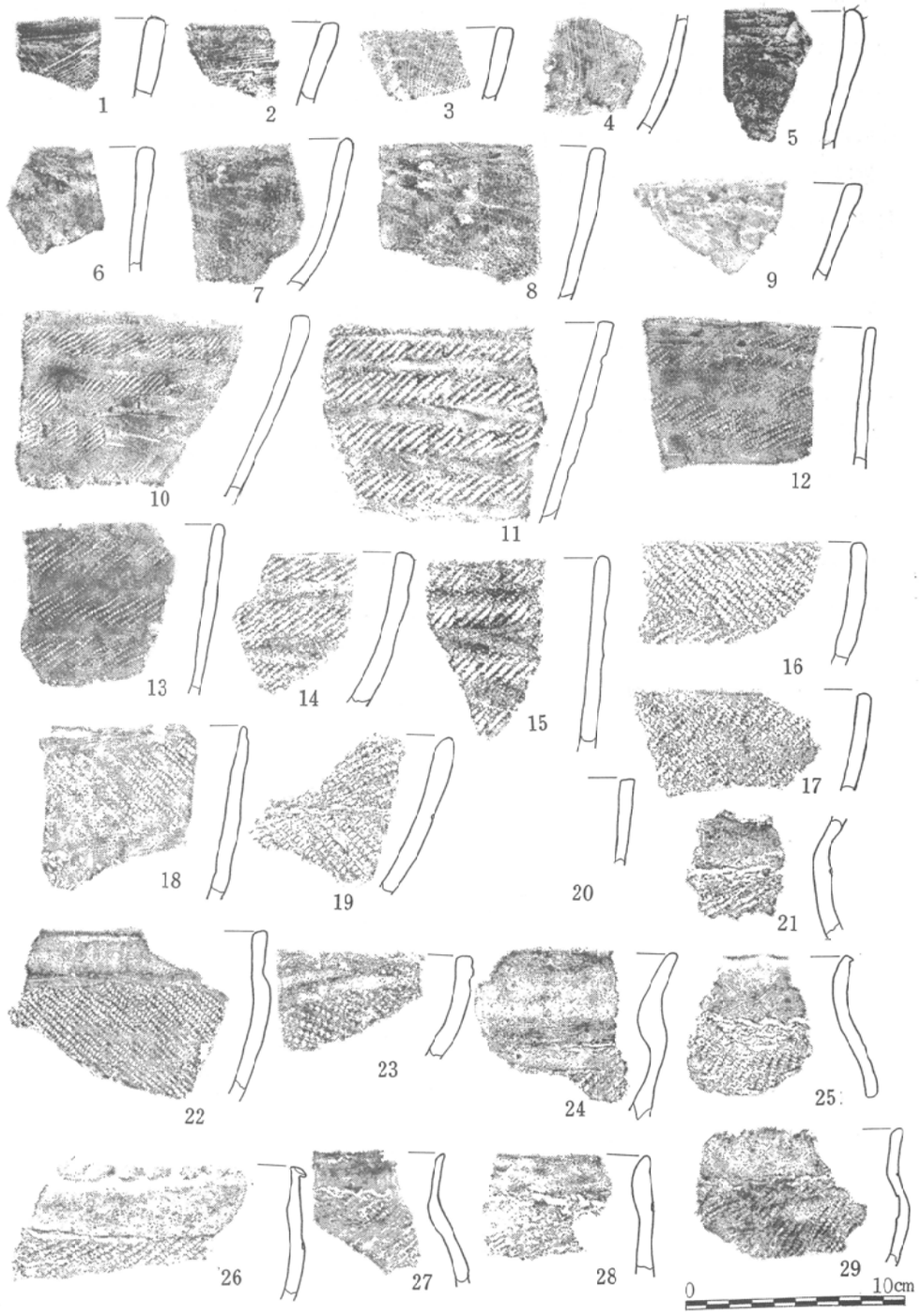
石製品

石製品としては、石棒1点、石刀3点、独鈷石1点、岩偶1点、岩版1点、石錘2点、石製装身具1点、円盤状石製品1点が出土している。

石棒（第47図7）はⅡ区Ⅰ層の出土である。径2.9cmを測り断面は楕円形を呈する。半欠損品で表面に縦位の微細な擦痕がありていねいな研磨を行なっている。

石刀（第47図4・12・13）は、3点出土している。(12）は先端部の破片である。材質ははは粘板岩で表面に斜位の擦痕がある。（4）は縁泥庁岩を使用し端部は平坦で断面は中央部で厚く楕円形を呈する。（13）は、材資は粘板岩である。縁辺の一辺を面取りし、表面に横位の擦痕を残す。

独鈷石（第47図14）はⅡ区Ⅱ層より出土したもので、刃部の一端のみの半欠損品である。刃部は偏平で、縁辺の一端を面取りし平坦である。



第42図　包含層出土土器（6）

石偶（第43図６）は両端を欠損しており形態の全様は把握し得ないが、肩部の一端と推定され岩偶と思われる。形状は中央部でわずかに膨み、断面は角の張る楕円形を呈する。表面に二条の全周する線刻があり、その間に３本の断続する線刻をもつ。表面にこまい斜位の擦痕をもちていねいな研磨を行なっている。

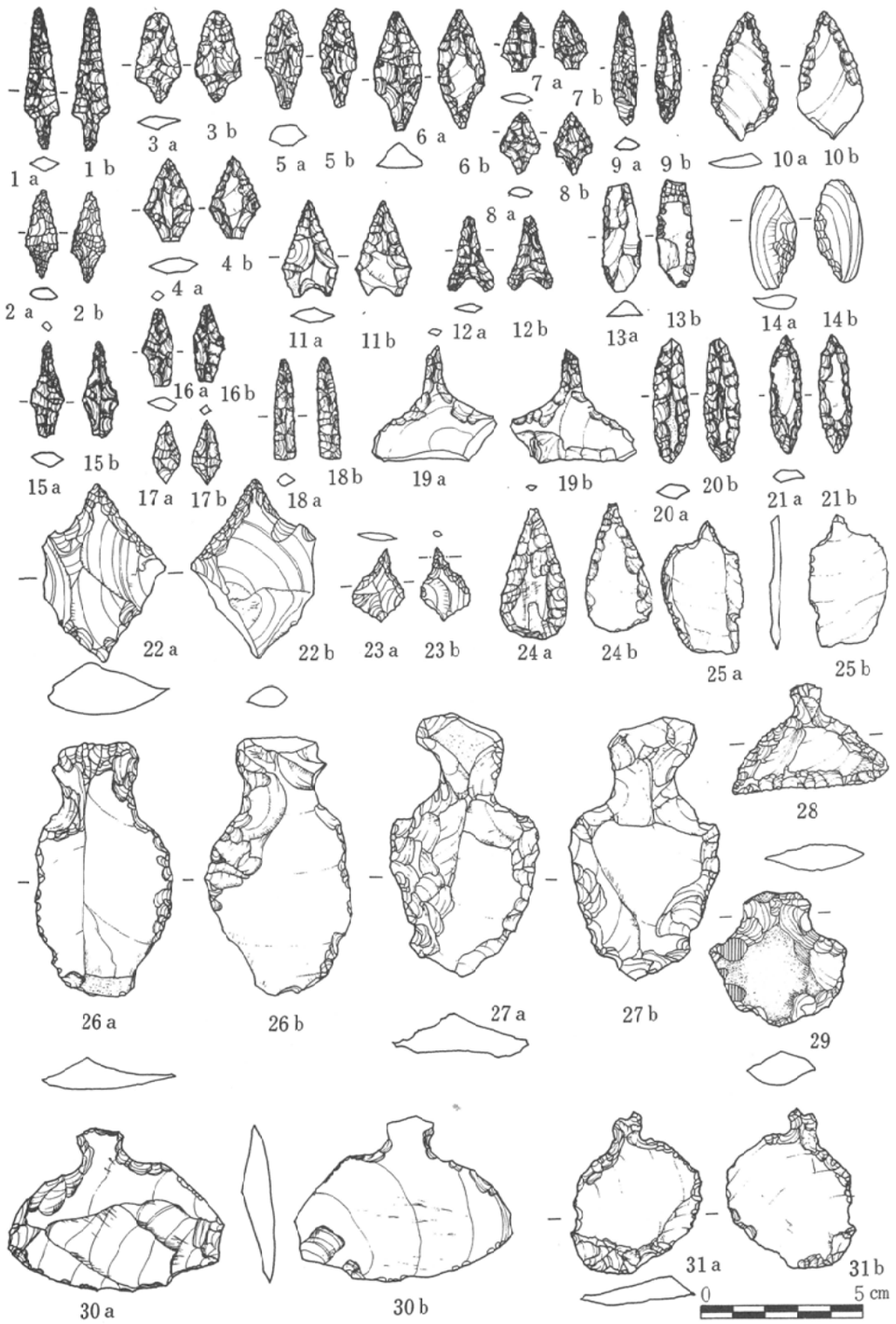
岩版（第30図５）は、径８㎝を測り楕円形を呈し、断面は扁平で縁辺に幅３㎜程の深い凹刻がある。表面文様の凹部はていねいに研磨され朱塗りされた形跡がある。裏面は横位斜位の擦痕をもち、穿孔は両面より行われている。Ⅱ区の表採品である。

石錘（第11図３、第43図４）は２点、Ⅱ区包含層より出土している。（３）は、楕円形を呈する礫で、長軸方向に凹刻をめぐらし重量70g である。表面に横位の擦痕を持つ。（４）は石刀の破片の再利用品である。材質は緑泥片岩で、長軸方向に凹刻をめぐらす。

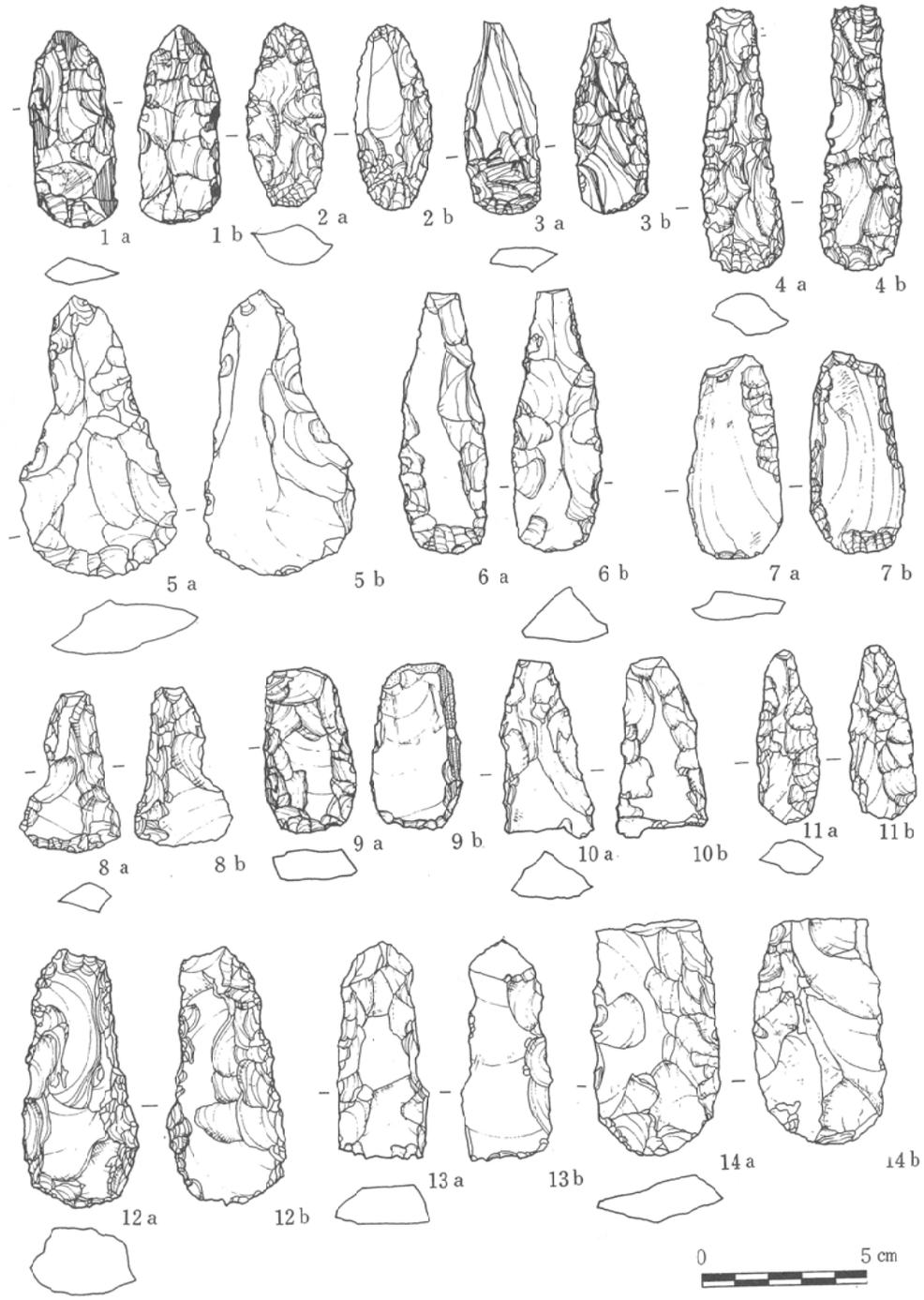
石製装身具（第30図８）は勾玉状の石製品で、全長3.3㎝、厚さ0.6㎝を測り偏平な板状を呈し、縁辺は面取りされている。中央部に径４㎜程の穿孔を有する。穿孔は両面より行われている。

円盤状石製品（第48図12）は、Ⅱ区より１点出土している。いずれも径６㎝程の偏平な円盤状を呈し、縁辺を敲打していて整形し平坦面を研磨している。

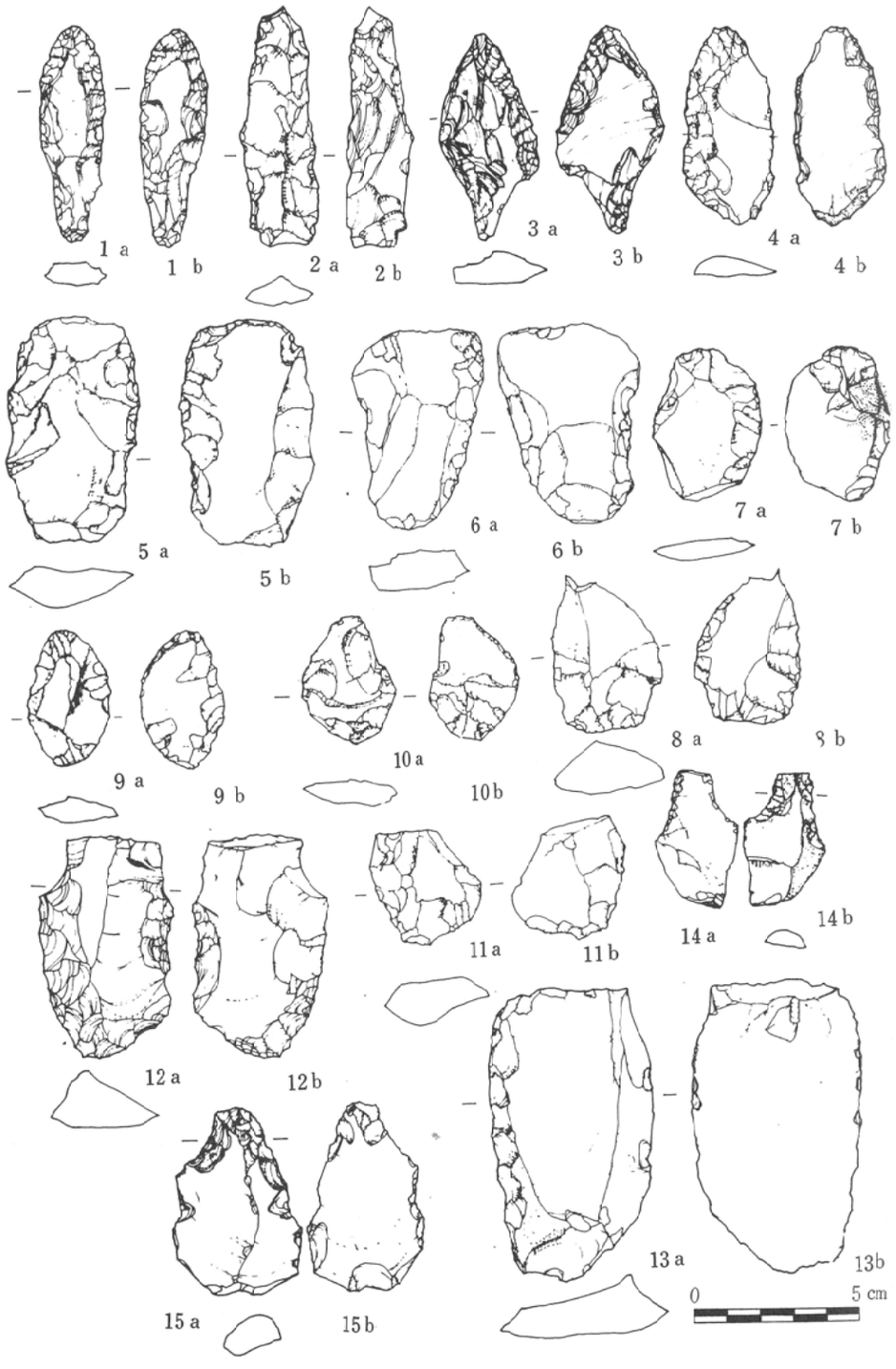
第43図　包含層出土土製品・石製品



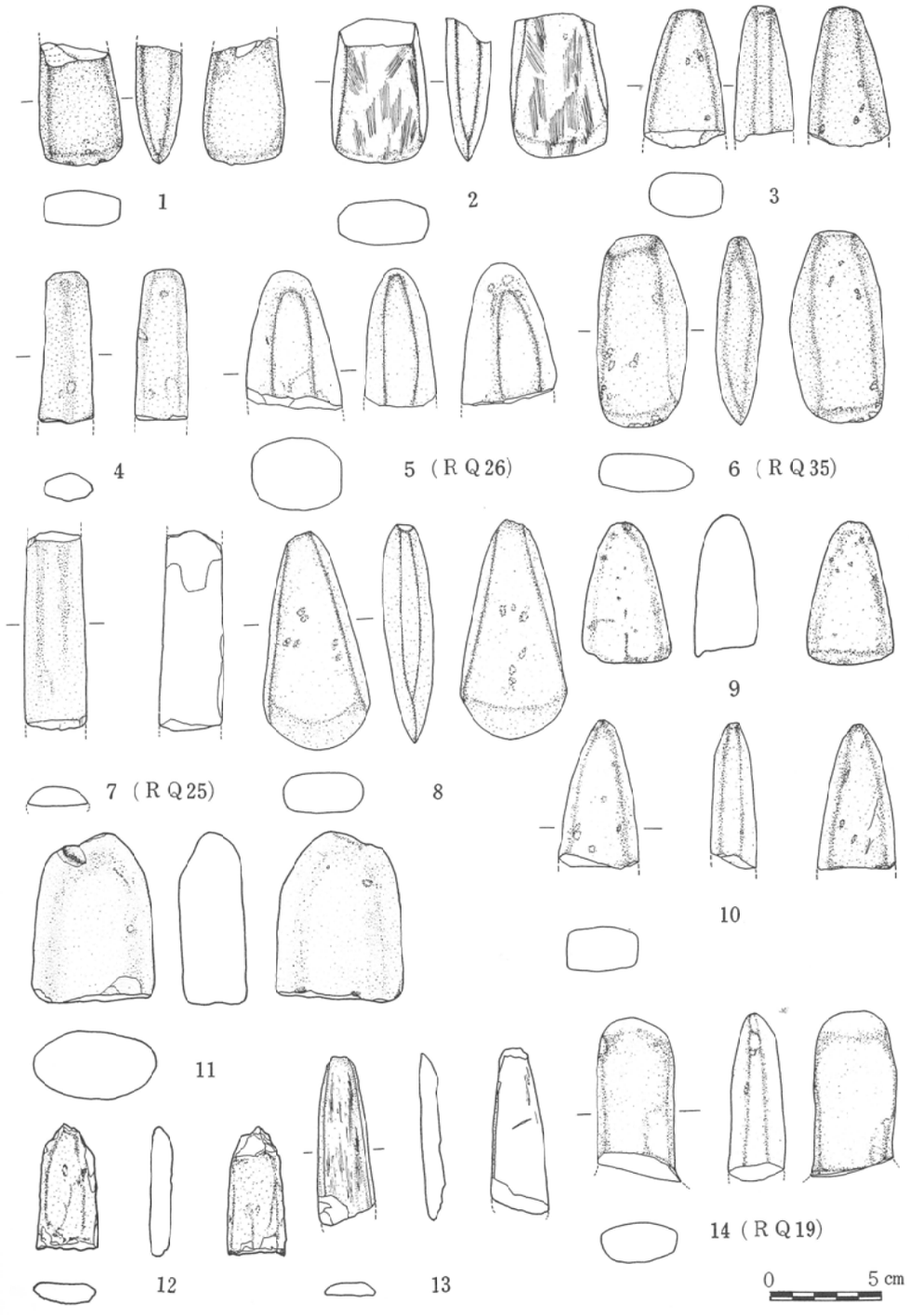
第44図　包含層出土石器（1）



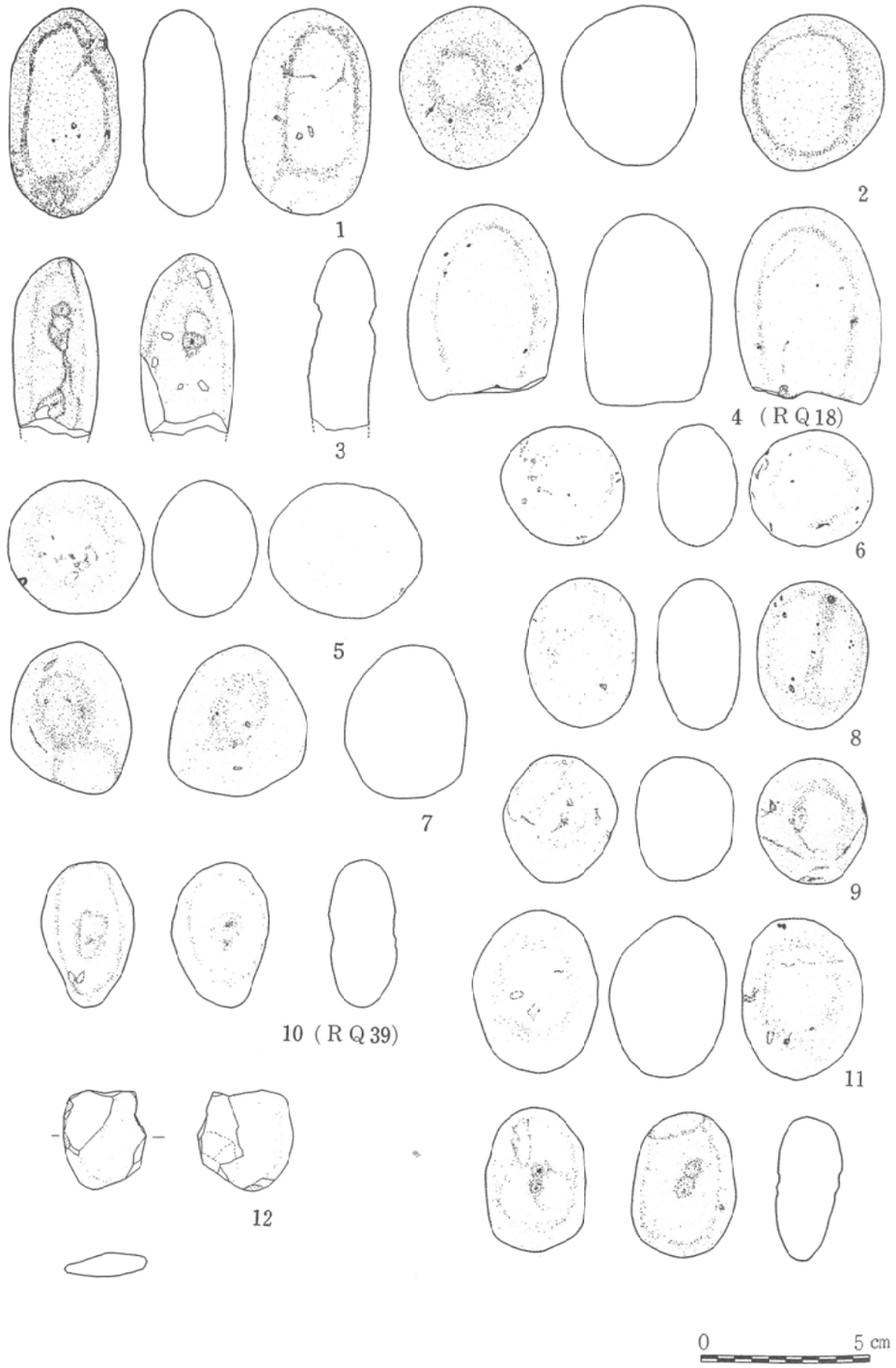
第45図　包含層出土石器（2）



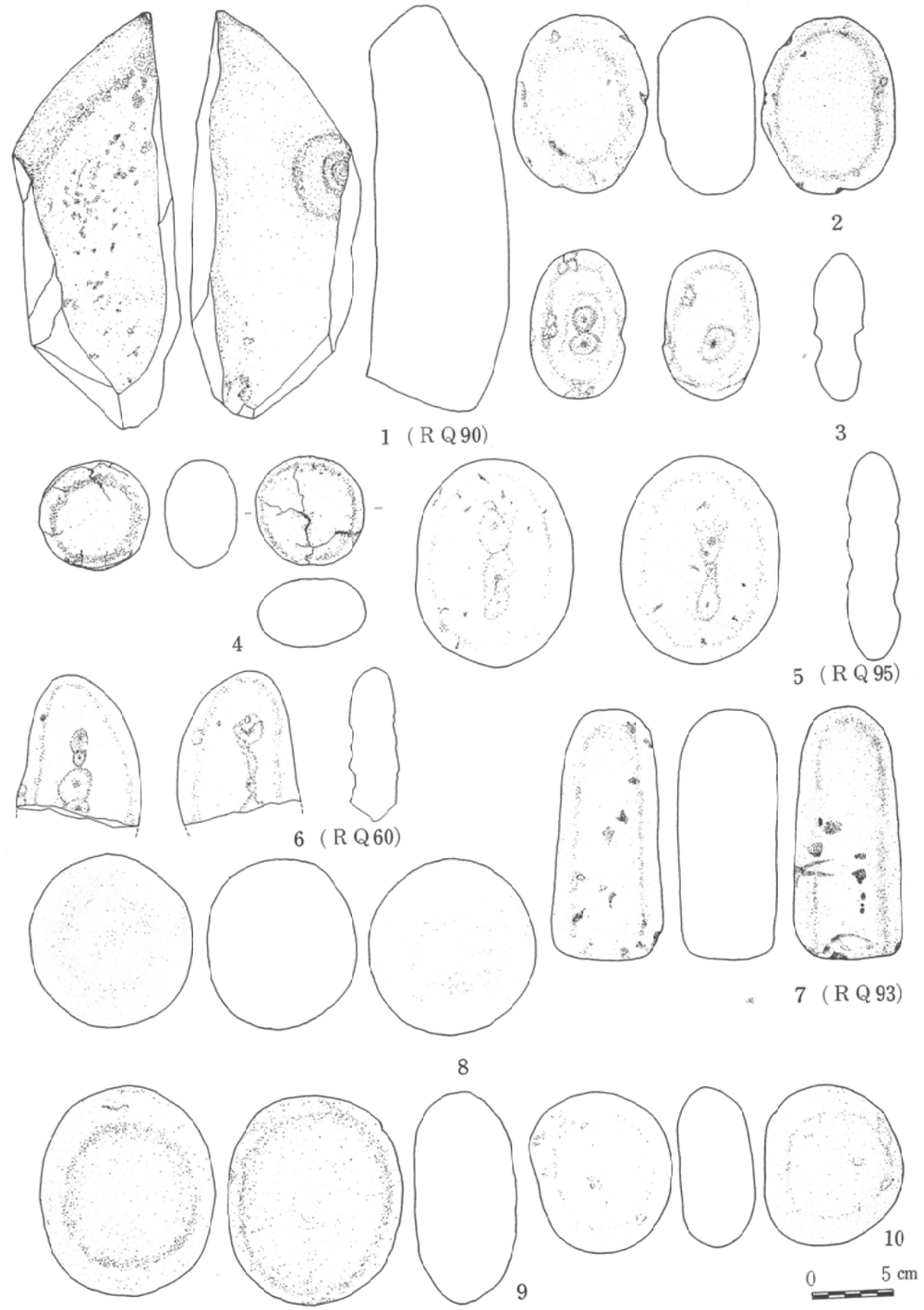
第46図　包含層出土石器（3）



第47図　各区出土磨製石斧



第48図　各区出土石器（1）



第49図　各区出土石器（2）

Ⅳ まとめ

出土遺物

a．土　器

本遺跡出土の土器は、以上のとおり12群29類に分類できた。各土器群は資料的に精粗があり、必ずしもすべてを網羅しているとは言い難いが土器群における類別は、ほぼ同一土器型式における文様もしくは器形の組み合わせと考えられる。またⅠ～Ⅻ群に分けられた土器群も土器型式の範囲内で大略この順序で変遷してきたものと把握される。これらの土器群について他遺跡との比較を行なってまとめとする。

〔第Ⅰ群土器〕　精査地域のほぼ全域・各層にわたって出土するが、とくにＳＫ６・８の覆土内からまとまった資料が出土している。口唇部外側に刻目をもち同じ縄文原体を横・縦位に回転させて羽状となしたⅠa類（第33図１）は、青森県十腰内遺跡・福島県寺脇貝塚など東北地方各地域に類例があり、縄文時代後期中葉、加曽利ＢⅡ式併行期と把握されているが、加曽利ＢⅡ式そのものというよりはむしろ東北地方南部で宝ケ峰式ないし宮戸Ⅱｂ式の名でよばれているものに属する。山形県内では遊佐町神矢田遺跡の報告がある。羽状縄文が顕著でないIb類もIa類と同じ型式に入る。沈線による格子目文を有するIc類は、同一個体にIa類と共存して施文されている例（第34図12）からIa類と同じ型式に入るとみられるが、その一部はⅡ～Ⅲ群土器に伴なう可能性もある。太い沈線による綾杉文（第34図14）は寺脇貝塚などに類例があり、宮戸Ⅱb式には少なく加曽利ＢⅡ式の主たるモチーフである。

〔第Ⅱ群土器〕　Ⅱa・Ⅱb類は資料的にきわめて少なく、ＳＫ6・8やＳＴ３の覆土下層などから出土している。磨消縄文手法による初源的な入組文ないし弧線連結文をもつⅡａ類のうち、縦長の１個の貼瘤をもつものは関東地方の曽谷式に近いものであるが、Ⅱａ類の貼瘤は小円形のもの（第22図２・３）が多く、その内容は安孫子昭二氏論文（昭和44年）の貼瘤文土器第１段階に類似する。

２条の平行沈線による貼瘤が多用された入組文ないし弧線連結文をもつⅡb類のうち、みみずばれ状の隆起線文をもつもの（第37図９）は、東北南半で新地式と呼ばれているものである。Ⅱa類とⅡb類の量的な関係は不明である。曲線的な細い刷毛目文をもつⅡc類は、Ⅰ～Ⅲ群に伴出するがとくにⅡ群土器に多い。Ⅱb類は県内で山形市大森遺跡に好例がある。

〔第Ⅲ群土器〕　Ⅲa類の磨消縄文手法を伴なう入組文（第34図６）や弧線連結文（第20図２）は、東北南半では宮戸Ⅲa式ないし安孫子論文の第Ⅱ段階に比定できるものである。

Ⅲｂ類の貼瘤をもつ直線的な磨消縄文（第23図18）は、宮戸Ⅲa式にも類例があるが、関東地方の安行Ⅰ式に近い様相を示す。その量的関係は不明である。Ⅲa・Ⅲb類はＳＴ3の覆土下層やＳＫ６・13などから少数発見されている。県内では高畠町上平柳Ａ遺跡から好資料が発見されいる。

〔第Ⅳ群土器〕　Ⅳ群土器は先端の細い棒状工具の刻目による入組文ないし弧線連結文を特徴とするものである。刻目の間隔の比較的大きいⅣa類（第18図12）と狭いⅣb類（第18図13）に分れるが基本的には同じものである。縦や横に刻目をもつ貼瘤が多用されることから、東北南半では金剛寺式に属するものであるが、具体的な内容は安孫子論文の第Ⅲ段階により類似する。３号住居跡の覆土や土壙群から多く出土している。

〔第Ⅴ群土器〕　ほとんどの遺構内から出土しているが、とくにＳＫ６・８からまとまった資料が出土している。先端の角張る箆状工具による刻目文をもつⅤａ類は磨消縄文手法による弧線連結文と組み合わさる例（第33図２）もあり、刻目文の中ではⅣ群土器に後続するものである。三又状陰刻を伴なう磨消手法の入組文Ⅴｂ類（第34図10）は、東北地方南半の宮戸Ⅲｂ式に比定できる、Ⅴａ類も含めた組合せは安孫子論文の貼瘤土器第Ⅳ段階により合致した内容を示す。

磨消縄文による入組文に眼鏡状の張瘤突起を伴なうものⅤc類（第34図15）は、東北地方よりは関東地方の安行Ⅱ式に近似性をもつ。口縁部に連続した刻目をもつ貼瘤を有するもの（第23図７・８）も同様である。Ⅰ～Ⅴ群土器は縄文時代後期に位置付けられる。

〔第Ⅵ群土器〕　三叉文を主とする土器群で、ＳＴ１・３や土壙内から出土している。玉抱き三叉文などが磨消縄文とあわせて用いられるⅥａ類（第41図19）は縄文時代晩期大洞Ｂ式に相当するが、細分して大洞B_1式とよばれている土器である。磨消縄文を伴なわない沈線のみによる三叉文等を有するⅥb類は大洞Ｂ式のうち細分した場合のB_1Ｂ式いづれにも存在するが、的場遺跡の場合は魚眼状文（第41図20）など古い様相をもつものが多い。

〔第Ⅶ群土器〕　羊歯状文を主とする土器群で、ＳＴ１・３・ＳＫ１や包含層中に少量認められる。羊歯状文を有するⅦa類（第38図10）沈線によるＫ字文等を有するⅦb類（第38図14）二つとも大洞Ｂ－Ｃ式に比定される。

〔第Ⅸ群土器〕　Ⅶa類のＫ字状文等が縦横にのびた磨消縄文手法による雲形文を主とする土器群で、１・３・４、ＳＫ１および包含層中から少量出土している。口頸部に２～３条の平行沈線と浮彫的な刻目をもつⅩⅢa類（第38図21）、ⅩⅢa類の体部に雲形文をもつⅩⅢb類（第38図24）両方とも大洞C_1式に比定される。

〔第Ⅸ群土器〕　磨消縄文手法による直線化した雲形文を有する土器群で、ＳＴ１・３・４、ＳＫ５・13および包含層からやや多く出土している。３～５条の平行沈線文および

平行沈線の一部に連続した刻目を有するⅨa類(第38図28)・Ⅸa類の体部に直線的な雲形文（第38図29）ないし沈線文（第41図31）を有するものは大洞C 2式に比定される。後述のⅩ群土器は大洞C2式のうち新しい様相をもつものであり、その意味でⅨ群土器は大洞C2式の古い様相をもつものといえる。

〔第Ⅹ群土器〕　磨消縄文をもつ工字文を主とする土器群でＳＴ３・４からもっとも多く出土している。Ⅹa~-Ⅹc類までを含めた土器の量は各土器群の中でもっとも多い。磨消縄文と伴う工字文を体部に有する鉢および壺形土器(第16図１)のⅩa類と口唇部に刻目をもち頸部に平行沈線が施されているⅩc類の一部は従来大洞C 2式として一括されてきた。しかし岩手県九年橋遺跡ではⅩ群土器を主としてⅨ・Ⅺ群土器を伴なう良好な資料が発見されており、ＳＴ３の時期とも関連してこの土器群は再検討を要する。

東北地方南半における大洞C 2式期のまとまった報告は少ないが、宮城県老ケ崎遺跡では当該期の比較的良好な資料が出土している。老ケ崎遺跡で主体を占めるのはⅨ群土器で、これにⅩ群土器が少量伴っている。Ⅹ群土器の内でもⅩb類はみられず、Ⅹa・Ⅹc類のみである。また新潟県朝日遺跡では大洞C 1・C 2式期のまとまった遺物が出土しているが、Ⅹa類がみられず、Ⅹb・Ⅹc類が少量存在する。限られた資料であるが大洞C式期のうちⅨ群土器とⅩ群土器が分離できる可能性を示しているといえよう。ただⅩ群土器はまだ新しい土器型式の設定までには至らず、大洞C式期の中で比較的新しい様相をもったまとまりの段階である。

〔第Ⅺ群土器〕　浮彫手法による直線的な工字文を有する土器群で、出土量はⅩ群土器についで多い。浮線による直線的な工字文を体部に有するⅩa類（第７図4、第17図２）、浮線による直線的な工字文ないし平行沈線文をｂ縁部に有するⅩb類（第７図5）は大洞Ａ式に比定できる。口縁部が幅広く研磨され、体部に結節回転縄文を有する甕形土器Ⅺｃ類も大洞Ａ式を中心にする。

〔第Ⅻ群土器〕　変形工字文を有するものを主とする土器群で、ＳＴ１と包含層中から少量出土している。抉り手法による２個の瘤を有する変形工字文のⅫa類（第９図22)、瘤を持たない変形工字文を有するⅫb類（第8図23）は大洞Ａ′式に比定できる。第22図33はさらに時期が下る可能性を持つ。Ⅻc類とした口唇部に縄文を有する甕形土器も大洞Ａ′式期に属する。

ｂ．土製品

本遺跡出土の土製品は耳柱、土錘、土版、土偶等で多種にわたる。それぞれの個数は多くないが、耳栓の出土数が多く目立つ。

耳栓は、包含層出土のものと遺構出土のものを一括して分析すると、形態的に６類に分

類することができる。ａ類（第７図８、第17図７、第36図２・３）は、所謂環状耳栓の類で今回の出土例中ではもっとも多い。断面は偏平で、うすく中央部で「く」の字状に弯曲するものである。黒色処理を施したものも散見され、表面は研磨されている。ｂ類（第17図６、第７図６・７）は環状耳栓の類で、径７㎝程の大形のものである。断面は、上縁が平坦で厚く、下縁で薄くなり、側縁でゆるく外側に弯曲する。表面は研磨されている。文様装飾をもたない素環のものと、この時期特有の玉抱き三叉文を上縁の平坦部に陰刻したものとがある。四単位の文様が全周するものとみられる。ｃ類（第17図７）は環状耳栓である。ゆるく外側に弯曲する上縁部に三叉文を施し、上縁内側に段をもつものである。ｄ類（第30図７、第43図２）は滑車形の耳栓である。上縁に平坦面をもたず断面は比較的薄い。側縁がゆるく外側に弯曲し、上・下縁が丸くふくれて縁をなすものである。ｅ類（第30図６）は上・下縁とも平坦で、上縁に文様が施されている。断面は厚く、側縁は直線的である。ｆ類（第30図２）は唯一の完形品である。断面中央部で凹んだ滑車形を呈する耳栓で、表面の外縁に４個の玉抱き三叉文が陰刻されている。以上の６類のうちｃ類およびｅ類は晩期初頭大洞Ｂ式期のものと想定され、他は後期末葉~-晩期初頭のものと推定される。

土偶は６点のみの出土で、すべて破片である。胴部片１点の他は肩部・腕部である。そのため全体をうかがうに不充分である。偏平な断面のものが多く、肩部より直角的に短かい腕部がつくものが多い。資料的に断片的であるため、時期を明確にし難い。

Ｃ　石　器

本遺跡出土の石器群は、縄文時代後期中葉から晩期末までの長い期間にわたって製作・使用・遺棄・廃棄されたもので、特定時期の特定集団によって遺された一括遺物ではない。また、おのおのの所属時期を明確にし得るものはほとんどなく、土器型式に見合う器種構成や、その量的割合、そして各器種の形態的変遷等については、明らかにできなかった。このように資料的限界性をもつ石器は、個々の内包的属性（機能・形態・製作技法等）の追及による分類をすすめざるを得ない。本来、石器の分類はその内包的属性を総合的に把握したうえでなされるべきであるが、すでに研究者の間で共有されている慣例的な器種名をもつ石器でさえ、その分類基準はきわめて不十分である。このような状況のなかで、それらの器種名を安易に適用することは問題があろう。しかし、本書では、出土石器の各器種の形態・製作技法・機能について個別に検討し再編することは、時間的制約により不可能であるため、それらの器種名を踏襲した。その結果、分類基準について精粗が生じたことも否めない。この点については今後の課題としたい。

打製石器 338点を分類した結果と所見を以下に述べる。石鏃（Ⅰ）と石錐（Ⅱ）は各類の間で、とくに量的に多いということはない。石匙（Ⅲ）は各類とも他の縄文晩期の遺跡

と同様、縄文前期のものに比較してラフなつくりのものが多い。ＳＫ８出土のａ類の石匙は、後期後半の土器を伴うとはいっても特異な印象をうける。元来、「つまみ」のある石器を総称して「石匙」と呼んでいるが、その「つまみ」以外の部位に注目すると、刃部の加工方法や刃角に大きな差異がある。刃角の急斜なもの（第44図28等）、刃角の緩斜なもの（第24図13・14等）、一次剥離面の鋭い刃部をもつもの(第10図４第)などである。このようなありかたは、ａ~ｃ類に共通しており、機能はそれぞれ異なったものであることがうかがえる。したがってこれらは、将来的には、数器種に分割されるべきものと思われる。

石箆（Ⅳ）は、先端部のつくりだしで、ａ~ｅの５類に分類した。このなかでもｄ類としたものは、「トランシェ様石器」（富樫：1976)や「直刃式片刃打製石斧」(鈴木：1977）としてすでに独立した器種として扱われているものに類似するが、やや小振りで刃角が小さい。本類に類似するものとして、北海道札刈遺跡（野村他：1974）の箆状石器ｂ類と分類されたものの一部（ｐ89No.９）がある。縄文時代の後晩期には両面とも見事に仕上げられた石槍はなくなるが、ラフなつくりの尖頭状の石器がある。本遺跡も例外ではなく側面観がジグザグした尖頭状の石器（Ⅴ）がある。この器種には折損する例が多い。

両面加工石器（Ⅵ）の中には、両面加工石器である石箆等の製作段階のものもあると思われるが、それを分離することは困難である。したがって、他遺跡での類例の探索や、使用痕の観察等今後検討すべき点が多く、それらの作業を経た後で適格な名称をつける必要がある。このような意味で「両面加工石器」は仮称である。スクレーパー（Ⅶ）のなかでは、剥片の一部に抉りを入れるノッチドゥスクレーパーが多い。この種の石器は、量的には多いにもかかわらず、検討されることが少なかったものである。打製石斧（Ⅷ）は１点のみの出土である。加工痕ある剥片（Ⅸ）、使用痕ある剥片（Ⅹ）は、器種としての分類からははずされるべきものかもしれない。

磨製石斧は、ＳＫ６出土の１点以外はすべて包含層出土である。形態的にａ~ｄ類の４類に分類された。多くが破損品であるが、ｄ類とした小形石斧は、機態的にもａ~ｃ類とは異質のもので、材質は碧玉で、斧としての使用痕らしき形跡は認められず、一種の装身具として用いられた可能性があると思われる。

磨石はａ類~ｅ類まで５類に分類された。特にａ類、ｃ類に著しい磨擦痕をもつものが多く凹石へ転用したものもある。とくにｃ類では、磨石→凹石といったパターンが認められる。また磨石の縁辺に朱の付着したものがあり、今回の調査では、１点のみの出土であったが、石皿の表面にも朱の付着が認められた、両者をセットして朱の粉末処理を行ったものと考えられる。

石冠は、ＳＴ３より３点出土している。形態的には３例とも異なるが、いずれも底面に

研磨、敲打痕を残している。とくに第27図８は、円礫に凹刻して握りを作り出しただけのもので、底面に著しい敲打痕が認められる。所謂広義の石冠の中で、本例は、利器としての磨石、石杵的な機能を有したものと推則される。

これら磨製石器の時期は包含層出土のものが多く不明である。ＳＴ３Ｆ４(床面近く）から出土した石冠３例はⅩ群土器縄文時代晩期大洞C_2式の新しいほうの時期と考えられる。

ｄ．石製品

本調査で得られた石製品は、種類、量とも多く、石棒、石刀、独鈷石、岩偶、岩版、石製装身具、円盤状石製品などがある。石棒、石刀には異った地点より出土しているものが接合する例があり、石刀の多くは、片刃でそりを持ち、刃こぼれ状の使用痕は認められない。すべて破損品で石棒も小形化の傾向にある。即ち、実用の利器としてではなく、意図的に破損、投棄されたような形跡を示している。円盤状石製品は、包含層、土拡、住居跡などから出土しているが、１点はＳＴ３のＥＵ１内より出土している。縄文後晩期にみられる石製円盤と同一のものである。岩版は断面が偏平で、上縁は平坦である。上縁近くに両面穿孔による一孔を有するもので、文様的には三又状の陰刻があり、その陰刻で画された凸部に浅い円形の陰刻を持つものである。時期的には、晩期初頭、大洞Ｂ式に含まれるものと考えられる。今回の調査で得られた石製品は、包含層出土のものが多く時期的に判然としないが、いずれも縄文後期末~晩期に位置付けられるものと考えられる。

遺　構

約186m²の精査区域より検出された遺構は、竪穴式住居跡３棟、土壙14基である。今回の精査区域は、舌状に張り出した遺物包含層分布地域の南端に位置しており、遺跡の範囲は、さらに北側の農業構造改善事業区域外にも広がるものとみられる。

これらの遺構は、出土遺物により表４のような時期的なあり方を示す。Ⅰ~Ⅻまでの土器群は、前節の分析により他遺跡との比較において、表５のようなあり方を示す。全体として時期的には、縄文時代後期中葉から晩期末葉までにあたる。

３棟の住居跡は、すべて縄文時代晩期後半に位置し、ＳＴ１は大洞Ａ~Ａ′式期、ＳＴ３は大洞C_2式期後半、ＳＴ４は大洞C_2式期に比定できる。土壙群は、縄文後期後半より晩期後半までの多様な時期幅をもつ。ＳＫ13は縄文後期安孫子論文の第Ⅱ段階、ＳＫ３・８・10は第Ⅲ段階、ＳＫ２・６は第Ⅳ段階、ＳＫ４・９・10は晩期大洞Ｂ式期、ＳＫ１は大洞C_1式期、ＳＫ５は大洞C_2式期頃に、それぞれ比定できる。したがって土壙群は、主として後期中葉より晩期初頭にかけて存在し、それを切って各住居跡が晩期後半に営まれたこと

がわかる。

住居跡の平面形は、ＳＴ１が長径8.2mの楕円形、ＳＴ３が最大径10.2mの略円形、ＳＴ4が径6.9mの円形を呈する。いづれも縄文時代の住居跡としては規模の大きい方である。周溝は、ＳＴ１が幅30~50cm・深さ（床面からの一以下略）18cm、ＳＴ３が幅35~53cm・深さ45~50cm、ＳＴ４が幅25~43cm・深さ20cmを測る。とくにＳＴ３の周溝は、南西部で２つに分れ、外側のものには壁柱穴とみられる小穴群がみとめられた。炉跡は、ＳＴ３のほぼ中央に長径1.6mの楕円形石組炉、北側に径60cmの円形石組炉が検出されている。ＳＴ１・４にはみとめられなかった。ＳＴ１東側で検出された焼土は、炉とは断定し難い。

３棟の住居跡は、重複関係・出土遺物の検討から、ＳＴ４ → ＳＴ３ → ＳＴ１の順に構築されたものとみられる。各々の時期は、大洞Ｃ$_2$式期 → 大洞Ｃ$_2$式期後半 → 大洞Ａ~Ａ′式期に比定される。

ＳＴ３北西部で検出した３基の埋設土器は、各々の土器に炭化物が付着していることから、煮沸用の土器を二次的に転用し、体部下半を欠いた上で数個くみ合わせたものとみられる。ＥＵ１・２は、ＳＴ３の床面を10cm程度掘りくぼめた掘り方をもち、ＥＵ１は下半を河原石で囲っている。ＥＵ３は、周溝内にたてかけられている。検出状況からは、土器全体を土中に埋置したものではなく、大半を表面に露出させていたものとみられる。類例が少なく性格が明らかでないが、すべて体部下半を欠いていること、二~三重に土器をくみ合わせていることから、貯蔵用というよりは甕棺墓の一種とみるほうが妥当である。

ＳＴ１・３・４出土遺物の中に２例の接合資料がみられた。ＳＴ１の西壁直下より出土した石棒（ＲＱ69）とＳＴ３北壁寄りのＦ$_1$出土の石棒(ＲＱ48)、ＳＫ５内出土の石刀（ＲＱ99）とＳＴ４北壁寄りＦ$_1$出土の石刀(ＲＱ53)である（第　図）。これらはＳＴ１やＳＫ５に埋置する際に、完成品の一部を壊してすでに廃絶されたＳＴ３・４の窪地の覆土１層に人為的に投棄したか、あるいは自然的に流れ込んだものと考えられる。遺構の時期関係もこれに矛盾しない。

的場遺跡は、寒河江川流域における縄文後・晩期の遺跡の中心的位置を占めてきいる。

この時期の遺跡は、寒河川流域では全部で４遺跡確認されている。川沿いの見晴らしのよい段丘上の舌状微高地に位地にするが、本遺跡の他は、遺跡の範囲・時期はごく小さく限定されるようである。他の遺跡が未調査とはいえ、本遺跡の今回の調査における遺構・遺物のあり方は、それをうかがわせるに充分であろう。

本調査における最大の成果は、縄文晩期後半の３棟の住居跡を検出したことである。３棟とも一部分欠けているにしても明瞭に検出された。本県における縄文晩期の住居跡は、

遊佐町神矢田遺跡、羽黒町玉川遺跡、天童市矢口遺跡、高畠町上平柳遺跡、小国町朝篠遺跡など（表７）で発見されている。が、いずれも壁や周溝が明瞭でなく、平地式住居として理解されているものもあるほどである。しかし、東北地方においても青森県大森勝山遺跡や青森県源常平遺跡などのように、竪穴式住居跡の検出例もある。このことは、縄文時代晩期の各時期にわたって竪穴式住居跡が存在したことを裏付けている。この意味において本遺跡の３棟の住居跡は、貴重な資料を追加したことになるる。

本調査で得られた埋設土器は、一種の甕棺墓とみられる。本県では、羽黒町玉川遺跡の20数個体の甕棺（大洞Ｃ$_2$式期）、天童市矢口遺跡の合口甕棺（大洞Ｃ$_1$式期）が発見されている。体部下半を欠いた例は、玉川遺跡の数個がみとめられている。これもまた数少ない資料に類例を加えたことになる。

土壙群、接合資料など、以上の他にも遺構・遺物の点で得られた成果は貴重であるが、本書で充分に表わせなかった点も多い。それらについては今後の課題としたい。

的場遺跡の土器群別と土器型式編年対比表

表 5

的場遺跡	関東地方	東北一般	東北地方南部			東北地方北部
	岡本・戸沢①	安孫子昭二②	山内清男③	伊東信雄④	後藤勝彦⑤	磯崎正彦⑥
Ⅰ群土器	加曽利BⅡ 加曽利BⅢ			宝ケ峰	宮戸Ⅱb	十腰内Ⅲ
Ⅱ群土器	曽谷	第Ⅰ段階	新地		西ノ浜	十腰内Ⅳ
Ⅲ群土器	安行Ⅰ	第Ⅱ段階			宮戸Ⅲa	十腰内Ⅴ
Ⅳ群土器		第Ⅲ段階		金剛寺	宮戸Ⅲb	
	安行Ⅱ					
Ⅴ群土器		第Ⅳ段階				
Ⅵ群土器	安行Ⅲa		大洞 B1 大洞 B2			十腰内Ⅵ
Ⅶ群土器	姥山台		大洞B-C1 大洞B-C2			
Ⅷ群土器	安行Ⅲc		大洞 C1			
Ⅸ群土器	杉田Ⅱ		大洞 C2			
Ⅹ群土器						
Ⅺ群土器	千網		大洞 A1 大洞 A2			
Ⅻ群土器	荒海		大洞 A1			

表5 文献註

① 岡本勇・戸沢充則『縄文時代の発展と地域性 関東』日本の考古学Ⅱ 昭和40年

② 安孫子昭二・『東北地方における縄文後期後半の土器様式』石器時代9 昭和44年

③ 山内 清男『縄文土器』日本原始美術 昭和39年

④ 伊東 信雄『宮城県史Ⅰ 古代』宮城県 昭和31年

⑤ 後藤 勝彦『陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について』考古学雑誌48－1 昭和37年

⑥ 磯崎 正彦『十腰内遺跡』岩木山所収 昭和43年

東北地方晩期住居跡発見例

表 6

	住居跡名称・所在地	平面形	住居跡種類	長径×短径	周溝	柱穴(主柱穴)	壁高(平均)	炉跡	住居跡所属期
1	大森勝山(青森・弘前)	不整円形	竪穴	13.77×13.22m	有	(4)	56cm	有(中央)	大洞B～BC
2	源常平67住(〃・浪岡)	?	竪穴	?	無	96(?)	?	?	?
3	〃 70住(〃・〃)	円形	竪穴	9.84×9.60	無	97	20	有(中央)	大洞B
4	〃 71住(〃・〃)	円形	竪穴	6.84×6.80	無	50	16	?	〃
5	〃 74住(〃・〃)	?	竪穴	?	無	186	6	有(東寄)	大洞A
6	深郷田(〃・中里)	円形	竪穴	6.0× 5.3	有	38(5)		有	大洞B
7	松元(〃・浪岡)	?	竪穴	?	無	?	?	有(?)	大洞C1
8	どじの沢1住(岩手・岩手)	円形	竪穴	?	無	4(?)	?	有	大洞BC
9	〃 2住(〃・〃)	?	竪穴	?	無	?	?	有	大洞B
10	〃 3住(〃・〃)	円形	竪穴	?	無	7(?)	?	有	大洞BC
11	〃 4住(〃・〃)	?	竪穴	?	無	?	?	有	大洞C2
12	二月田(宮城・七ケ浜)	?	平地?	?	無	32(?)	?	有	大洞A(?)
13	的場1住(山形・西川)	楕円形	竪穴	8.5×4.4(?)	有	7	15	?	大洞A～A′
14	〃3住(〃・〃)	円形	竪穴	10.2× 9.4	有	20(6)	20	有(中央)	大洞C2
15	〃 4住(〃・〃)	円形	竪穴	6.9× 6.9	有	3	4	?	大同C2
16	王川1住(山形・羽黒)	楕円形(?)	平地?	5× 4(?)	無	9(?)	?	有(中央)	大洞B
17	〃 2住(〃・〃)	円形(?)	平地?	4.5 (?)	無	23(?)	?	有(中央)	大洞B
18	矢口1住(〃・天童)	隅丸方形(?)	平地?	4.5× 4(?)	無	7(?)	?	有(北寄)	大洞C1
19	〃 2住(〃・〃)	隅丸方形(?)	平地?	5× 4(?)	無	8(?)	?	有(西寄)	〃
20	〃 3住(〃・〃)	隅丸方形(?)	平地?	5.2×4.3(?)	無	6(?)	?	有(北寄)	〃
21	朝篠1住(〃・小国)	楕円形(?)	平地?	5× 4(?)	無	7(?)	?	有(南寄)	大洞BC～C1
22	〃 2住(〃・〃)	楕円形(?)	平地?	4.5～ 5(?)	無	12(?)	?	有(南寄)	大洞C2～A
23	神矢田1住(〃・遊佐)	円形(?)	平地?	6～ 7(?)	無	17(?)	?	有(中央)	後期末
24	〃 2住(〃・〃)	円形(?)	平地?	6.2 ～ (?)	無	10(?)	?	有(西寄)	晩期後半
25	上平柳1住(〃・高畠)		竪穴					有(中央)	大洞BC～C1
26	〃 2住(〃・〃)		竪穴					有(中央)	〃
27	八幡原№24.1住(〃・米沢)	不整円形	竪穴	3.4× 3.2	無	12(6)	20cm	無	大洞BC

出土土器遺構・層分類表

表 7

		1 層	2 層	3 層	4層層	周 溝	床 面	小 計
ST1	覆 土	953	256	93	156	138	138	1,596
	EP1	58	—	—	—	—	—	58
	EP2	56	—	—	—	—	—	56
	EP2	9	—	—	—	—	—	9
	EP4	16	1	—	—	—	—	17
ST3	覆 土	4,019	1,485	743	1,690	866	223	9,026
	E L	73	43	—	—	—	—	116
	EP1	42	—	—	—	—	—	42
	EP2	23	14	—	—	—	—	37
	EP3	69	24	—	—	—	—	93
	EP4	7	13	—	—	—	—	20
	EP5	11	32	—	—	—	—	43
	EP6	6	9	—	—	—	—	15
	EP7	72	68	—	—	—	—	140
	EP8		5	—	—	—	—	5
ST4	覆 土	819	109	—	—	114	—	1,042
	EP1	16	—	—	—	—	—	16
	EP2	5	—	—	—	—	—	5
	SK 1	66	—	—	—	—	—	66
	SK 2	16	—	—	—	—	—	16
	SK 3	35	—	—	—	—	—	35
	SK 4	45	—	—	—	—	—	45
	SK 5	105	—	—	—	—	—	105
	SK 6	67	456	—	—	—	—	523
	SK 8	106	453	67	148	—	—	774
	SK 9	16	—	—	—	—	—	16
	SK10	38	—	—	—	—	—	38
	SK11	132	12	0	—	—	—	144
	SK12	27	—	—	—	—	—	27
	SK13	39	48	—	—	—	—	87
	SK14	5	—	—	—	—	—	5
包 含 層		1,187	4,316	1,009	198	—	—	6,710
合 計		8,138	7,344	1 ,912	2,036	1,136	361	20,927

出土土製品・石製品・磨製石器計測表(1)

表 8

挿図番号	番号	出土地区	出土層位	遺物名称	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
11	1	ST1	F1	石棒		3.2	2.4	241	泥岩	有頭石棒ST3F1出土のものと同一個体
11	2	ST1	F1	両頭石斧	16.4	6.5	3.7			
11	4	ST1	F1	石刀		4.8	1.0		泥岩	片刃、先端部に刻みあり
11	7	ST1	F1			3.8	1.6		粘板岩	ST4F1出土のものと接合
48	6	ST1	F2	磨石				260	安山岩	a類
7	9	ST1	F1	土錘	3.3	2.5	2.1	14		小形
7	6	ST1	Y	耳栓		約7.0				ST1F1出土のものと接合
7	7	ST1	F1	耳栓		約8.0				
7	8	ST1	F1	耳栓		約7.0				
27	6	ST3	F3	石冠	7.4	10.2	5.0	390		完形
27	7	ST3	F3	石冠	6.4	7.9	5.1	405		完形
27	8	ST3	F3	石冠	7.0	5.1	6.1	265	花コウ岩	完形
27	1	ST3	F1	石棒		3.1			泥岩	断面円形、ST1F1出土のものと同一個体
27	3	ST3	F1	石刀		3.3	1.0			半欠品、片刃
27	7	ST3	F1	石刀		2.7				半欠品、片刃
17	9	ST3	F1	石刀		2.4	0.8		粘板岩	基部のみ
27	5	ST3	F3	石錘	8.2	5.7	4.0	202	安山岩	
27	2	ST3	F1	円盤状石製品		5.4	2.7	130		
27	4	ST3		円盤状石製品		6.6	2.0	140		
49	2	ST3	F1	磨石					花コウ岩	c類
49	4	ST3	F1	磨石				260	砂岩	a類
49	7	ST3		磨石				1,140		d類、周溝出土
49	8	ST3	F1	磨石				810	花コウ岩	b類
49	10	ST3	F1	磨石				640	花コウ岩	c類、縁に朱が付着
		ST3	F1	磨石				1,340	花コウ岩	e類、
49	3	ST3	F1	凹石				410		
49	5	ST3	Y	凹石				710		磨石の再利用品、磨石分類上のc類
49	6	ST3	F1	凹石				330		
49	1	ST3	F1	石皿					安山岩	半欠品
17	4	ST3		耳栓		約6.0				
17	5	ST3	D	耳栓		約7.0				

出土土製品・石製品・磨製石器計測表(2)

表 9

挿図番号	番号	出土地区	出土層位	遺物名称	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
17	6	ST3	F1	耳栓		約 6.0				
17	7	ST3	Y	耳栓		約 8.0				
17	8	ST3	F1	土偶						肩部破片
11	7	ST4	F1	石刀		3.8	1.6		粘板岩	ST1、EP5出土のものと接合
49	9	ST4	D	磨石				1,440	花コウ岩	
43	7	ST4	F1	耳栓		約 4.0				
30	1	SK6	F2	磨製石斧					流紋岩	c類、基部のみ
48	1	SK6	F1	磨石				640	花コウ岩	e類
36	4	SK6	F2	円盤状石製品		4.7	1.8	25		
30	2	SK6	F2	耳栓		4.1				完形品、表面に朱塗りされた形跡あり
30	3	SK6	F1	土偶						肩部破片、表面に朱塗りされた形跡あり
図版37		SK8	F4	磨石				300	花コウ岩	a類、縁に朱の付着あり
図版37		SK8		磨石				470	花コウ岩	c類
36	2	SK8	F4	耳栓		約 5.0				
36	3	SK8	F4	耳栓		約 7.0				内外面、黒色処理
47	1	包含層	I	磨製石斧				75		a類
47	2	包含層	I	磨製石斧						a類
47	3	包含層	II	磨製石斧				96		b類
47	5	包含層	I	磨製石斧				128		b類
47	6	包含層	II	磨製石斧	8.8	3.9	2.7	157		a類、完形品
47	8	包含層	II	磨製石斧	9.9	5.1	2.4	139		b類、完形品
47	9	包含層	I	磨製石斧						b類
47	10	包含層	II	磨製石斧				104		b類
47	11	包含層	II	磨製石斧				128	碧玉	c類
30	4	包含層	II	磨製石斧	3.9	2.4	0.9	12		d類、小形、完形
48	4	包含層	II	磨石				920		d類
48	5	包含層	II	磨石				640		a類
48	7	包含層	II	磨石				755		b類
48	8	包含層	II	磨石				350		a類
48	9	包含層	II	磨石				340		a類
48	11	包含層	II	磨石				430		e類

出土土製品・石製品・磨製石器計測表(3)

表 10

挿図番号	番号	出土地区	出土層位	遺物名称	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
48	3	包含層	II	凹石				490		
48	10	包含層	II	凹石				350		
48	13	包含層	I	凹石				260		
49	3	包含層	II	凹石				300		
47	7	包含層	I	石棒	2.9			42		半欠品
47	4	包含層	II	石刀	2.5	1.3			緑泥片岩	端部破片
47	12	包含層	II	石刀	2.8	1.0			粘板岩	端部破片
47	13	包含層	II	石刀	2.5					半欠品、一端を面取り、片刃
47	14	包含層	II	独銛石	2.6	2.5		123		
43	6	包含層	I	岩偶	2.5	1.8		41		岩偶、線刻有り
30	5	包含層		岩版						表採品
11	3	包含層	II	石錘	5.4	2.2		70		長軸方向に擦込あり。
43	4	包含層		石錘					緑泥片岩	石刀破片の再利用品
30	8	包含層	II	石製装身具	3.3	0.6		4		板状、中央部に穿孔あり
48	12	包含層	II	円盤状石製品	6.1	2.1		92		
43	2	包含層	II	耳栓	約 7.0					
43	3	包含層	II	土偶						脚部破片
43	5	包含層	I	土偶						体部破片
43	8	包含層	I	土偶						肩部破片

出土石器一覧表（1）

表 11

種類 / 遺構・地区・層位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ a	b	c	d	e	f	石核	Ⅻ	XIII	合計
ST1 F1			1	2	2	6	5		7	1	4	6	55	11	110	167	53			430
F2		1										2	4	2	10	24				43
Y												2	8		17	19	2		1	49
EP1							1						4		1	4				10
EP2													3		4	4				11
EP3														2	5	7				14
EP4							1			1					3	4				9
EP5																	1			1
ST3 F1	2		4	3	3	10	12		17	5		22	73	62	260	357	71		3	904
F2、3		1		3	4	3	22		20	5	4	22	55	58	188	161	71			617
Y							2	1				3	10	4	24	26	5			75
D				1			1				1	8	17	11	49	62	15		2	167
EL1 F1															3					3
EL1 F2													4		6	4				14
EP1 F1							1		2				2		3	2	1			11
EP2 F1											1	2	3		1	1				8
F2															1	9				10
EP3 F1					1									1	2	3	1			8
F2													2	2	2	5				11
EP6 F1													1							1
F2												1								1
EP7 F1									1			1	3	2	3	7	2			19
F2														1	2					3
EP9 F1						1						2			4	1				8
EP10 F1															1	2				3
ST4 F1	1	1		1	1	2		6	1	2	5	37	19	85	171	60				392
F2											1	1	1	8	10					21
EP1														1	2					3
D			1																1	2
SK1 F1											1	2	1	5	18	2				29
SK2 F1												1	2	2	9	1				15
SK3 F1												2	1	1	3					7
F2												1	2	1	16	1				21
ST4 F1												2	3	8	6	6				25
SK5 F1												2		4	4	2				12
F2																				
SK6 F1											3	6	6	50	57	7			1	130
F2		1																1		2

出土石器一覧表（2）

表 12

種類 / 遺構・地区・層位	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ a	b	c	d	e	f	石核	Ⅻ	XIII	合計
SK8 F1													4	3	8	16	4			35
F2			1			1						2	19	3	32	53	14		1	126
F3															2	4	1			7
F4				1			1						4	3	11	21	6		1	48
SK9 F1						1								1	9	19				30
SK10 F1															7	11				18
F2		1													1					2
SK11 F1	1														1	3			1	6
SK12 F1													1		5	8			1	15
SK13 F1	1					1							1		1	6	1			11
F2																1				1
SK14																				
Ⅰ区 Ⅰ														1	2	1	1			5
Ⅱ区 Ⅰ	5	5	5	1	6	11	7		4		3	42	143	163	556	890	156	2	1	2000
Ⅲ区 Ⅰ				1	1				1				1	7	8	37	5			61
Ⅳ区 Ⅰ															3	3				6
Ⅴ区 Ⅰ														1	6	11	1			19
Ⅰ区 Ⅱ													1		1	6				8
Ⅱ区 Ⅱ	3	3	8	9	4	8	17		11	3		47	151	148	554	1189	214	6	6	2381
Ⅲ区 Ⅱ						1	2		2		1	13	18	32	76	241	50		1	437
Ⅳ区 Ⅱ							3					5	26	6	51	126	35			252
Ⅴ区 Ⅱ	1		1		1							1	3	1	10	35	5	1		59
Ⅱ区 Ⅲ	6	2		4	2	1			1			7	35	33	94	240	17			442
Ⅳ区 Ⅲ	1																			1
Ⅴ区 Ⅲ	1			1								1	3		6	7	1			20
Ⅱ区 Ⅳ		1																		1
Ⅴ区 Ⅳ						1						1		1	3	7				13
不明	3	3	1	4			4		1											16
				31																
総計	30	19	22	31	25	47	79	7	68	24	24	244	689	724	2443	3883	733	10	20	9115

出土石器計測表（1）

表 13

挿図番号	石器番号	土地区区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
44・1		Ⅱ−15T	Ⅱ	Ⅰa	43.4	11.2	4.5	1.4	頁岩	
24・1	41	ST3	F1	Ⅰa	33.0	14.6	5.4	1.6	頁岩	
		Ⅱ−10T	Ⅰ	Ⅰa	(25.3)	(13.9)	(4.9)	(1.3)	頁岩	
44・2		不明		Ⅰa	27.4	11.1	5.4	1.2	頁岩	アスファルト付着
44・4	12	Ⅳ−5T	Ⅲ	Ⅰb	(25.6)	(15.2)	(5.7)	(1.7)	鉄石英	
44・3		Ⅱ−15T	Ⅰ	Ⅰb	27.8	13.7	4.7	1.3	頁岩	
44・5	80	Ⅱ−16R	Ⅰ	Ⅰc	30.7	11.5	6.6	2.1	頁岩	
44・6	27	不明		Ⅰc	36.6	15.1	8.5	3.6	頁岩	
	9	Ⅱ−20T	Ⅲ	Ⅰd	23.7	10.8	4.3	0.8	頁岩	
44・8	4	Ⅱ−15T	Ⅲ	Ⅰd	19.3	12.2	4.5	0.7	頁岩	
44・7		Ⅱ−20T	Ⅰ	Ⅰd	18.6	10.7	3.6	0.7	頁岩	
	56	不明		Ⅰd	21.8	13.8	4.5	0.8	玉髄	
44・9	10	V−10T	Ⅱ	Ⅰe	34.3	9.0	5.6	1.4	頁岩	
24・2		ST3	F1	Ⅰe	30.8	11.0	4.8	1.6	頁岩	
36・7	36	SK11	F2	Ⅰf	(33.4)	(15.3)	(5.8)	(2.2)	頁岩	
44・10	14	Ⅱ−20T	Ⅲ	Ⅰf	(38.8)	(20.8)	(4.1)	(3.0)	頁岩	
44・11	65	Ⅱ−12N	Ⅲ	Ⅰg	29.2	16.9	4.2	1.6	玉髄	
44・12	40	Ⅱ−12O	Ⅲ	Ⅰg	23.2	14.2	3.5	0.6	鉄石英	
44・13	82	Ⅱ−16R	Ⅰ	Ⅰx	33.3	12.7	4.8	2.1	頁岩	
		Ⅱ−20T	Ⅲ	Ⅰx	34.0	17.6	7.4	4.2	頁岩	
36・6		SK13	F1	Ⅰx	31.7	14.7	6.3	2.7	頁岩	
44・14		Ⅱ−10L	Ⅱ	Ⅰx	31.2	15.3	5.6	1.6	頁岩	
10・8		ST4	F1	Ⅰx	35.9	24.7	12.2	7.3	頁岩	
		Ⅱ−14P	Ⅰ	Ⅰx	28.6	15.2	8.6	3.2	瑪瑙	
		Ⅱ−14O	Ⅱ	Ⅰx	33.2	21.9	9.0	5.4	珪岩	
36・5	95	SK6	F2	Ⅱa	30.9	7.7	6.4	1.5	頁岩	
44・16	29	Ⅱ−16O	Ⅱ	Ⅱb	24.3	9.7	5.6	1.0	頁岩	
44・15	93	Ⅱ−15S	Ⅳ	Ⅱb	(28.8)	(10.7)	(5.8)	(1.3)	頁岩	
44・17	32	不明		Ⅱb	19.9	8.6	5.1	0.7	頁岩	
10・9	64	ST4	F1	Ⅱc	(21.0)	(27.7)	(7.9)	(2.4)	頁岩	
44・19	84	Ⅱ−16Q	Ⅰ	Ⅱc	35.0	39.5	10.3	8.3	頁岩	

出土石器計測表（2）

表 14

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
44・18	15	Ⅱ−20L	Ⅲ	Ⅱc	(30.9)	(6.5)	(4.4)	(0.8)	頁岩	
		Ⅱ−20T	Ⅰ	Ⅱd	35.7	10.1	3.9	1.8	頁岩	
44・20	72	Ⅱ−15P	Ⅱ	Ⅱd	38.0	11.6	6.5	2.8	頁岩	
44・21		Ⅱ−20T	Ⅰ	Ⅱd	36.5	9.9	5.5	2.0	頁岩	
		不明		Ⅱd	10.8	8.7	5.1	0.8	頁岩	
44・22		Ⅱ−15T	Ⅰ	Ⅱe	53.8	39.0	13.8	19.5	頁岩	
44・23		不明		Ⅱe	21.8	16.0	3.8	1.0	頁岩	
36・8	31	SK10	F2	Ⅱf	49.5	21.7	8.8	6.3	頁岩	
44・24		Ⅱ−20T	Ⅰ	Ⅱf	40.3	20.7	7.4	5.4	頁岩	
		Ⅱ−5M	Ⅲ	Ⅱx	38.6	34.3	15.0	13.5	頁岩	
		Ⅱ−10T	Ⅱ	Ⅱx	23.1	19.6	6.5	2.2	頁岩	
25・7		ST3	F2	Ⅱx	34.7	19.9	5.2	3.4	頁岩	
10・1		ST1	F2	Ⅱx	48.0	50.4	19.3	22.5	頁岩	
44・26		Ⅱ−15R	Ⅱ	Ⅲa	78.3	41.7	17.3	41.8	頁岩	
24・13	51	ST3	F1	Ⅲa	95.0	38.4	10.5	34.2	頁岩	
10・2		ST1	F1	Ⅲa	61.1	26.8	7.0	9.4	頁岩	
24・15		ST3	F1	Ⅲa	68.4	27.3	8.4	10.8	頁岩	
10・10		ST4	D	Ⅲa	78.1	32.4	11.7	23.1	頁岩	
		Ⅱ−9M	Ⅰ	Ⅲa	37.7	26.0	6.2	4.3	頁岩	
		Ⅱ−17N	Ⅱ	Ⅲa	34.8	14.9	5.3	2.4	頁岩	
44・27	75	Ⅱ−15R	Ⅰ	Ⅲa	80.1	40.0	12.4	41.5	頁岩	
44・25	3	Ⅱ−15T	Ⅱ	Ⅲa	39.9	24.5	3.4	3.2	頁岩	
36・9		SK8	F2	Ⅲa	73.6	27.5	7.4	12.4	頁岩	
		V−5O	Ⅱ	Ⅲb	30.6	60.3	10.1	13.0	頁岩	
44・28		Ⅱ−14O	Ⅱ	Ⅲb	32.2	47.4	7.6	8.2	頁岩	
24・14	66	ST3	F1	Ⅲb	39.4	58.6	7.7	12.3	頁岩	
	83	Ⅱ−16R	Ⅰ	Ⅲb	33.7	34.0	10.0	8.4	頁岩	
24・12		ST3EP1	F1	Ⅲc	55.4	63.8	10.0	25.8	頁岩	
		Ⅱ−10T	Ⅰ	Ⅲc	47.8	43.1	6.0	9.8	頁岩	
44・30	73	Ⅱ−14P	Ⅱ	Ⅲc	51.5	66.7	10.9	28.1	頁岩	
		Ⅱ−20T	Ⅰ	Ⅲc	45.8	52.7	9.8	17.3	頁岩	

出土石器計測表（3）

表 15

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
	33	Ⅱ－12M	Ⅱ	Ⅲc	45.2	58.4	10.6	24.3	玉髄	
10-14	43	ST3	F1	Ⅲc	50.3	70.1	8.5	17.8	頁岩	
	77	不明		Ⅲc	42.7	52.6	8.0	15.0	頁岩	
44-29		Ⅱ－17M	Ⅱ	Ⅲc	41.0	41.8	11.3	15.5	頁岩	
	68	Ⅱ－12M	Ⅱ	Ⅲx	73.2	43.3	9.8	32.4	頁岩	
45-2	13	Ⅱ－20T	Ⅲ	Ⅳa	55.7	23.6	11.4	16.0	頁岩	
45-1		Ⅱ－17S	Ⅱ	Ⅳa	60.0	24.1	14.9	20.8	頁岩	
10-3		ST1	F1	Ⅳa	72.0	31.7	14.4	30.5	頁岩	
25-2		ST3	F3	Ⅳa	85.9	26.2	15.8	30.4	頁岩	
24-4	47	ST3	F1	Ⅳa	77.6	27.6	13.7	28.2	頁岩	
25-11		ST3	D	Ⅳa	80.3	26.0	16.7	32.6	頁岩	
45-9	17	Ⅲ－10K	Ⅰ	Ⅳb	50.1	28.0	10.8	20.8	頁岩	
45-4	7	Ⅱ－20T	Ⅲ	Ⅳb	80.3	24.8	14.9	28.4	頁岩	
45-6	30	Ⅱ－12M	Ⅱ	Ⅳb	70.8	26.9	15.7	31.2	頁岩	
45-3	16	Ⅱ－20L	Ⅲ	Ⅳb	59.7	23.4	11.1	15.0	頁岩	
45-7		Ⅱ－11L	Ⅱ	Ⅳb	61.3	28.4	8.7	18.3	頁岩	
25-1		ST3	F23	Ⅳb	46.7	25.3	12.6	15.2	頁岩	
		Ⅱ－14S	Ⅱ	Ⅳb	58.5	29.9	10.7	18.1	頁岩	
45-8		Ⅱ－15O	Ⅱ	Ⅳb	48.2	29.5	11.5	11.7	頁岩	
45-5		不明		Ⅳb	87.8	50.0	15.8	53.0	頁岩	
45-14		Ⅱ－9L	Ⅰ	Ⅳc	(70.0)	(39.2)	(20.0)	(48.1)	頁岩	
24-3		ST3	F1	Ⅳc	68.0	48.0	15.1	42.2	頁岩	
24-5		ST3	F1	Ⅳc	66.5	40.0	16.4	37.0	頁岩	
45-12	2	Ⅱ－15T	Ⅱ	Ⅳc	77.9	35.3	20.7	55.4	頁岩	
		ST1	F1	Ⅳc	48.3	20.5	10.1	10.5	頁岩	
45-11		Ⅱ－15S	Ⅱ	Ⅳd	52.0	19.5	10.4	9.0	頁岩	
45-10		Ⅱ－11O	Ⅲ	Ⅳd	53.4	27.9	14.4	18.7	頁岩	
45-13		Ⅱ－12N	Ⅱ	Ⅳd	66.9	28.1	16.8	27.8	頁岩	
10-11		ST4	F1	Ⅳd	68.0	38.4	16.9	30.3	頁岩	
		Ⅱ－15O	Ⅱ	Ⅳd	61.7	27.1	12.8	19.8	頁岩	
		Ⅱ－13L	Ⅱ	Ⅳd	48.8	19.5	11.8	10.6	頁岩	

出土石器計測表（4）

表 16

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
36-10		SK8	F4	Ⅳe	49.4	29.4	11.5	12.0	頁岩	
		V－5O	Ⅲ	Ⅳx	56.0	25.8	12.5	20.2	頁岩	
		Ⅱ－15P	Ⅱ	Ⅳx	68.0	32.6	15.1	24.6	頁岩	
24-6		ST3 EP3	F1	Ⅴa	54.1	29.0	8.7	14.4	頁岩	
		Ⅱ－13R	Ⅰ	Ⅴa	39.1	16.0	9.4	4.9	頁岩	
46-3	1	Ⅱ－5M	Ⅱ	Ⅴa	62.2	30.9	11.3	17.6	頁岩	
	28	Ⅱ－17O	Ⅱ	Ⅴa	56.1	23.7	9.3	13.8	頁岩	
46-1		Ⅱ－20T	Ⅰ	Ⅴa	64.3	20.8	10.7	13.5	頁岩	
		Ⅱ－5T	Ⅰ	Ⅴa	65.6	30.2	19.1	21.5	頁岩	
		ST1	F1	Ⅴb	66.1	32.2	8.6	16.0	頁岩	
		ST1	F1	Ⅴb	60.3	47.5	15.4	33.1	頁岩	
		ST3	F1	Ⅴb	55.5	39.2	12.4	20.8	頁岩	
46-4		Ⅱ－13L	Ⅱ	Ⅴx	60.2	28.0	7.3	13.1	頁岩	
24-7		ST3	F1	Ⅴx	(32.5)	(23.3)	(7.7)	(4.8)	頁岩	
25-4		ST3	F23	Ⅴx	(32.8)	(21.7)	(6.2)	(4.3)	頁岩	
25-3		ST3	F23	Ⅴx	66.4	28.3	11.8	19.9	頁岩	
46-2		Ⅱ－20T	Ⅰ	Ⅴx	71.6	23.5	11.4	16.0	頁岩	
		Ⅴ－10J	Ⅱ	Ⅴx	48.5	26.1	13.9	17.4	頁岩	
		Ⅱ－14L	Ⅲ	Ⅴx	(24.4)	(23.5)	(7.7)	(4.1)	頁岩	
		Ⅱ－14L	Ⅲ	Ⅴx	(29.1)	(27.0)	(9.8)	(9.8)	頁岩	
		Ⅱ－13O	Ⅱ	Ⅴx	(35.4)	(22.9)	(6.1)	(4.1)	頁岩	
		Ⅱ－15Q	Ⅱ	Ⅴx	67.4	24.4	15.0	20.6	頁岩	
		ST3	F23	Ⅴx	50.2	21.3	15.7	14.7	頁岩	
		Ⅲ－10K	Ⅰ	Ⅴx	(38.6)	(31.2)	(16.0)	(18.6)	頁岩	
		ST3	F3	Ⅴx	36.3	22.3	7.8	5.6	頁岩	
		Ⅱ－12N	Ⅰ	Ⅴx	(39.1)	(23.1)	(7.6)	(5.3)	頁岩	
		ST3	F1	Ⅴx	(58.5)	(52.4)	(20.0)	(45.6)	頁岩	
46-6		Ⅱ－13O	Ⅰ	Ⅵa	62.6	44.2	12.1	32.7	頁岩	
		Ⅱ－11O	Ⅱ	Ⅵa	67.5	40.2	13.3	37.1	頁岩	
46-5		Ⅱ－15O	Ⅱ	Ⅵa	56.6	41.0	16.3	29.0	頁岩	
45-8		Ⅱ－14O	Ⅰ	Ⅵa	47.0	34.1	15.3	18.5	頁岩	

出土石器計測表（5）

表 17

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
		ST 1	F 1	Ⅵa	52.4	31.2	13.7	19.0	頁岩	
46 - 7		Ⅱ－15T	Ⅰ	Ⅵa	45.3	34.0	7.9	10.7	頁岩	
36 - 13		SK13	F 1	Ⅵa	43.8	29.9	10.5	11.3	頁岩	
36 - 12		SK 8	F 2	Ⅵa	40.5	29.3	8.0	10.7	頁岩	
		Ⅱ－14L	Ⅲ	Ⅵa	(53.8)	(29.6)	(8.3)	13.1	頁岩	
		Ⅱ－12O	Ⅱ	Ⅵa	43.0	28.7	8.9	9.9	頁岩	
10 - 5		ST 1	F 1	Ⅵa	49.2	35.7	13.5	25.1	頁岩	
		Ⅱ－13L	Ⅱ	Ⅵa	45.4	34.0	7.9	10.9	頁岩	
		ST 1	F 1	Ⅵa	65.1	46.4	19.8	48.7	頁岩	
		Ⅱ－16R	Ⅰ	Ⅵa	50.8	41.7	15.7	33.2	頁岩	
24 - 8		ST 3	F 1	Ⅵa	58.6	34.0	8.8	16.4	頁岩	
24 - 9		ST 3	F 1	Ⅵa	54.6	33.7	9.0	13.8	頁岩	アスハァルト付着
		ST 3	F 1	Ⅵa	36.0	23.5	10.2	8.7	頁岩	
		Ⅱ－16M	Ⅰ	Ⅵa	39.2	29.2	9.0	11.8	頁岩	
		ST 3	F23	Ⅵa	(37.7)	(27.9)	10.2	8.5	頁岩	
		Ⅱ－10M	Ⅰ	Ⅵb	68.6	42.5	22.0	66.0	頁岩	
		Ⅱ－16P	Ⅰ	Ⅵb	48.0	30.0	9.5	14.7	頁岩	
		Ⅱ－15F	Ⅰ	Ⅵb	73.4	58.1	21.3	69.9	頁岩	
		Ⅲ－ 5K	Ⅱ	Ⅵb	78.0	59.4	19.1	84.4	頁岩	
		Ⅱ－20L	Ⅱ	Ⅵb	86.0	64.2	16.3	61.3	頁岩	
		Ⅱ－16L	Ⅰ	Ⅵb	86.7	53.8	17.7	88.0	頁岩	
		ST1	F 1	Ⅵb	77.3	42.6	21.7	67.9	頁岩	
		Ⅱ－17R	Ⅱ	Ⅵb	64.8	53.4	20.4	71.3	頁岩	
		Ⅱ－13L	Ⅱ	Ⅵb	62.3	43.4	15.6	48.4	頁岩	
26 - 7		ST 3	F23	Ⅵb	71.4	44.5	11.1	32.3	頁岩	
		Ⅱ－14O	Ⅰ	Ⅵb	65.4	31.4	16.8	37.6	頁岩	
		ST3 EP9	F 1	Ⅵb	50.0	45.2	17.1	34.7	頁岩	
		ST 3	F 3	Ⅵb	48.6	44.8	20.2	44.7	頁岩	
		ST 1	F 1	Ⅵb	39.9	40.3	15.1	24.3	頁岩	
		ST 3	F 1	Ⅵb	46.9	42.4	17.8	27.0	頁岩	

出土石器計測表（6）

表 18

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
		Ⅱ－12O	Ⅱ	Ⅵb	56.4	24.7	11.6	13.3	頁岩	
		ST 3	F 1	Ⅵc	50.3	26.9	11.8	12.6	頁岩	
		ST 3	F 1	Ⅵc	51.3	51.9	26.8	83.2	頁岩	
36 - 14		SK 9	F 1	Ⅵc	39.7	34.1	12.8	25.3	頁岩	
		Ⅴ－15O	Ⅳ	Ⅵc	50.1	49.7	15.9	57.0	頁岩	
		ST 3	F 1	Ⅵc	48.3	51.0	16.5	50.4	頁岩	
		ST 1	F 1	Ⅵc	61.7	31.2	25.0	39.9	頁岩	
		ST 3	F 1	Ⅵc	76.4	49.7	15.4	46.8	頁岩	
		ST 4	F 1	Ⅵc	38.1	35.8	12.4	19.6	頁岩	
		ST 3	F 1	Ⅵc	45.4	25.5	18.0	10.1	頁岩	
		ST 3	F 1	Ⅵc	34.9	31.0	12.4	14.0	頁岩	
		ST 3	D	Ⅶa	39.0	37.1	9.0	12.8	頁岩	
10 - 6		ST1 EP1	F 1	Ⅶa	31.9	24.4	17.9	9.5	玉髄	
24 - 10		ST 3	F 1	Ⅶa	46.2	34.1	13.4	22.8	頁岩	
10 - 12		ST 4	F 1	Ⅶa	26.2	30.2	6.3	5.1	頁岩	
46 - 10		Ⅱ－14R	Ⅰ	Ⅶa	37.8	31.5	6.8	6.7	頁岩	
		ST 1	F 1	Ⅶa	30.0	31.2	10.0	10.4	頁岩	
46 - 11		Ⅳ－ 5T	Ⅱ	Ⅶa	34.2	36.5	11.1	13.8	頁岩	
46 - 9		Ⅱ－20T	Ⅰ	Ⅶa	39.5	25.0	7.3	7.0	頁岩	
		ST 1	F 1	Ⅶb	64.6	94.8	19.0	94.4	頁岩	
46 - 12		Ⅱ－ 9M	Ⅱ	Ⅶb	65.8	40.3	19.2	54.6	頁岩	
		ST 3	F23	Ⅶb	44.2	75.0	18.7	56.2	頁岩	
25 - 5		ST 3	F23	Ⅶb	82.0	40.5	15.4	38.6	頁岩	
25 - 6		ST 3	F 3	Ⅶb	23.0	49.8	18.7	19.0	頁岩	
10 - 13		ST4	F 1	Ⅶb	58.3	20.0	10.0	13.4	頁岩	
		ST 1	F 1	Ⅶb	54.2	25.0	12.8	18.8	頁岩	
		ST 3	Y	Ⅶb	50.2	47.8	15.4	41.7	頁岩	
25 - 8		ST 3	F 1	Ⅶb	56.6	47.4	16.0	47.1	頁岩	
		Ⅱ－14L	Ⅱ	Ⅶc	123.6	90.2	31.2	215.0	頁岩	
		Ⅱ－13R	Ⅰ	Ⅶc	98.6	69.6	25.0	182.2	頁岩	
46 - 13	20	Ⅱ－12L	Ⅱ	Ⅶc	87.8	51.0	15.0	78.6	頁岩	

出土石器計測表（7）

表 19

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
	20	ST3	F2.3	Ⅶc	78.1	73.4	18.6	99.3	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶc	101.0	63.8	18.6	88.0	頁岩	
		Ⅱ−13N	Ⅱ	Ⅶc	98.4	43.3	20.0	67.4	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶc	66.2	51.8	16.4	54.0	頁岩	
		Ⅱ−10T	Ⅰ	Ⅶc	61.8	40.0	14.0	38.3	頁岩	
		Ⅱ−10L	Ⅱ	Ⅶc	70.9	39.0	15.0	26.1	頁岩	
		Ⅱ−15S	Ⅰ	Ⅶc	70.0	39.8	8.6	23.0	頁岩	
		Ⅳ−15T	Ⅱ	Ⅶc	55.2	26.0	14.6	12.3	頁岩	
	50	Ⅱ−15O	Ⅱ	Ⅶc	63.0	32.0	11.3	17.5	頁岩	
25-9		ST3	Y	Ⅶc	43.0	42.1	14.4	17.0	頁岩	
		Ⅱ−160	Ⅱ	Ⅶc	65.1	36.3	13.6	22.4	頁岩	
10-7		ST1 EP4	F2	Ⅶc	36.0	31.6	6.2	6.3	頁岩	
36-11		SK8	F4	Ⅶd	68.4	31.3	7.9	19.4	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶd	65.2	32.4	12.0	23.0	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶd	69.0	36.9	16.2	35.0	頁岩	
		Ⅱ−16M	Ⅱ	Ⅶd	38.9	31.8	8.8	11.4	頁岩	
		Ⅲ−10J	Ⅱ	Ⅶd	43.6	21.6	8.4	6.1	頁岩	
24-11	55	ST3	F1	Ⅶd	37.0	19.7	6.3	4.2	頁岩	
		Ⅱ−12N	Ⅰ	Ⅶd	61.8	73.6	12.6	55.2	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶd	23.0	46.7	10.2	10.4	頁岩	
		不明		Ⅶd	41.8	55.5	12.6	33.2	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶe	41.2	52.5	16.2	30.5	頁岩	
		Ⅱ−120	Ⅱ	Ⅶe	28.3	46.4	9.2	11.7	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	67.3	65.6	26.1	121.0	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	61.4	84.4	32.6	125.2	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	73.4	58.9	18.6	79.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	60.5	63.1	13.0	50.0	頁岩	
		Ⅱ−5M	Ⅱ	Ⅶe	60.3	56.8	17.0	50.3	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶe	65.3	63.6	23.8	89.0	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶe	49.4	65.7	27.8	49.0	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	54.0	53.9	16.4	30.3	頁岩	

出土石器計測表（8）

表 20

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
46-15		Ⅱ−170	Ⅱ	Ⅶe	46.8	39.4	11.5	21.9	頁岩	
		Ⅱ−160	Ⅱ	Ⅶe	43.3	47.7	16.1	27.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	37.2	58.9	11.3	23.3	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	61.7	32.3	8.1	13.0	頁岩	
		Ⅱ−17R	Ⅱ	Ⅶe	42.7	62.4	7.4	21.8	頁岩	
		Ⅲ−15F	Ⅱ	Ⅶe	36.8	46.3	12.2	22.9	頁岩	
		Ⅱ−14L	Ⅱ	Ⅶe	29.1	42.2	6.3	6.0	頁岩	
		ST1	F1	Ⅶe	29.4	39.5	15.2	15.8	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶe	38.0	52.4	9.4	13.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	38.8	36.1	9.6	11.0	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	20.3	33.4	10.1	3.3	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶe	24.3	22.6	5.1	2.3	頁岩	
		Ⅲ−15T	Ⅱ	Ⅶe	31.7	20.8	9.3	5.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	36.1	35.5	18.6	15.2	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	25.2	40.3	15.4	9.0	頁岩	
		Ⅱ−15N	Ⅰ	Ⅶe	27.1	41.1	9.8	8.4	頁岩	
46-14		Ⅱ−120	Ⅱ	Ⅶe	25.1	41.6	8.6	6.7	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	43.8	38.4	20.7	24.2	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	36.8	46.6	12.3	18.3	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶe	56.5	42.0	19.6	36.0	頁岩	
		Ⅱ−11M	Ⅱ	Ⅶe	25.1	54.8	20.0	15.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	63.9	40.8	15.8	31.0	頁岩	
		Ⅱ−12O	Ⅱ	Ⅶe	24.9	39.5	13.7	6.8	頁岩	
		Ⅱ−11N	Ⅱ	Ⅶe	32.5	43.0	18.0	11.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅶe	51.9	35.0	14.9	26.3	頁岩	
		ST3	F1	Ⅶe	47.1	41.4	12.6	26.7	頁岩	
		不明		Ⅶe	34.5	57.6	13.0	28.8	頁岩	
		不明		Ⅶe	26.5	35.5	6.9	4.4	頁岩	
25-12		ST3	Y	Ⅷ	86.2	70.5	21.0	128.7	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	81.3	56.9	18.2	71.0	頁岩	
		ST3	F1	Ⅸ	57.2	79.3	11.9	56.5	頁岩	

出土石器計測表（9）

表 21

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
		ST3	F 2	Ⅸ	50.8	63.0	13.8	44.0	頁岩	
		ST3	F 3	Ⅸ	39.6	55.7	18.1	35.0	頁岩	
		Ⅱ−10L	Ⅱ	Ⅸ	41.0	32.2	14.2	25.5	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	55.5	64.7	19.2	68.1	頁岩	
		ST4	F 1	Ⅸ	35.8	61.2	10.8	28.2	頁岩	
		ST3 EP7	F 1	Ⅸ	50.1	45.3	19.8	49.3	頁岩	
		ST1	F 1	Ⅸ	64.3	40.3	18.5	38.6	頁岩	
		ST4	F 1	Ⅸ	46.8	39.4	16.5	31.8	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	40.2	68.6	17.4	48.0	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	57.0	36.7	21.0	54.9	頁岩	
		Ⅱ−13L	Ⅰ	Ⅸ	(53.4)	(61.2)	(12.2)	(43.6)	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	(40.0)	(67.4)	(22.3)	(56.4)	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	65.9	57.4	15.3	44.5	頁岩	
		ST3 EP2	F 1	Ⅸ	56.3	49.8	23.3	66.4	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	(51.0)	(47.6)	(16.8)	(41.4)	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	(67.4)	(32.6)	(15.6)	(43.0)	頁岩	
		Ⅱ−13L	Ⅱ	Ⅸ	(56.5)	(36.8)	(12.8)	(32.4)	頁岩	
		Ⅱ−11O	Ⅲ	Ⅸ	67.7	52.7	19.4	49.9	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	71.9	51.2	21.3	41.0	頁岩	
		Ⅱ−15T	Ⅱ	Ⅸ	77.2	35.7	11.3	25.7	頁岩	
		ST1	F 1	Ⅸ	64.0	38.8	13.6	29.5	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	54.6	49.2	17.8	54.2	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	61.0	39.3	11.9	35.1	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	53.6	49.8	16.4	48.6	頁岩	
		Ⅱ− 5K	Ⅱ	Ⅸ	67.0	34.9	15.5	31.3	頁岩	
		Ⅱ−11O	Ⅲ	Ⅸ	53.9	38.4	14.7	28.1	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	31.9	57.8	13.7	38.6	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	(34.8)	(70.5)	(15.0)	(26.5)	頁岩	
		Ⅱ−15T	Ⅱ	Ⅸ	54.4	32.4	12.4	14.1	頁岩	
		Ⅱ−12M	Ⅱ	Ⅸ	41.9	32.5	13.9	18.9	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	38.7	38.1	15.3	24.7	頁岩	

出土石器計測表（10）

表 22

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
		Ⅱ−10L	Ⅱ	Ⅸ	47.1	48.7	8.4	16.0	頁岩	
		Ⅱ−15T	Ⅰ	Ⅸ	41.0	60.6	7.4	19.1	頁岩	
		ST1	F 1	Ⅸ	59.0	36.1	11.5	22.2	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	(25.5)	(59.6)	(12.4)	(18.6)	頁岩	
		Ⅱ−15S	Ⅱ	Ⅸ	(36.9)	(47.3)	(11.6)	(16.8)	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	48.4	42.3	17.1	33.9	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	67.6	31.2	12.6	27.0	頁岩	
		Ⅱ−17N	Ⅱ	Ⅸ	37.0	32.9	12.2	18.8	頁岩	
		ST3	F 2	Ⅸ	35.3	46.6	12.3	15.4	頁岩	
		ST4	F 1	Ⅸ	52.0	30.8	15.0	19.7	頁岩	
		Ⅳ− 5T	Ⅰ	Ⅸ	36.6	25.9	6.0	5.2	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	43.1	35.4	8.6	14.4	頁岩	
		ST4	F 1	Ⅸ	45.8	33.1	13.6	22.2	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	53.7	23.4	13.8	15.4	頁岩	
		ST1 EP4	F 1	Ⅸ	39.0	33.2	10.3	12.7	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	49.9	37.7	16.5	24.9	頁岩	
		ST1	F 1	Ⅸ	41.8	30.3	14.3	15.6	頁岩	
		ST3 EP3	F 2	Ⅸ	30.6	27.7	9.4	9.8	頁岩	
		ST1 EP4	F 1	Ⅸ	44.6	26.2	12.9	13.1	頁岩	
		ST1 EP4	F 1	Ⅸ	26.0	51.0	17.6	17.8	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	20.5	27.7	13.4	13.4	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	18.5	30.0	6.6	4.0	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	34.6	44.8	10.4	12.1	頁岩	
		ST3	F 1	Ⅸ	23.3	32.8	13.0	11.8	頁岩	
		ST1	F 1	Ⅸ	34.1	25.2	12.4	7.9	頁岩	
		ST4	F 1	Ⅸ	32.7	41.5	13.8	20.4	頁岩	
		ST1	F 1	Ⅸ	31.4	21.2	6.8	4.8	頁岩	
		Ⅱ−170	Ⅰ	Ⅸ	42.6	22.2	9.7	9.7	頁岩	
		Ⅱ−120	Ⅱ	Ⅸ	22.2	40.0	10.5	11.4	頁岩	
		Ⅱ−10N	Ⅰ	Ⅸ	33.7	18.9	12.2	7.2	頁岩	
		ST3 EP1	F 1	Ⅸ	33.2	22.9	9.3	8.1	頁岩	

出土石器計測表 (11)

表 23

挿図番号	石器番号	出土地区	出土層位	石器名称	全長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石質	備考
		ST3	F3	Ⅸ	32.4	25.6	10.2	6.5	頁岩	
		ST3	F1	Ⅸ	32.7	19.6	8.3	5.1	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	31.1	21.0	10.0	5.9	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	32.7	19.3	12.4	6.1	頁岩	
		Ⅲ−5K	Ⅱ	Ⅸ	27.7	19.0	6.6	3.0	頁岩	
		ST3	F1	Ⅸ	32.5	19.6	8.7	3.7	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅸ	22.0	19.0	8.1	4.8	頁岩	
		Ⅱ−13L	Ⅱ	Ⅸ	22.9	24.0	5.7	3.2	頁岩	
		Ⅱ−15M	Ⅱ	Ⅸ	21.5	10.4	3.2	0.4	頁岩	
		ST4	F1	Ⅸ	40.1	28.5	9.0	11.4	頁岩	
		不明		Ⅸ	(45.7)	(43.8)	(16.3)	(38.3)	頁岩	
		Ⅱ−16Q	Ⅱ	Ⅹ	52.5	73.2	18.3	49.0	頁岩	
		Ⅱ−17M	Ⅱ	Ⅹ	26.8	41.6	11.0	11.9	頁岩	
		Ⅱ−12M	Ⅱ	Ⅹ	47.5	57.7	17.2	36.9	頁岩	
		ST3	F1	Ⅹ	25.0	57.2	9.4	10.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅹ	(32.0)	(65.8)	(12.4)	(19.4)	頁岩	
		ST3	F1	Ⅹ	64.7	28.6	9.3	19.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅹ	112.9	72.8	29.7	23.0	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅹ	36.9	51.0	4.2	8.2	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅹ	56.6	41.0	12.0	26.0	頁岩	
		ST4	D	Ⅹ	34.0	23.3	7.4	8.8	頁岩	
		ST3	F2.3	Ⅹ	(58.0)	(21.0)	(5.5)	(5.0)	頁岩	
		ST3	F1	Ⅹ	53.8	56.7	14.1	38.6	頁岩	
		ST4	F1	Ⅹ	(27.3)	(27.0)	(7.9)	(7.8)	頁岩	
		ST3	F1	Ⅹ	(27.1)	(40.9)	(7.2)	(7.4)	頁岩	
		ST3	F1	Ⅹ	37.3	48.8	8.7	11.5	頁岩	
		ST1	F1	Ⅹ	49.7	50.4	10.9	33.1	頁岩	

主要参考文献

1 安孫子昭二『東北地方における縄文後期後半の土器様式』石器時代9 昭和44年

2 磯崎正彦他『十腰内遺』『岩木山』所収 昭和43年

3 伊藤 信雄『宮城県史Ⅰ 古代』宮城県 昭和31年

4 岡本勇・戸沢充則『縄文時代の発展と地域性 南東』日本の考古学Ⅱ 昭和40年

5 後藤 勝彦『陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について』考古学雑誌48−1 昭和37年

6 佐藤禎宏・佐藤鎮雄『神矢田遺跡』山形県遊佐町教育委員会 昭和47年

7 志向 泰治『宮城県角田市老が崎遺跡の調査』考古学雑誌49−4 昭和38年

8 鈴木 次郎『縄文時代の直刃式片打製石斧について ー神奈川県尾崎遺跡の出土例を中心として ー』神奈川考古第2号 昭和52年

9 富樫 泰時『トランシェ様石器について』東北考古学の諸問題 昭和51年

10 中村孝三郎・小林達雄『朝日遺跡調査報告』新潟県越路町教育委員会 昭和40年

11 野村崇他『札刈遺跡 ー北海道上磯郡木古内町札刈の国道拡張に伴う緊急発掘調査報告ー』 昭和49年

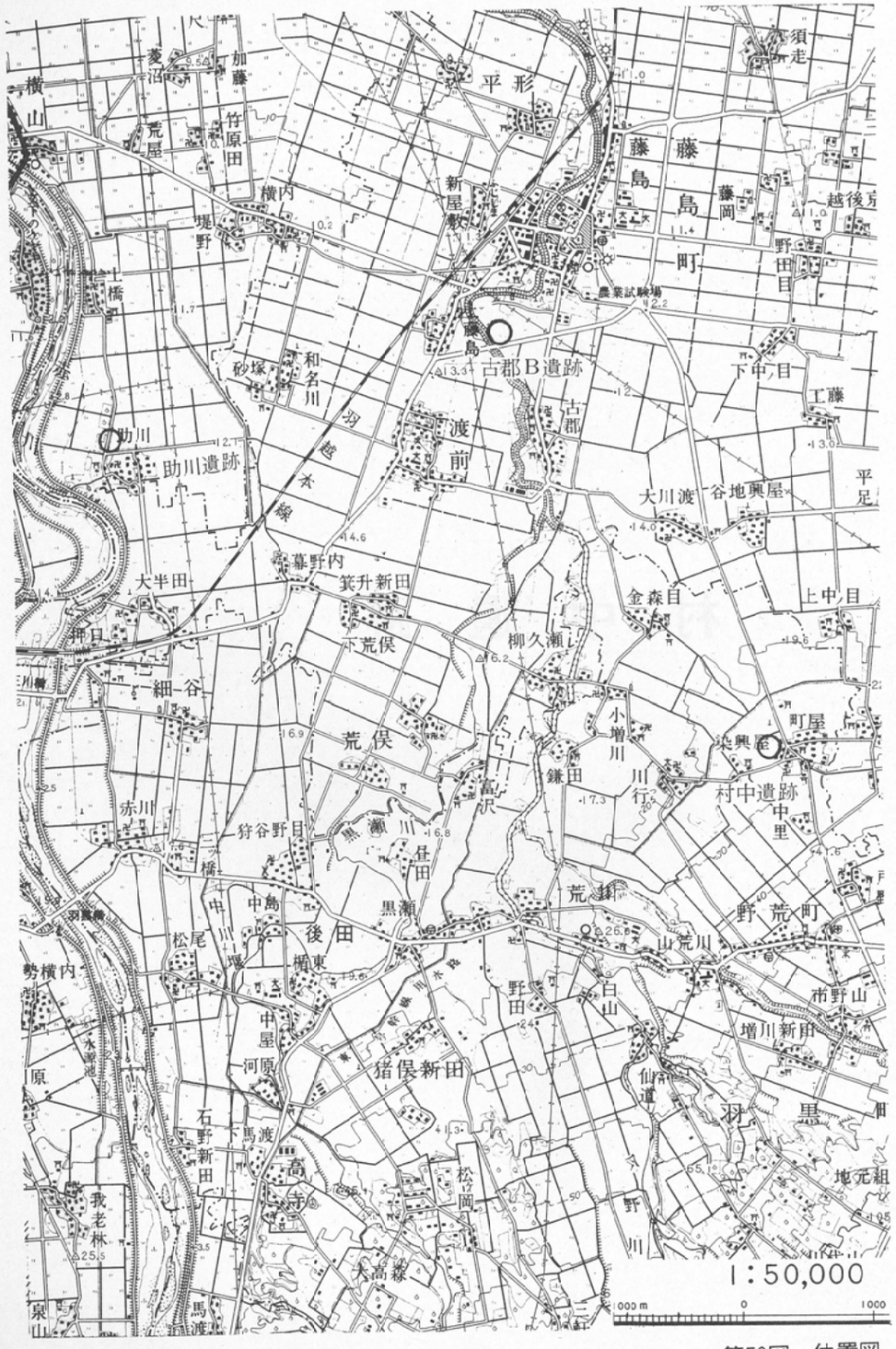
12 藤村東男他『九年橋遺跡第3次調査報告書』岩手県北上市教育委員会 昭和52年

13 馬目順一郎『寺脇貝塚』福島県磐城市教育委員会 昭和41年

14 山内 清男『縄文土器』日本原始美術 昭和39年

15 柏倉亮吉他『玉川遺跡』山形県羽黒町教育委員会 昭和48年

村　中　遺　跡



第50図　位置図

Ⅰ　調査の経緯（第50、51図　図版47・48）

村中遺跡は山形県東田川郡羽黒町大字町屋字村中に所在する。昭和48年度に山形県教育委員会が実施した庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査（註１）により新たに発見された遺跡である。町屋部落の立地する微高地の西端にあり、地目は畑地である。標高23.6m を測る。

昭和49年、遺跡の西側に上述の農道工事施行計画が具体化したため、山形県農林部と山形県教育委員会の協議の結果、昭和50年度に山形県教育委員会が事前の緊急発掘調査を実施することになった。

調査は昭和50年６月９日より６月14日までの延６日間実施した。調査担当者は山形県教育庁文化課佐藤庄一・尾形與典・名和達朗の三名である。調査の実施にあたっては羽黒町教育委員会および町屋部落の方々より多大なる協力を得た。

調査は調査区の設定により開始した。遺跡内の農道工事区域に、路線の中心線を基準として２×２ｍのグリッドを単位とする調査区を設定した。南北基線（磁北にほぼ平行）をｙ軸、東西基線をｘ軸とする、第１象限の座標を用いた。ｘ軸をＡ~Ｋ、ｙ軸を０~30までとし、例えば「Ｂ—10」のように呼称した。調査区の大きさは、10×60m で、延136m ² を発掘した。

調査方法は、Ｂ~Ｉ—４~21にグリッドを基準にする２×６ｍのトレンチをいちまつ状に入れて発掘し、遺構・遺物の検出に応じて随時拡張する方法を用いた。

第１日目は発掘器材を現場へ運び、調査の打合せを行う。

第２日目は現場にテントを設営し、調査区域にグリッド杭を打つ。その後上述の方法で粗掘りを実施する。Ｂ—17・18区で礫群、Ｉ—10~12区でpit群を検出し、10列以南で砂層が深くなることを確認した。

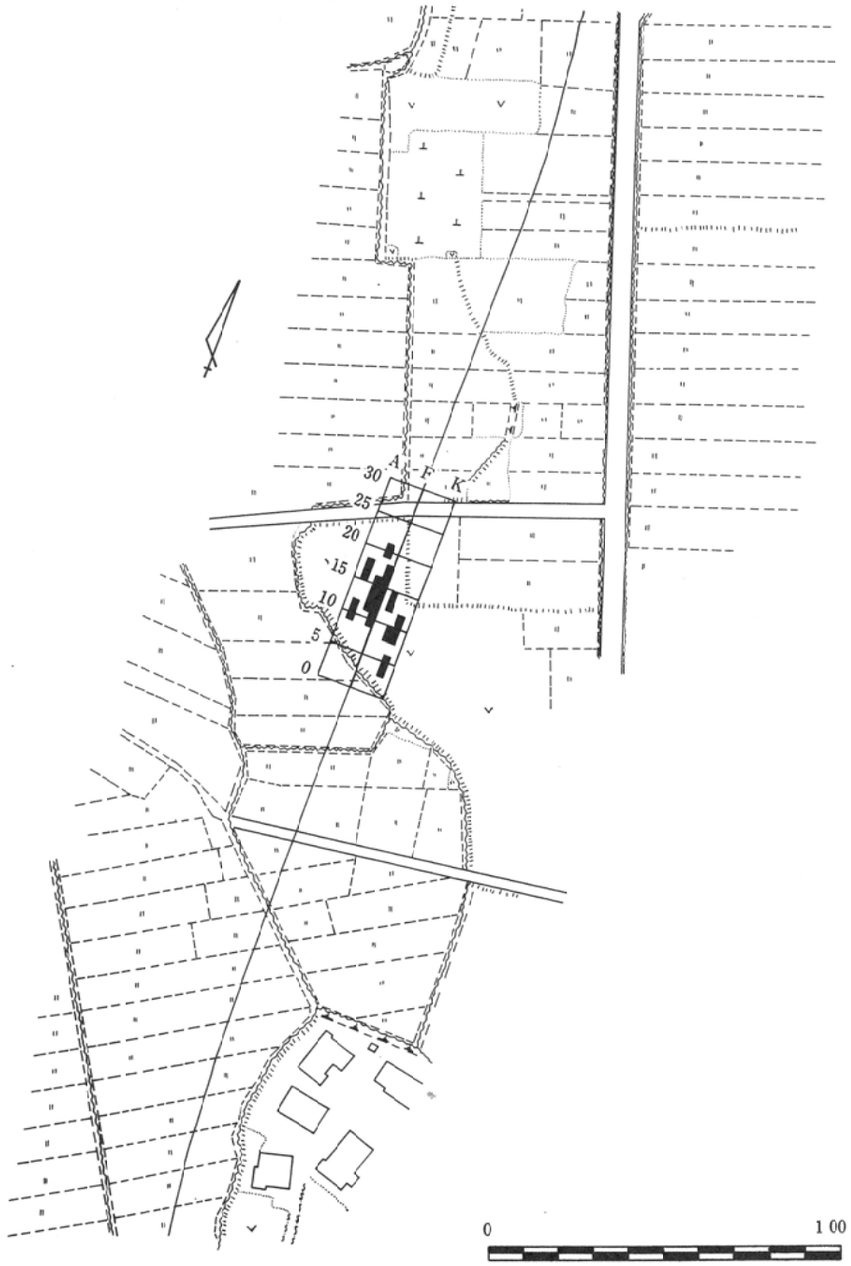
第３日目は第２日目の結果によりＤ—12~16・Ｇ—９~10・Ｉ—９区を拡張した。

第４日目は各区の精査を行う。Ｄ—12~16区では礫群の広がりが検出されたが、検討の結果自然堆積によるものと判断された。Ｈ—９~10・Ｉ—９区のpit群は耕作土よりの混入物があり、攪乱によるものとそうでないものとに分類される。遺跡全体の通しセクションを記録する。

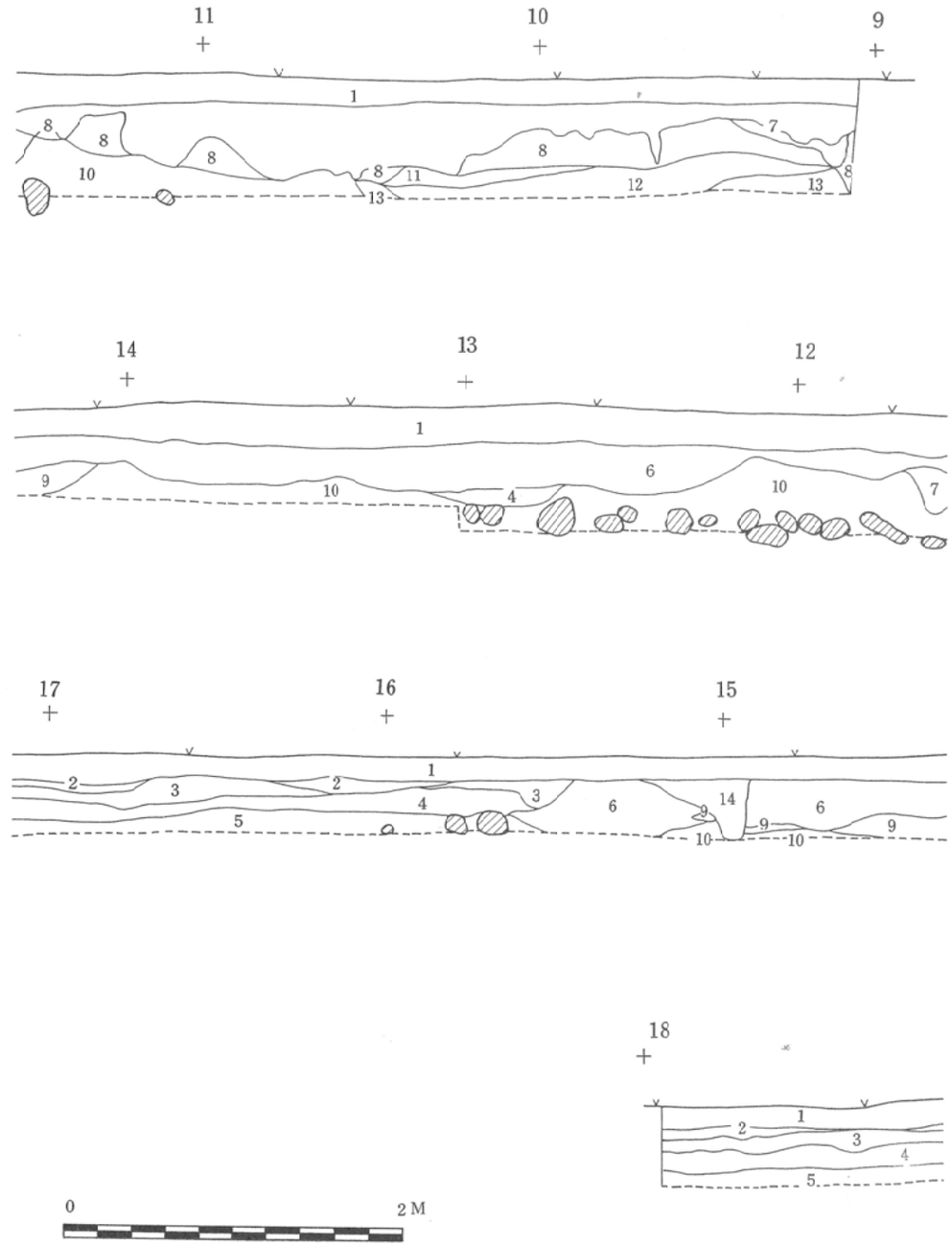
第５日目は遺跡の北側の状況をみるためにＤ—20~21区を拡張した。Ｈ—９~10・Ｉ—９~10区は精査後平面実測を行う。さらに、各区および遺跡全体の最終状況の撮影、調査区のレベルを記録する。

最終日はテント・発掘器材の撤収を行う。これで調査を終了した。

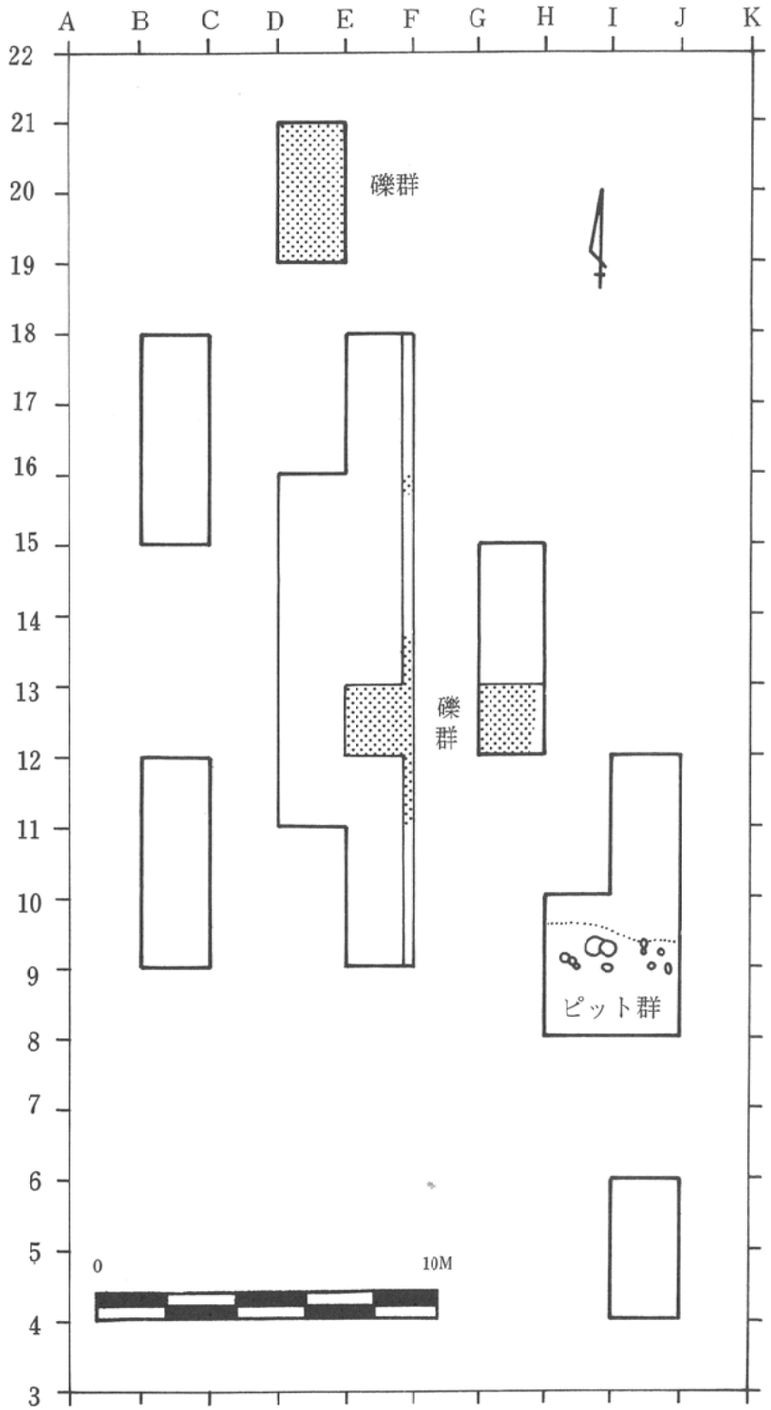
註１　山形県教育委員会『庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書』
山形県埋蔵文化財調査報告書第１集　昭和49年



第51図　村中遺跡　全体図



第52図　Ｆライン土層図



第53図　グリッド配置図

Ⅱ　遺跡の概観

月山の噴火によって流出した火山泥流のうち、手向（とうげ）部落がのる笹川泥流と、川代（かわだい）部落がのる泥流性台地、月山北麓台地とがあり、この２つの泥流地帯にはさまれて、笹川が北流している。

笹川は、月山朝日連峰のうち、雨告山（あまもりやま、標高1360m ）の北麓に源を発し、下流で藤島川、京田川と名を変え、最上川河口にそそぐ。

笹川は、さきの２つの泥流地帯にはさまれて、扇状地性氾濫原を形成し、さらに北の方では、笹川扇状地を形成する。

この扇状地は、扇頂から扇端までの５~６km間で、比高差約 100m という、きわめて急な傾斜をもつが、村中遺跡は、その略扇央部分に位置し、標高は23.6m を測る。

さて、付近の略同時期の遺跡を概観してみると、すぐ北方の土口遺跡をはじめとして、大川渡遺跡、大川渡宮の前遺跡などの集落跡があり、東方、羽黒山神社への登り口付近には大鳥居古窯跡、南西の荒川部落付近には漆畑古窯跡、などの窯業遺跡がある。

Ⅲ　遺構と遺物（第52~54図　図版48）

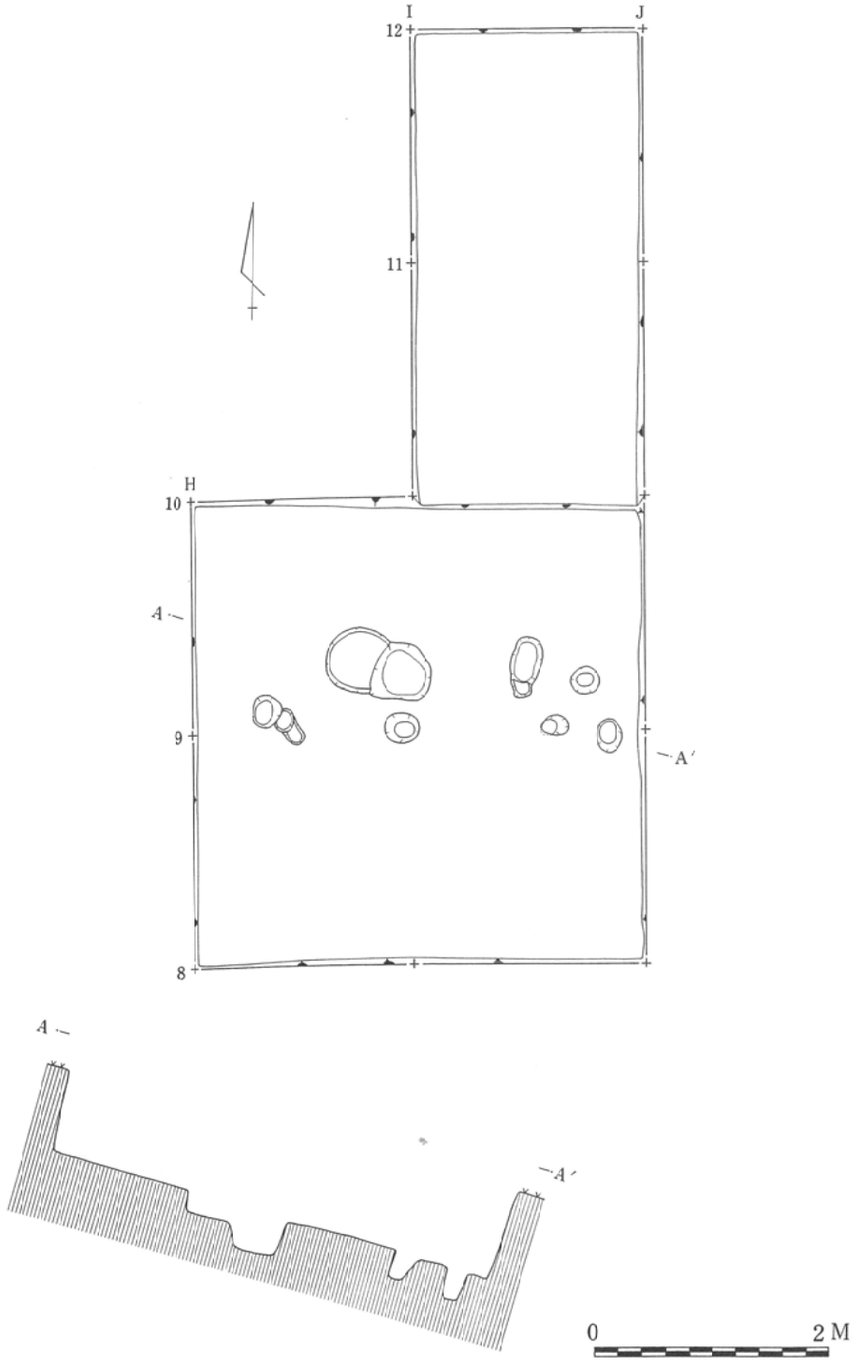
調査区の層序を見てみると、ここは畑地にあたっているため、厚さ20cm前後の耕作土が地表を覆っており、これを１層とした。その下には６層がある。これは、炭化物粒を含む黒褐色土と茶褐色粒土の混ったもので、25~50cmの厚さをもつ。この６層を２、３、４層が切っており、それぞれの土質は次の如くである。２層ー灰褐色砂質土、３層ー暗灰色粘土、４層ー炭化物粒を含む暗褐色土。

６層の下には、北の方では、暗褐色土に砂利が混った５層があり、南の方では、４層（暗褐色土）や９層(砂利)、10層(乳灰色砂)、11層（暗褐色砂）などがある。また、特に南の方、E—10~12区にかけて、６層の下に７層、８層という、後世の攪乱層がみられる。

さて、遺物について言えば、遺物の種類は土器類のみである。

土器類は総計で25片。うちわけは、須恵器が１片、土師器が７片、赤色土器が11片、近世以上と思われる陶磁器が５片、そして、時期は不明であるが、かなり時代が降るものと思われる器形不明の埴質土器が１片ある。いづれも小片で、実測は不可能である。器形別では甕形が最も多く、杯形のものがこれに次く。

土器類は、18ラインを北限とし、９ラインを南限とする範囲に分布する。



第54図　H－9～I －12区遺構図

調査区を、地表下40~-45cm（土層観察のため、一部を55~-70cmまで下げた）にわたって掘り下げ、精査を行なったが、遺構は殆んど見られなかった。わずかに、I－9杭を中心とする4グリッド、即ちH－9・10区、I－9・10区に、11個から成るピット群がみられただけである。このうちには山芋栽培時の穴が数個混っており、近世以降現代のものと、そうでないものとに分かれる。只、このピット群のうちのひとつから、赤色土器の破片が1片出土している。これらのピット群は、路線幅の関係で拡張できなかったせいもあるが、検出した範囲内では、大きさ、深さなどの点からも、組み合わせられるものがなく、建物跡であるか否か、さらには柱穴であるか否かの判別はできなかった。

他に、土層断面図に見られる様に、地表下55~-60cmのところで、礫群が観察されたが、これは、検討の結果、自然推積によるものと判断された。

Ⅳ　ま　と　め

村中遺跡は、月山北麓の笹川扇状地の略扇央部に立地し、町屋部落の西端に位置する。標高23.6m を測る。昭和48年度に実施された庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査により発見された遺跡である。表採資料により平安時代末~-鎌倉時代の集落跡とみられた。

調査は、昭和50年6月9日~-6月14日までの延6日間実施された、グリット方式で農道施行区域内を136m²発掘した。その結果、遺構では調査区域の南東側、すなわちH－9・10区、I－9・10区でpit群 を検出した。しかし、畑地の作物による穴が混っており、遺物を含むものも1つだけで、建物跡等の想定ができなかった。遺物は土器のみで、総数25片と少なく、いずれも小破片である。種別では、須恵器、土師器、赤色土器、陶磁器（近世以降）、時期不明の埴質土器がある。

以上であるが、本調査では遺跡の集落跡としての全貌を把えることができなかった。その中心部は遺構・遺物の出土分布を考慮すると、今回の調査地点よりももっと東側の方に、位置することも考えられる。時期に関しても、明確な事は言えないが、平安時代末（12世紀）頃に中心をおくと推察される。

古郡B遺跡

Ⅰ　調査の経緯（第50図　図版49）

古郡Ｂ遺跡は東田川郡藤島町大字古郡道橋に在る。付近には藤島川が蛇行し、沖積地を形成している。昭和50年、県土木部河川課では藤島川の改修工事を計画し、県文化課に周辺遺跡の存在を問い合わせ、存在遺跡の調査を依頼した。これを受けた文化課では古郡Ｂ遺跡の調査を計画し、50年10月20日~11月１日（延11日間）に実施した。

10月20日

器材の運搬、藤島町教育委員会より借用したテントの設営を行ない、明日からの調査作業計画の打ち合わせを行なう。また同時に遺跡の現状写真を撮影する。

10月21日

ローリングタワーを設置し、ポラロイドによる近景現状写真をとり、マウンド上の草刈りとその後の近景写真を撮影する。またマウンド上に東西18m　南北23m のトレンチを磁北に合わせて設置し、東・南トレンチから掘り始める。

トレンチの名称は北トレンチより１Ｔ、東トレンチを２Ｔ、南トレンチを３Ｔ、西トレンチを４Ｔと命名し、呼称する。

マウンド上に大きな榎木があり、以前に切りたおしたとのことであったが根が広がり、調査は難行した。

10月22日

２トレンチを青砂層上面まで掘り下げる。トレンチ内からは遺物の出土がみられなかった。３トレンチにおいてマウンドの裾部より動物の白骨体が出土、以前地主がブタの死体を埋めたとの話である。

また調査と併行してマウンドの測量作業に取りかかる。縮尺は 100分の１とし、レベルは三角点より標高レベルを移動し、海抜13Mの原点ポイントをマウンドの近くに打ち込み、測図を25cmコンタによる測図作業を開始する。

10月23日

３トレンチを掘り終ったが、出土遺物は検出されず、４トレンチの調査に取りかかる。２・３トレンチを掘り終った段階で、マウンドを観察すると、マウンドは設営時の表土に付近の土砂を盛り上げただけの様相を示している。１・４トレンチ共に出土遺物の検出はみられず、マウンドの中心にある榎木の下を掘る必要が出た。一方昨日からのマウンドの測量作業が終了し、すでに掘り終った２・３トレンチの土層測図作業を始め、夕方までに完了させた。又、遺跡の遠景を南方より撮影した。

10月24日

マウンド中心に向って掘り始めたが、榎木根が作業を遅らせている。2・3トレンチの土層観察写真を撮影する。

10月25日

中心を掘り進めているが、出土遺物も埋設施設も発見出来ず、現在まで掘り進めた各トレンチ内を再度精査してみたが、これも何ら検出できなかった。1・4トレンチの土層図測図作業の準備に取りかかる。

10月27日

榎木の下にも遺構・遺物の発見が出来ず、1・4トレンチの土層測図作業を進める。

10月28日

強風を共う雨天のため作業を中止する。

10月29日

27日に残った土層図の測図作業を行ない、完了後土層写真を撮影する。

10月30日

再度各トレンチや、マウンド中心からの調査でも施設や出土遺物もなく、土層の状態から考えても掘り込まれた形跡がなく、調査は終了した。これらのことを考えてみれば、この庄内地方には同様なマウンドが、点在している部落の入口部に在り、推測ではあるが、部落の存在を目印しとしたものと思われる。

11月1日

すべての調査を終了し、調査機材を整備梱包ののち山形に向け運搬する。また藤島町教育委員から借用したテント等を返した。

Ⅱ　遺跡の概観

古郡遺跡は、庄内平野北西部、藤島川右岸に存在する。藤島川は、その源を羽黒山系に発し、庄内平野を蛇行しながら日本海へ注ぐ。庄内平野は最上川、赤川、京田川、大山川等、大小の河川の沖積により形成し、広大な沖積平野を作り、米所山形県をささえている。

遺跡は藤島町上藤島部落南東部、新設された国道 345号線と藤島川が交差する北側に位置し、藤島川右岸の沖積地に存在する。遺跡は高さ1.5m をもつマウンドで、中世ないし近世の墳墓として昭和38年の山形県遺跡地名表（註一）に記載されている。

藤島町には古郡B遺跡の他、古郡A遺跡　渡前遺跡、平形遺跡等の遺跡が点存している。

これらの遺跡は赤川や藤島川が形成した平坦な沖積地に立地し、自然堤防ないし、付近の微高地に集中している。平形遺跡（註二）・渡前遺跡は奈良・平安時代の集落跡として登録されている。

註一　山形県教育委員会　『山形県遺跡地名表』　昭和38年

註二　柏倉亮吉・小野　忍『平形遺跡第1次・第2次発掘調査概要』　昭和47年

山形県教育委員会　『山形県文化財発掘調査報告書』第6集　昭和51年

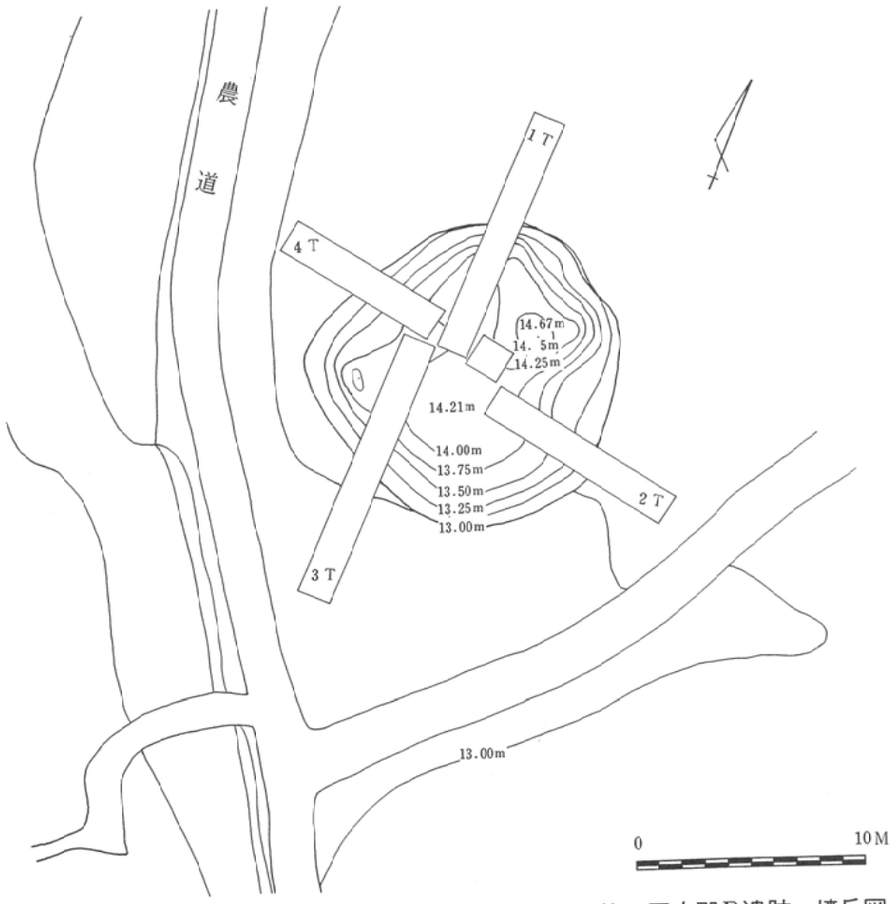
Ⅲ　遺構と遺物（第55、56図　図版50）

本遺跡では前述の通り、遺物の発見がなく、マウンドだけを記述する。

マウンドは現地表面より1.5m の高さにあり、径約27m を測る。最頂部をやや北寄りにもち、南部はゆるやかな傾斜を保つ。北側と西側は急傾斜となり、付近の畑地にマウンドを削ずられたものと思われ、復元すれば径38m の大きさになるものと考えられる。

調査はこのマウンドの頂部よりやや西にずらし磁北に合わせたトレンチを4本設置し、②Tと③Tを掘る。層序は、第Ⅰ層約35~50cmと厚く覆われた表土、第Ⅱ層は墳頂部下に約20cmの厚さで水平にある褐色砂層で、木根による攪乱が著しい。第Ⅲ層は約30~45cmの明褐色砂層である。第Ⅳ層は砂の粒子が細かく、粘着性がやや強く、構作面と考えられ、黒色砂層である。第Ⅴは粘着性があり、若干の白色粒子を含み、明褐色粘質砂層である。第Ⅵ層は粒子が粗い明褐色砂層で約20cmの厚さである。第Ⅶ層は青灰色砂層の地山である。

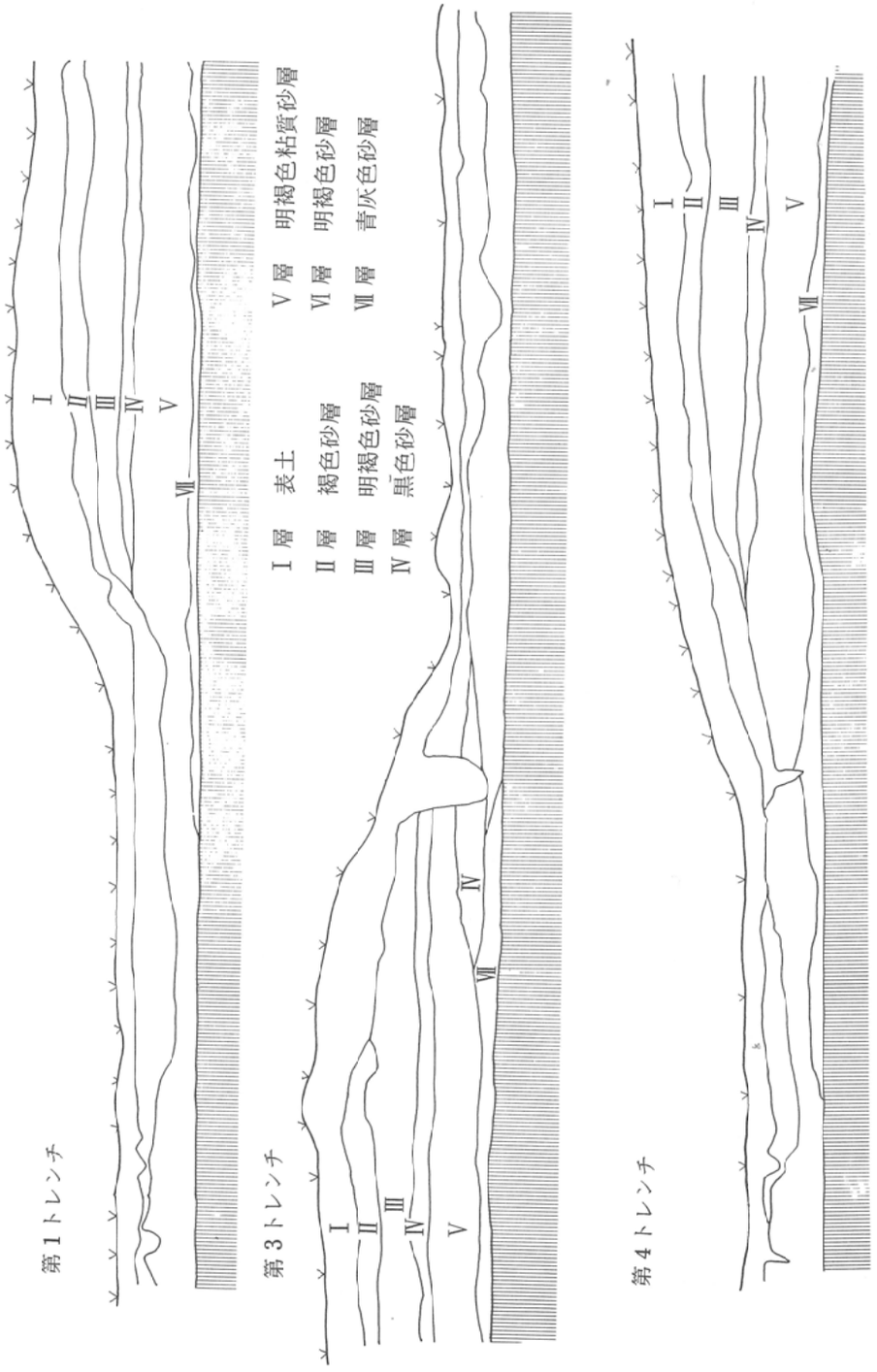
これらの層を観察すると、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層は厚さが一定し、水平にある。このことを考えると、Ⅴ層上面に規則的に砂を盛り上げた遺構と考えられる。また各トレンチからは出土遺物が検出されず、断面を観察しても掘り込まれた形跡もない。頂部に榎木があり、その根下に向らの痕跡も認められなかった。



第55図古郡B遺跡　墳丘図

Ⅳ まとめ

本遺跡は遺跡地名表に平安時代の墳墓（No.1227）として登録されているが調査の結果、墳墓ではなく、近世期のマウンドと考えられ、調査ではトレンチ内や榎木の下にも向ら痕跡が認められなかった。その造築目的としては、近世信仰対象としての島海山や出羽三山信仰としての塚(関東地方には山岳信仰としての富士見塚等がある)。または庄内地方に多くみられる点散した部落の出入口にあたる道路に設けた目印としての塚、とも考えられる。いずれにしてもこのような塚は前述の通り、多くの数をなし、今後の資料の増加をまちたい。



第56図　土層図

助川遺跡

第57図　助川遺跡　全体図

Ⅰ　調査の経緯（第50・57　図版51・52）

本遺跡は、山形県東田川郡三川町大字助川字北畑65・78番地他に所在する。遺跡発見のきっかけは、昭和37年県遺跡分布調査にもる「山形県遺跡地名表」には助川遺跡(No.1193)散布地(平安時代）となっており、助川部落の南西部の畑地一帯が遺跡の推定範囲となっている。この地区は、圃場整備事業に係るため昭和49年９月に第一次発掘調を実施し、遺物は土器片（細片）が十数片出土したのみで、遺構は検出されなかった。この調査の際、本遺跡の範囲が助川部落の一部と西部畑地および北西部の畑地一帯に、土師・須恵器片が散布することが判明した（註）。

今回の調査は、昭和49年度から続く県営赤川右岸圃場整備事業が本遺跡の西部・北西部一帯に孫るため、山形県教育委員会と同農林部および関係機関との協議のうえ、また三川町教育委員会の協力を得て、昭和51年５月18日から５月27日と同年６月28日から７月３日までの２度にわたって緊急発掘調査を実施した。

調査は、遺跡が広範囲にわたるため昭和49年に調査した地区をＡ地点、助川部落の西側をＢ地点とし、さらに北西部一帯をＣ地点と仮称し、昭和51年５月18日から５月27日までＣ地点を６月28日から７月３日までＢ地点を調査した。

調査の方法は、推定遺跡範囲内に両地点ともグリッド法によるトレンチを井桁状に設定し、第１段階は２×４ｍの範囲で坪掘りを行ない、第２段階は重機械（バックホ）を入れ、遺構を確認した部分を随時拡張する方法をとった。グリッドの基線は現存する地形を利用して、Ｂ地点では南隅に30—50グリッドを、Ｃ地点は北東隅を１—30グリッドの基点とし、東西方向をＸ軸・南北方向Ｙ軸とするように設定し、Ｘ軸を１・２・３‥‥150、Ｙ軸も同様に呼称する。北からのＹ軸方向は、Ｂ地点でＮ—20°—Ｅ・Ｃ地点でＮ—5°—Ｅを測る。

Ｃ地点

５月18~５月20日

80—120グリッドを基点に10ｍごとに井桁状にグリッドを設定する。Ｘ軸71・81列Ｙ軸30・80・100列を20ｍ間隔で２×４ｍの範囲でグリッド粗掘作業を行う。71—119・120グリッド内において、小礫を組んだ25×30㎝の方形を呈する礎石状の遺構を検出し、東・西・北にそれぞれ4ｍ拡張する。層序を確認した後、Ｘ軸71・81・91列、Ｙ軸30・66・70・80・100列を井桁状に重機械を使用し粗掘作業を行う。

５月21・22・24日

重機械を使用した各トレンチの平面・断面精査の作業を行う。その結果遺構は確認され

ず、70~-72—118~-120グリッド内にわずか礎石状の建物が検出されたのみである。遺物の出土状態は第Ⅰ層から土師・須恵・須恵系土器の坏・甕の破片が出土している。

5月25~-5月27日

礎石状建物跡のさらに精査追究を行う。25×30cmの方形の小礫群がほぼ磁北の方向に70~-80cmの間隔で直線的に並んでいるが、その他柱穴等の施設は検出されない。さらに南側100—115~-150付近を拡張するが、遺構・遺物は検出されなかった。写真・測図を行ない第2次の調査を終了する。

B地点

6月28日~-6月30日

草刈り作業終了のち、C地点と同様にグリッド設定を行う。遺物の散布状況及び層序の確のため、50—120・120・100・90、35—80、40—110~-130、50—56~-139、35~-50—51、40~-50—110グリッドの粗掘り作業を行う。さらに、50—56~-139・35~-50——51・30~-52—80・40~-50—110グリッドの重機械による粗掘作業を行ない、平面・断面精査をする。第Ⅰ層より須恵系土器・須恵器の細片（坏・甕）が数十片出土し、遺構は検出されなかった。

7月1日~-7月3日

前日に引続き平面・断面の精査を行うが、遺構・遺物が検出されなかった。写真・測図を行なって調査を終了。

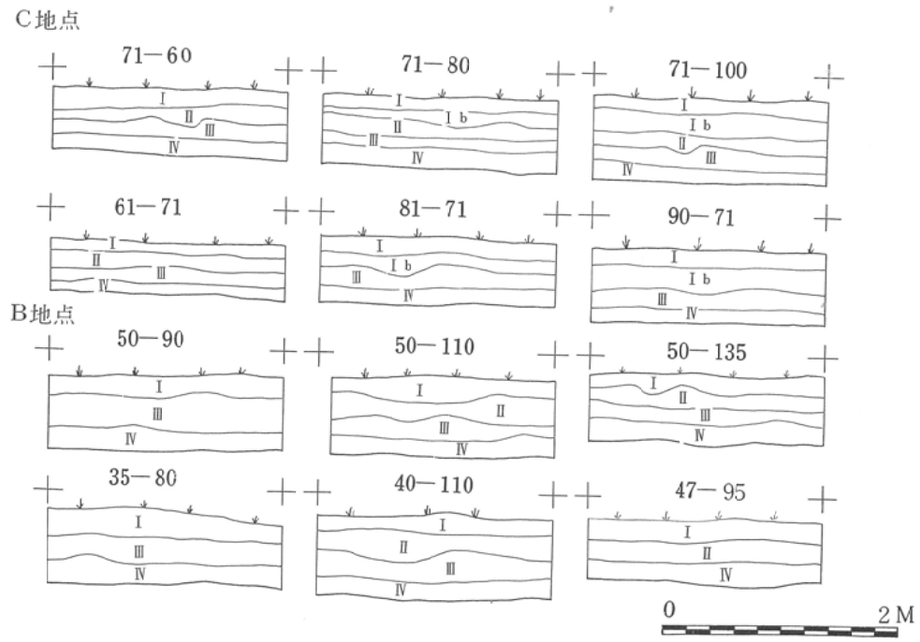
なお本地点の西側から南西側にかけては、墓地および畑地に作付がおこなわれているため調査を放棄する。

（註）　山形県教育委員会　「山形県文化財発掘調査報告書」　第6集　昭和51年3月

Ⅱ　遺跡の概観（第58図　図版53）

本遺跡は庄内平野の南部を流れる赤川中流右岸の東に大きく蛇行する所に位置し、標高13~-15mを計り平面に立地する。三川町助川部落のB地点では西方250m、C地点は北方150mの地点にある。

遺跡の現況は、昭和7・8年にかけて赤川堤防改修事業により大幅に土取・削平が行なわれ、堤防として築かれ現況を大きくかえた。また昭和45年には開田事業により削平され、さらに畑地として利用され、開田・畑地のくりかえしがなされプライマリーな遺跡として存在せず、土器の破片が散在している程度である。現在、B地点では畑地・果樹畑・荒地



第58図　土層図

となり、C地点では水田・果樹畑となっている。

遺跡の層序は、両地点とも上記の関係でプライマリーな層序関は認められず、全体として微砂質土でサラサラし、40~-60cmで黄褐色土の土層にたっし各層とも攪乱を受け、明確な遺物包含層は認められなかった。両地点とも差違はなく、同一層として下記に示すものである。

Ⅰ層　褐　色　土　耕作土である。B地点は畑地でサラサラとして粘性がなく軟かい。C地点は水田耕作のため堅く粘質である。10~-25cm堆積している。

Ⅰb層　暗青灰色土　C地点のみ確認される。酸化鉄を含み粘性がある微砂質土で堅くしまっている。15~-25cmでほぼ水平に堆積している。

Ⅱ層　暗褐色土　微砂質土でやわらかく、木の根等の腐植物粒などが混る。15~-35cmの堆積があり不整合である。

Ⅲ層　褐　色　土　Ⅱ層に近似しているが、色調も明るくやや堅くなっている。25~-35cmの堆積がある。

Ⅳ層　黄褐色土　砂質性が強く部分的に堅くしまる所もある。地山である。

Ⅲ　遺構と遺物

遺　構

B地点においては、第Ⅳ層黄褐色土そのそもが畑地によりかなり攪乱されているため、遺構を検出できなかった。

C地点では、70~-72－118120グリッド内に礎石状建物跡のみ検出された。確認面は地表下10~-15cmで浅く大部分は破壊されている。礎石の大きさは、約25×30cmの方形をなし5~-10cmの小礫が偏在的に集り、若干の岸化粒子を含んで、その下部には掘り込みをもっていない。方向はほぼ磁北を向き、70~-80cmの間隔で並んでいる。周辺部にはその他の施は検出できず、出土遺物もなく時期は不明で、どのような施設であるかも明確ではない。

遺　物

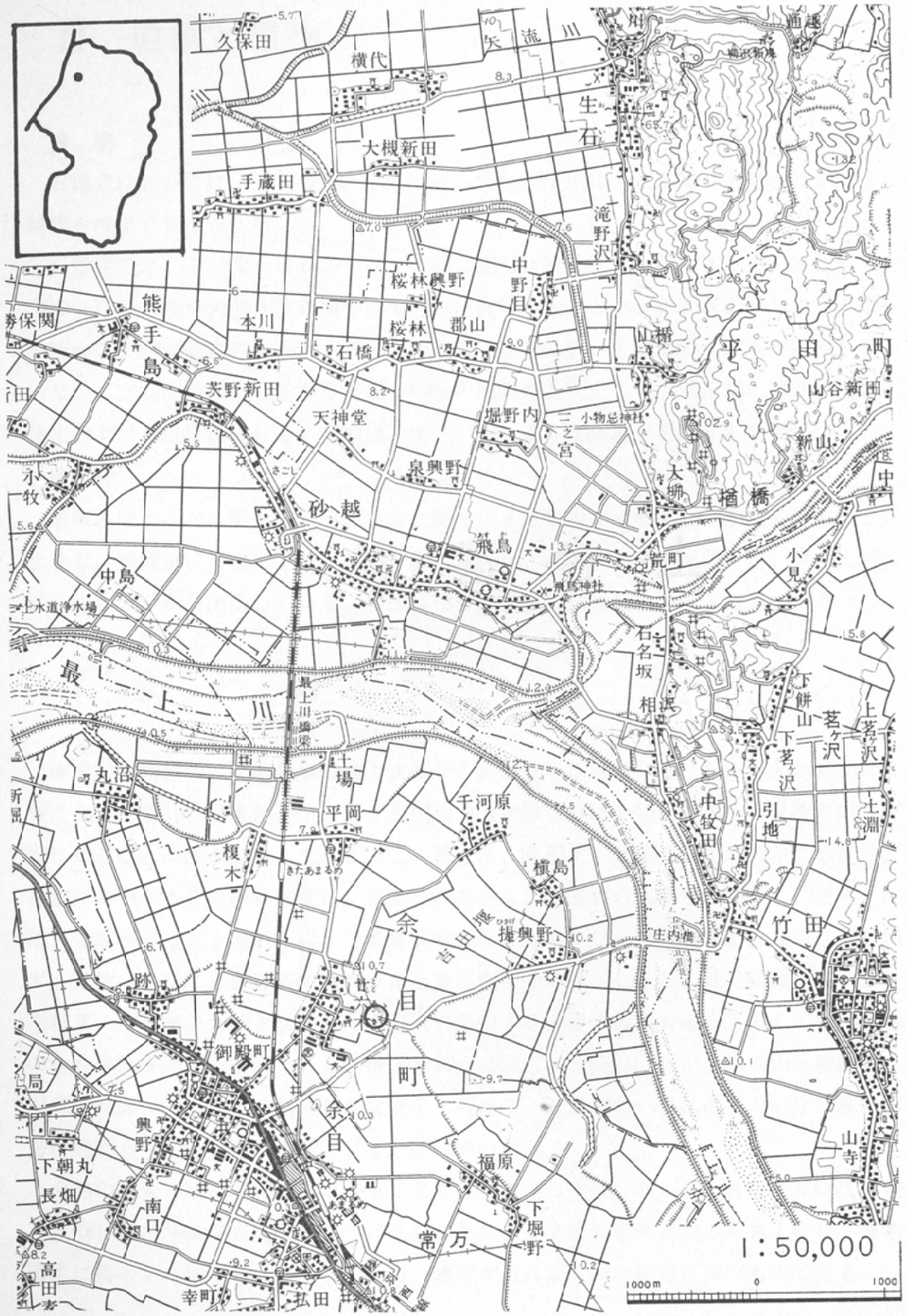
遺物のほとんどは第Ⅰ層から出土し、両地点とも集中する所もなく散在的になっている。出土量は整理箱に⅓程度で破片ないし細片で、ほとんどが須恵系土器の坏　甕で土師器（坏）片がわずかに出土している。時代は平安時代末（12世紀前後）と推定される。

Ⅳ　ま　と　め

本遺跡の調査は、昭和49年の第１次調から始まり本年度の２度にわたり発調査が行なわれたが、結果的には遺跡の中心部が不明確で遺物散布地域を知るのみで、遺跡の内容が明瞭に知ることは出きなかった。またこの地区は、昭和７・８年の堤防が築かれるまで、風水害にあいかなりの影響を受け、堤防改修事業により遺跡の大部分が消壊し、近年では開田・畑地といった土地利用により遺跡ほ破壊度が大であり、遺構の検出をみることが出来ず、遺物（土器片）を採集するのみに止まる程度である。しかし、地元住民によれば、助川部落の中心部の畑地から土器片が濃密に集中する地点が数ケ所あるとのことで、本遺跡の中心部分が調区の東側にあると推定される。またこの部落は、古くは出羽山三神社とくに羽黒山神仰が強く、その関連した社が７ケ所あり、近世においては部落の対岸に荘内藩の舟付場があり水上交通の要所としても開けていた。

今回の調査ではあまり成果が得ることができなかったが、おしはかれば平安時代末期から出羽神仰の関係が密接に結びつけられ、また水上交通の要所としても考えられ、遺物が濃密に集中する地点もあるところから、機会があれば今後の調査を待つものである。

上　台　遺　跡



第59図　位置図

Ⅰ　調査の経緯（第59、60図、図版54・55）

上台遺跡は、山形県東田川郡余目町大字甘六木字上台および下台に所在する。昭和48年度に山形県教育委員会が実施した庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査（註１）によって新たに発見された遺跡である。遺跡は最上川南岸の自然堤防上に細長く延びており、遺跡の西側が上述農道の敷地内に入る。上台遺跡の取扱いについては、県教育委員会と農林部が昭和48年以来数度にわたって協議しているが、昭和51年10月に農道施工計画が具体化になり、同年11月～12月にかけて県教育委員会が事前に緊急発掘調査を実施することになったものである。

調査期日は、昭和51年11月15日から12月３日までの延15日間で、調査には山形県教育庁文化課の佐藤庄一・名和達朗が主に従事した。なお調査の後半には、調査補助員として阿部明彦氏（当時山形大学教育学部専攻生）に応援を得ている。また調査にあたって余目町教育委員会および地元甘六木部落の方々に多大な御協力を得た。記して感謝を申し上げる。

調査は、まず遺跡の範囲のうち路線工事区域に含まれる部分に、路線の中心線を基準に２×２ｍのグリッドを単位とした調査区を設定する。南北の基線をｙ軸、東西の基線をｘ軸とし、ｙ軸線をＮ－26°－Ｗに設定した。座標は第４象限としｘ軸を０～30、ｙ軸を０～120までとし、各グリッドはたとえば「10－50」のように呼称する。調査区の大きさは、60×240ｍの大きさである。

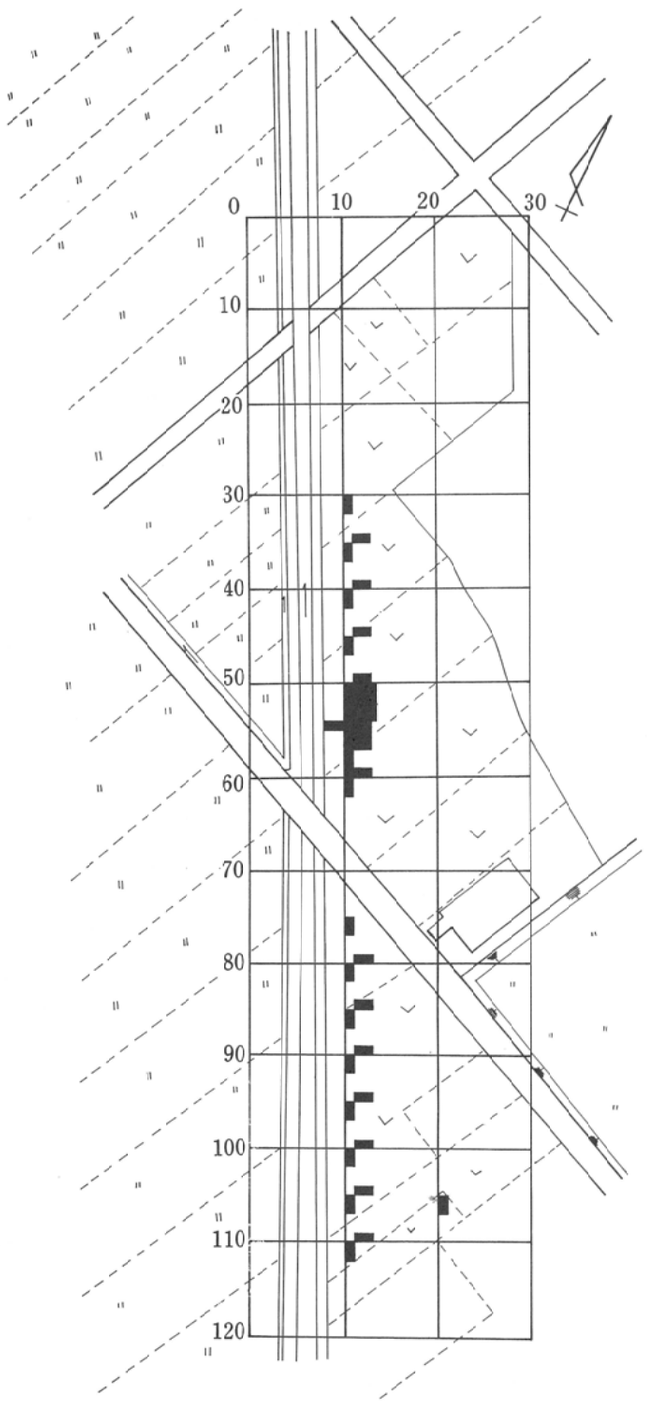
調査方法は、南北は10列、東西は34～109まで10ｍの間隔で２×４ｍのトレンチを基に発掘し、遺構・遺物検出に応じて随時拡張する方式である。

第１週は、前記の方式で粗掘りを行なう。包含層までは以外と浅くほぼ１週間で掘り終える。遺物は、全体に少ないがとりわけ10－50・56付近に集中することが確認できる。

第２週は、遺物の出土傾向に合わせて10－52～62を拡張し、遺構検出のための精査を行なう。さらに遺物の出土範囲をとらえるために105・106－20を発掘、並びに遺跡全体のボーリングによる土層観察を行なう。11・12－54ではＳＸ１、10－50～52では東壁よりに住居跡を想定させる土色変化を確認し、また８・９－54・10－57～61、10－85・86、10－90・91でＳＤ６を検出する。

第３週は、11・12－50～56、13－50～53を拡張しＳＴ２のプランを検出し、ＳＤ６はセクション記録及び覆土を掘り上げる。また遺跡全体の通しセクションを記録する。最終的に検出遺構の平板実測、写真撮影、遺跡全体のレベル記録し、本遺跡の調査を終了する。

註１　山形県教育委員会『庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書』
山形県埋蔵文化財調査報告書第１集　昭和49年



第60図　上台遺跡　全体図

Ⅱ　遺跡の概観

最上川は、庄内平野に入ると東方に位置する出羽丘陵に沿いながら北流し、松嶺付近で大きく西方に蛇行して酒田に至り日本海に注いでいる。そのため平野の各所には自然堤防が形成され、また旧河川の跡を残す湿地帯もみとめられる。

本遺跡は、全目町の北1.5kmにある廿六木部落の東端にあり、最上川左岸の自然堤防上に立置する。標高は、11.7mを測る。下の水田との比高は、6m前後で一見河岸段丘を思わせる。この北端には、下台遺跡（註1）も立地しており、古来比較的安定した地形を示す。現在の地目は、畑地で一部南側が豚舎になっている。遺跡の保存状況は、長芋類の耕作及び西端を旧堰が通っているためその工事により一部破壊され、遺物包含層も大部撹乱が行なわれている。

遺跡の層序（第61図・図版56）は、3つに分けられる。調査区域が平坦な地形のためほぼ土層も水平に堆積している。Ⅰ層からⅢ層までは平均して20～30cmの深さである。ただし、東側の斜面ではⅡ層が傾斜変換線から急激に厚くなっている。

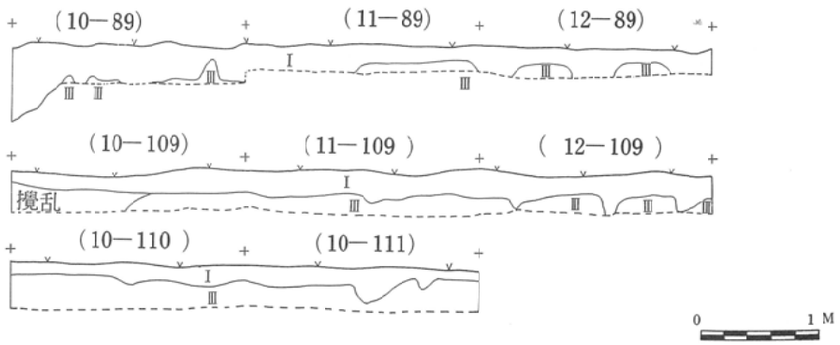
Ⅰ層　耕　作　土　茶褐色微砂

Ⅱ層　茶褐色シルト　部分的に褐色土を含む。遺物包含層である。耕作による撹乱が加えられ、特に遺跡の南側が顕著である。

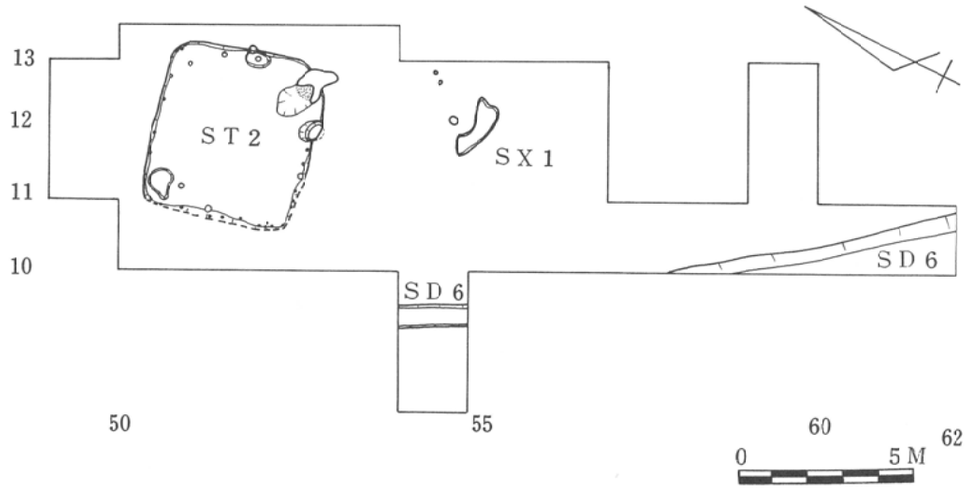
Ⅲ層　黄褐色砂　シルト質で粘性をもつ。

遺物は、Ⅱ層とⅢ層との境界付近に多く。Ⅲ層の上面は、遺構の確認面である。

遺構（第62図）は、10～13—50～55に集中して検出される。その北側は、未検出でまた長芋類によ撹乱が甚しく、未検出である。また南側の方は、10—85・86、10—90・91のSD6を除いて未検出である。調査区が縦長なので20—105・106を拡張して東側の状況を観



第61図　土層図



第62図　遺構配置図

察したが、やはり遺構・遺物とも確認できなかった。そのため遺跡全体の遺構の分布は、前記のグリッドでＳＸ１　ＳＴ２を検出したのみで他は、撹乱による破壊も考えられその分布形態は、不明である。

遺物は、遺構を検出したグリッドが多く南北の両端につれて減少してくる。また出土総数も、395片と少ない。グリッド別にみると、北は10―40から南は10― 100の範囲内に分布し、ＳＴ２よりに多く分布する傾向がある。なお東西の広がりは、西は堰に断ち切られ、東は路線の幅に制約されて不明である。おそらくは、地形の形状に沿って分布していることを考慮すると東西・南北50× 100m の広がりを持つと推定される。

註１　山形県教育委員会『庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書』
山形県埋蔵文化財調査報告書第１集　昭和49年

Ⅲ　遺構と遺物

遺　構

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡１棟、落ち込み遺構１基、溝状遺構１本の３ケ所のみである。

１号落ち込み遺構（図版57）

発掘区域のほぼ中央11・12―49・50区にある。平面プランは不整の長楕円形を呈し、長径1.8m・短径約0.7m を測る。遺構検出面から底面までの深さは５㎝前後で、底面はほぼ平坦である。覆土は１層で、黄褐色砂層に褐色の砂質土を含んだものである。遺構内から赤色の酸化土器坏・甕４片が出土した。性格は不明である。

２号住居跡（第63図　図版57・58）

発掘区域のほぼ中央10～12―15～52区で検出された竪穴住居跡である。平面プランは隅丸方形を呈し、南北4.5m、東西4.9m を測る。東南隅にカマドを有し、カマドの両脇および北西隅に不整楕円形の落ち込みをもつ。床面から壁上面までの高さは５～14㎝でゆるやかな立ち上りを示す。住居跡はⅢ層の黄褐色砂を掘り込んで作られ、遺構内の覆土は１層―炭化粒子を含む褐色質微砂、２層―炭化粒子・焼土を含む暗褐色砂質土にわかれる。両覆土ともカマド周辺を除いては、遺物が少量しか見られなかった。床面はⅢ層を軽く叩きしめただけである。壁添いの床面は叩きしめが弱い。

住居跡内から主柱穴ないし壁柱穴を構成すると思われるピットが30個検出された。カマド（ＥＬ３）は、基部の両袖下半が残存し、前庭部に長径約１ｍ、深さ５㎝前後の軽い落ち込みを有する。煙道は基部から約60㎝程浅く伸びるだけで、煙出し穴等は認められなかった。カマドの袖部と前庭部から赤色の甕形土器（第　図　～　）が　個体散乱して発見された。住居内の３つの落ち込みのうち、ＥＰ５・６に比較して掘り込みが深く、やや壁側に内傾する。いわゆるカマド脇の貯蔵穴として理解されるものである。ＥＰ５・６は床面から３～６㎝程の浅い落ち込みを持つもので、ＥＰ５から赤色の甕形土器片が少量発見された。

６号溝状遺構（図版56）

２号住居跡の南西部に16m 程細長くのびる溝状遺構で、幅70㎝・深さ30㎝前後を測る。覆土は２層にわかれ、１層が濁黄褐色砂質土、２層が暗黄褐色砂質土である。遺物は覆土１層から赤色土器および須恵器の甕形土器が数片出土している。本溝状遺構は地層の観察

第63図　２号住居跡

などからかなり新しい時期のものと思われる。

遺　物

本遺跡から出土した遺物は、土器片が総数 395片、石器が１点出土した。土器は、遺構内特にＳＴ２覆土内出土が大半を占め、そのほとんどが破片である。種別では、須恵器・赤色器（註１）土師器があり、量的には５％、70％、25％である。

須恵器（第64図１・２・４　図版59）

ロクロないし、叩きによる成形後、環元炎焼成を行なった土器群である。器形は、坏・壺・甕形土器があるが、坏以外は小破片で形態は不明である。

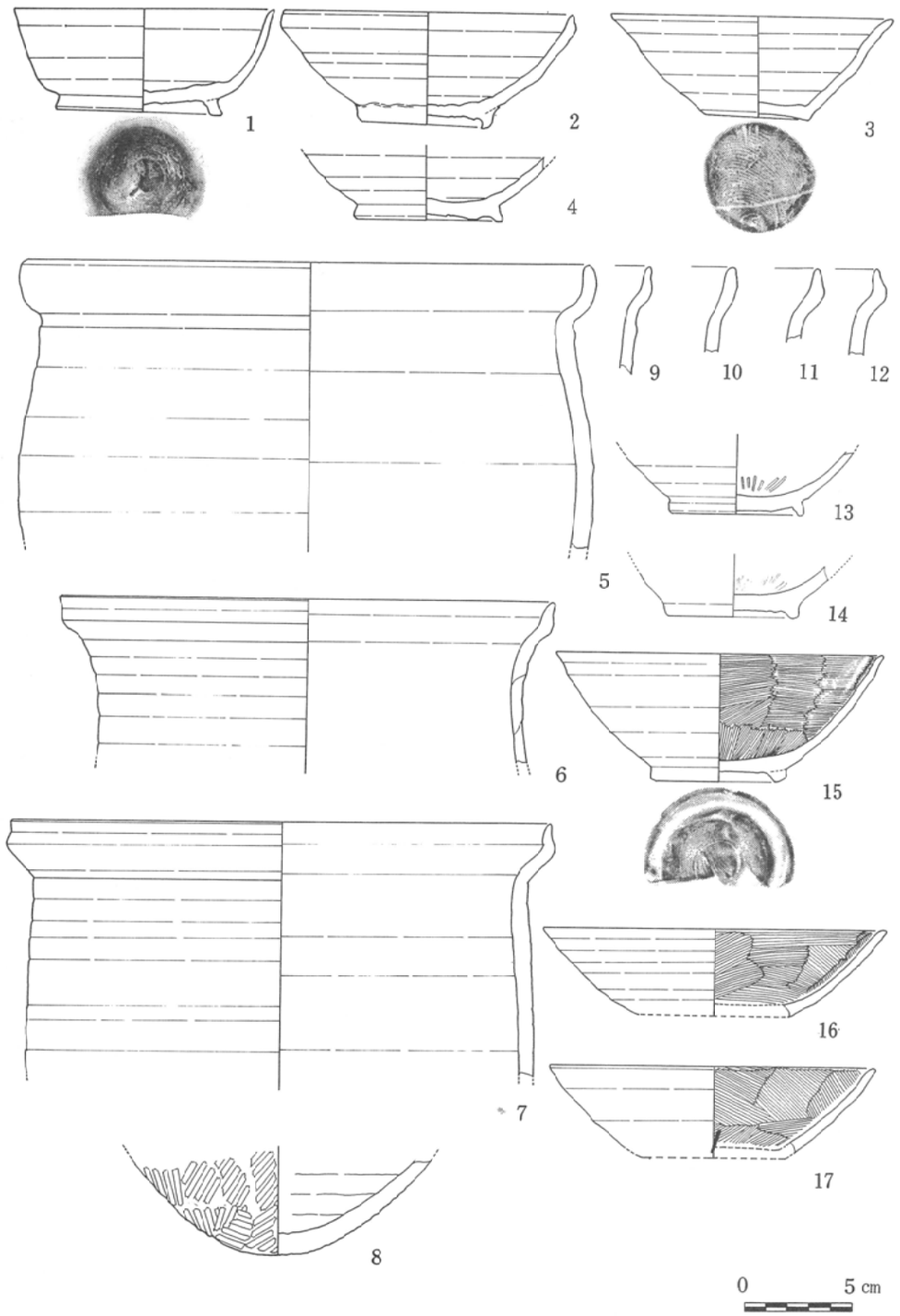
坏形土器は、ロクロ成形で糸切り（２・４）と篦切り（１）がある。高台付が多く、その内外周辺はナデ調整されている。器形の知れるものは３片でうち１片は下半部のみである。１は、口径12.1cm、底径7.7cm、器高4.7cm、器厚0.3cmを測る。底部と体部との境界は丸く、体部は急角度で直線的に開く。高台の高さは0.5cmで外側に張り出るように付けられている、２は、口径13.4cm、底部6.0cm、器高5.3cm、器厚0.4cmを測る。体部は緩かに立ち上り口縁下１cmの所で外側に肥厚し、内弯するように開く。また、内部底面に巻上げ痕が観察される。高台は高さ0.4cmを測り、端部が内弯している。４は、底径6.9cm、器厚0.5cmを測る。高台は高さ0.3cmと低く、やや上げ底の底面外周に斜位に付けられている。色調は各個体とも褐色気味で、青灰色を呈するのが全体に少ないようである。なお２・４はＳＴ２内ＥＰ４－Ｆ２より出土している。

赤色土器（第64図３・５～12　図版59・60）

ロクロないし叩きによる成形後、酸化炎焼成を行なった土器群である。本遺跡で最も出土量が多く、器形は、坏、甕形土器がある。

坏形土器（３）は、ロクロ成形で糸切り離しである。回転方向は、右回りである。口径13.1cm、底径4.8cm、器高4.6cm、器厚0.5cmを測る。口径に比して底径が小さく、体部は少しうねりを持ちながらやや外反気味に開く。底部は、少し上げ底である。明赤褐色の色調で胎土に粗砂を含む。ＥＰ４－Ｆ４より出土。

甕形土器（５～12）は、器全形を知れるものが少ないが口径23～26cm、器厚0.5cm前後の大形甕である。体部は膨み（５）あるいは直線的（６・７）に立ち上り、頸部でくびれて大きく外反しさらに口縁部で内弯するもの（５・10・11）、口縁上端にかけて少し外反するもの(６・７・９・12)とがある。底部は、丸底（８）と平底がみられる。器体上部は巻上げ後ロクロ成形され、下部は叩きしめを行なうのを特徴とする。８の器面には平行叩き



第64図　遺跡出土土器

目が認められる。しかし、裏面にあて痕は認められず平滑に仕上げられている。色調は白燈色、明赤褐色を呈し、胎土にに粗砂を含む。なお本遺跡ではＳＴ２－ＥＬ３前庭部よりまとまって出土している（６～８）

土師器（第65図13～21　図版59）

坏、甕形土器の器形がある。器全形を知れるものは、坏形土器２個体（15・18）のみで全て破片である。本遺跡では、特にＳＴ２－ＥＬ３とＥＰ４よりまとまって出土している。

坏形土器は、内面が丁寧なヘラミガキののち黒色化処理されている。口径が約19cm前後で器高が比較的高いもの（18・19）と、口径約15cm前後と少し小形のもの（13～17）がある。体部はロクロ成形の痕がみられ、内弯気味に立ち上がり、底部の切り離しは糸切りで回転方向は右回りである。また高台が付けられ、その内外周はナデ調整されている。底面との高さは、0.2cmという低いもの(13・18)と0.4cm前後のもの（14・15）とに分けられる。底径は、６～７cm前後、器厚は、0.3～0.6cmにまとめられる。胎土に粗砂を含む。

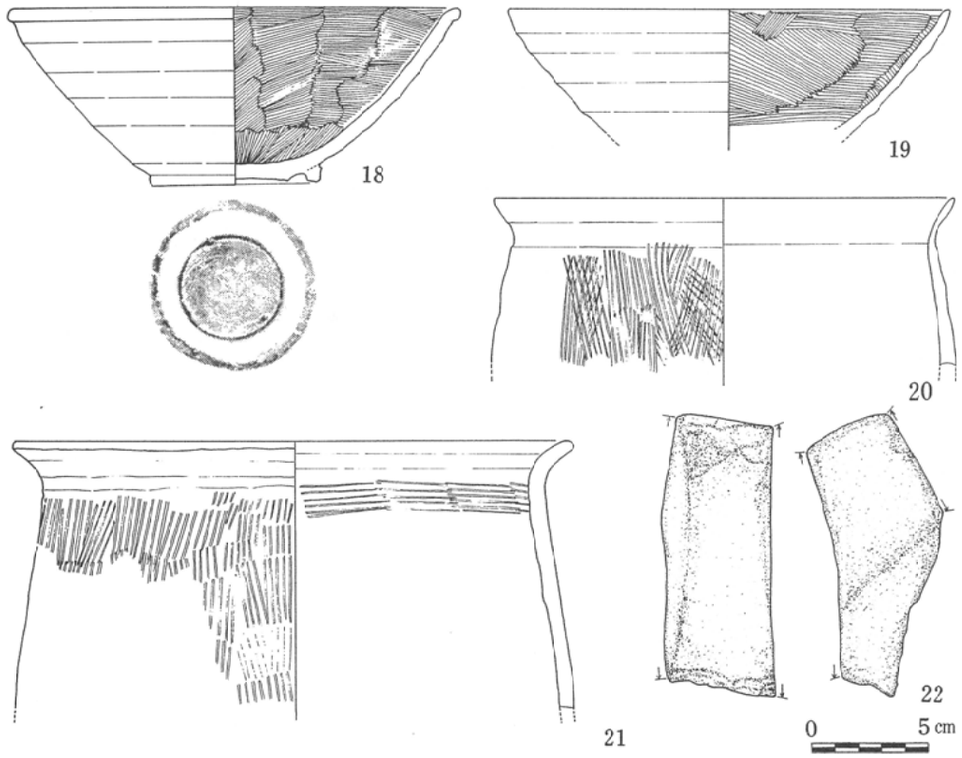
甕形土器は、全て口縁部破片のみでＥＬ３より出土している。器形は、やや胴張りの体部から頸部でくびれ、そのまま外反して開く土器である。さらに頸部は、横方向にナデ調整され、体部には縦位ないし斜位方向にハケ目が施され、21は頸部内面にも横方面に認められる。ハケ目の１単位幅は、約2.5cm内外である。

20は口径19.6cm、器厚0.3～0.7cm、21は口径23.8cm、器厚0.8cmを測る。色調は黄褐色ないし赤褐色で、胎土に粗砂を含む。器下部を欠いているので器全形、器高その他は不明である。

石　器（第65図22　図版59）

石器は、10－52－Ⅱより砥石が１点出土している。不整な角柱形を呈する砂岩を用いている。各面をそれぞれ使用しており、そのため一部磨り減ってくぼんでいる所も認められる。長さ11.5cm、厚さ4.5cm、重量320g を測る。

註１　ロクロ成形で糸切り無調整の坏形土器及び、器体上部は巻上げ後ロクロ成形、下部は叩きしめを施す甕形土器で酸化炎焼成によるものをそれぞれ赤色土器として分類する。技術的には須恵器の範疇に入ると思われるが、器形的に一定のまとまりを持つことと、酸化炎焼成を目的としていることに着目しして類別を行なった。



第65図　遺跡出土土器・石器

Ⅳ　ま　と　め

今回調査した上台遺跡は、庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査によって発見され、同事業にかかる緊急調査として昭和51年11月15日から12月３日まで延15日間調査が行なわれ、新道路線幅内 328m²を発掘した。

本遺跡は、余目町廿六木部落の東端の畑にあり、最上川左岸の自然堤防による台地上に立地することから、調査当初から遺構の保存状況が良好で、その検出が注目された遺跡である。今回の調査は、部分発掘なので遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、一応の成果を得ることができた。

土層は、３層に分けられる。上から耕作土、茶褐色シルト、黄褐色砂の順で、遺物包含層はⅡ層であるが、主としてⅢ層との境界付近に多く出土をみた。遺物は、調査区の中央

とりわけＳＴ２付近に多く出土してる。土器は、耕作による攪乱を受けたためか全体的に遺存状況が良く、一括土器、完形土器が少ない。住居跡内では、覆土内よりもＥＬ３前庭部とＥＰ４覆土内に多く出土している。種別では、須恵器、赤色土器、土師器に分けられ量的に５％、70％、25％の順である。須恵器は、一般に青灰色よりも褐色気味の色調で、高台付の坏形土器が多く、内部底面に巻上げ痕を残すのもみられる。赤色土器は、坏と甕形土器があり、ロクロないし叩きによる成形を行ない。酸化炎焼成された土器である。坏形土器は、口径に比して底径が小さくやや外反気味に開く器形である。甕形土器は、体部が少し膨むか直線的に立ち上り、頸部でくびれて大きく外反しさらに内弯する器形で、器体上部を巻上げロクロ成形、下部は平底か丸底で叩きしめが施される。このような特徴を持つ甕形土器は、新潟県蛇山遺跡（註１）に類例があり、県内では山形市西蔵王三本木沼周辺に出土例（註２）がある。土師器は、内面にヘラミガキと黒色化処理を施された高台付坏形土器と、胴張りの体部で頸部から大きく外反する形態で、体部器面にはけ目を施す甕形土器とがある。両方ともＳＴ２内にまとまっており、前者はＥＰ４、後者はＥＬ３と出土位置が分けられる。以上の土器群は、時期的には平安時代末頃（12世紀）に中心を置くものと考えられる。

遺構は、住居跡（ＳＴ２）、性格不明の落ち込み（ＳＸ１）、溝状遺構（ＳＤ６）が検出された。ＳＴ２は南北4.5m、東西4.9mの隅丸方形プランで、東南隅にカマド(ＥＬ３)を配している。確認面はⅢ層上面である。柱穴は、壁柱穴を主体に30個めぐる。床面には３つの落ち込みがあり、貯蔵穴の機能が考えられる。床面は、軽く叩きしめただけである。時期は、本遺跡出土遺物の88％が住居内より出土しており、その検討から平安末頃に位置づけられよう。庄内平野では、遺物の出土地点は各所にみられるが遺構、とりわけ住居跡を検出し得たのは他に１例（註３）あるのみで、今回の検出は同平野の開発及び集落の変遷を考える上での貴重な資料といえよう。ＳＸ１は、不整楕円形の浅い落ち込みでＳＴ２との関連、その性格も不明である。ＳＤ６は、遺跡西側を走る旧堰跡の工事による土採り跡と考えられる。

註１　新潟県教育委員会『北陸高速自動車道埋蔵文化財調査報告書蛇山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第６昭和51年

註２　山形大学講師　加藤　稔氏の御好意により、出土遺物を筆者らが、実見した。

註３　山形県教育委員会『岡山』山形県埋蔵文化財調査報告書第18集　昭和47年

図　　版

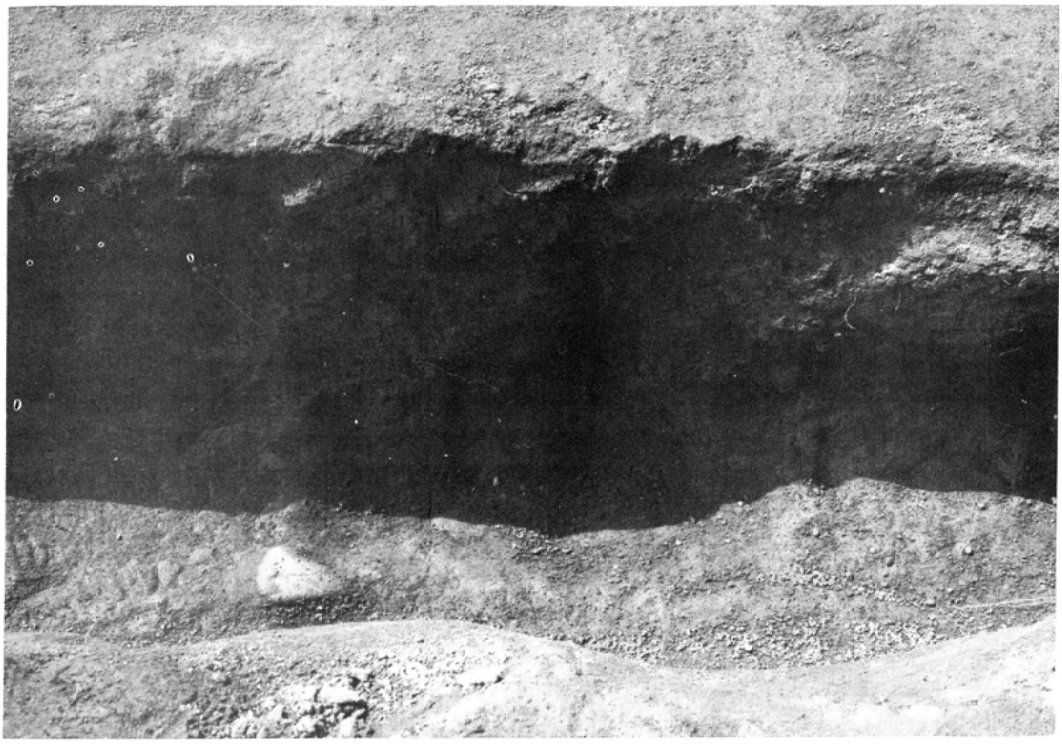
的場遺跡　Ⅱ区近景

的場遺跡　Ⅲ～Ⅴ区近景

的場遺跡　3号住居跡発掘風景

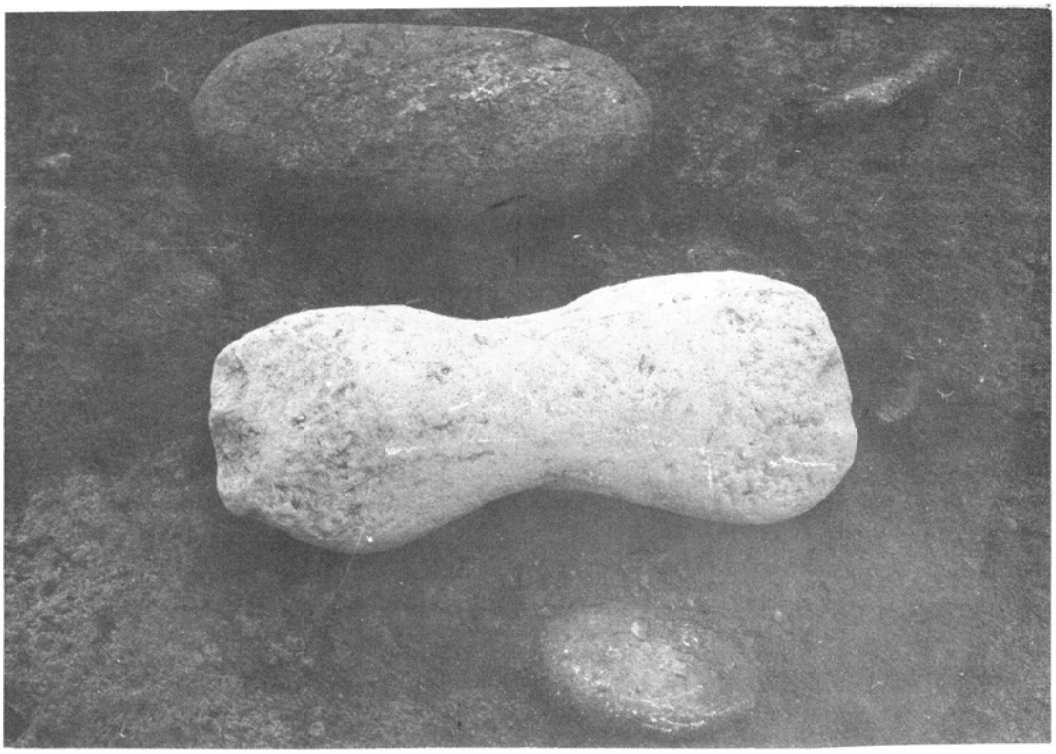
的場遺跡　遺構全景

的場遺跡　1号住居跡全景



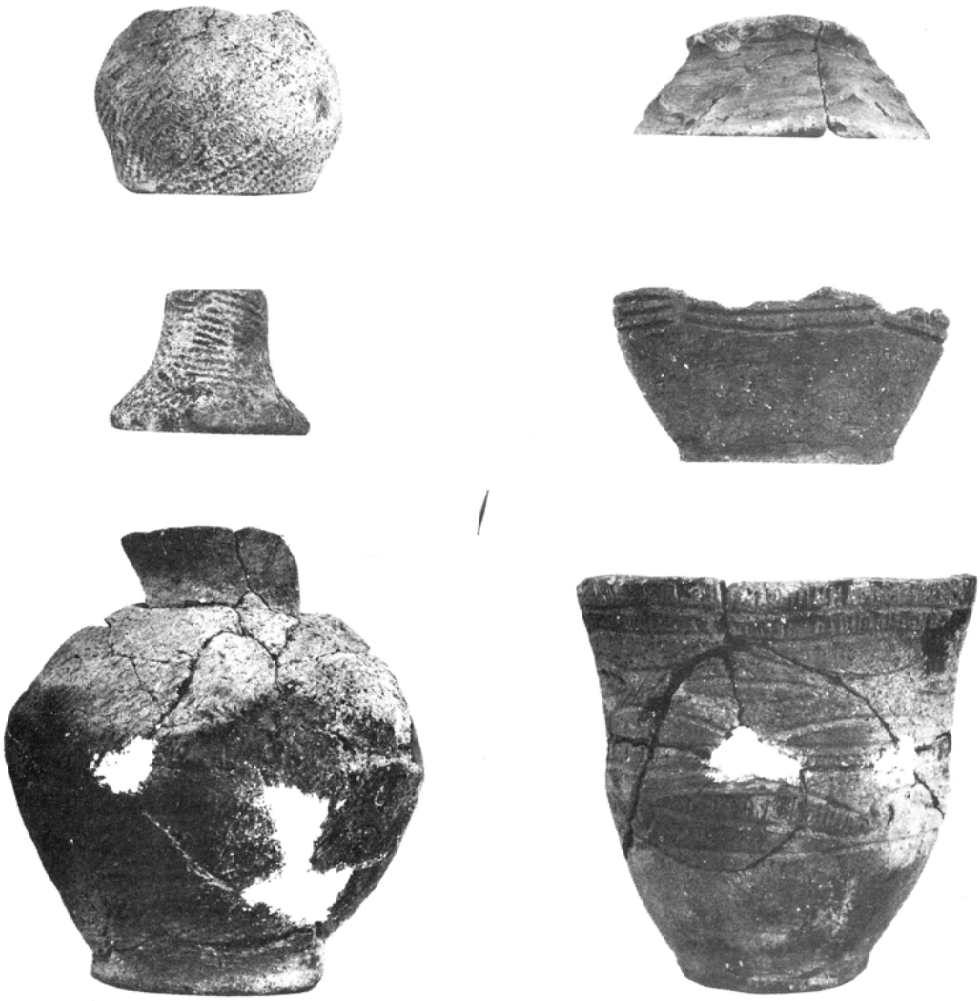
的場遺跡　1号住居跡壁・周溝

的場遺跡　1号住居跡土器出土状況

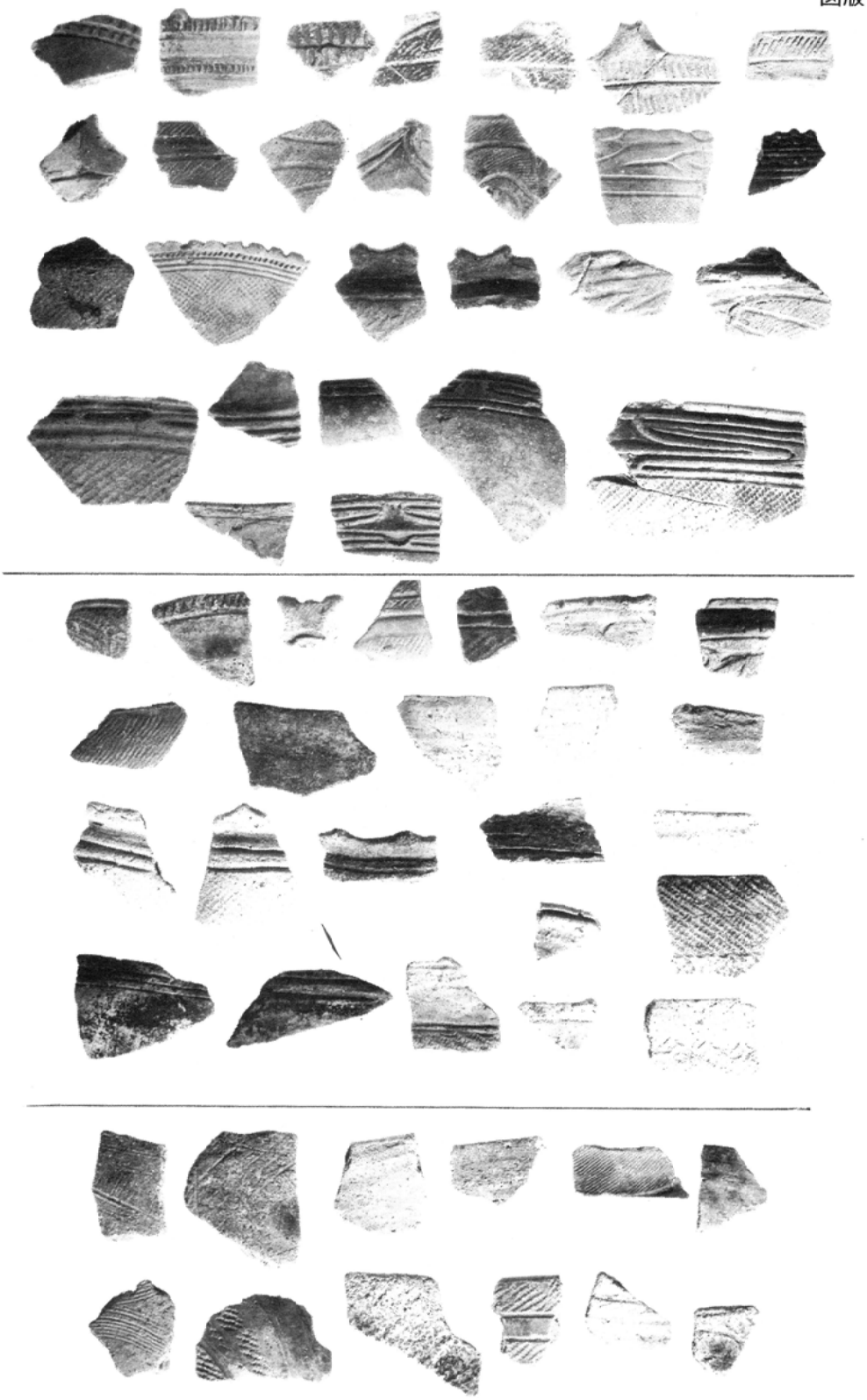


的場遺跡　1号住居跡石器出土状況

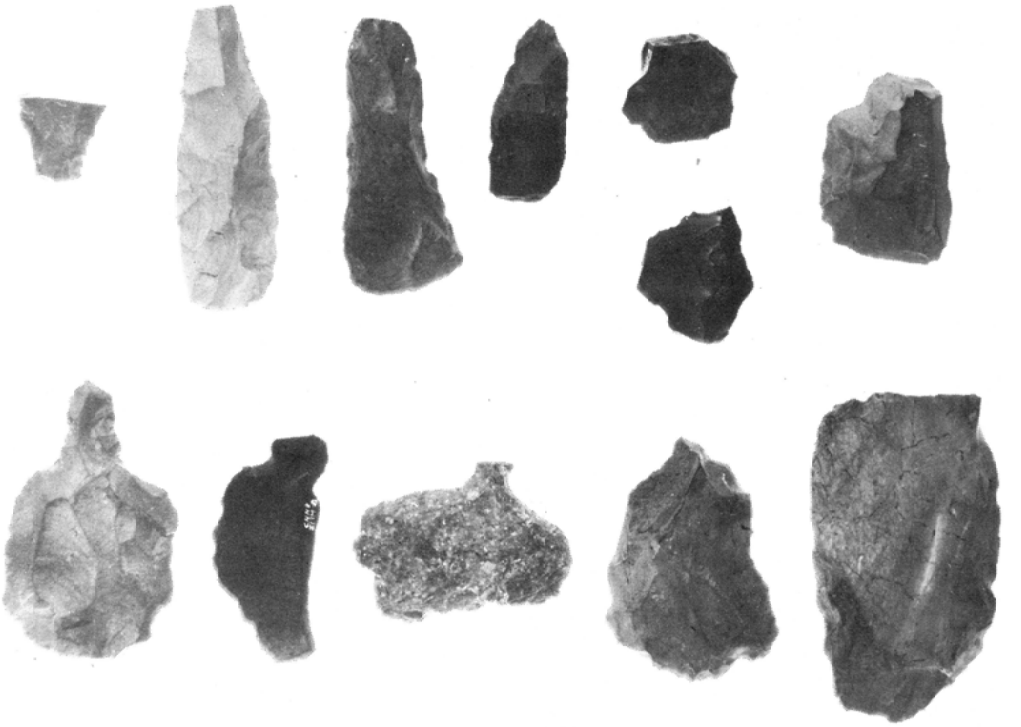
的場遺跡　土偶・注口土器

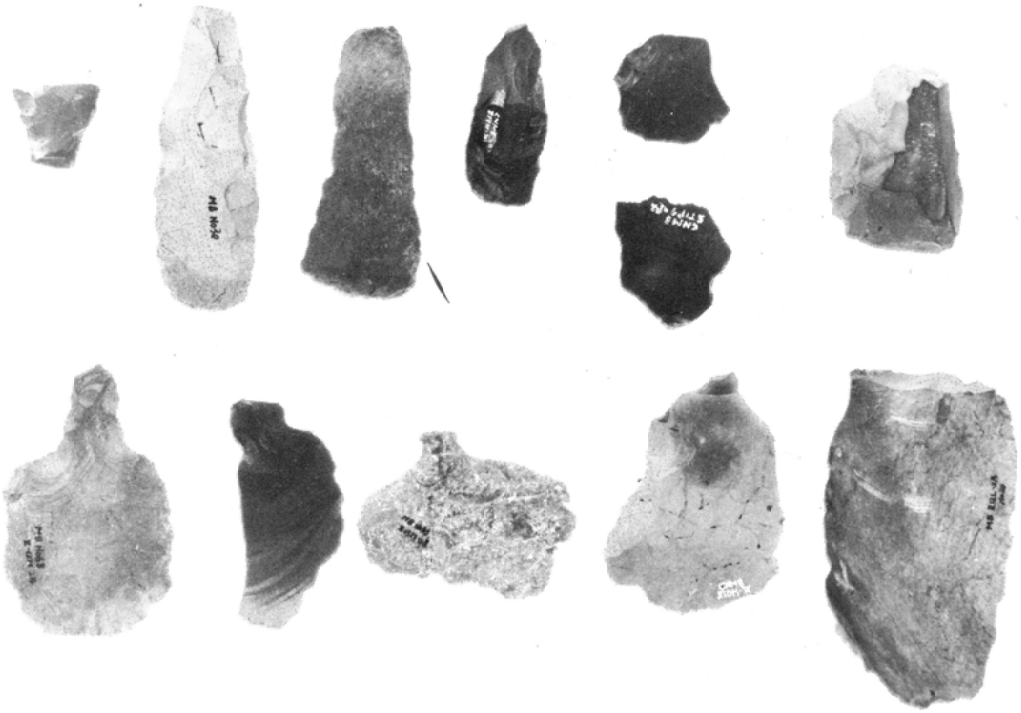


的場遺跡　1号住居跡・6号土壙出土土器

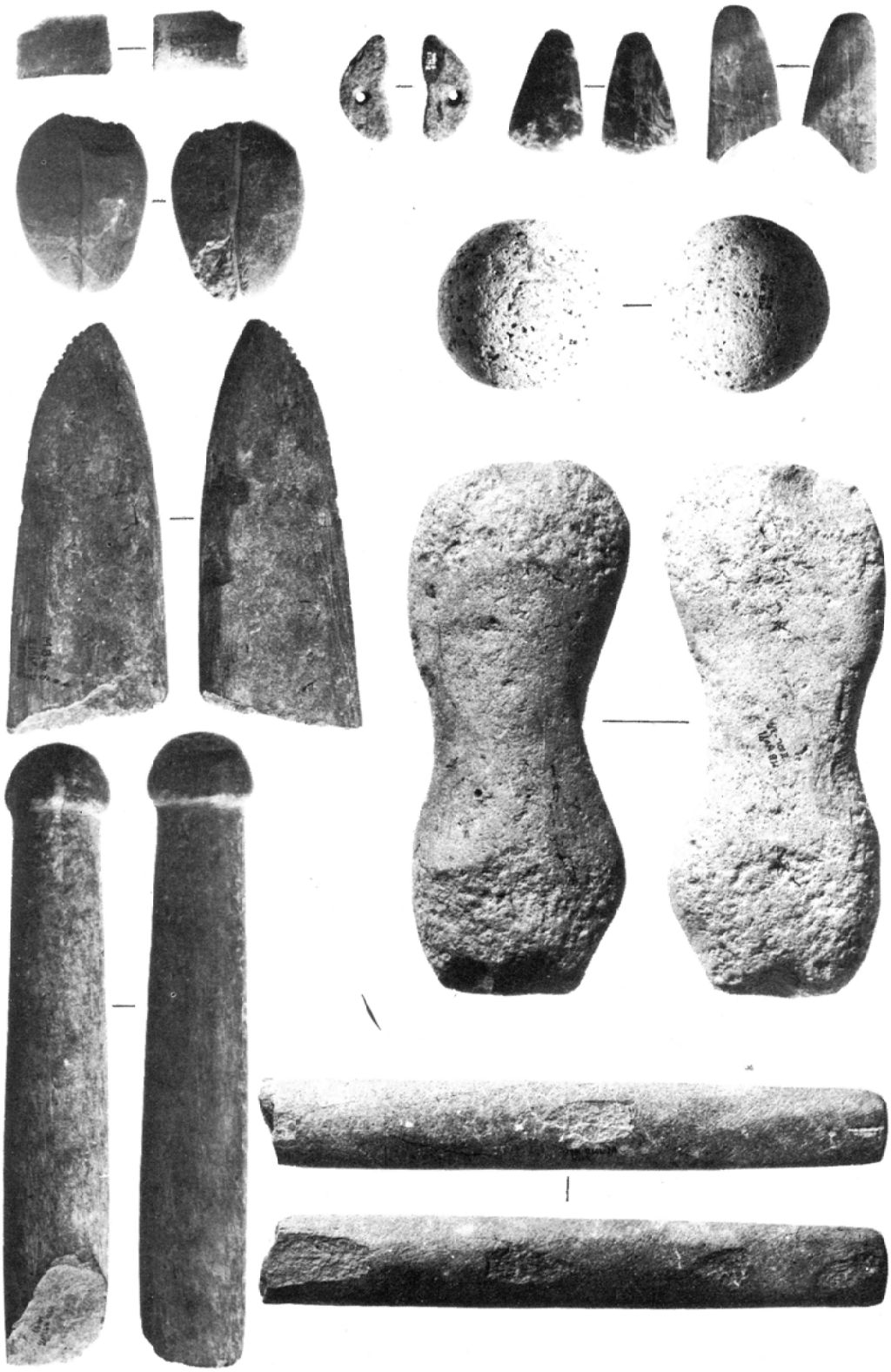


的場遺跡　1号住居跡覆土層・周溝・ピット出土土器





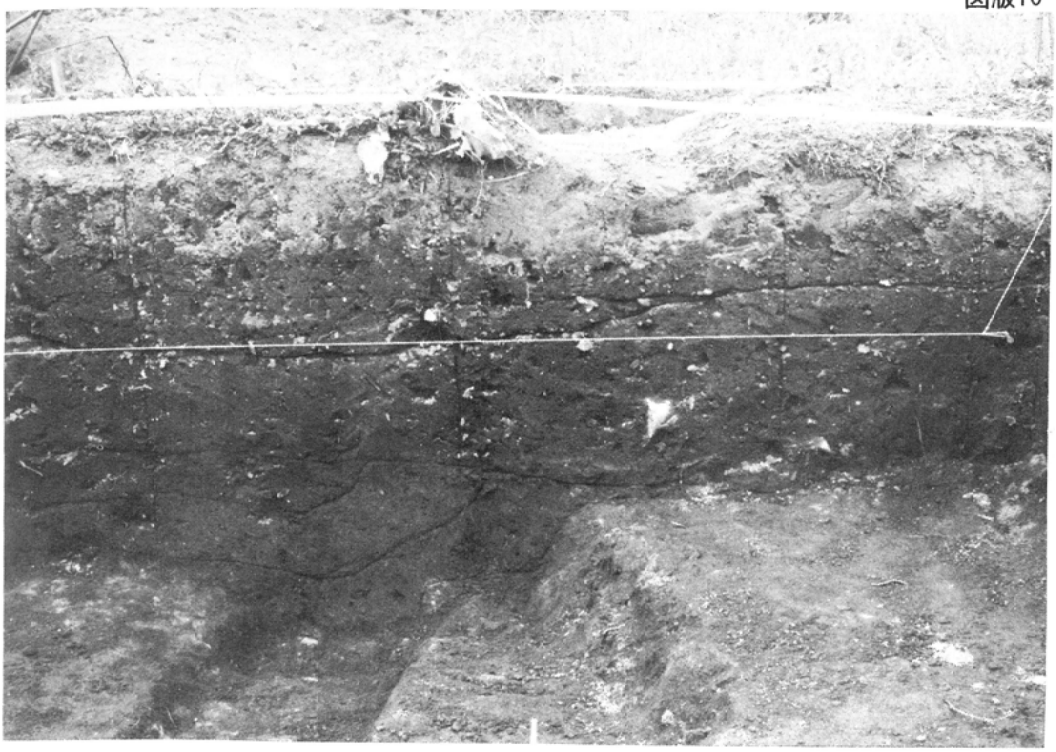
的場遺跡　1号住居跡出土打製石器



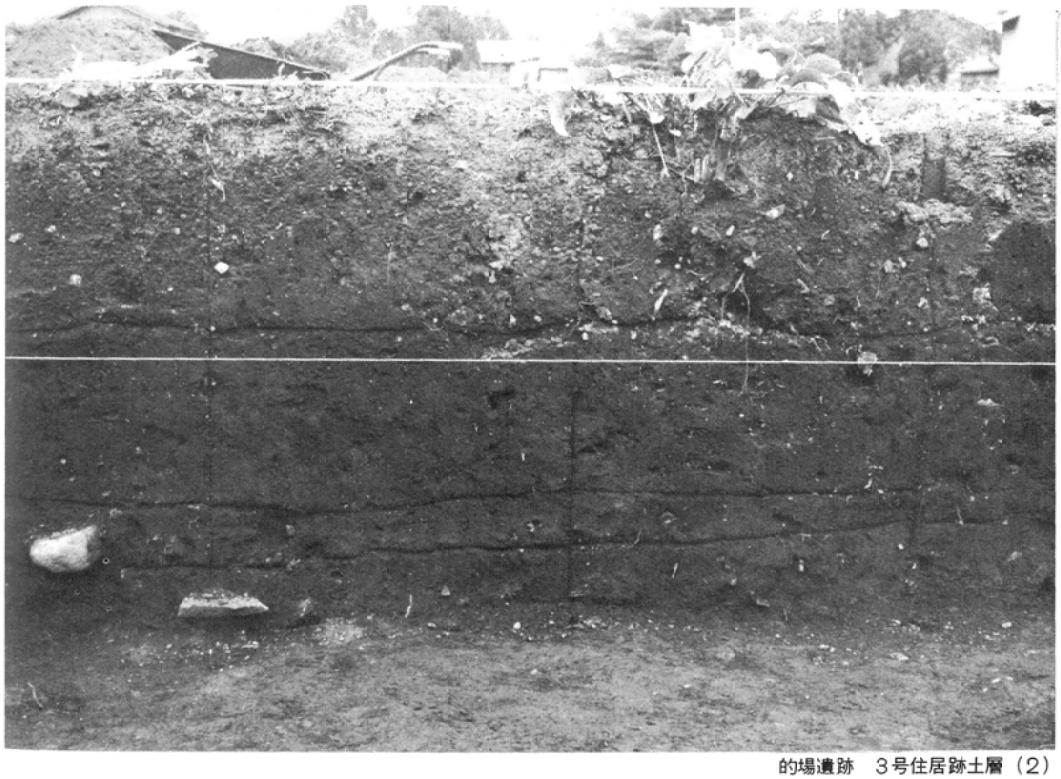
的場遺跡　1号住居跡出土石製品

的場遺跡　３号住居跡全景（1）

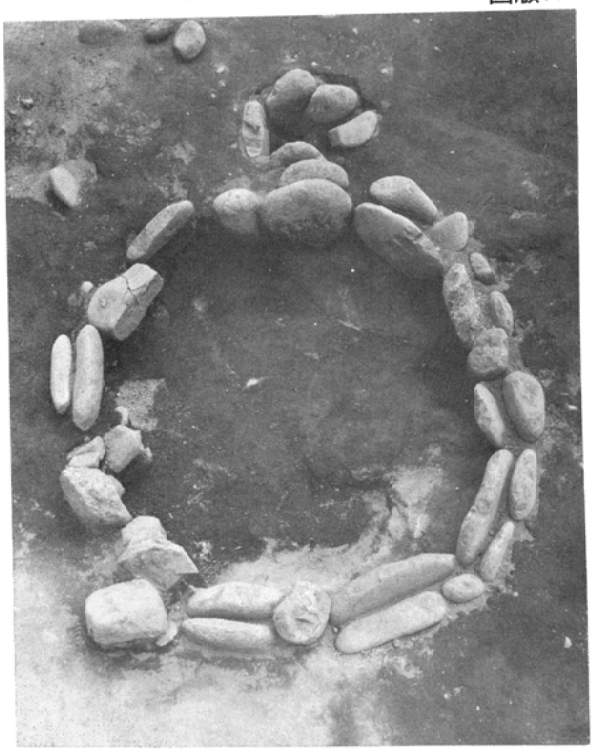
的場遺跡　３号住居跡全景（2）



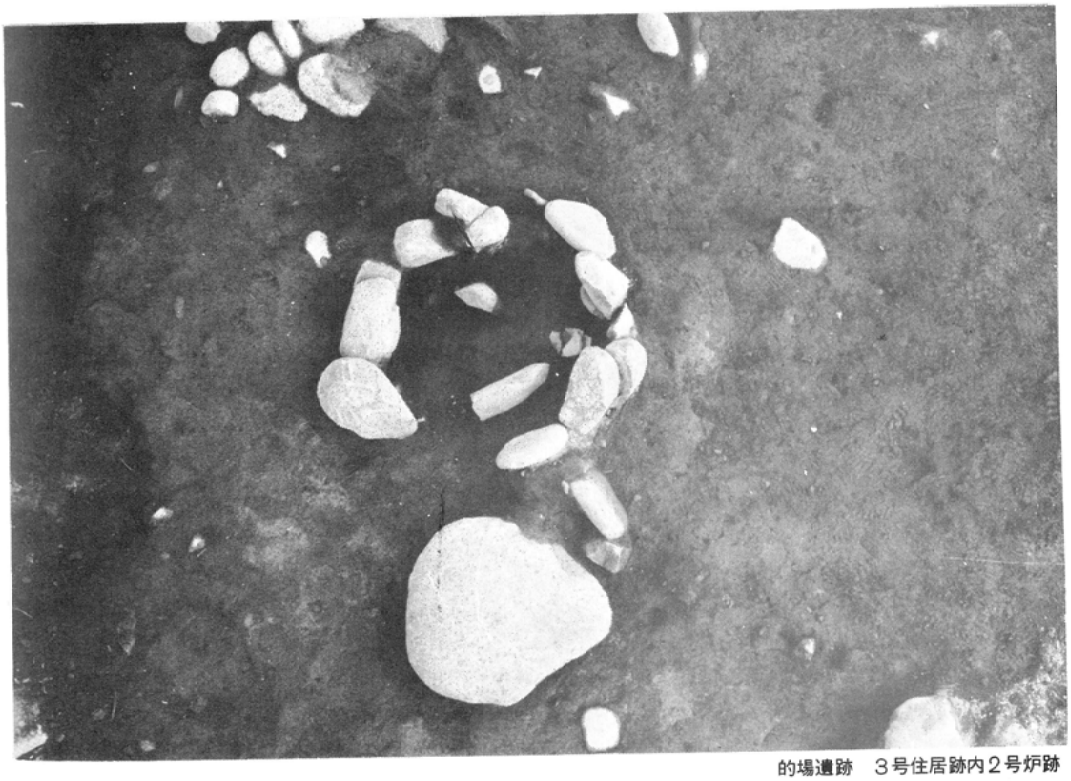
的場遺跡　３号住居跡土層（1）



的場遺跡　３号住居跡土層（2）

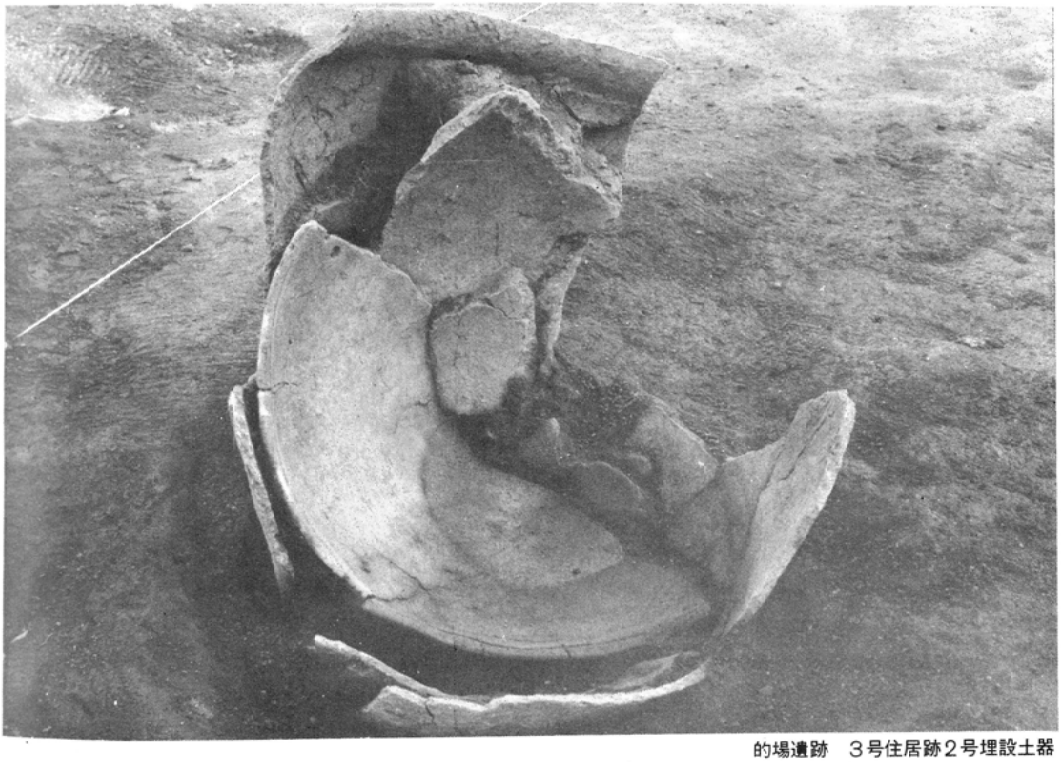


的場遺跡　3号住居跡内1号炉跡



的場遺跡　3号住居跡内2号炉跡

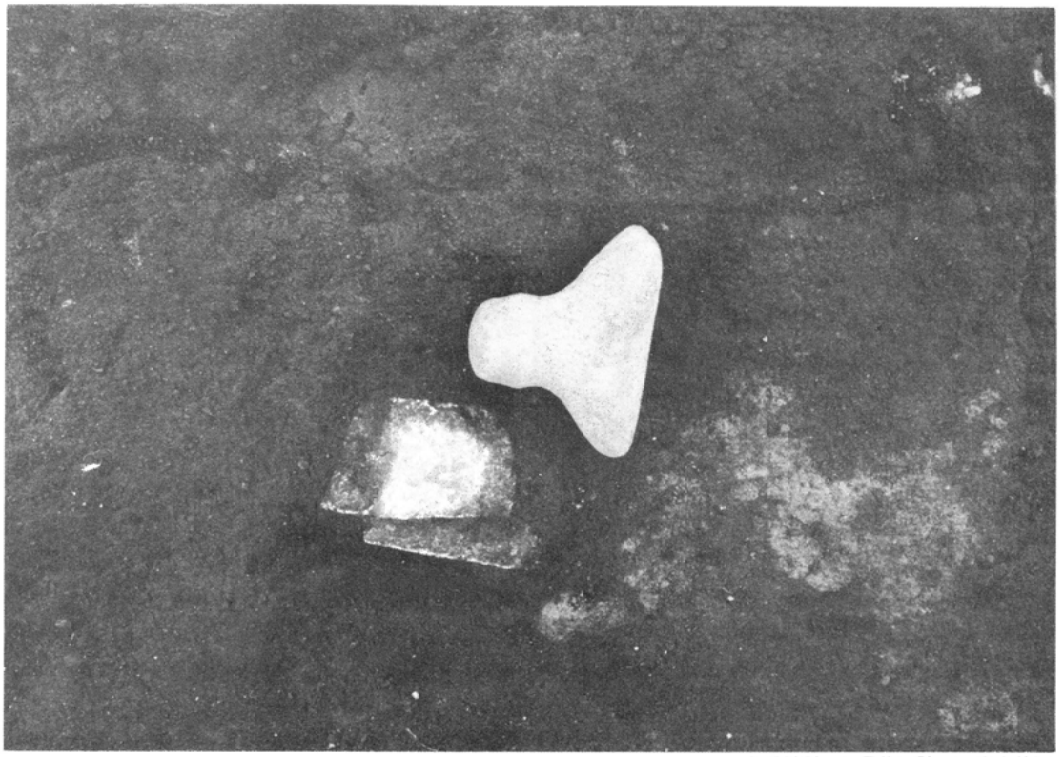
的場遺跡　3号住居跡埋設土器出土状況（ＥＵ１・２）



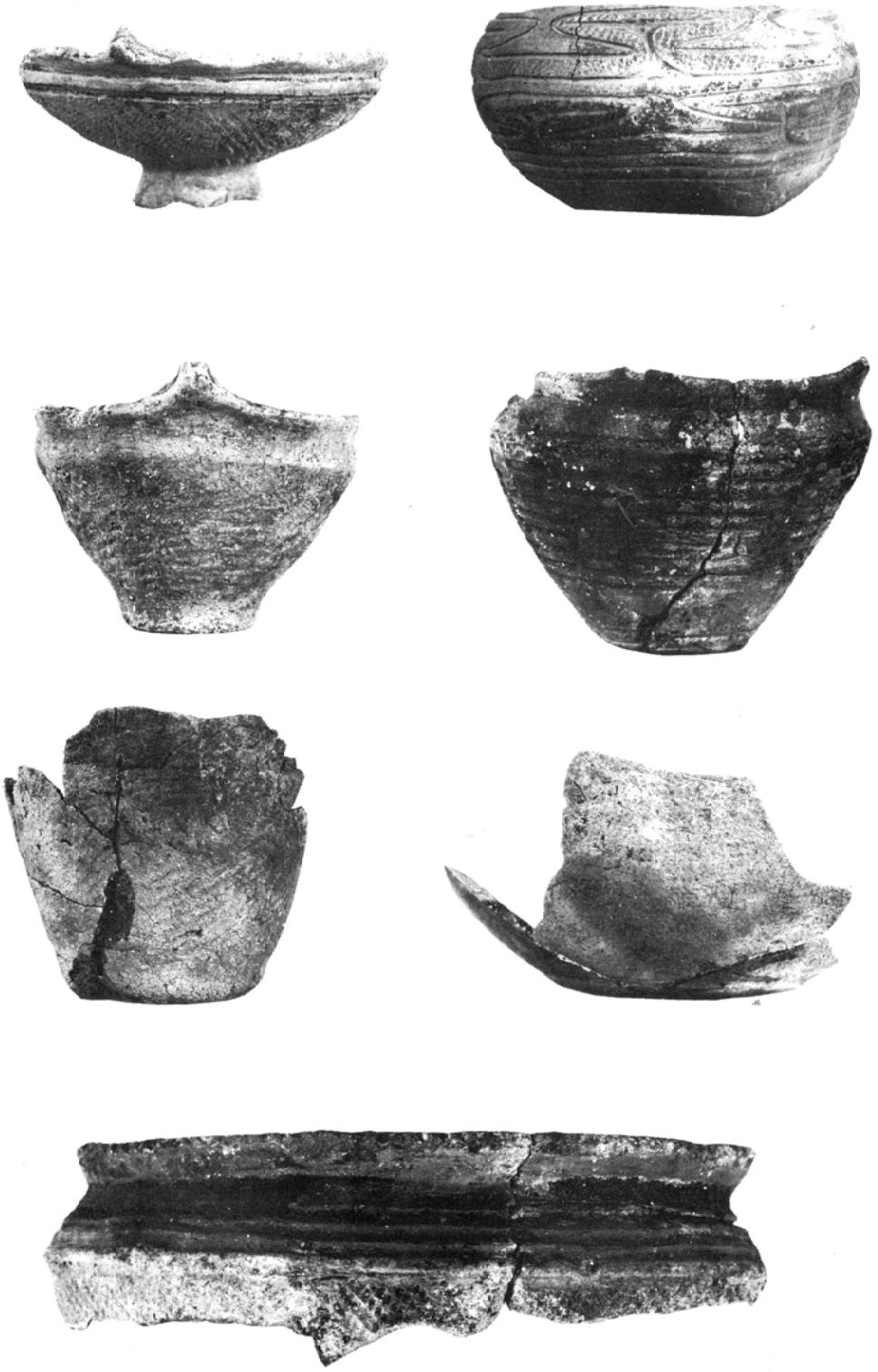
的場遺跡　3号住居跡2号埋設土器

的場遺跡　３号住居跡１・２号埋設土器

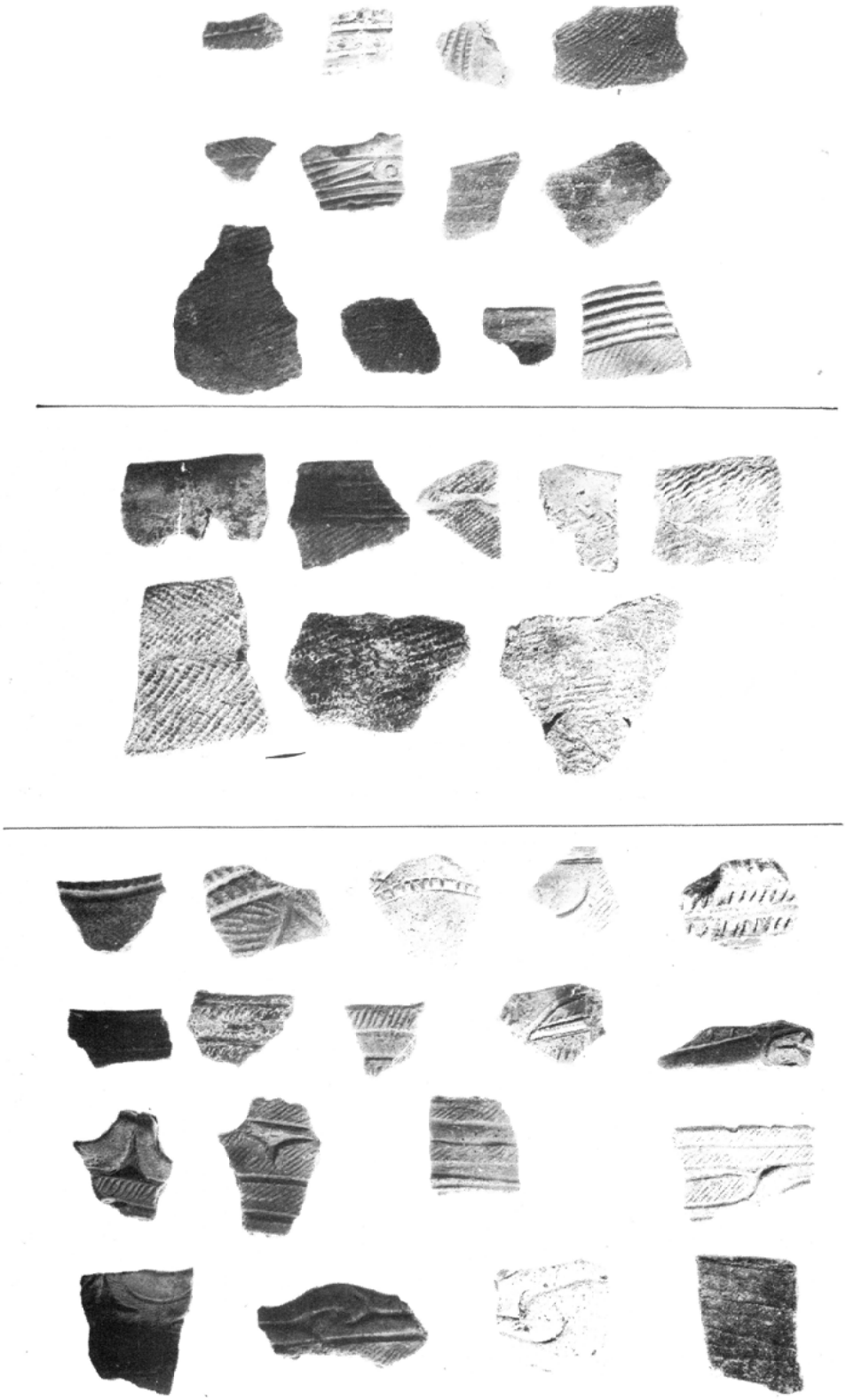
的場遺跡　３号住居跡土器出土状況



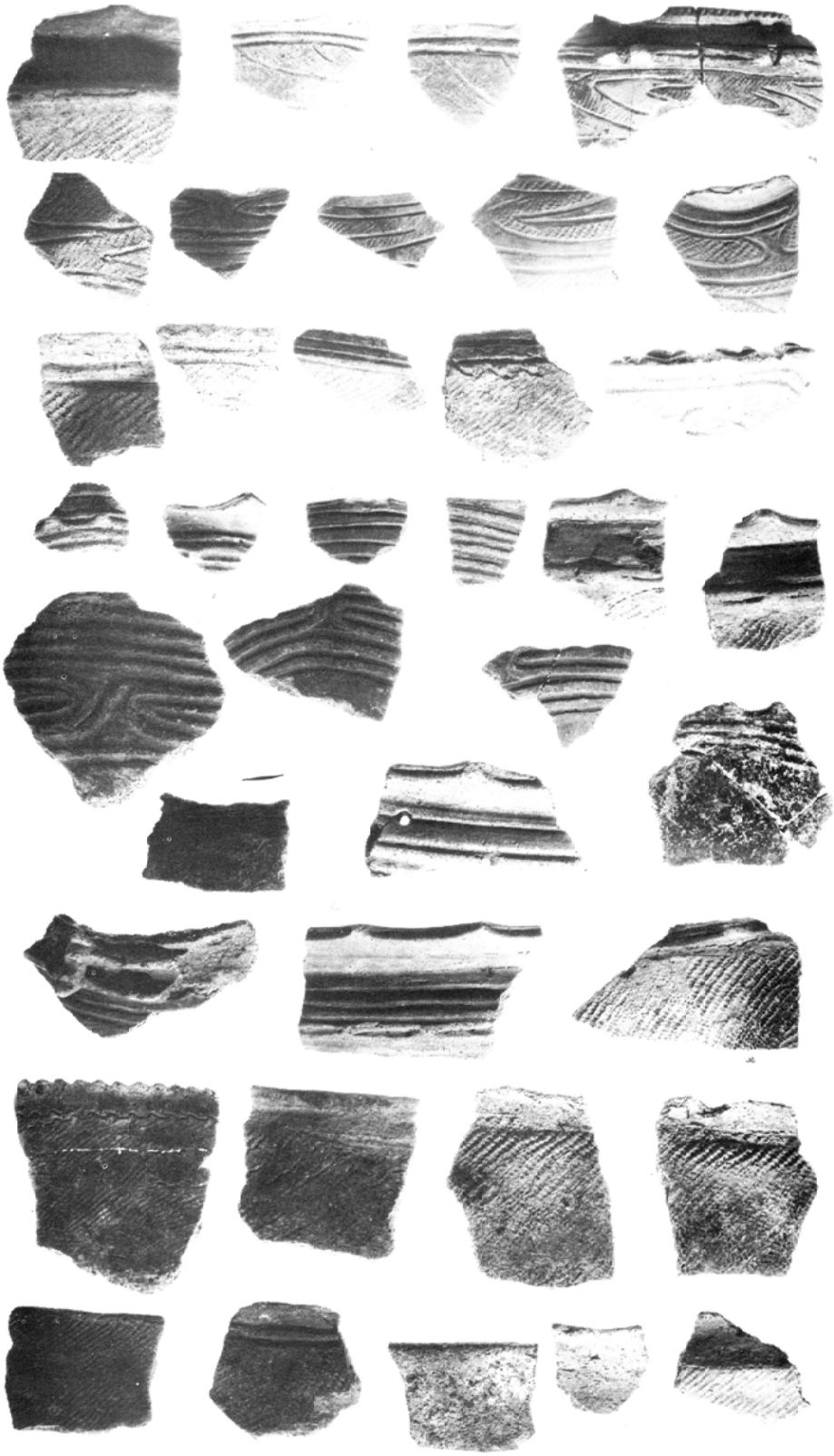
的場遺跡　３号住居跡石冠出土状況



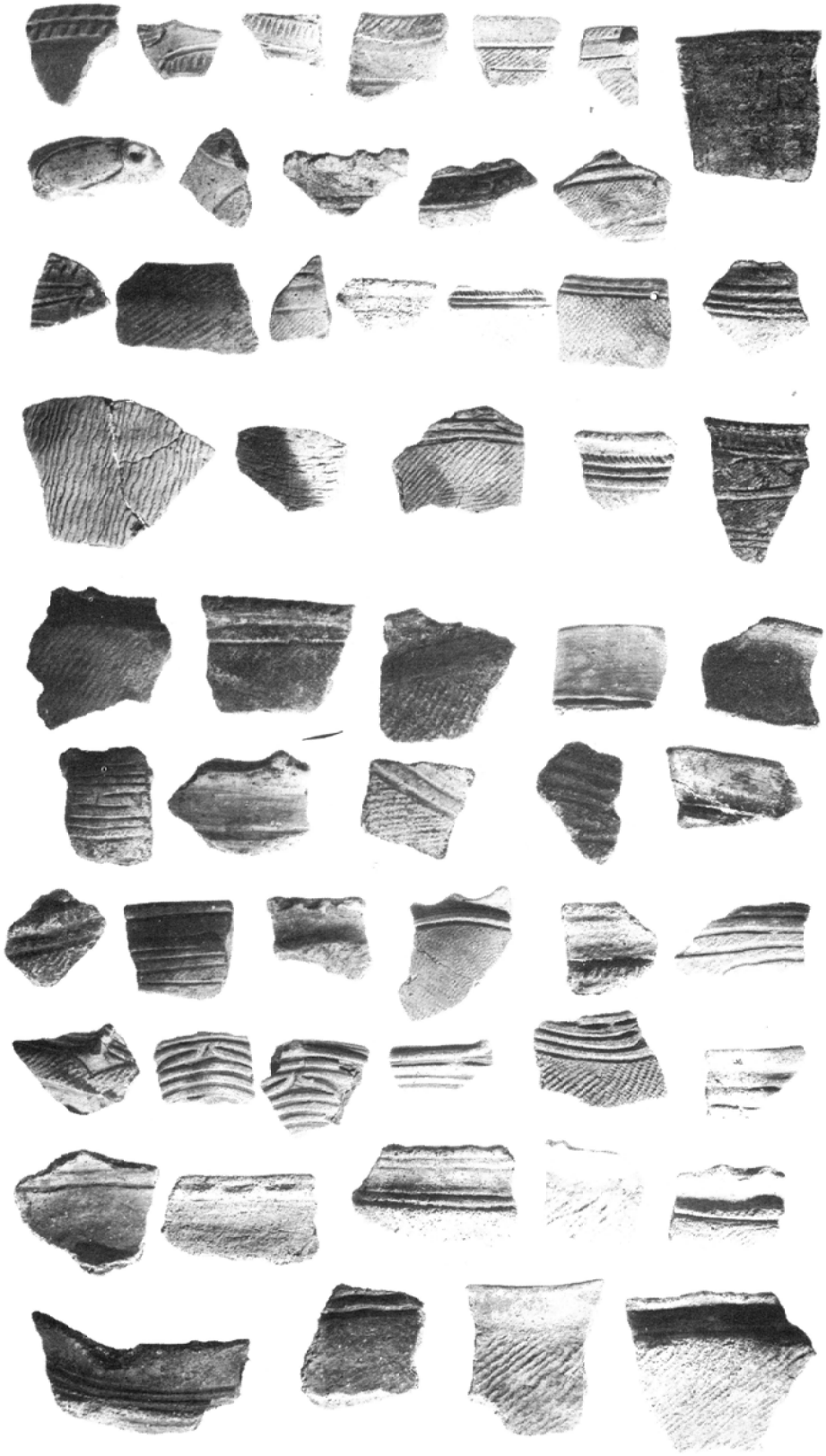
的場遺跡　３号住居跡出土土器



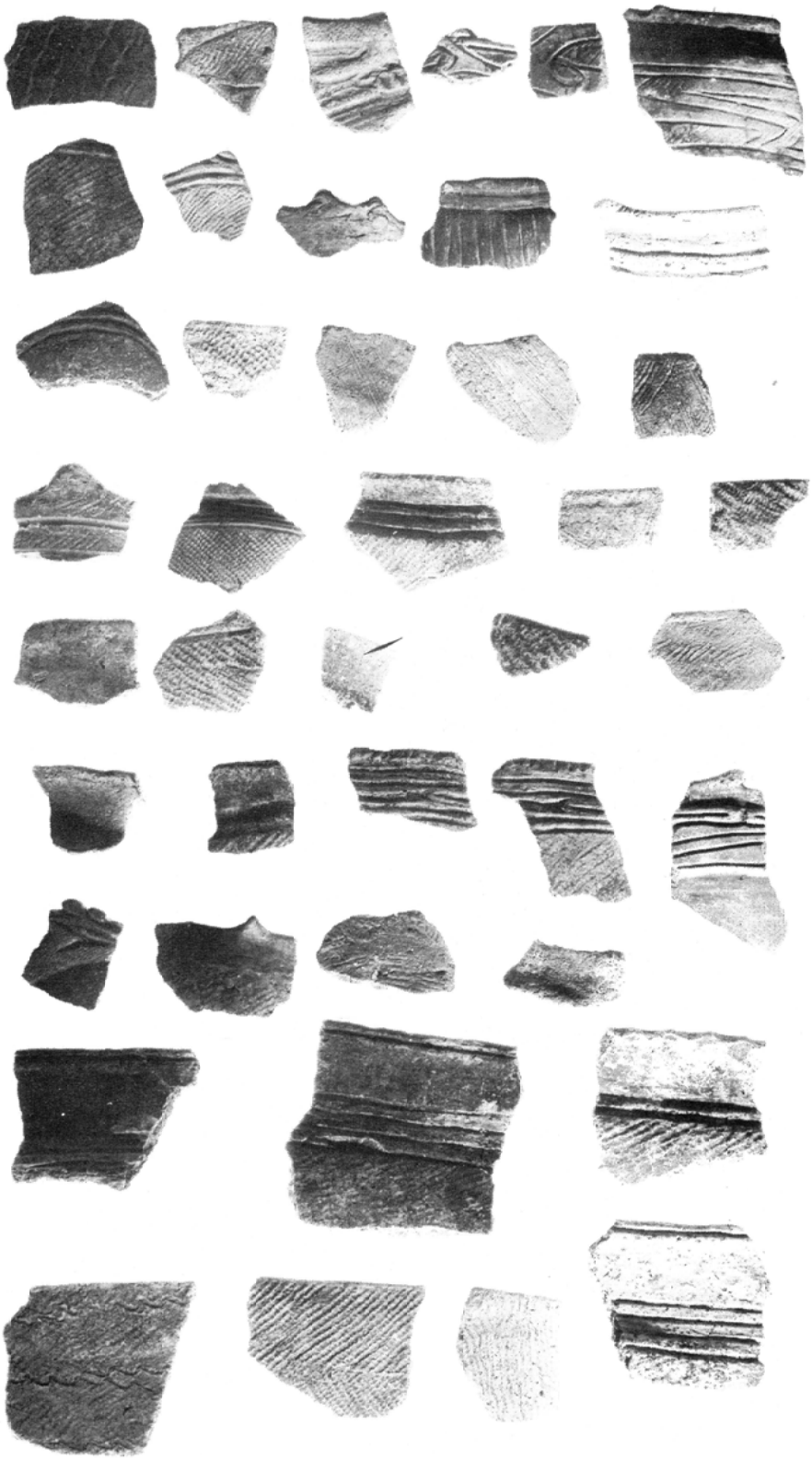
的場遺跡　３号住居跡覆土１層出土土器（１）



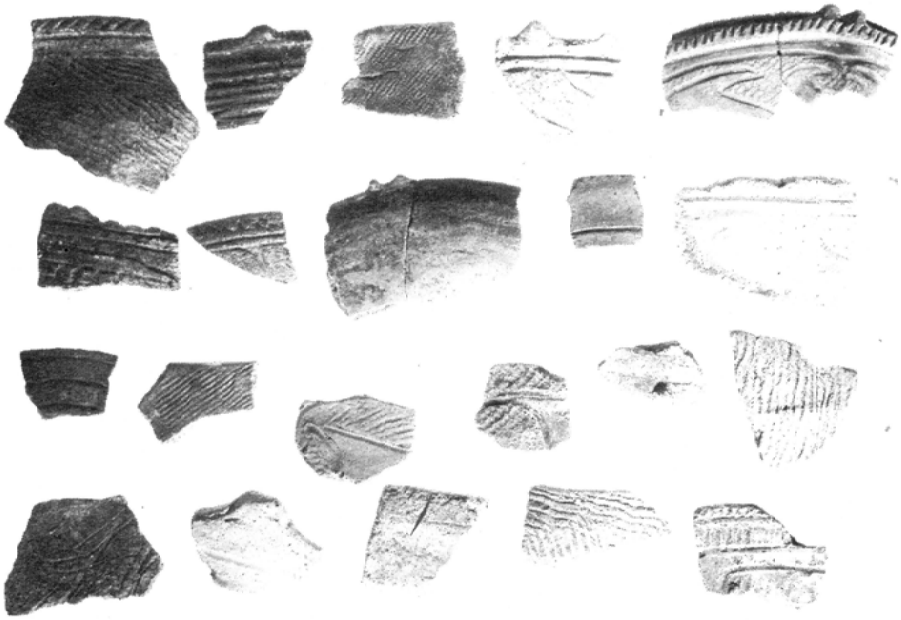
的場遺跡　３号住居跡覆土１層出土土器（２）

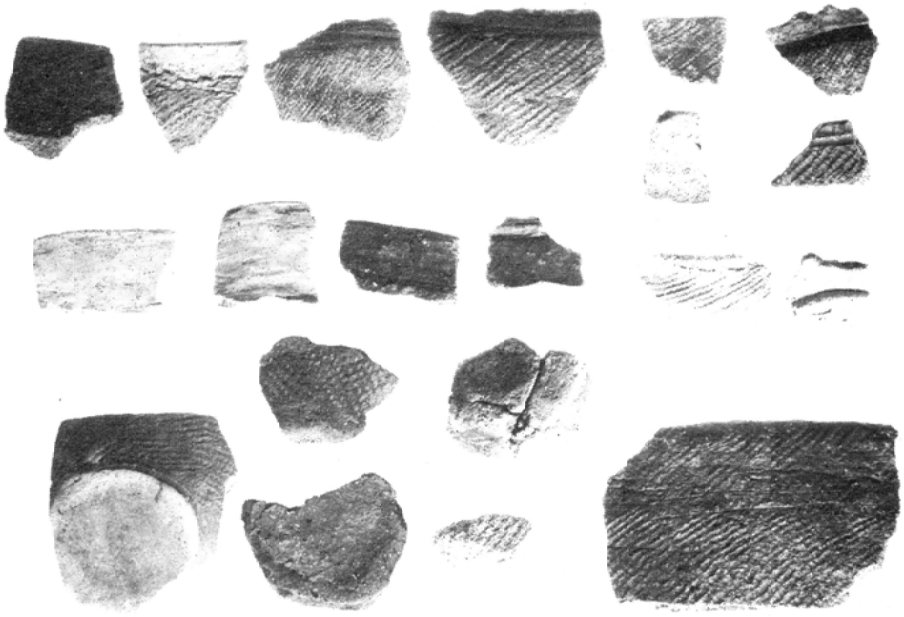


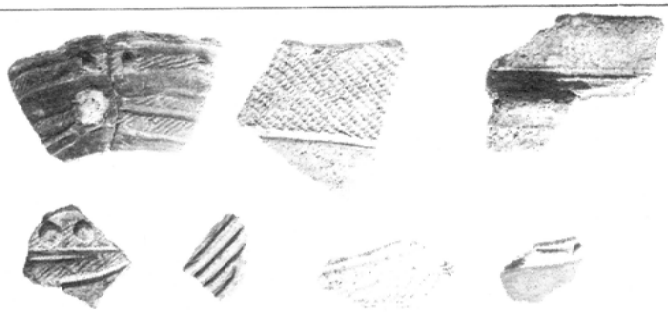
的場遺跡　3号住居跡覆土2・3・4層出土土器



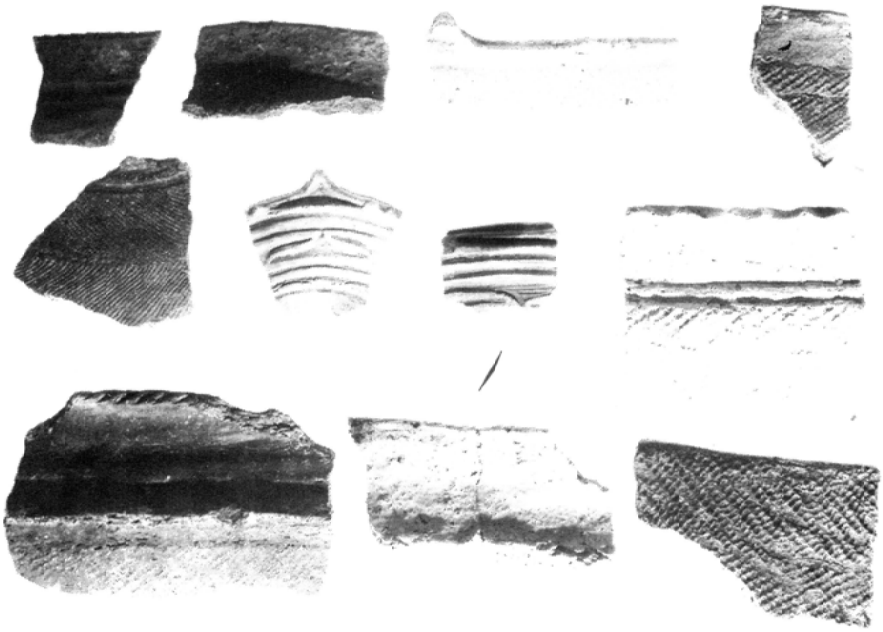
的場遺跡　3号住居跡周溝出土土器

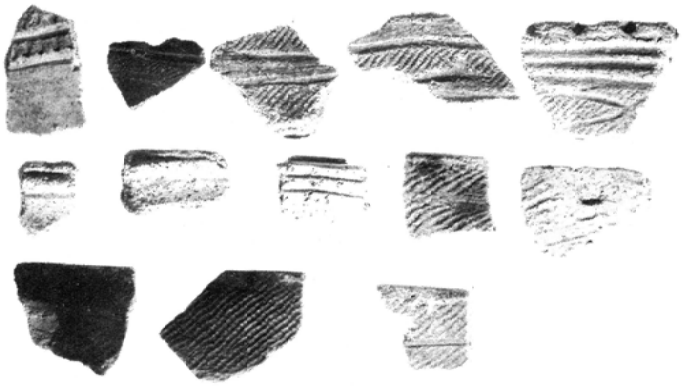


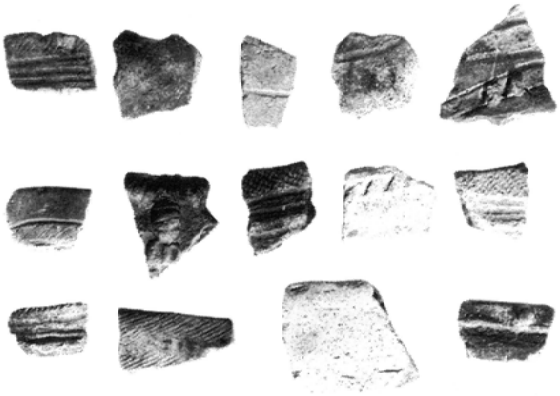




的場遺跡　３号住居跡覆土４層・床面・１号炉跡出土土器

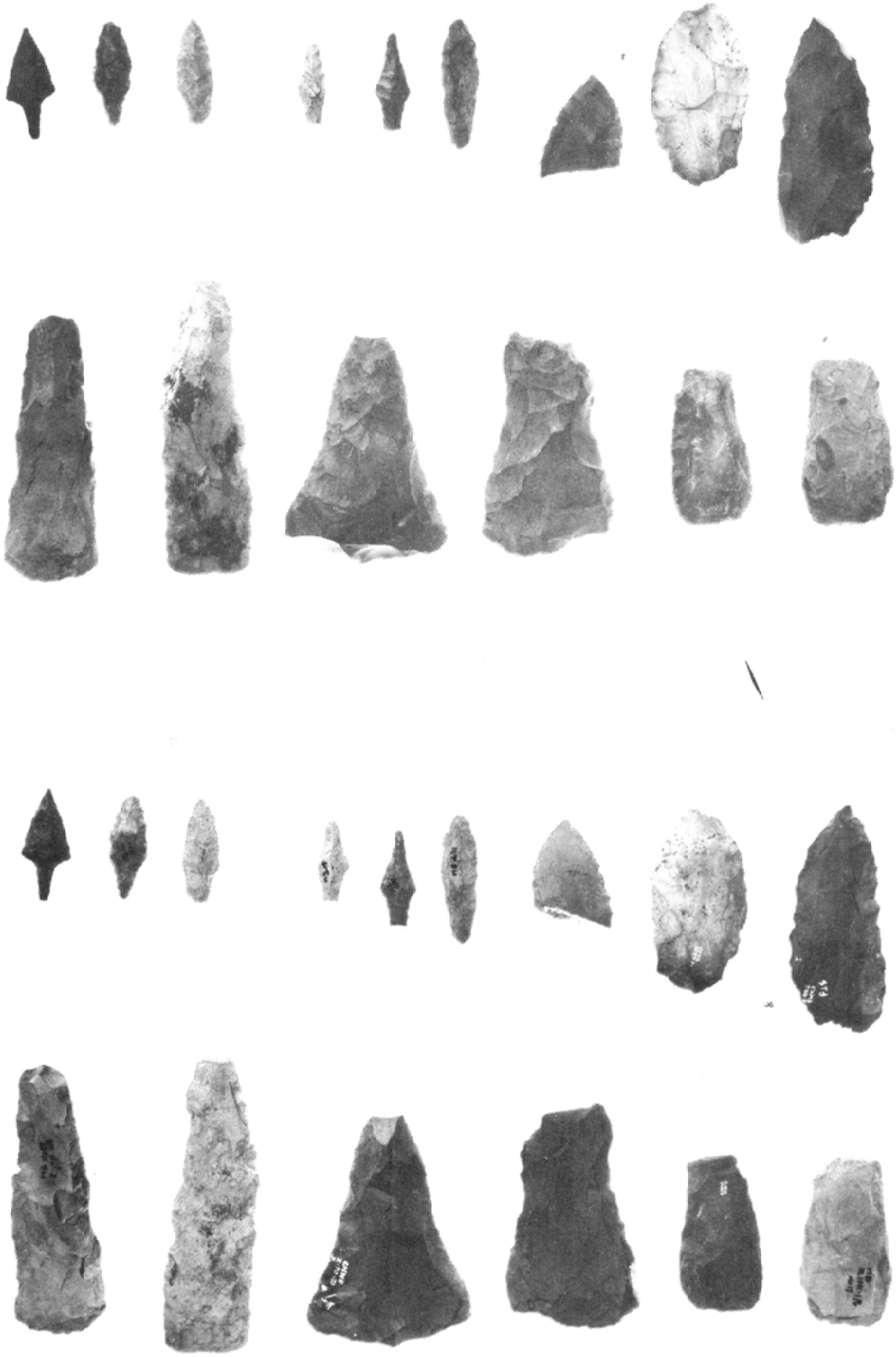




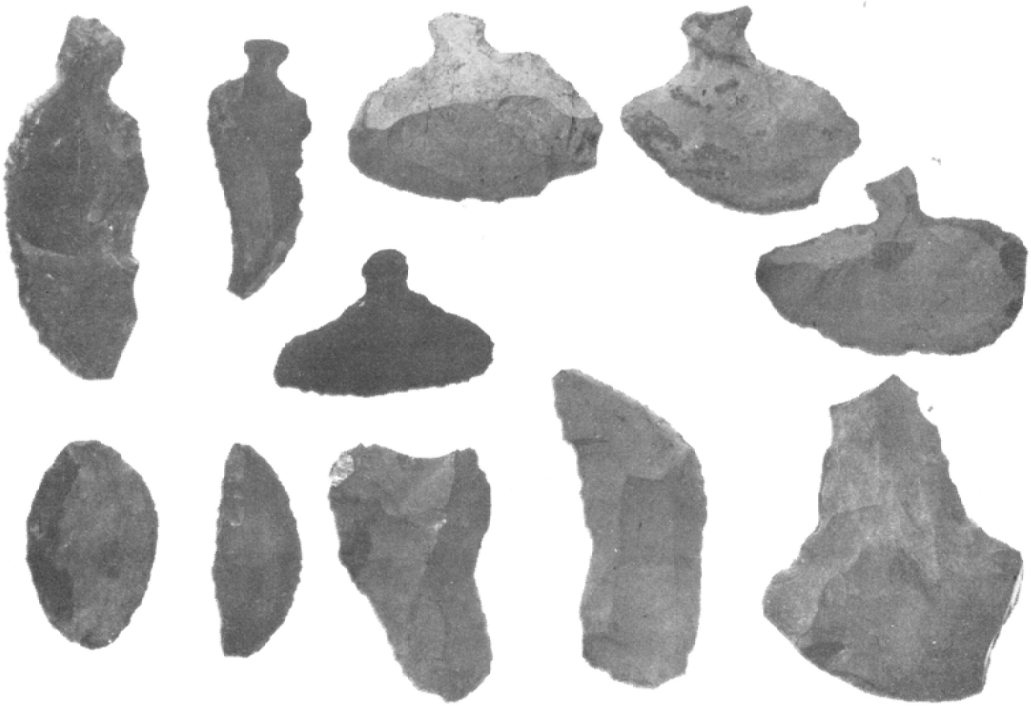


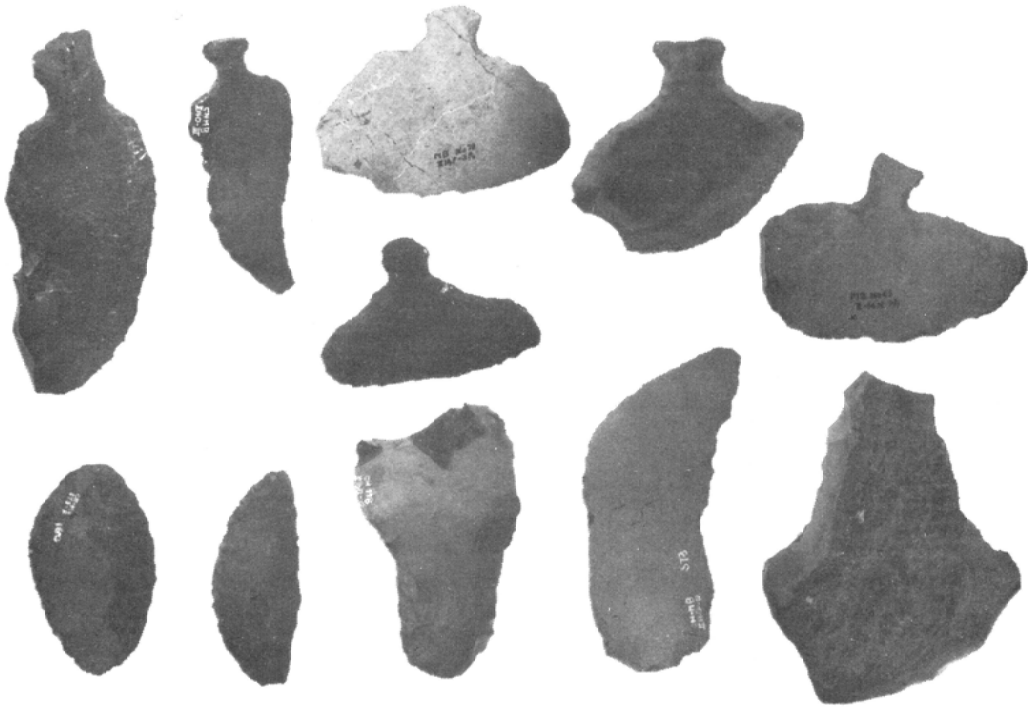
的場遺跡　３号住居跡ＥＰＩ～３・５・７～10出土土器

的場遺跡　３号住居跡出土遺物



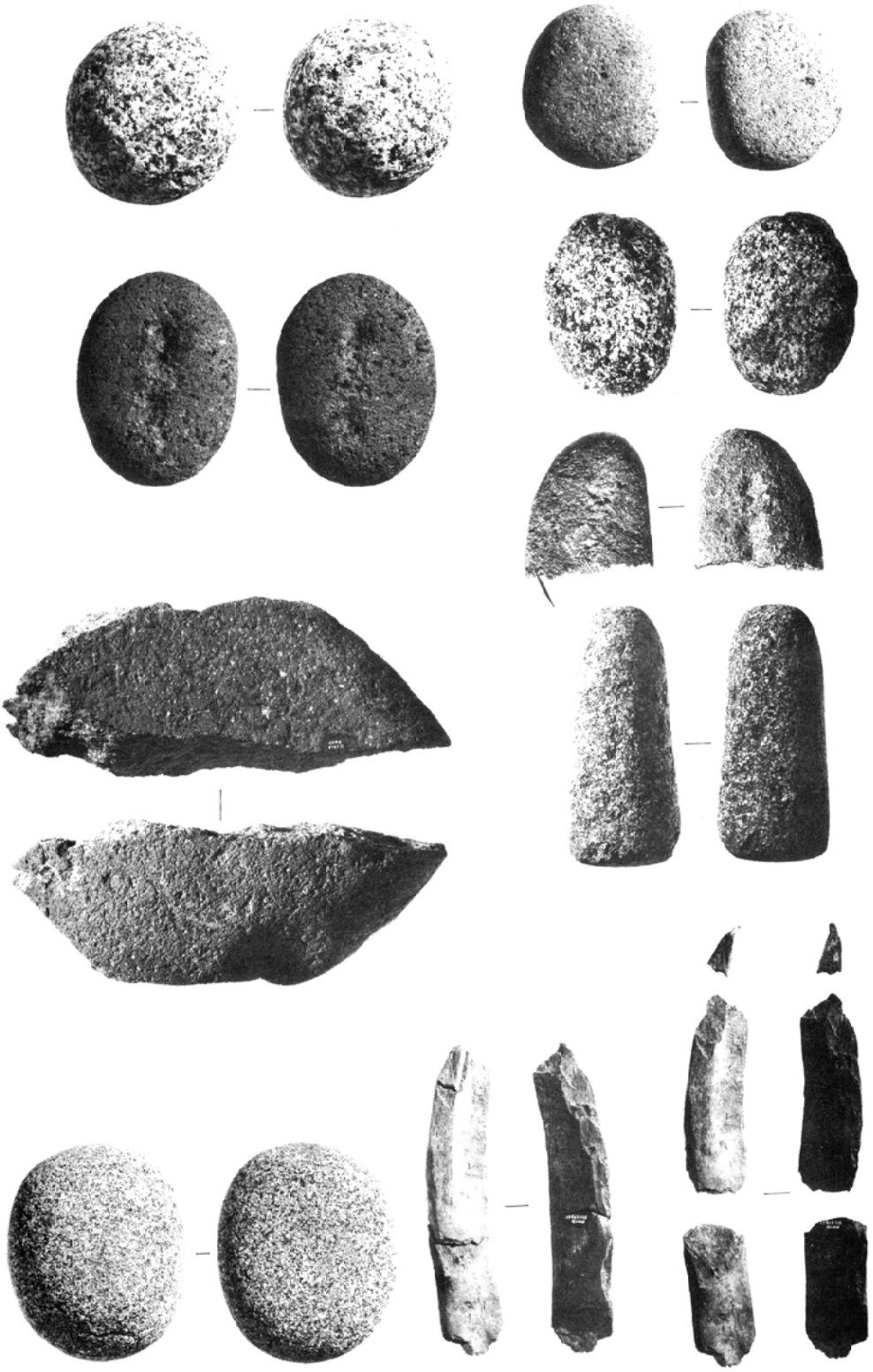
的場遺跡　３号住居跡出土打製石器（１）



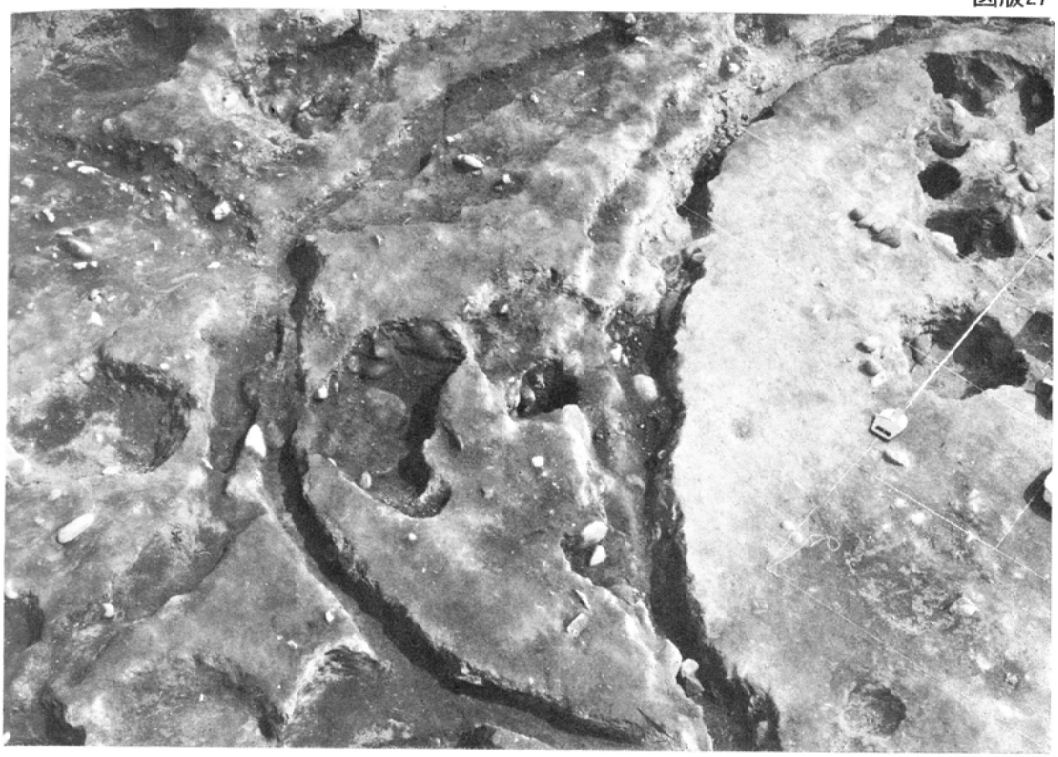


的場遺跡　３号住居跡出土打製石器（２）

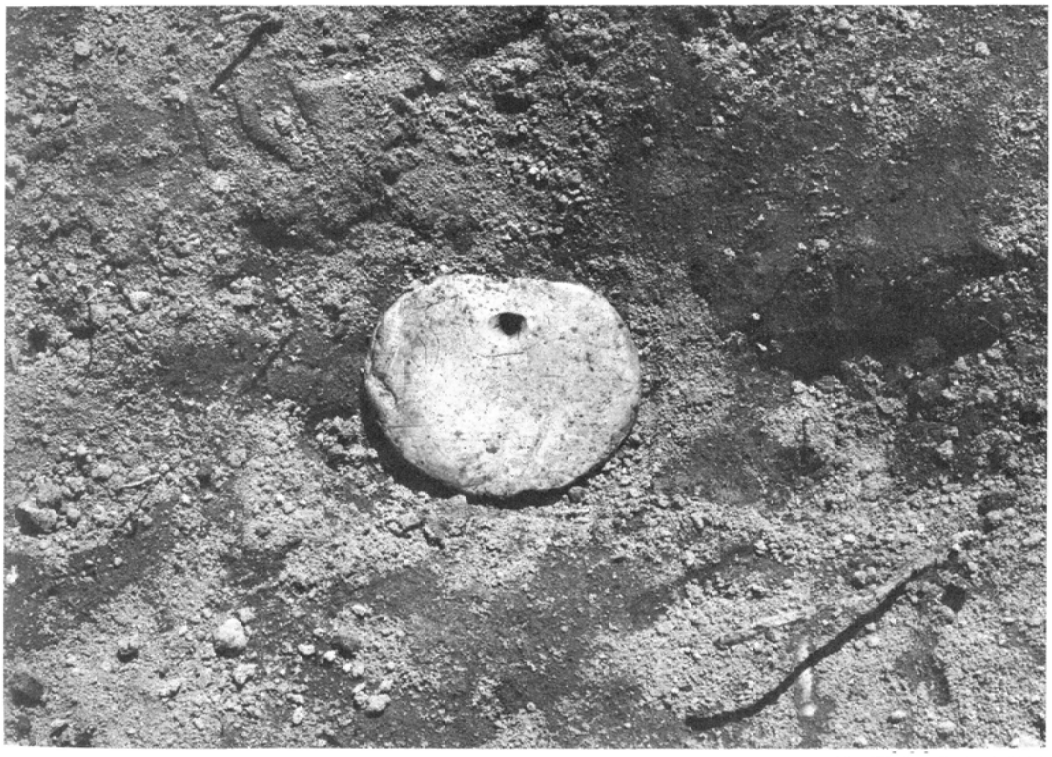
的場遺跡　３号住居跡出土磨製石器（1）



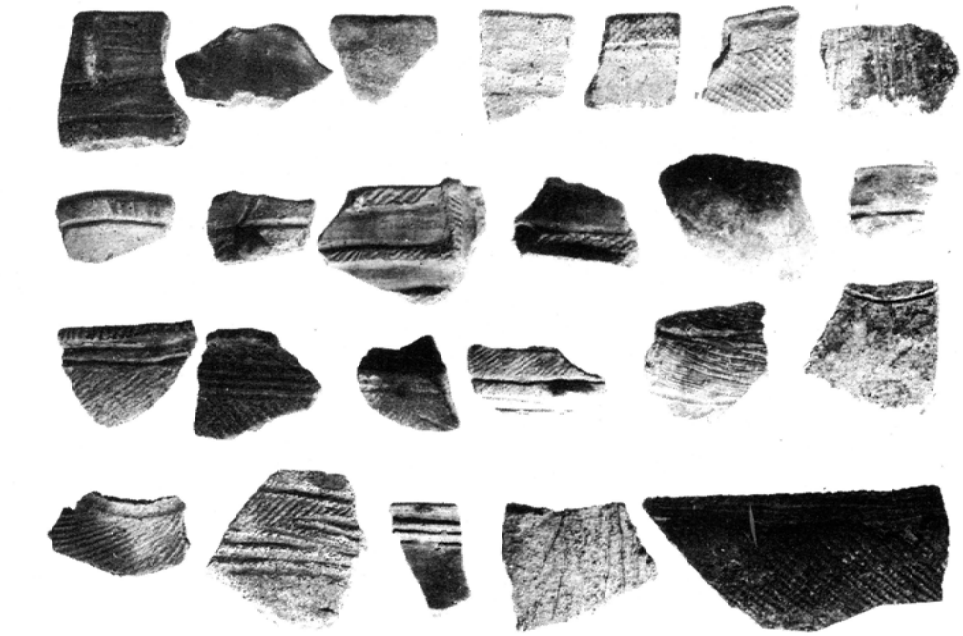
的場遺跡　3号住居跡出土磨製石器（2）

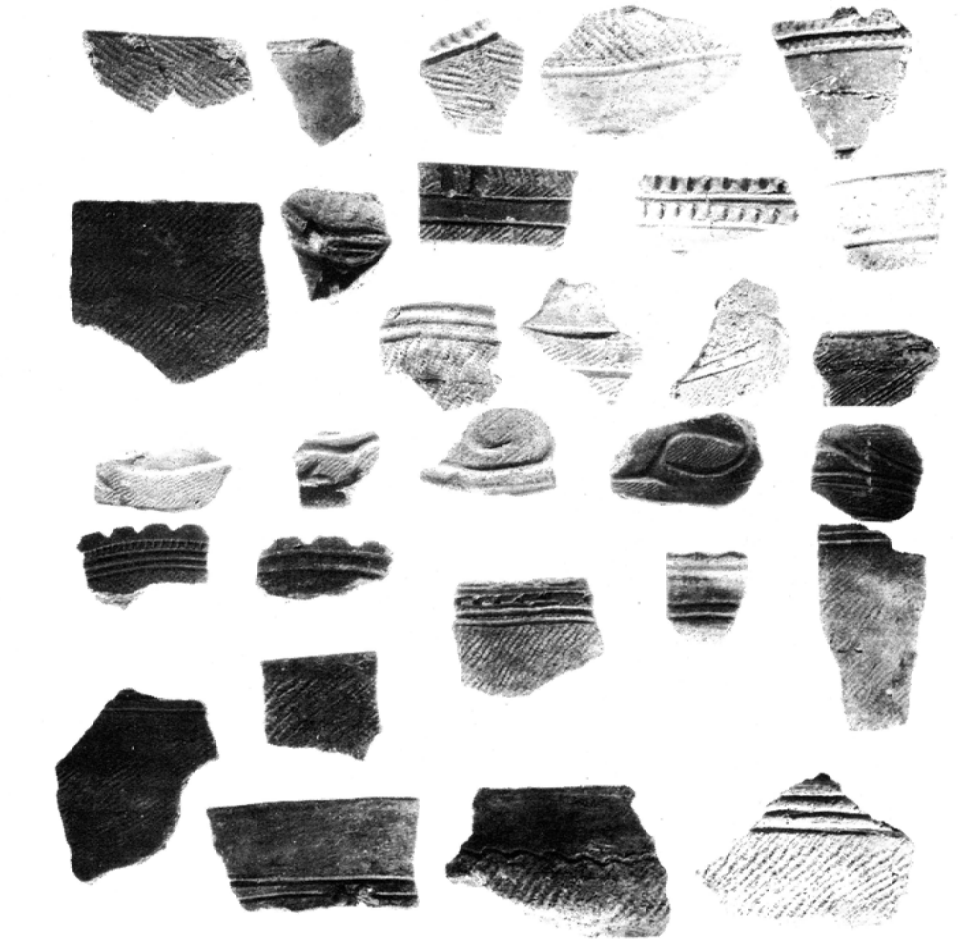


的場遺跡　4号住居跡全景

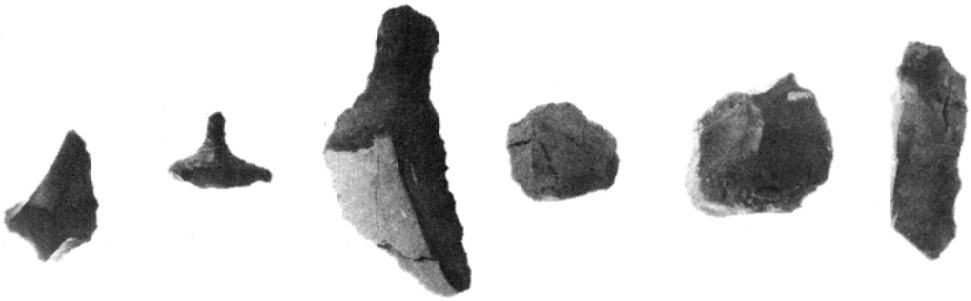


的場遺跡　岩版出土状況

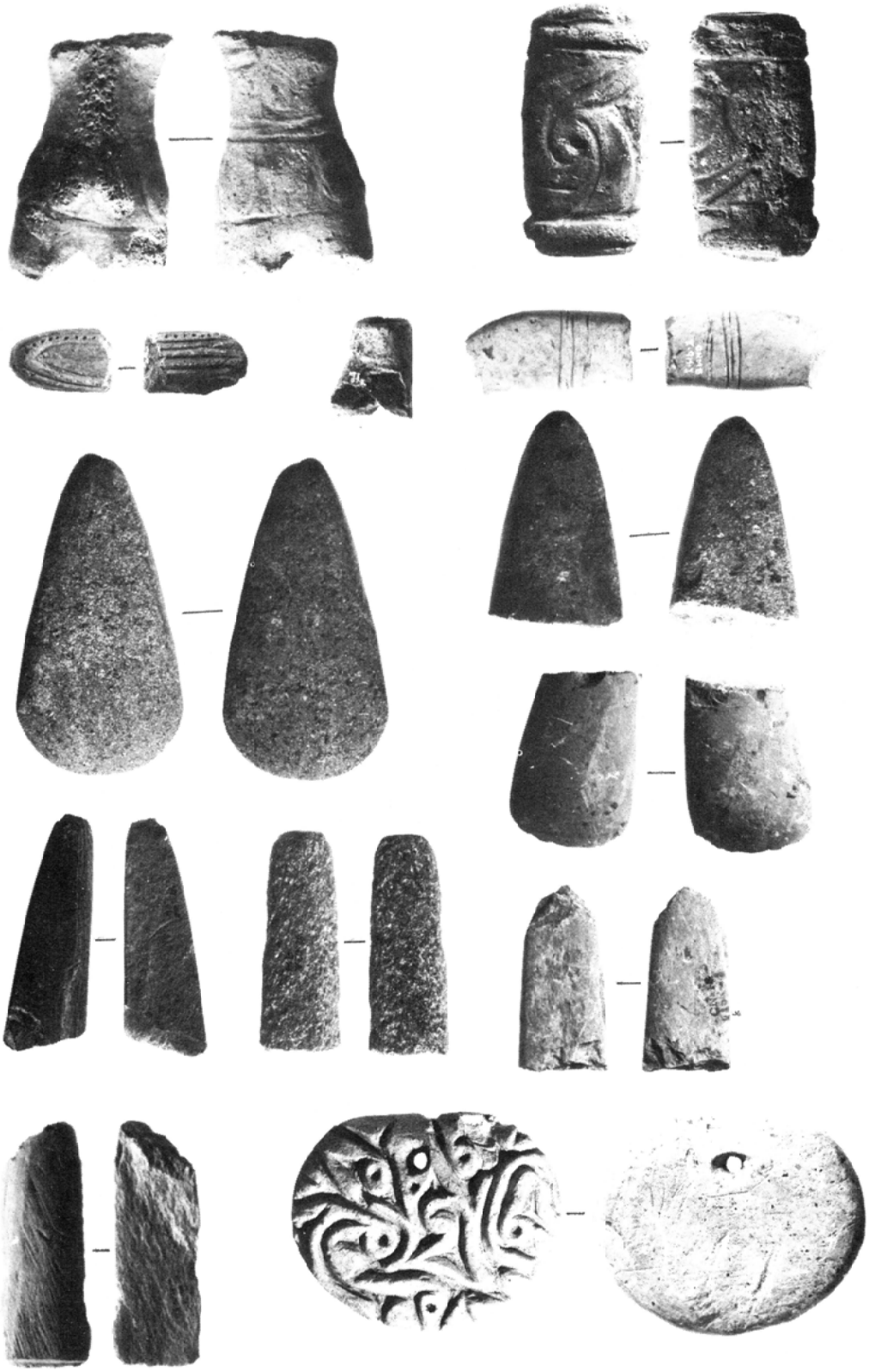




的場遺跡　4号住居跡覆土2層・包含層Ⅰ層出土土器



的場遺跡　4号住居跡出土打製石器



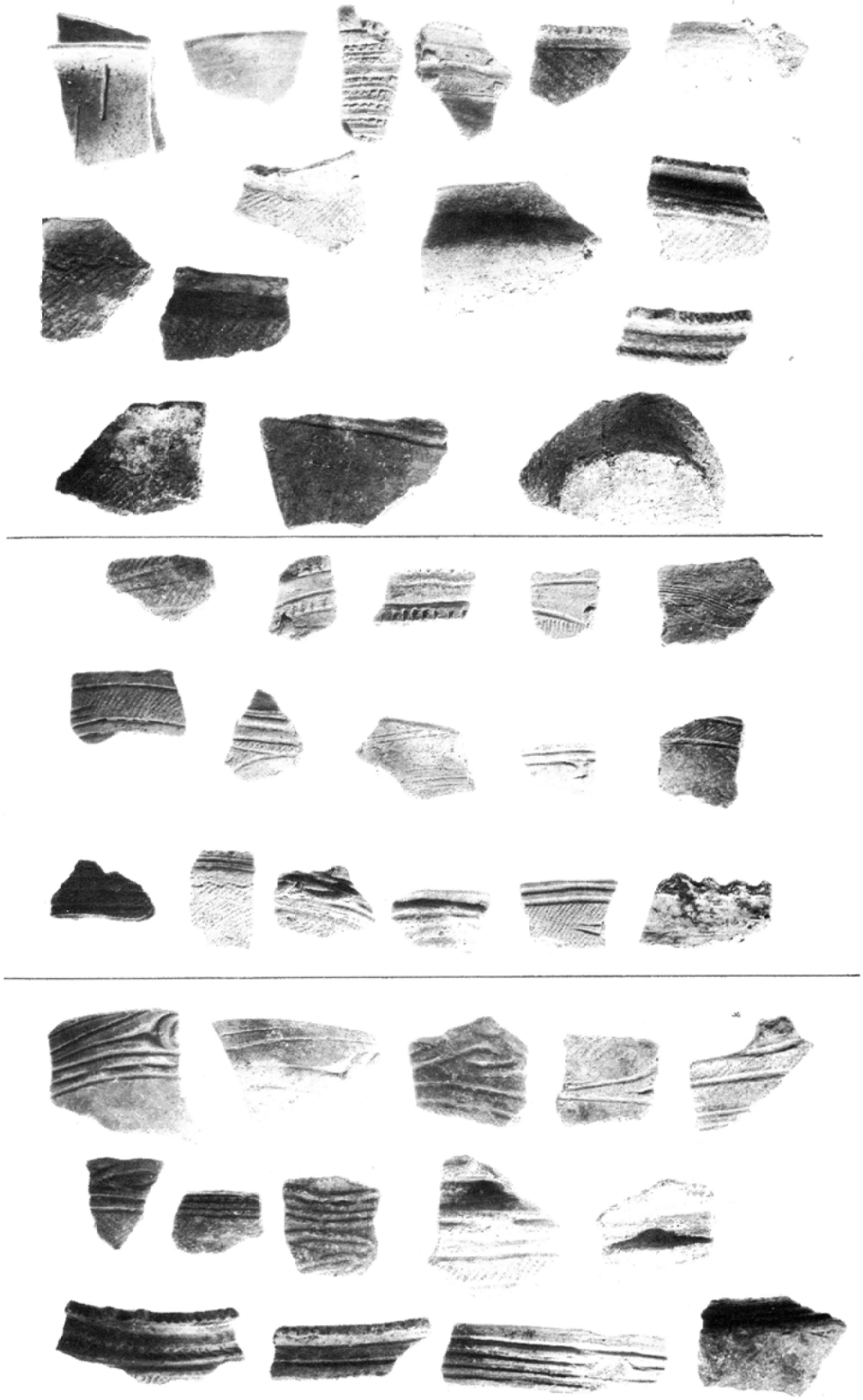
的場遺跡　4号住居跡・包含層出土土製品・石製品

的場遺跡　4号土壙近景

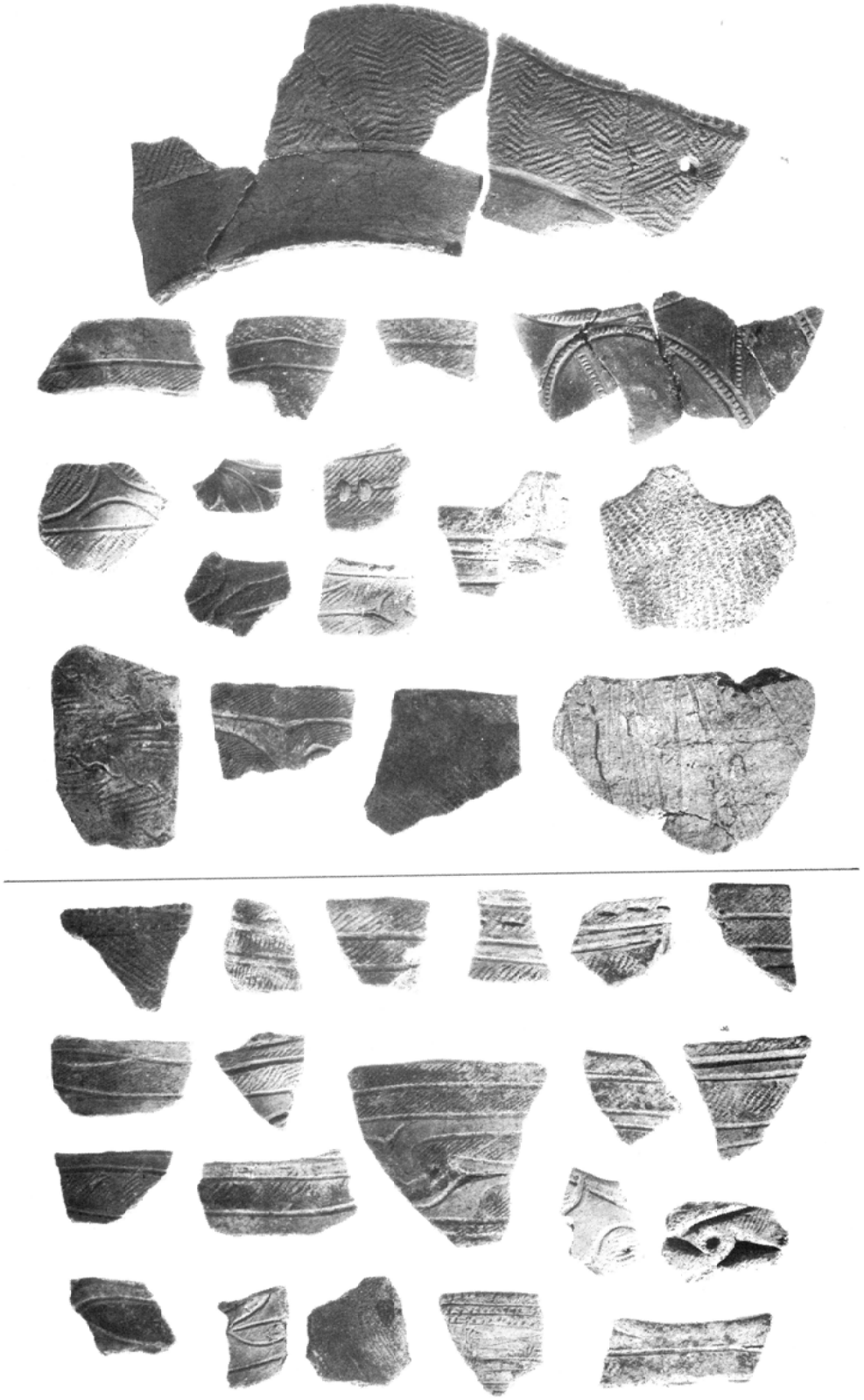
的場遺跡　8a 号土壙遺物出土状況

的場遺跡　8号土壙土偶出土状況

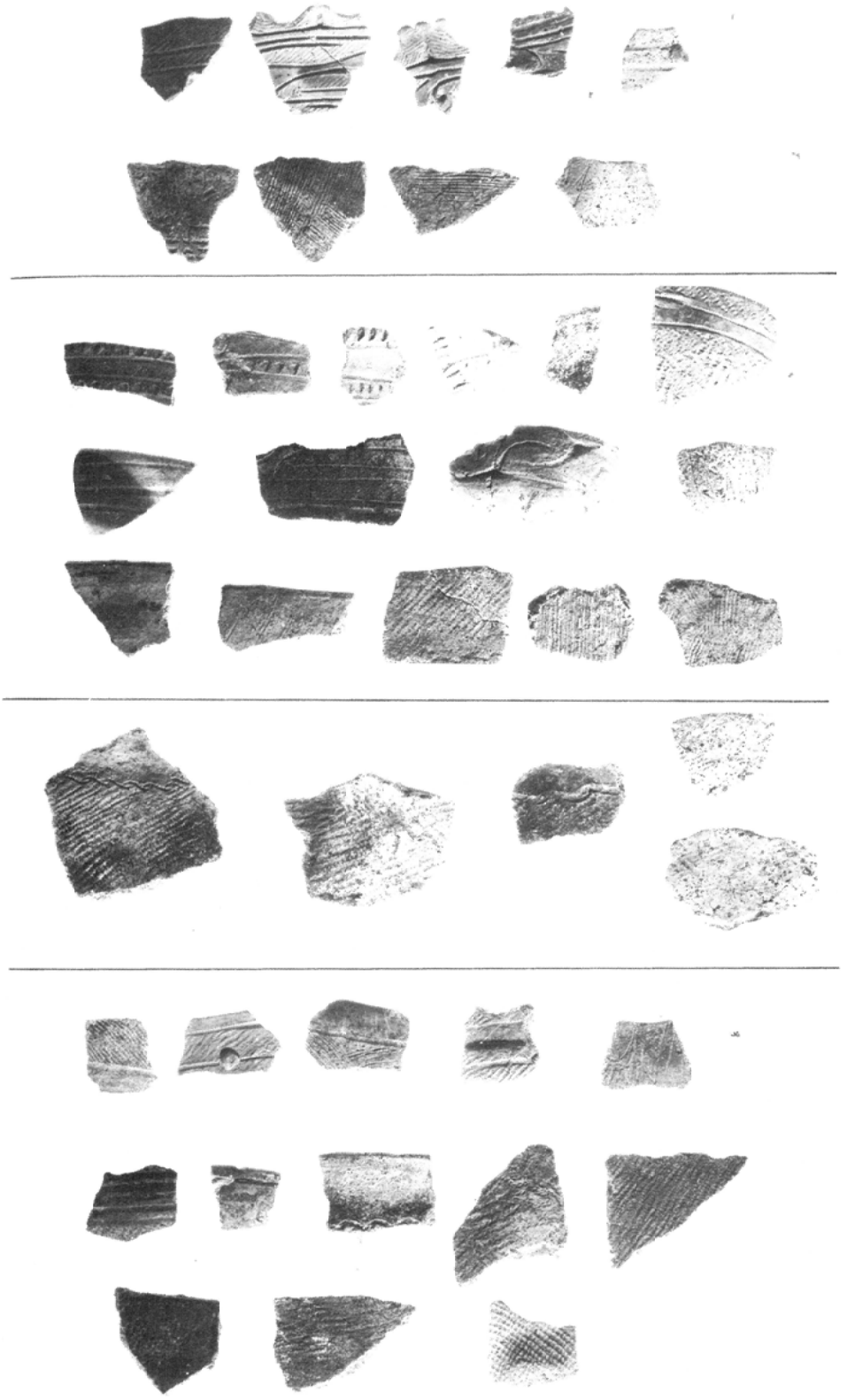
的場遺跡　11号土壙全景



的場遺跡　1・2号・3・4号・5号土壙出土土器

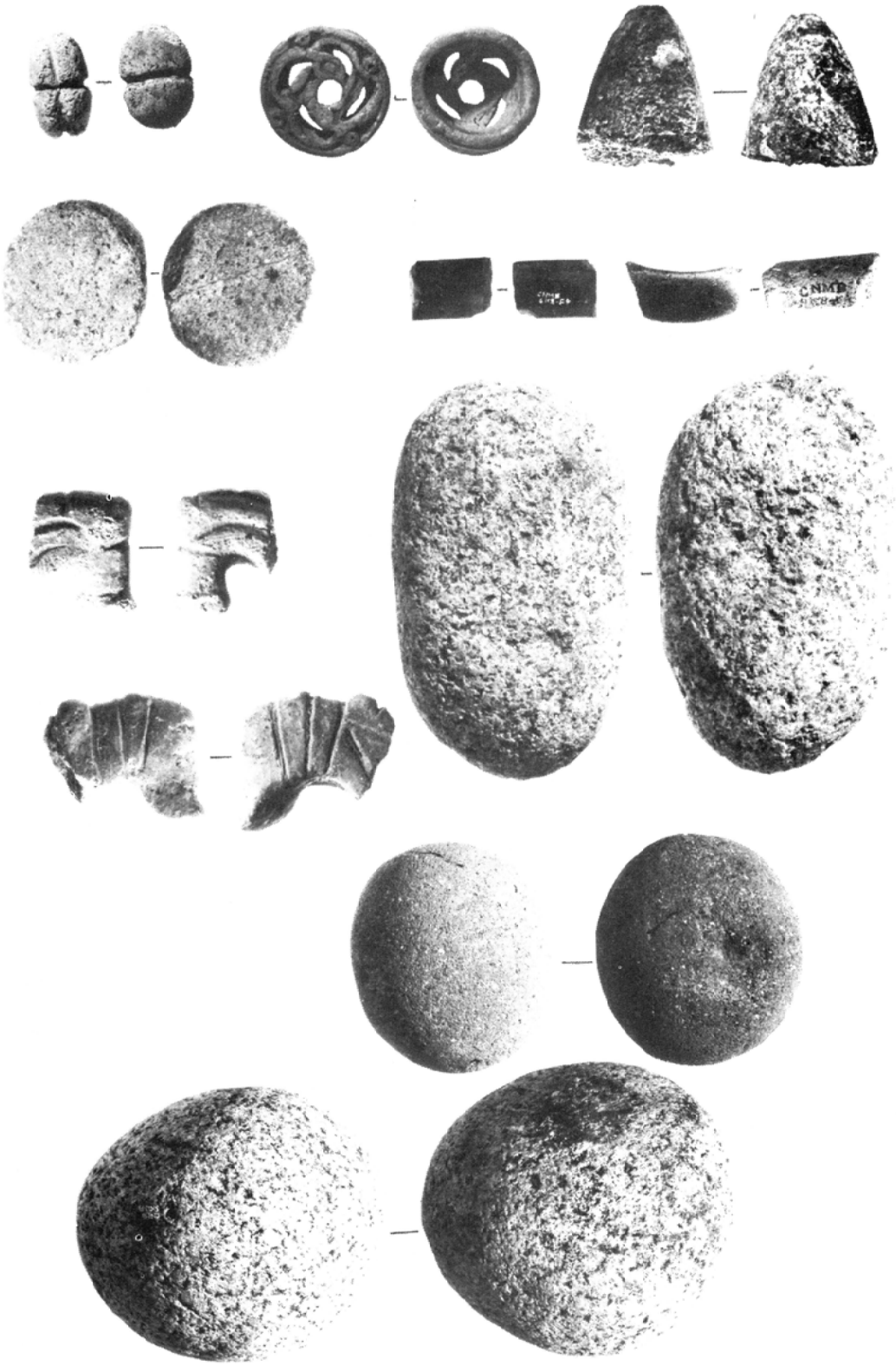


的場遺跡　6号・8号土壙出土土器

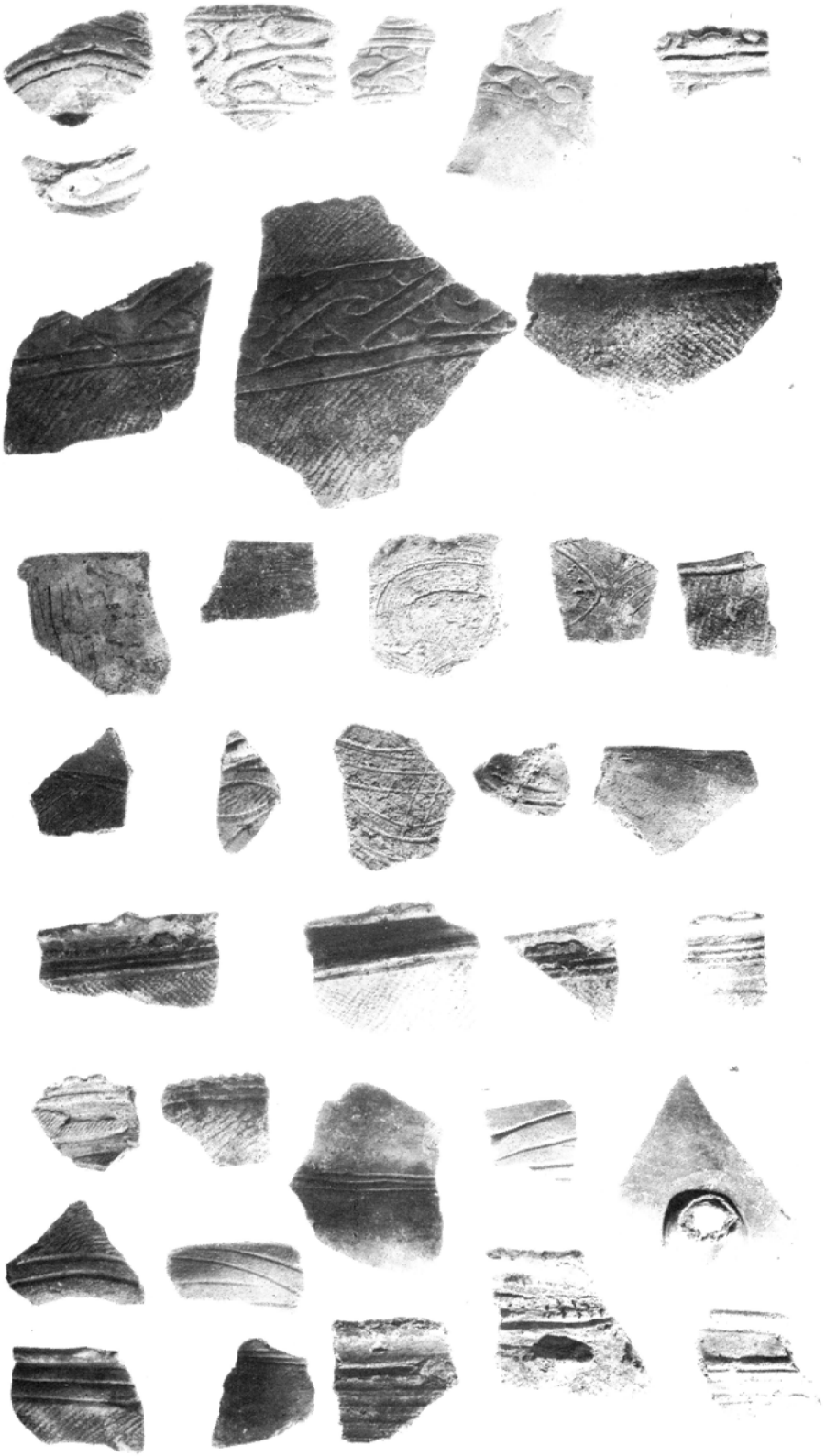


的場遺跡　10号・11号・12号・14号・13号土壙出土土器

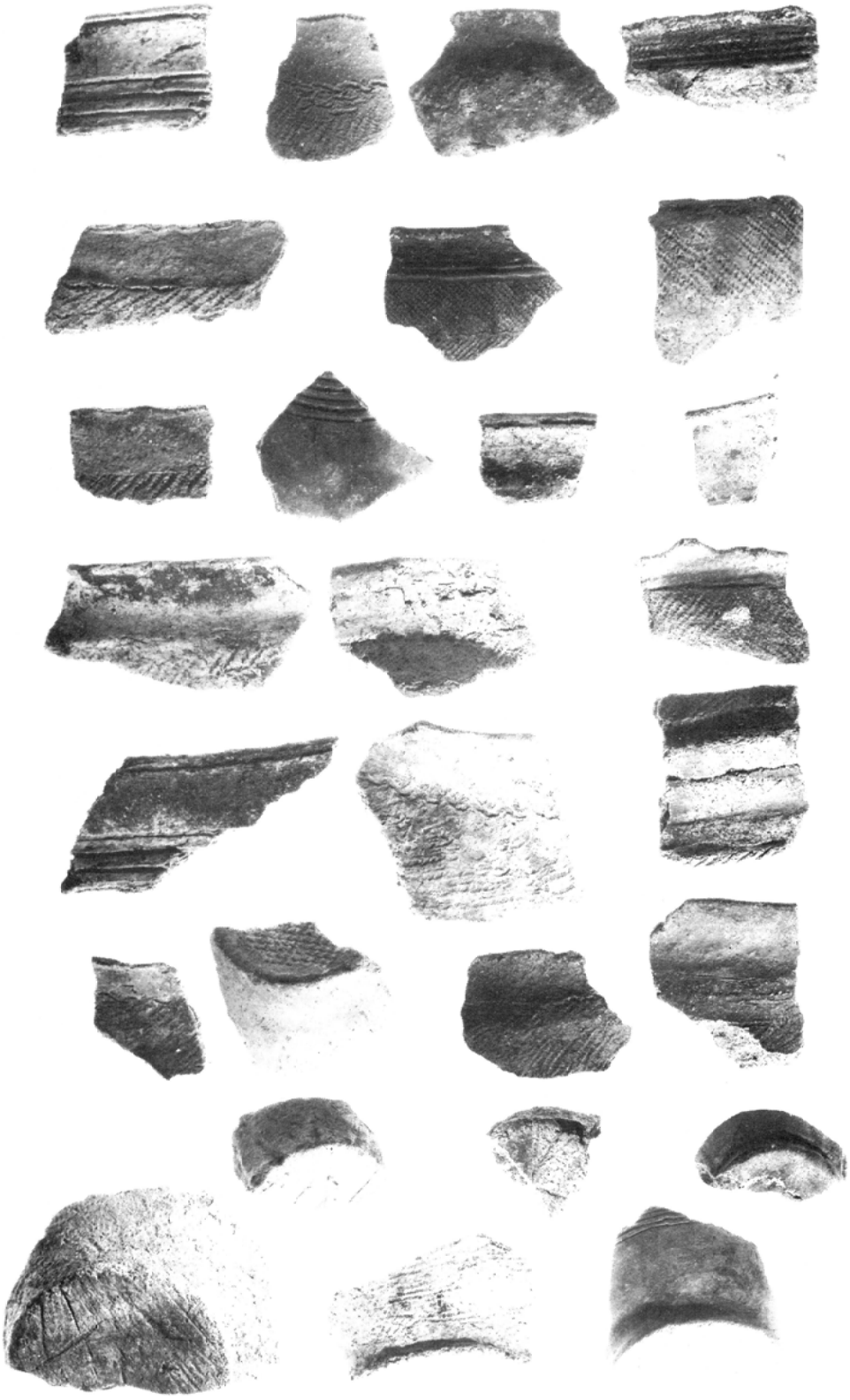
的場遺跡　土壙群出土打製石器



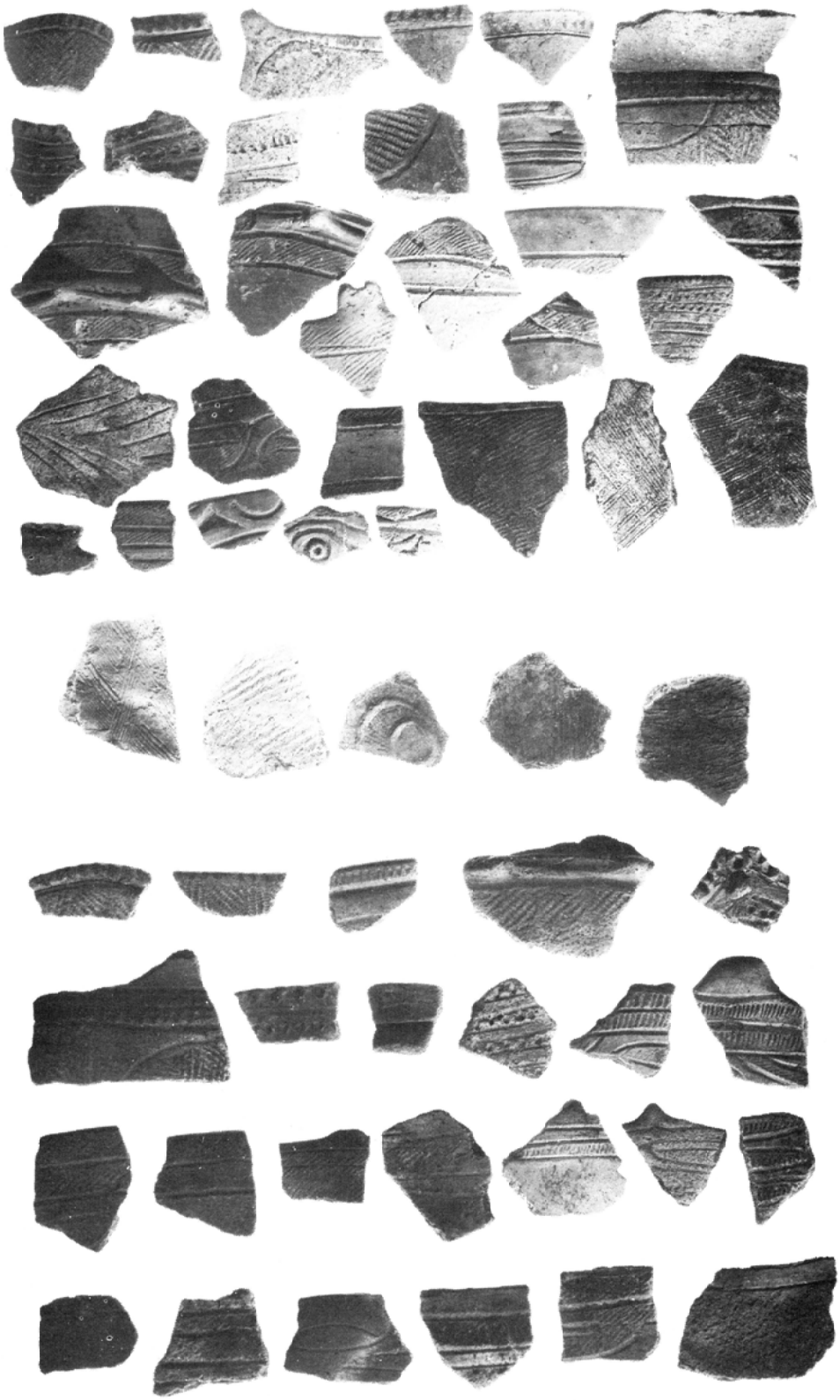
的場遺跡　６号・８号土壙出土遺物



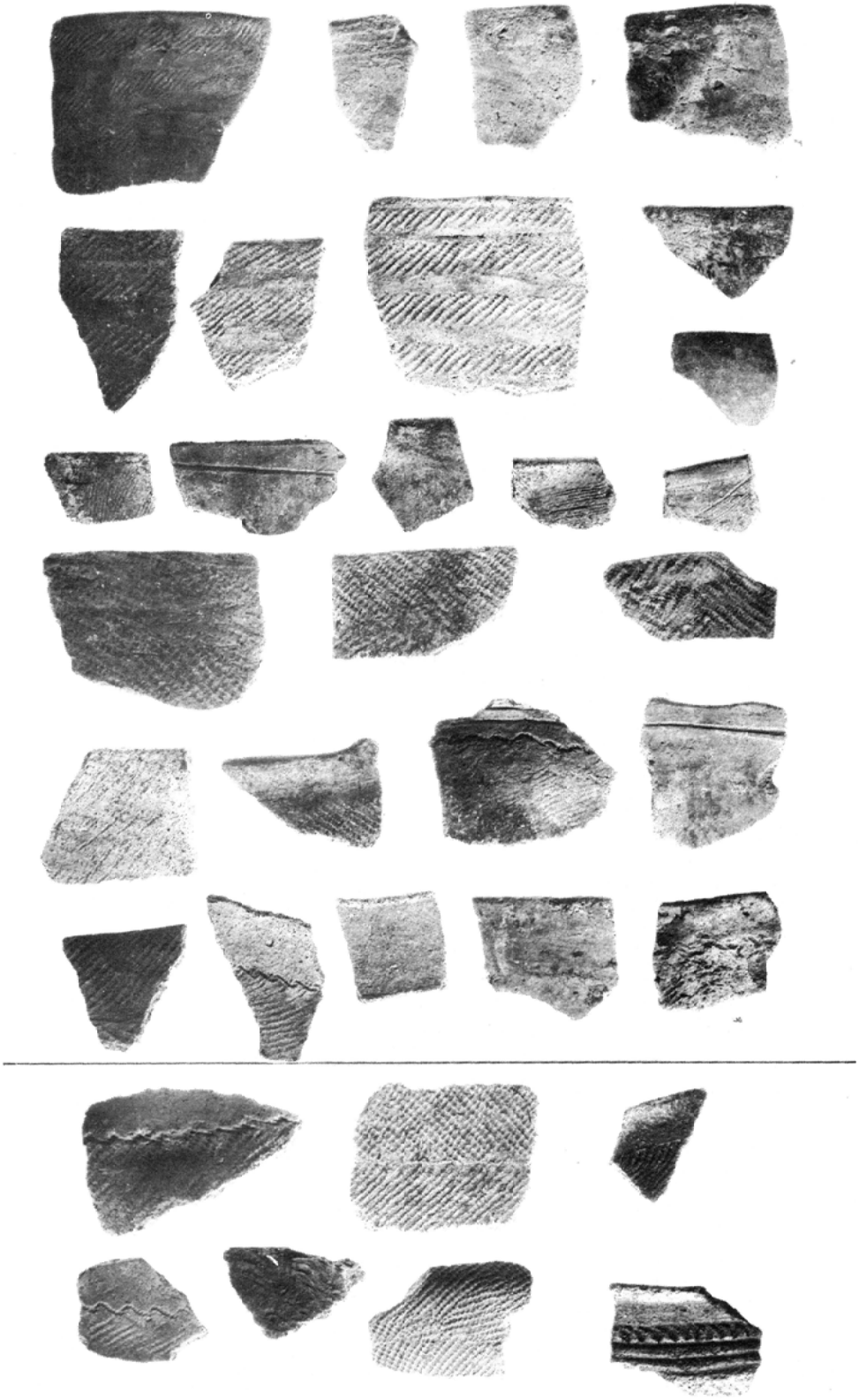
的場遺跡　包含層Ⅱ層出土土器（1）



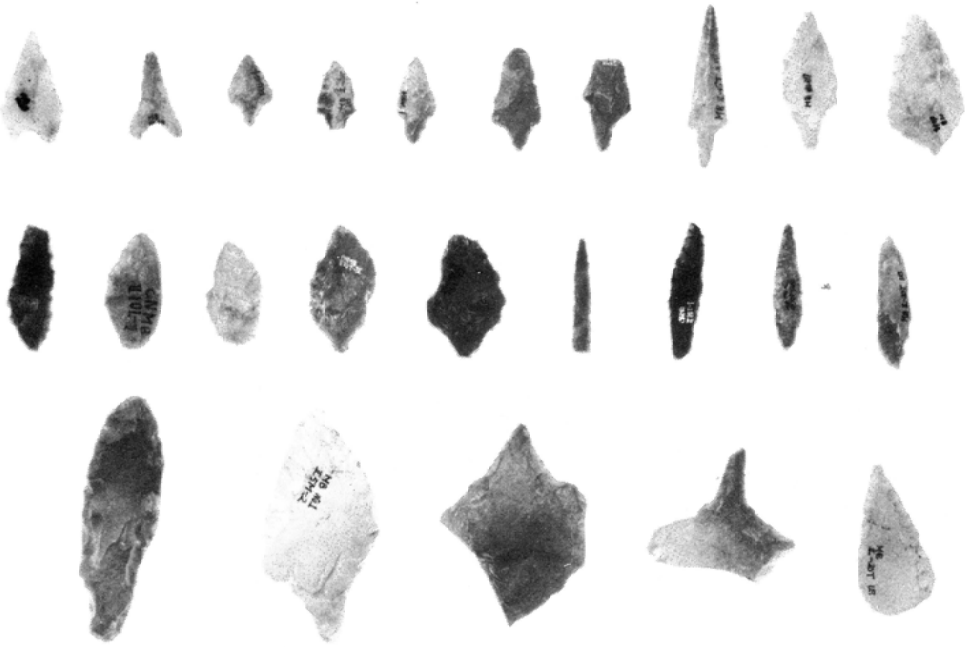
的場遺跡　包含層Ⅱ層出土土器（2）



的場遺跡　包含層Ⅱ層・同Ⅲ層出土土器（1）



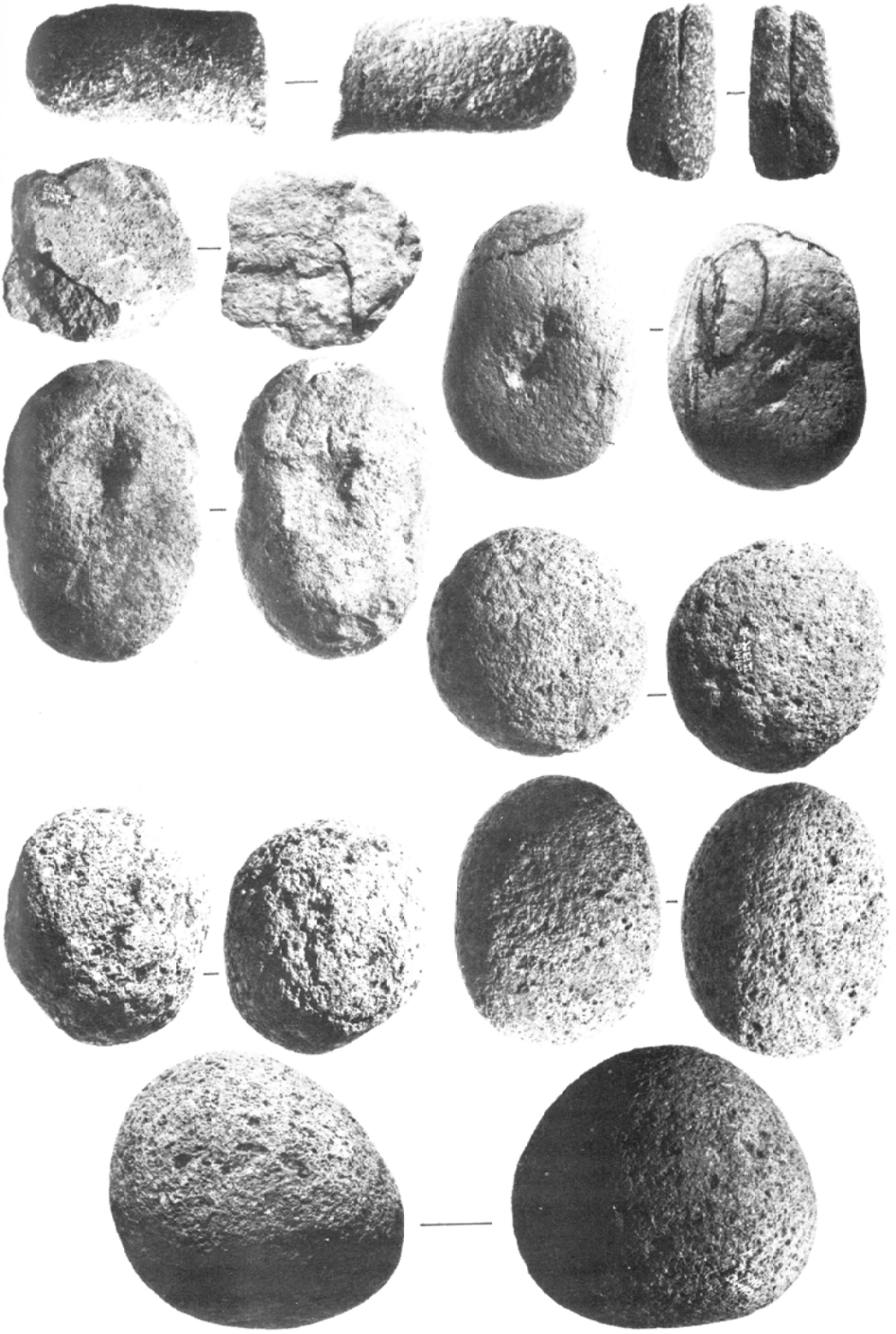
的場遺跡　包含層Ⅱ層・同Ⅲ層出土土器（2）



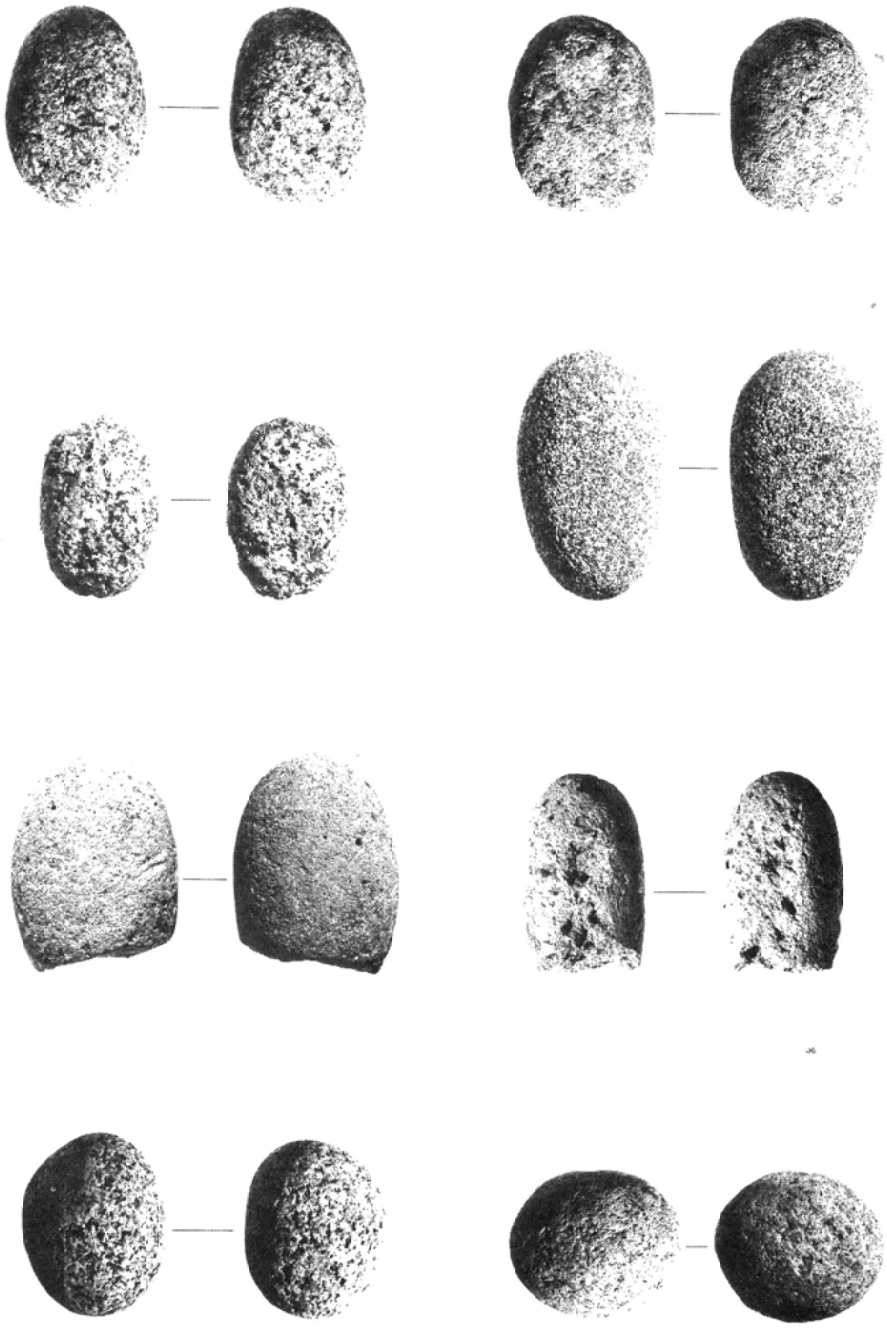
的場遺跡　包含層出土打製石器（1）

的場遺跡　包含層出土打製石器（2）

的場遺跡　包含層出土打製石器（3）



的場遺跡　包含層出土磨製石器（1）

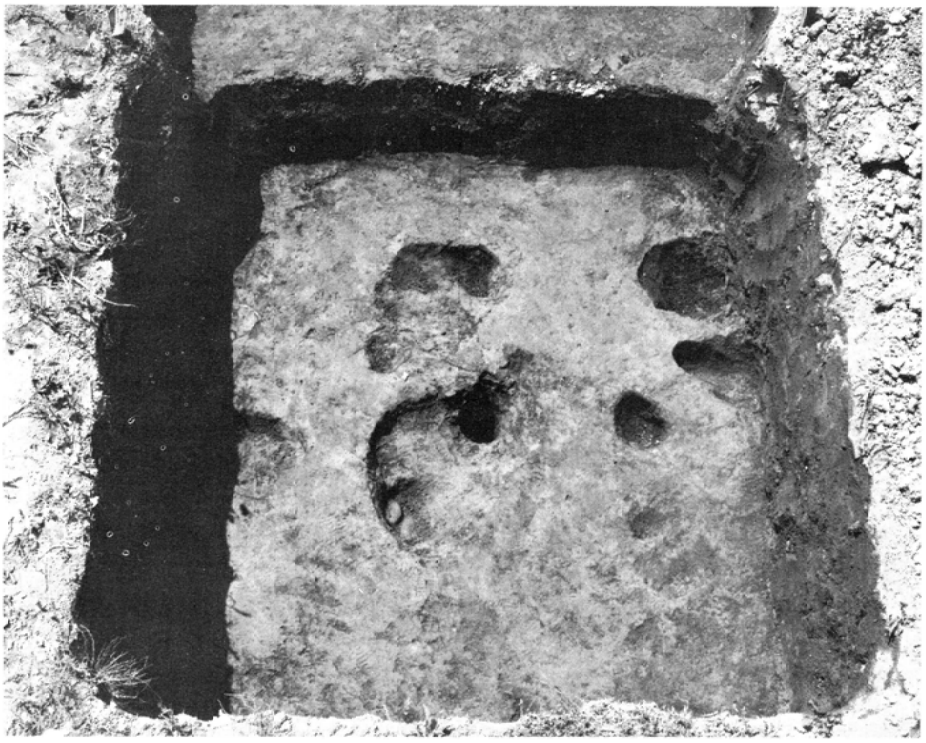


的場遺跡　包含層出土磨製石器（2）

村中遺跡　遠景

村中遺跡　調査状況

村中遺跡　発掘風景



村中遺跡　Pit 群

古郡B 遺跡　遠景

古郡B 遺跡　近景

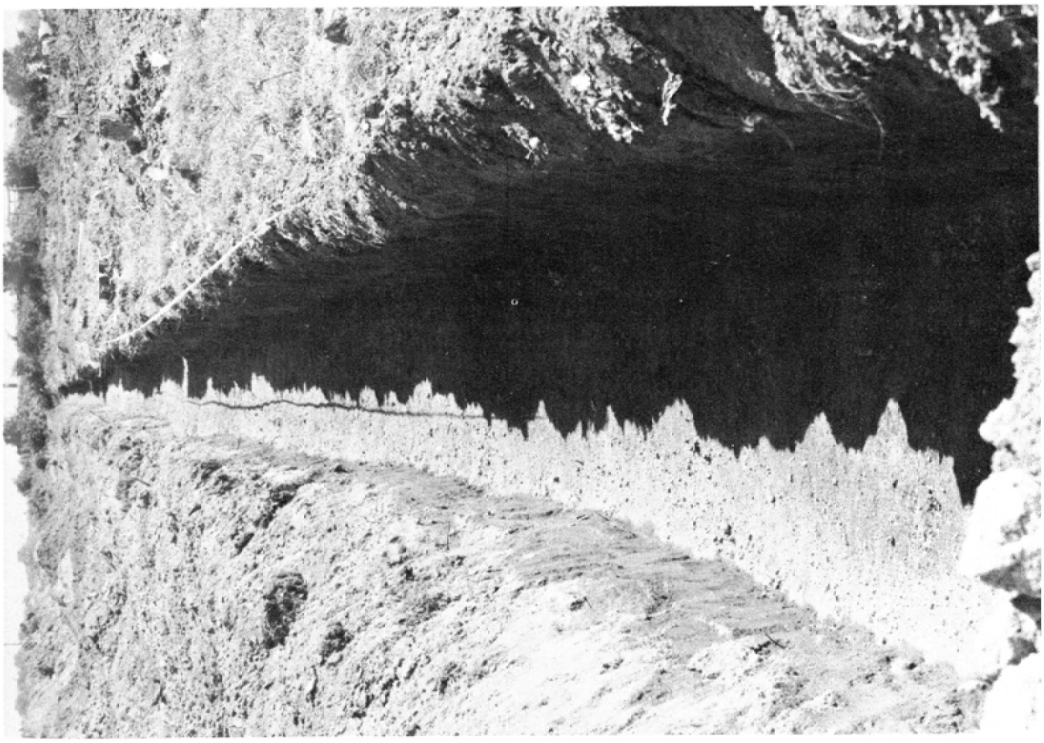
古郡B遺跡　トレンチ配置

古郡B遺跡　3トレンチ土層

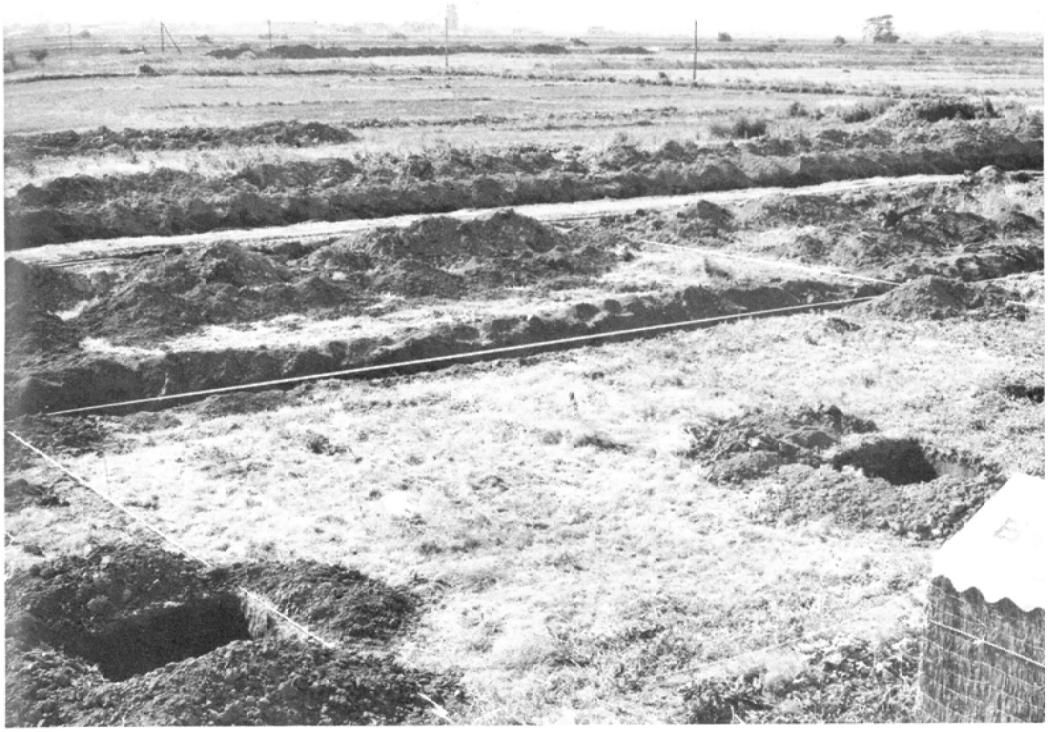
助川遺跡　近景

助川遺跡　B 地点50・110G 付近発掘全景

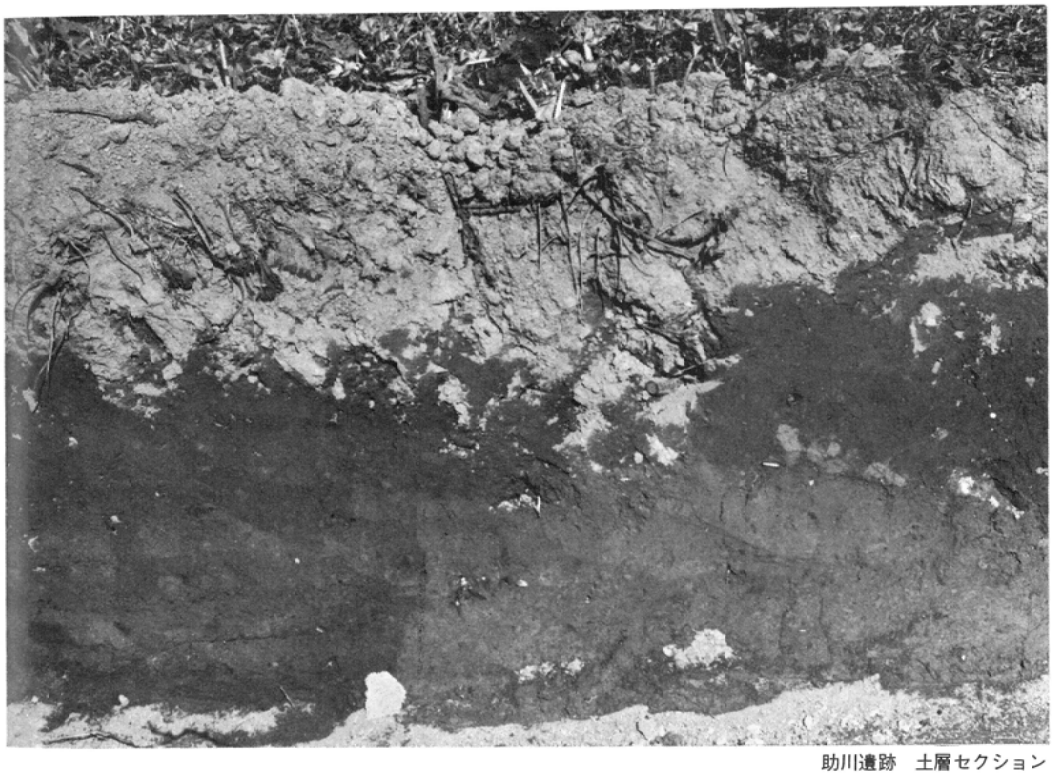
助川遺跡　発掘区状況



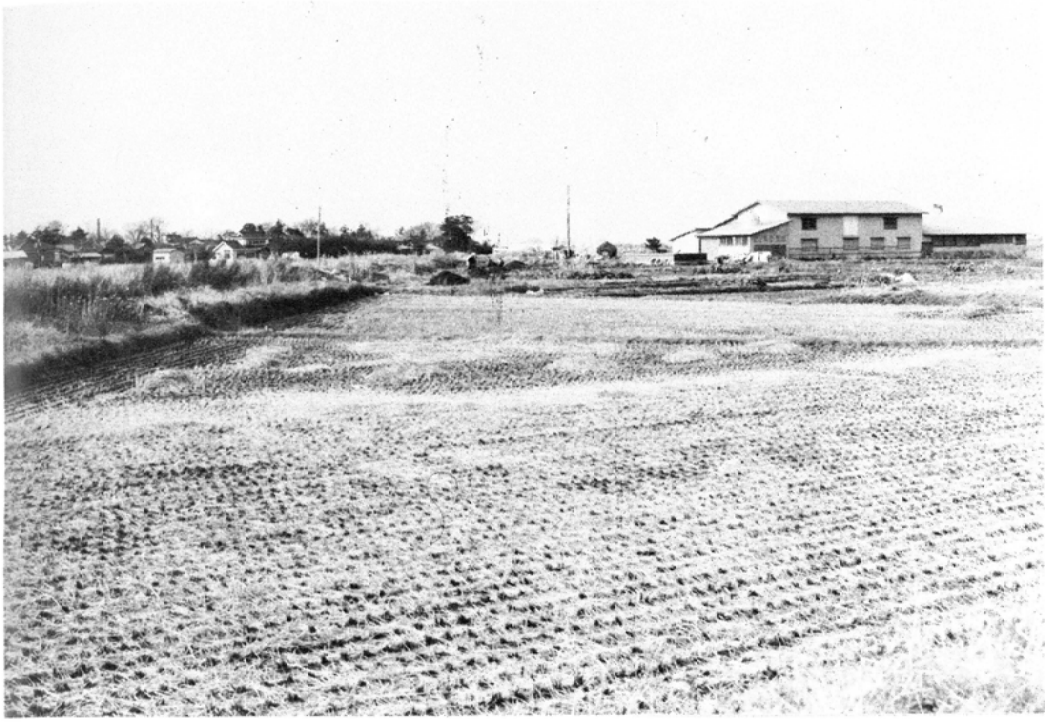
助川遺跡　発掘区状況



助川遺跡　B 地点50—120G 発掘区付近



助川遺跡　土層セクション

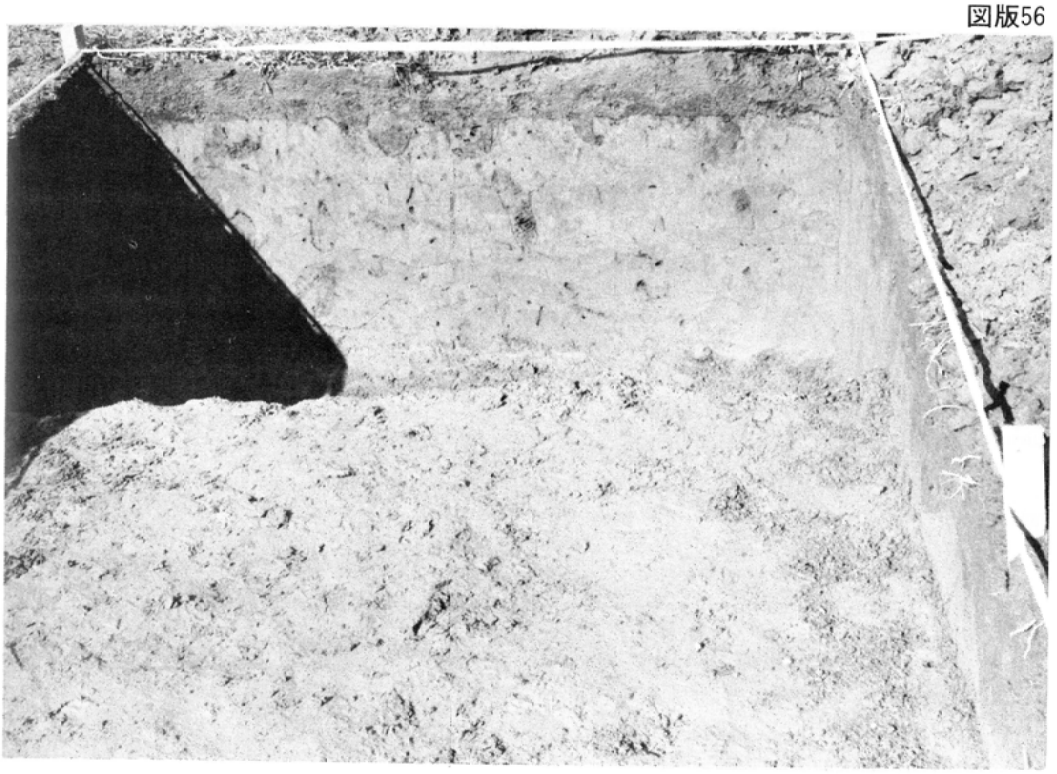


上台遺跡　遠景

上台遺跡　調査状況

上台遺跡　発掘風景（1）

上台遺跡　発掘風景（2）



上台遺跡　土層（10—40北壁）

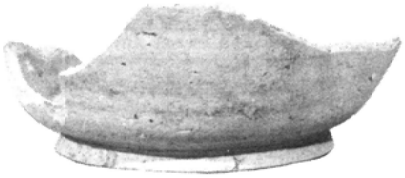
上台遺跡　6号溝状遺構土層

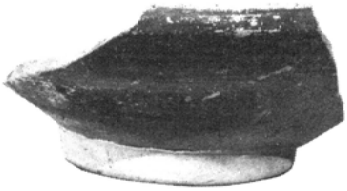
上台遺跡　1号落ち込み遺構全景

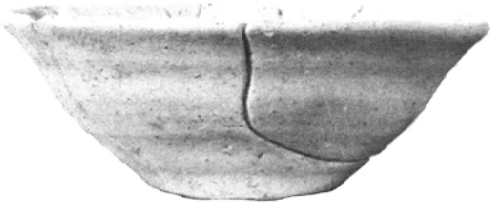
上台遺跡　2号住居跡全景

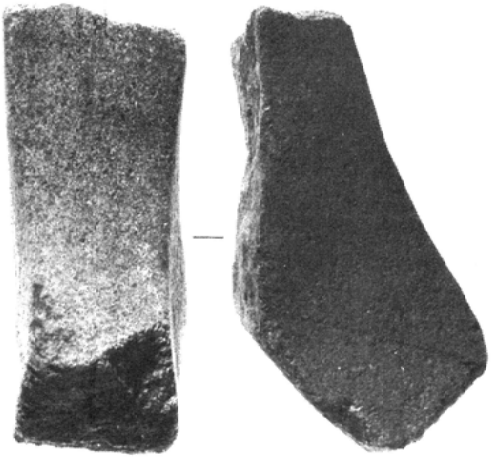
上台遺跡　2号住居跡内土器出土状況（1）

上台遺跡　2号住居跡内土器出土状況（2）









上台遺跡　出土土器・石器

上台遺跡　出土土器（1）

上台遺跡　出土土器（2）

山形県埋蔵文化財調査報告書第14集

昭和50・51年度山形県営農林
事業関係遺跡調査報告書

昭和53年３月31日　　印刷

昭和53年３月31日　　発行

発行　山形県教育委員会

印刷　株式会社大風印刷

この調査報告書は山形県教育庁文化課の承認を受けて、山形県文化財保護協会が増刷領布するものである。

山形市松波二丁目８－１
山形県文化財保護協会